

香美町

長見寺廃寺址

—国道178号香住道路ランプ部道路改築事業に伴う発掘調査—

2007年3月

兵庫県教育委員会

香美町

ちょう けん じ はい じ あと
長見寺廃寺址

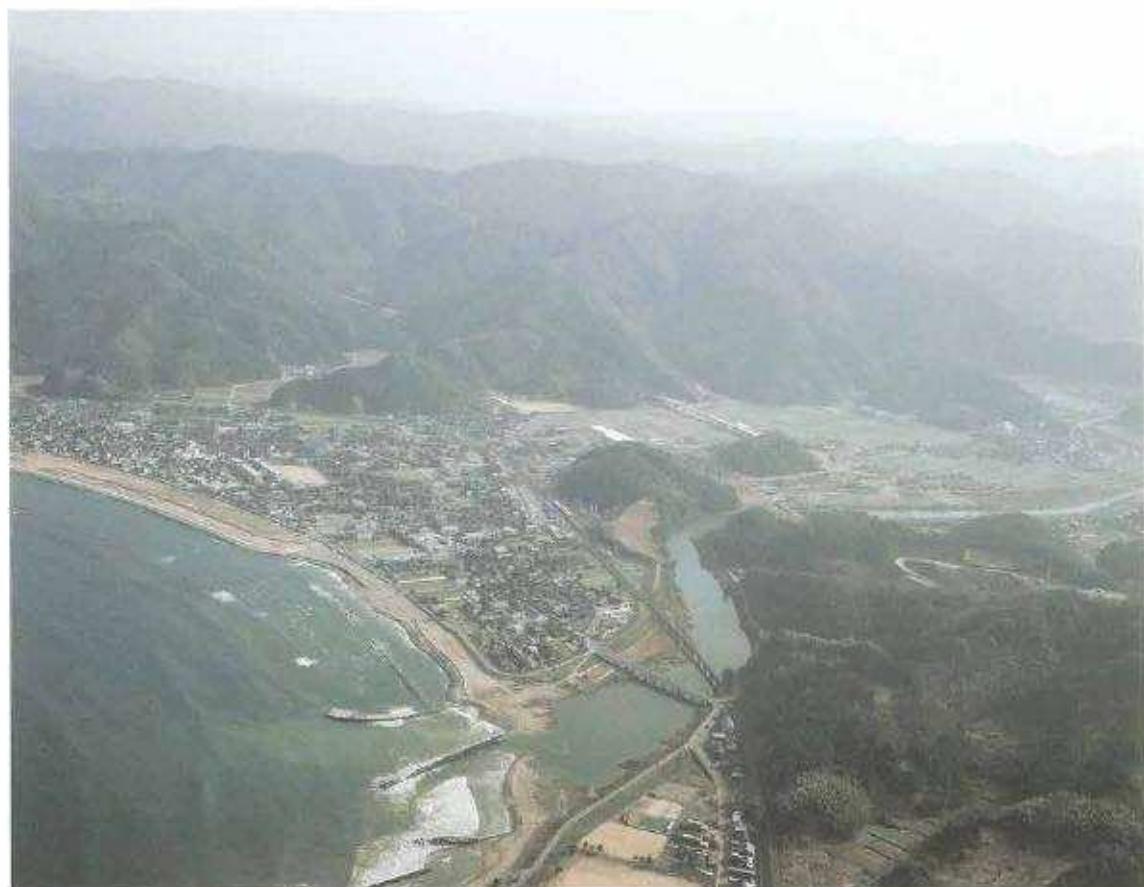
— 国道178号香住道路ランプ部道路改築事業に伴う発掘調査 —

2007年3月

兵庫県教育委員会

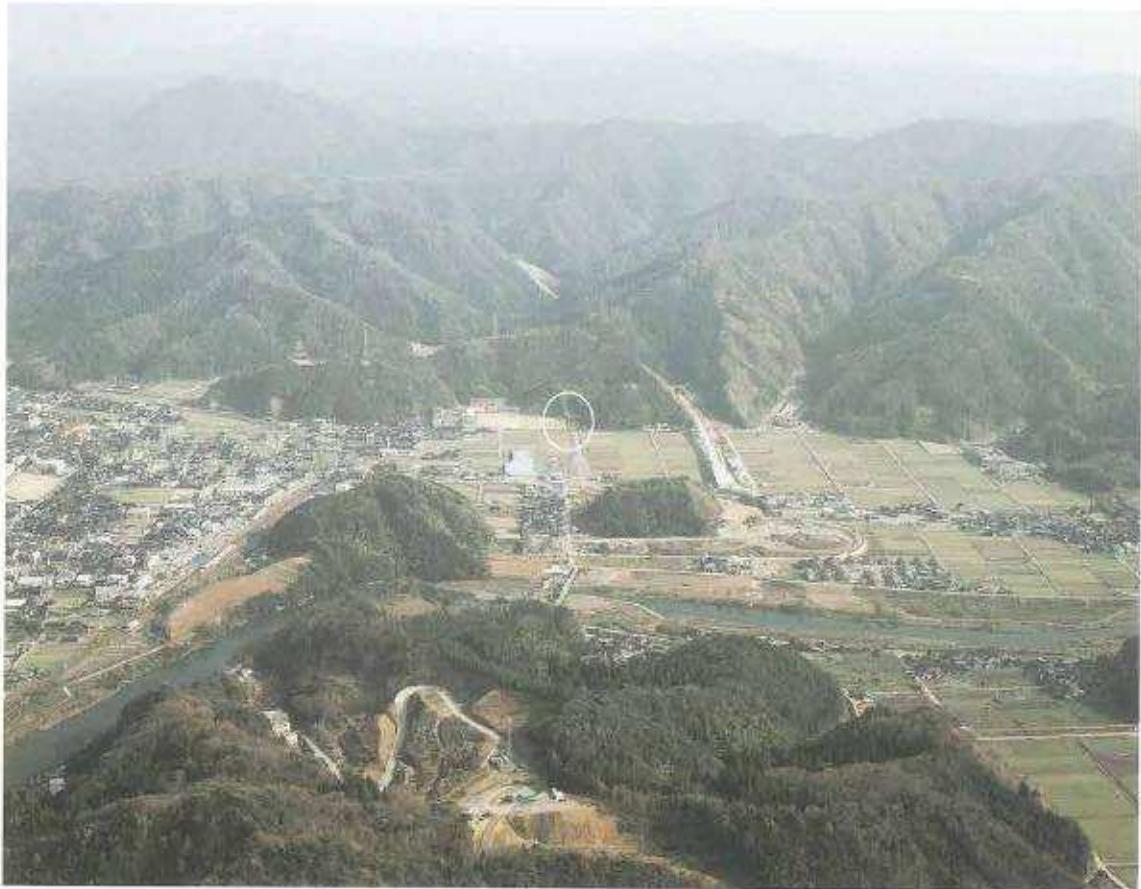


香住平野 南上空から



香住平野 北西上空から

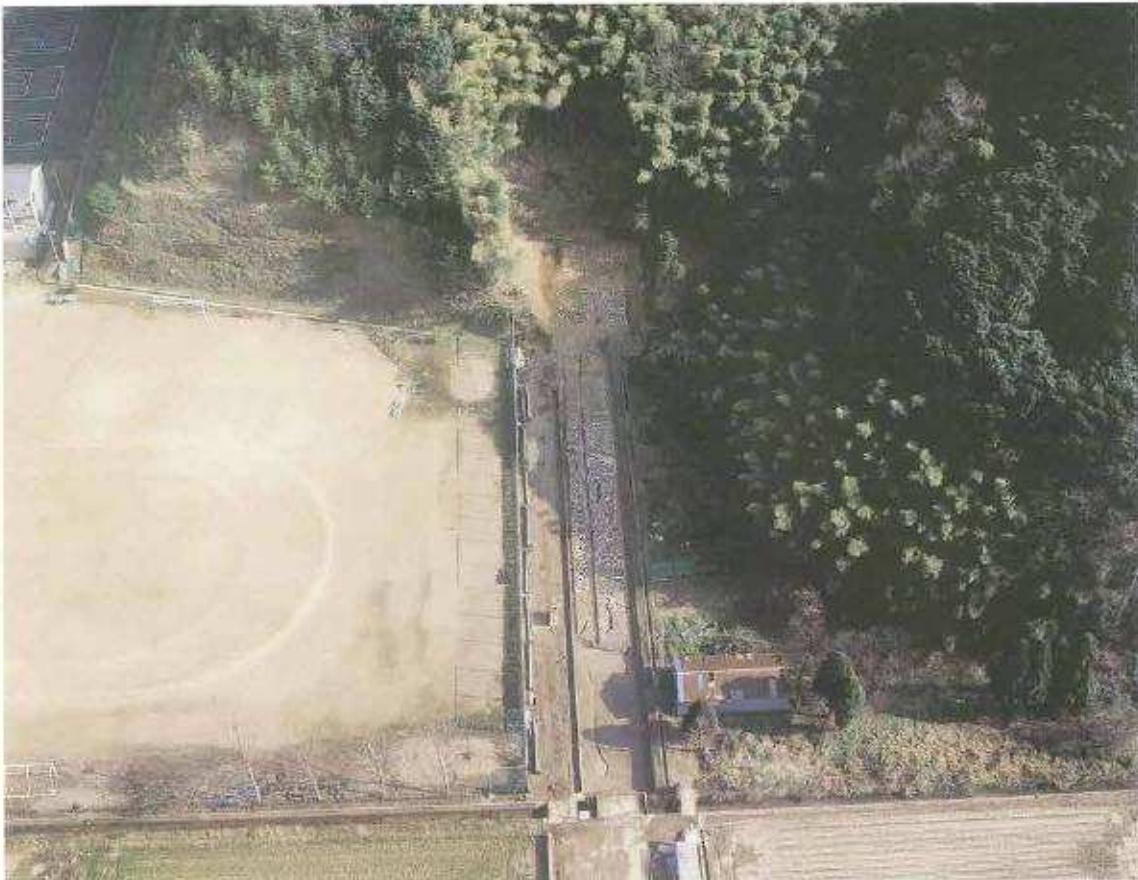
巻首図版 2



遺跡遠景 西上空から



遺跡近景 西上空から

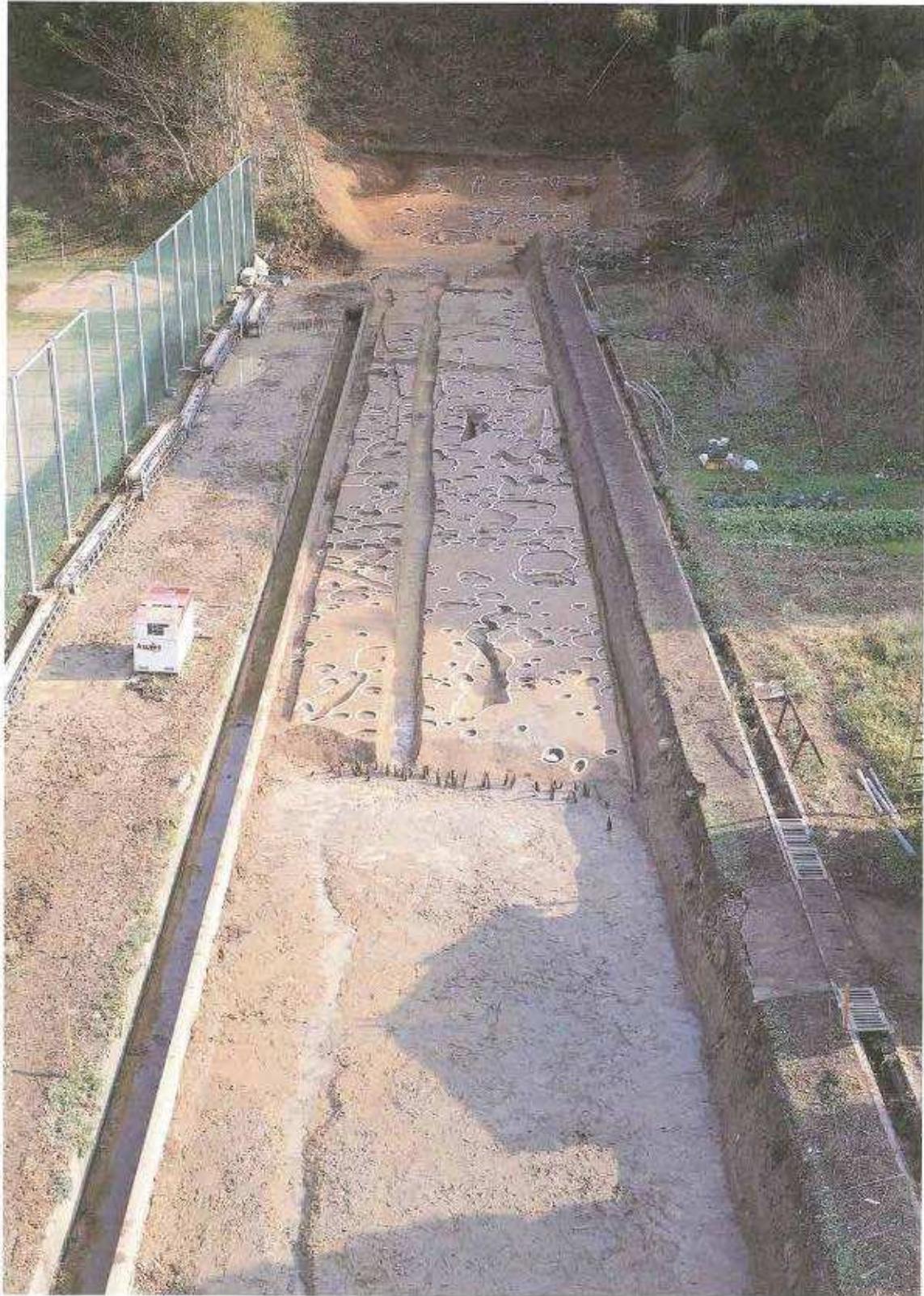


全景 西上空から



全景 北西上空から

巻首図版 4

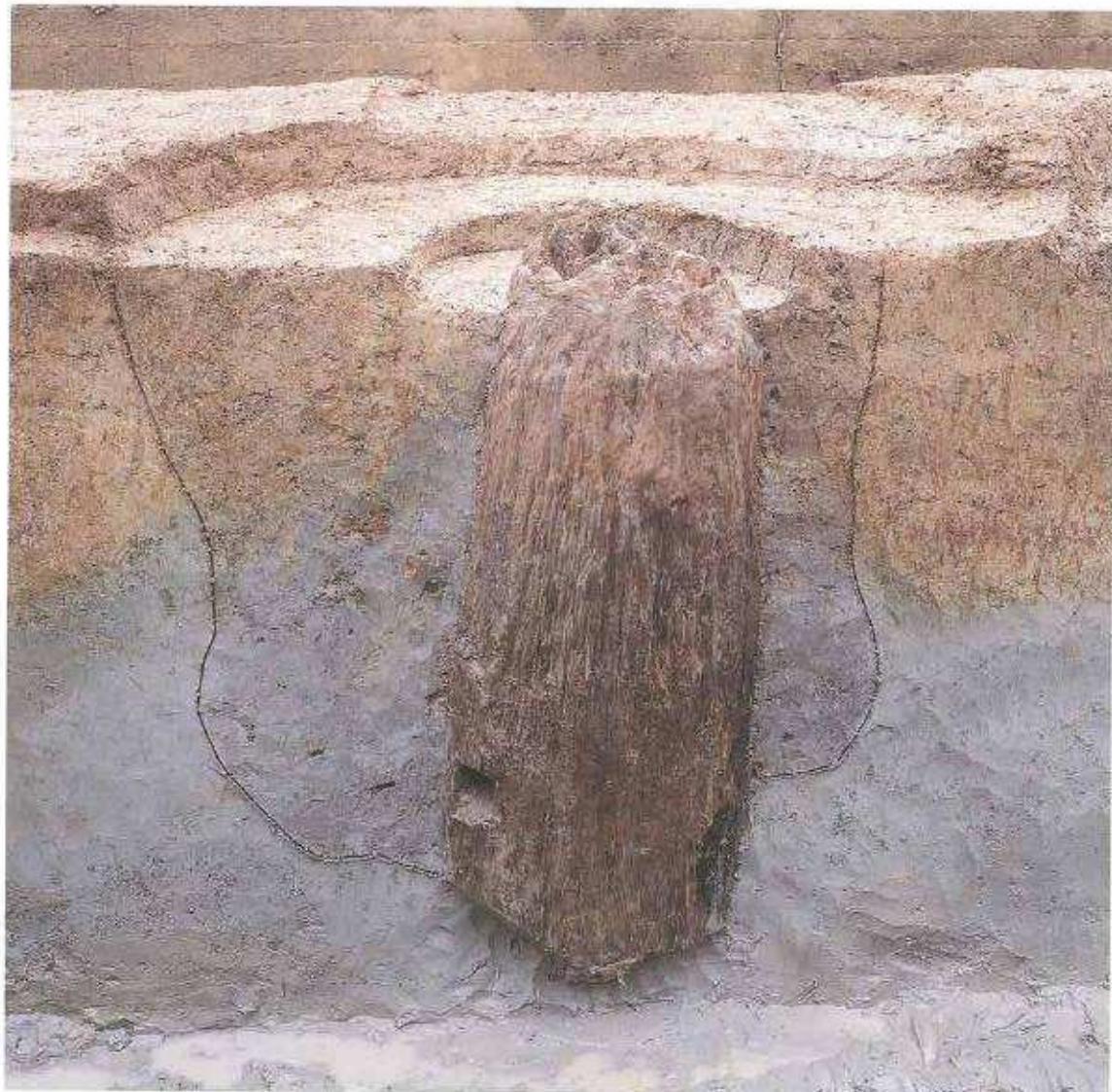


全景 西から



SB08-P1 南から

巻首図版 6



SB08-P 4 南から



出土瓦類

卷首図版 8



軒丸瓦



出土鷦尾

卷首図版10



出土柱材



小型特殊壺

例　　言

1. 本書は、美方郡香美町香住区香住字長見寺（旧香住町香住）に所在する、長見寺廃寺址の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国道178号香住道路ランプ部道路改築事業に先立つもので、兵庫県但馬県民局浜坂土木事務所（平成18年度から「新温泉事務所」）からの委託を受け、兵庫県教育委員会が平成3年度と平成14年度に確認調査を、平成14年度に本発掘調査を実施した。発掘調査は、清水工業有限会社が発掘作業を請け負い、実施した。
調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所山田清朝・小川弦太が担当した。
3. 調査後の空中写真の撮影は、国際航業株式会社に委託して行った。他の遺構の写真撮影・実測は調査員が実施した。
4. 整理作業は、平成17年度と平成18年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。合わせて、柱の保存処理を魚住分館にて平成15年度から実施し、5点の柱については財団法人元興寺文化財研究所へ保存処理を委託した。
5. 遺物の接合・実測・復元トレースについては上記事務所整理保存班で行った。
6. 遺物写真の撮影は、平成17年度は株式会社 アコードに、平成18年度は谷口フォト株式会社に委託し、行った。ただし、裏表紙と巻首図版10及び写真図版39の写真は、財元興寺文化財研究所 大久保治氏が撮影した。
7. 調査は、三角点をもとに三級基準点を設置しておこなった。成果は、世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に位置する。
8. 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
9. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。
10. 本書の編集は、岸野奈津子・島田留里の補助を得て山田が行い、山田と小川が執筆した。また、石器に関する報告は藤田 淳が執筆した。さらに、第4章においては、青木哲哉（立命館大学非常勤講師）・伊東隆夫（京都大学木質科学研究所）から玉稿をいただいた。
11. 本報告にかかる遺物は、兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水）に、写真は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。ただし、第1章で紹介した遺物は、香美町教育委員会が保管している。
12. 最後に、発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。ここに感謝の意を表するものである。
青木 哲哉・石松 崇・岩田 文章・岡平 拓也・眞田 廣幸・潮崎 誠・下高みづや
宍道 年弘・瀬戸谷 晓・中原 斎・根鈴智津子・菱田 哲郎・平野 芳英・味田 晃
光谷 扩実・宮村 良雄・森 郁夫・山根実生子
特に石松氏には、調査時さらには整理段階において、資料の収集等に多大なる援助をいただいた。
深く感謝の意を表したい。

凡　例

1. 土器の実測図の断面は、縄文時代～古墳時代前期については全て黒塗りとしている。一方、古墳時代後期以降については、須恵器を黒塗り、土師器を白抜きとし、両者を区別している。また、瓦類については、網掛けしている。
2. 遺構の番号は、調査時につけたものではなく、報告用に新たに付け直している。また、柱穴の番号については、掘立柱建物に伴うものは、建物ごとにP 1 から順に付けている。
3. 掲図に用いた地図等の出典は以下のとおりである。

第1図 カシミール3D

第2図 国土地理院発行1:50000地形図「鳥取」

第3図 香住町都市計画図(1:2500)

第4図 カシミール3D

第5図 「香住町誌」折り込み

第6図 明治34年陸地測量部発行1:50000地形図「香住」

第7図 香住町道路現況平面図(1:1000)

第8図 国土地理院発行1:25000地形図「余部」「香住」

第9図 香住町都市計画図(1:2500)

第12図 香住町道路現況平面図(1:1000)

第17図 カシミール3D

第18図 香住町都市計画図(1:2500)

第19図 兵庫県「一般国道178号城崎郡香住町香住地内 平面図」(1:500)

第20図 兵庫県「一般国道178号城崎郡香住町香住地内 平面図」(1:500)

目 次

第1章 長見寺廃寺址(山田)	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	6
第3節 長見寺伝承と遺跡の発見	9
第2章 調査の経緯(山田)	17
第1節 調査の起因	17
第2節 確認調査	19
第3節 本発掘調査	20
第4節 普及活動	22
第5節 整理・保存作業	23
第3章 調査の成果	25
第1節 基本層序と遺構の検出(山田)	25
第2節 調査の成果	30
1. 縄文時代～弥生時代の遺構と遺物(山田)	30
2. 古墳時代前期の遺構と遺物(山田)	36
3. 古墳時代後期～奈良時代の遺構と遺物(山田・小川)	47
4. 平安時代後期以降の遺構と遺物(山田)	92
第4章 自然科学分析		
第1節 長見寺廃寺址出土柱材の樹種(伊東)	94
第2節 長見寺廃寺址における地形環境(青木)	96
第5章 まとめ		
第1節 遺物		
1. 縄文時代～弥生時代(山田)	103
2. 古墳時代前期(山田)	104
3. 古墳時代後期～奈良時代の土器(小川)	108
4. 瓦類(山田)	113
5. 平安時代後期の土器(山田)	121
第2節 遺構(山田)	122
1. 遺構の変遷(山田)	122
2. 長見寺廃寺について(山田)	127
第3節 総括(山田)	131
報告書抄録	132

挿 図 目 次

第1図 香美町の位置	vi	第37図 縄文～弥生時代の遺構	30
第2図 香美町	1	第38図 縄文～弥生時代の土器	32
第3図 香住平野の地形分類	2	第39図 出土石器(1)	33
第4図 矢田川水系図	3	第40図 出土石器(2)	34
第5図 昔の香住絵図	4	第41図 古墳時代前期の遺構	36
第6図 明治34年の香住	4	第42図 SB01	37
第7図 遺跡周辺の微地形	5	第43図 SB02	38
第8図 主要周辺遺跡	7	第44図 SK01	40
第9図 伝承関連地	10	第45図 SD01	41
第10図 調査地からみた島山(志馬比城)	11	第46図 SD02	41
第11図 釣鐘尾城 堀切	11	第47図 古墳時代前期の土器(1)	42
第12図 調査地と水路	12	第48図 古墳時代前期の土器(2)	43
第13図 遺跡発見契機の遺物(1)	13	第49図 古墳時代～奈良時代の遺構検出作業	47
第14図 遺跡発見契機の遺物(2)	14	第50図 古墳時代後期～奈良時代の遺構	47
第15図 遺跡発見契機の遺物(3)	15	第51図 墓状遺構	48
第16図 竣工後の矢谷トンネル付近	17	第52図 古墳時代後期～奈良時代の遺構 掘立柱建物跡	49
第17図 日本海沿岸新道路交通網	17	第53図 SB03	50
第18図 香住バイパス	18	第54図 SB04	51
第19図 確認調査位置図	19	第55図 SB05	52
第20図 調査位置図	20	第56図 SB06	53
第21図 調査風景	21	第57図 SB06 写真撮影準備	53
第22図 現場事務所での土器洗い	21	第58図 SB07	54
第23図 現地説明会	22	第59図 SB07-P2断面	54
第24図 香住第一中学校生 遺構の見学	22	第60図 SB08	56
第25図 香住第一中学校生 遺物の見学	22	第61図 SB09	57
第26図 長井小3・4・5年生の見学	22	第62図 SB10	58
第27図 長井小1・2年生の見学	22	第63図 柱(1)	59
第28図 柴山小学校生の見学	22	第64図 柱(2)	60
第29図 年輪年代測定用のサンプリング	23	第65図 古墳時代後期～奈良時代の遺構 柱穴・土坑・溝	61
第30図 柱の写真撮影	23	第66図 柱(3)	65
第31図 保存処理後の柱	24	第67図 柱穴の断割り作業	66
第32図 基本土層(1)	26	第68図 SK02	67
第33図 基本土層(2)	27	第69図 SK03	67
第34図 遺構面の検出	28	第70図 SK04	68
第35図 調査風景	28		
第36図 検出遺構	29		

第71図	SD03	68	第90図	出土平瓦 (5)・鶴尾 (1)	87
第72図	SD04	69	第91図	出土鶴尾 (2)	88
第73図	SD06	69	第92図	平安時代後期以降の遺構	92
第74図	古墳時代後期～奈良時代の土器 (1)	71	第93図	平安時代後期以降の土器	93
第75図	古墳時代後期～奈良時代の土器 (2)	72	第94図	長見寺廃寺址出土柱材の顕微鏡写真	95
第76図	古墳時代後期～奈良時代の土器 (3)	73	第95図	矢田川下流平野の地形分類図	97
第77図	出土瓦類	76	第96図	A-A'地質断面図	98
第78図	瓦類出土位置	77	第97図	調査区付近の微地形	100
第79図	出土軒丸瓦	78	第98図	調査区の地質断面図	101
第80図	01形式復元図	79	第99図	古墳時代前期の土器の分類	105
第81図	01形式接合模式図	79	第100図	須恵器の分類	109
第82図	02型式復元図	80	第101図	平瓦側面の整形技法	114
第83図	03型式接合模式図	80	第102図	平瓦端面の整形技法	114
第84図	出土丸瓦	81	第103図	山陰型鶴尾	116
第85図	叩きの種類	82	第104図	山陰型鶴尾出土遺跡の分布 (1)	118
第86図	出土平瓦 (1)	83	第105図	山陰型鶴尾出土遺跡の分布 (2)	119
第87図	出土平瓦 (2)	84	第106図	I期の遺構	123
第88図	出土平瓦 (3)	85	第107図	II期の遺構 (1)	124
第89図	出土平瓦 (4)	86	第108図	II期の遺構 (2)・III期の遺構	125

表 目 次

第1表	縄文～弥生時代土器観察表	35	第16表	古墳時代後期～奈良時代 土器観察表 (1)	73
第2表	SB01 建物・柱穴規模一覧表	37	第17表	古墳時代後期～奈良時代 土器観察表 (2)	74
第3表	SB02 建物・柱穴規模一覧表	38	第18表	古墳時代後期～奈良時代 土器観察表 (3)	75
第4表	古墳時代前期土器観察表 (1)	44	第19表	瓦観察表 (1)	88
第5表	古墳時代前期土器観察表 (2)	45	第20表	瓦観察表 (2)	89
第6表	古墳時代前期土器観察表 (3)	46	第21表	瓦観察表 (3)	90
第7表	SB03 建物規模一覧表	49	第22表	瓦観察表 (4)	91
第8表	SB03 柱穴規模一覧表	49	第23表	平安時代後期以降の土器観察表	93
第9表	SB04 建物・柱穴規模一覧表	50	第24表	樹種同定一覧表	95
第10表	SB05 建物・柱穴規模一覧表	51	第25表	古墳時代後期～奈良時代の遺構一覧	111
第11表	SB06 建物・柱穴規模一覧表	52	第26表	山陰型鶴尾一覧表 (1)	118
第12表	SB07 建物・柱穴規模一覧表	54	第27表	山陰型鶴尾一覧表 (2)	119
第13表	SB08 建物・柱穴規模一覧表	55	第28表	長見寺伝承	129
第14表	SB09 建物・柱穴規模一覧表	57			
第15表	SB10 建物・柱穴規模一覧表	58			

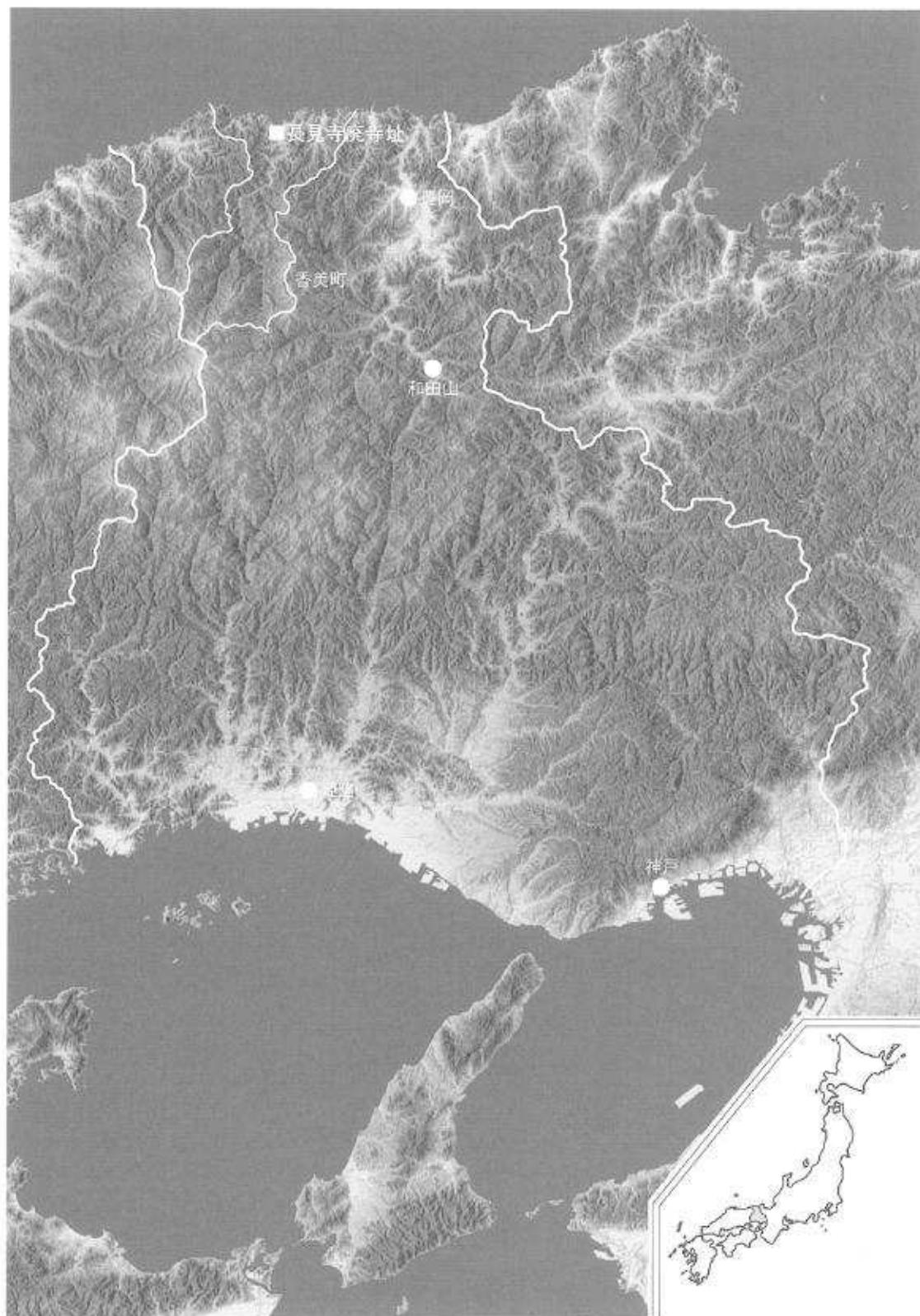
卷首図版目次

卷首図版 1	香住平野 南上空から	卷首図版 5	SB08-P 1 南から
	香住平野 北西上空から	卷首図版 6	SB08-P 4 南から
卷首図版 2	遺跡遠景 西上空から	卷首図版 7	出土瓦類
	遺跡近景 西上空から	卷首図版 8	軒丸瓦
卷首図版 3	全景 西上空から	卷首図版 9	出土鷲尾
	全景 北西上空から	卷首図版10	出土柱材
卷首図版 4	全景 西から	卷首図版11	小型特殊壺

写真図版目次

写真図版 1 遺構	全景(上空から)	写真図版 9 遺構	SB08(西から) SB08 P 1・P 4(南から)
写真図版 2 遺構	全景(西から) 全景(東から)		SB08 P 4(南から) SB08 P 1(南から)
写真図版 3 遺構	拡張部全景(西から) 拡張部全景(北から)		SB08 P 2(西から) SB08 P 3(西から)
	壇状遺構(北西から)	写真図版10 遺構	SB09(北東から) SB09 P 1(北東から)
写真図版 4 遺構	平坦部全景(俯瞰)		SB09 P 3(北東から) SB09 P 5(南西から)
写真図版 5 遺構	SB02(北から) SB02 P 3(東から)		SB09 P 7(北東から) SB10 P 5(西から)
	SB02 P 4(西から) SB02 P 8(西から)		SB10 P 6(北から)
	SB02 P 9(西から)	写真図版11 遺構	P 10(東から) P 14(西から) P 29(西から)
写真図版 6 遺構	P 4 土器出土状況(南から)		P 30(西から)
	SD02 土器出土状況(北から)	写真図版12 遺構	SK02(西から) SK03 全景(西から)
	SD02(西から) SD01(西から)		SK03 断面(西から) SK03 断面(西から)
	SK01(北から)		SD03(北東から)
写真図版 7 遺構	SB04 P 4(北から) SB04 P 5(西から)	写真図版13 遺構	SD04 全景(南西から) SD04 全景(東から)
	SB05 全景(東から) SB05 P 1(南から)		SD04 断面(東から) SD04(東から)
	SB05 P 1(南から) SB05 P 2(北から)	写真図版14 遺物	遺跡発見契機の土器(1~3)
	SB05 P 3(北から)		2上半部 2下半部
写真図版 8 遺構	SB06 全景(北から) SB06 P 1(東から)	写真図版15 遺物	旧河道出土土器(6・7・8・10)
	SB06 P 2(北から) SB06 P 4(東から)		包含層出土土器(12・14・15)
	SB06 P 6(東から) SB07 P 2(西から)	写真図版16 遺物	包含層出土土器(16) SB01出土土器(22)

- P 5 出土土器(24) P 4 出土土器(26)
- P 6 出土土器(29) P 3 出土土器(31)
- 写真図版17 遺物
- SK01出土土器(33・35~38・42・44・45)
- 写真図版18 遺物
- SD02出土土器(48・51) SD01出土土器(53)
- 包含層出土土器(54・56・62・63・65)
- 写真図版19 遺物
- SB05出土土器(66) SB10出土土器(69・70)
- SB08出土土器(67) SB09出土土器(68)
- P 15出土土器(89) P 13出土土器(91)
- P 9出土土器(92)
- 写真図版20 遺物
- P 26出土土器(71・72) P 8出土土器(74・75)
- P 7出土土器(76) P 12出土土器(81)
- P 20出土土器(82) P 23出土土器(83)
- P 14出土土器(85) P 19出土土器(86)
- P 22出土土器(88) P 17出土土器(90)
- 写真図版21 遺物
- P 8出土土器(73) P 21出土土器(78)
- P 16出土土器(79) P 24出土土器(80)
- P 25出土土器(84) P 27出土土器(94)
- P 28出土土器(95) P 10出土土器(93)
- SD03出土土器(107) 旧河道出土土器(116)
- 包含層出土土器(120)
- 写真図版22 遺物
- SK02出土土器(96~98)
- SK04出土土器(101・102) SK03出土土器(103)
- 包含層出土土器(100・105・121・122・138~140)
- 写真図版23 遺物
- SD03出土土器(106・108~110)
- SD05出土土器(111) SD04出土土器(112・113)
- SD06出土土器(114)
- 写真図版24 遺物
- 旧河道出土土器(115・117~119)
- 包含層出土土器(99・104・125・126・134~136)
- 写真図版25 遺物
- 包含層出土土器(123・124・127~132)
- 写真図版26 遺物
- 包含層出土土器(133・137・141・184・188・190)
- 旧河道出土土器(181・183)
- 写真図版27 遺物
- 軒丸瓦(142・143・145)
- 写真図版28 遺物
- 軒丸瓦(144) 144瓦当接合状況
- 写真図版29 遺物
- 丸瓦(146・147) 147端面
- 写真図版30 遺物
- 丸瓦(148) 平瓦(151) 151側面 151端面
- 写真図版31 遺物
- 平瓦(152・157) 157端面
- 写真図版32 遺物
- 平瓦(158・159) 158端面
- 写真図版33 遺物
- 平瓦(153・160~162)
- 写真図版34 遺物
- 平瓦(4) 4端面 4側面
- 写真図版35 遺物
- 平瓦(5) 5右側面 5左側面 5広端面
- 5狭端面
- 写真図版36 遺物
- 平瓦(174) 鶲尾(175) 175側面
- 写真図版37 遺物
- 鶲尾(176・177) 176側面
- 写真図版38 遺物
- 鶲尾(178) 178側面
- 写真図版39 遺物
- 出土柱(W 1・W 2・W 5~W 7:保存処理後)
- 写真図版40 遺物
- SB08-P 1出土柱(W 1) W 1箇穴
- SB08-P 4出土柱(W 2) W 2箇穴
- 写真図版41 遺物
- SB07-P 2出土柱(W 5) P 29出土柱(W 6)
- 写真図版42 遺物
- P 30出土柱(W 7) W 7箇穴
- 写真図版43 遺物
- 遺跡発見契機の石器(S 1~S 5)
- 写真図版44 遺物
- 包含層出土石器(S 6~S 12・S 14)



第1図 香美町の位置

第1章 長見寺廃寺址

第1節 地理的環境

1. 地理的環境

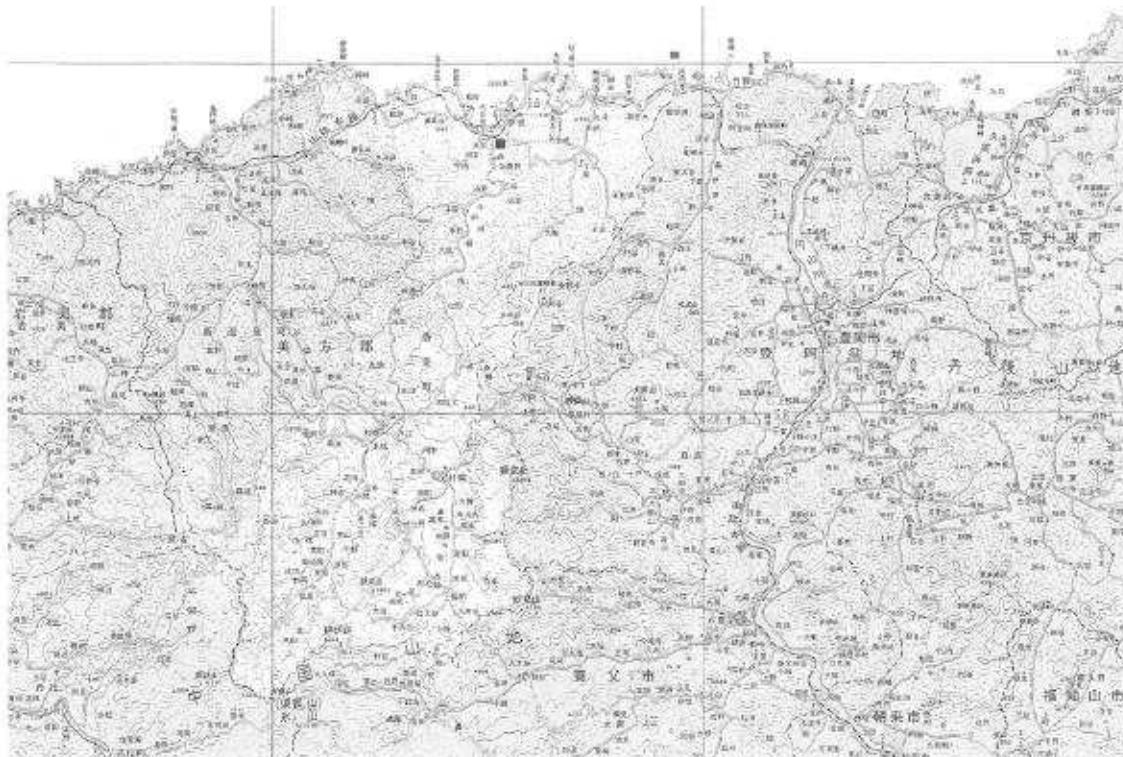
香 美 町

長見寺廃寺址は、兵庫県美方郡香美町に所在する。香美町は、平成17年4月1日に美方郡村岡町・同郡美方町・城崎郡香住町とが、合併してできた町である。兵庫県の北西部に位置し、北側は日本海に面している（第1図）。西側は美方郡新温泉町と、東側は農岡市と、南側は養父市と境をなしている（第2図）。町域は、南北で約33km、東西（日本海側）で約18kmと南北に長く、その面積は369.08km²を測り、兵庫県下で最も広い町である。また、人口は21,438人（平成17年国勢調査）である。

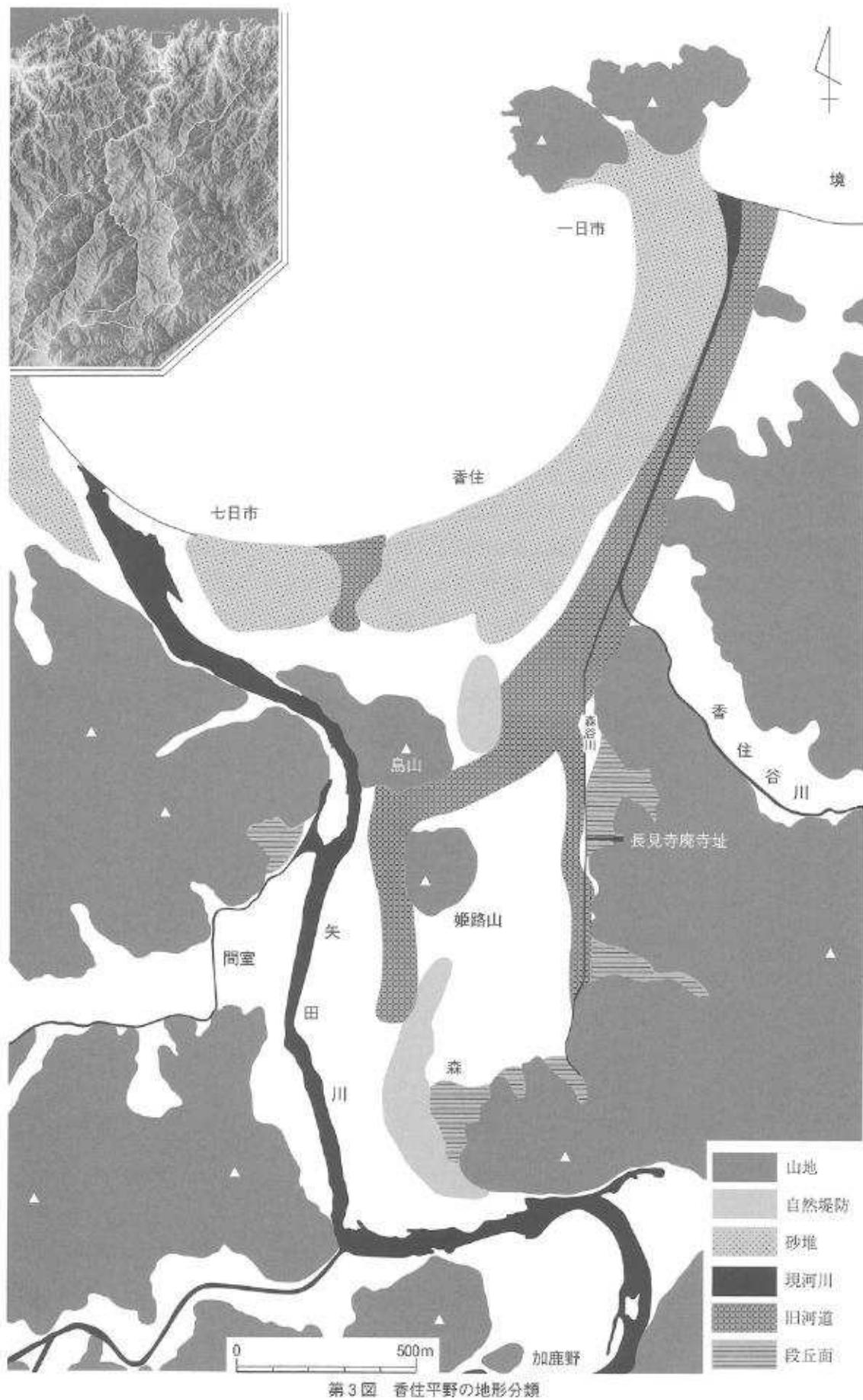
香 住 町

上記のように南北に長い香美町のなかにあって、長見寺廃寺址は旧の香住町（現香美町香住区）に所在する。上記旧3町のなかでも、日本海に面し、最も北側に位置する。香住町を中心とした海岸線は山陰海岸国立公園の中心となっている。山陰海岸は、リアス式となっており、いくつかの入り江がつながっている。東側から、佐須・柴山・香住・余部がその代表的なものである。これらの入り江は、天然の良港として古くから栄え、柴山港と香住港から水揚げされる松葉ガニの合計は全国一である。

上記の入り江の中で最も規模の大きなものが、香住湾である。この湾を中心に、旧香住町が形成されていた。



第2図 香 美 町



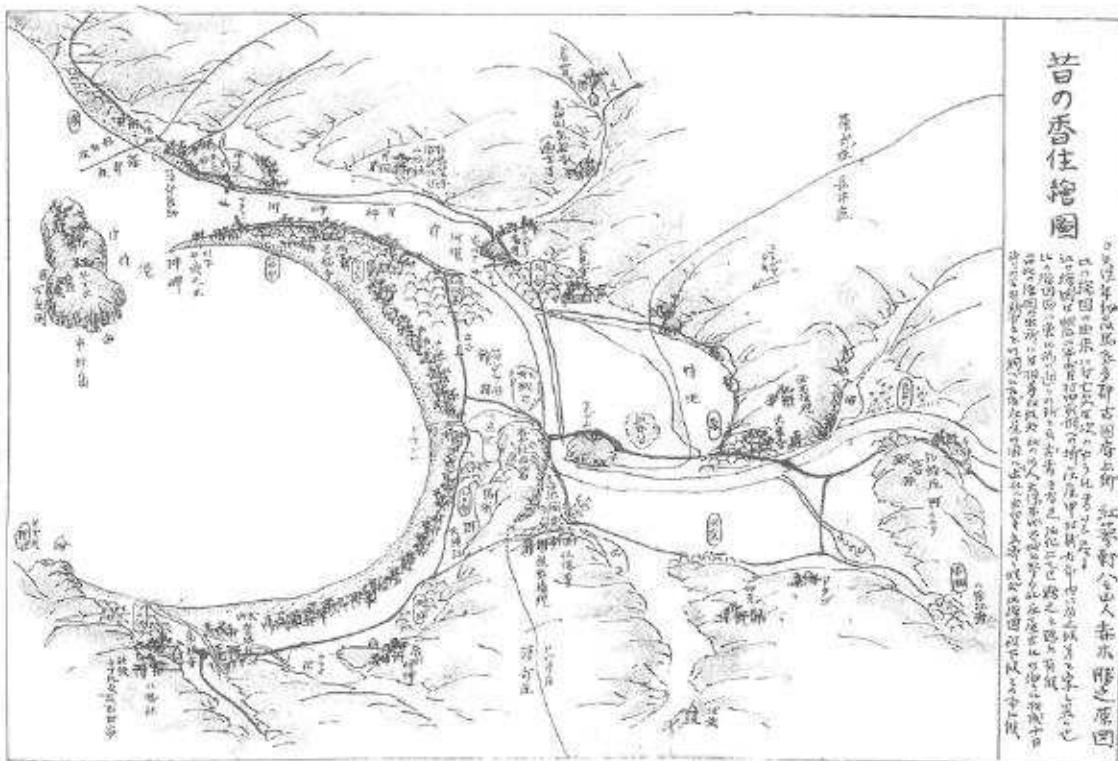
第3図 香住平野の地形分類

2. 地形環境(巻首図版1・2)

- 矢田川下流域平野** 香住湾の南側には、矢田川下流域平野が開けている。矢田川下流域平野は、以前ラグーンであった入江が、南側から北流してきた矢田川による堆積作用によって形成された沖積平野である。矢田川下流域平野は、南北方向で約1.6km、平野中央部付近における東西方向で0.8kmと、南北方向に長い平野である。
- 遺跡の立地** 平野の北側、海に面した位置には弧状をなす砂堆(陸繫砂州)が形成されている。そして、この砂堆の内陸側つまり南側は後背湿地となっており、矢田川下流域平野の南端部までひろがっている(第3図)。ただし、この後背湿地を詳細に観察すると(第7図)、島山の東側と姫路山の南側に南北方向にのびる自然堤防を復元することができる。
- ただし、島山東側の自然堤防については、微地形からその範囲を明確に復元することは困難である。しかし、島山東麓に「水取」という小字が残存することから、当地の微凹地の存在が想定され、その東側に自然堤防の存在を想定することができる。ちなみに、この自然堤防が、後述(第1章第3節)する「お城台」に相当するものと考えられる。
- そして、低湿地の周囲は丘陵が迫っている。丘陵部には小規模な谷が刻まれており、その谷部と後背湿地の間に、小規模な支流性扇状地が形成されている。この、後背湿地の東側に形成された扇状地の一つに当遺跡が立地している(第3図)。
- 遺跡の立地する小扇状地は、西北西に開く極めて小規模な扇状地である。扇端部からの奥行きは、わずか100mに過ぎない。ただし、当扇状地の北側については、香住第一中学校のグランドの造成により改変を受けており、詳細な旧地形を復元することは困難である。ただし、昭和41年撮影・測量の香住町都市計画図(1:2500)においては、グランド造成以前の姿が表現されているが、現地形と大きな変化は認められない(第18図)。また、扇端部における現地表面の標高は4.50m、扇端部西側の後背湿地の現地表面の標高は3.75mと、75cmの標高差が認められる。
- 矢田川** 矢田川下流域平野を形成する矢田川は、水ノ山北麓(現香美町小代区秋岡)を源とする二級河川である。小代区の中心をなす谷を北流し、途中、村岡区川会で鉢伏山(村岡区)を源とする湯舟川と合流している。合流後は、大きく蛇行を繰り返し、香住区加鹿野から香住平野の西側を北流し、香住区矢田で香住湾に注いでいる(第4図)。流域長34.7kmを測り、その流域面積は⁽¹⁾29,506kmである。結果的に、香美町域と谷田川水系がほぼ一致する。
- しかし、香住平野における矢田川の流れは、人工的に改修されたものである。以前は、香住区森の北西部から流れを北東方向に変え、姫路山と島山の間を通り、平野北



第4図 矢田川水系図



第5図 昔の香住絵図

側の砂堆の南縁に沿うように流れ、平野の東側の香住区境に注いでいたようである。地元では、天慶年間（938～946）に油良と七日市の間にある「蟹狭間」の地峡を切り開いて、現在の川筋が形成されたといわれている。⁽²⁾これは、次節で紹介する「長見寺伝承」に由来するものと考えられる。

天保年間（1830～1843）に描かれた矢田川下流域平野の絵図（第5図）をみると、旧の川筋が描かれている。また、調査地西側の低湿地部分の微地形を復元（第7図）すると、絵図と同様に姫路山と島山（志馬比城）の間に、旧河道を復元することができる。

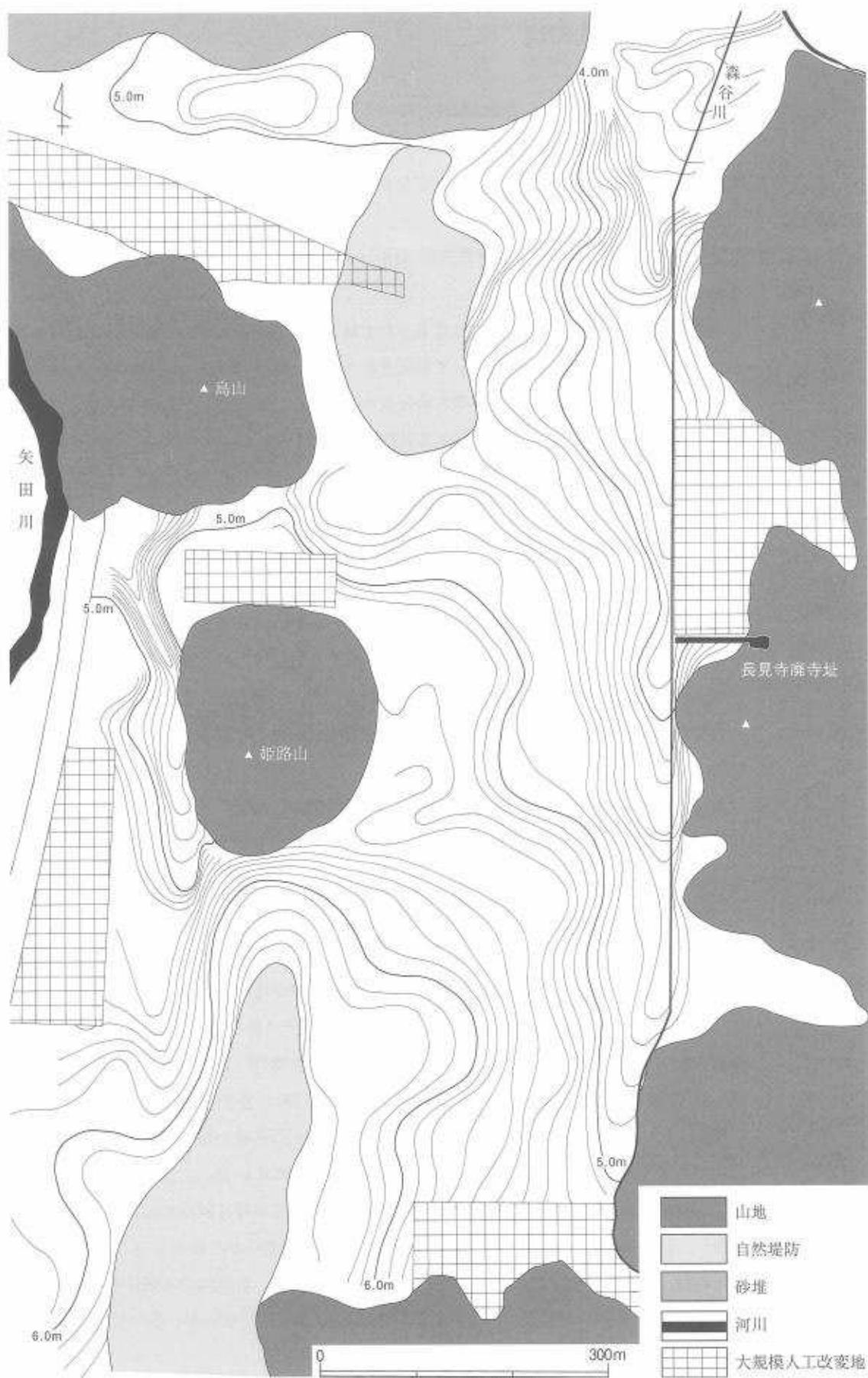
このため、天慶年間という年代観をにわかに信じることはできない。いずれにしても、現河川は以前とは大きくその流れを変えていることは間違いないものと考えられる。これは、微地形分析からも確認することができる。また、この流れによって形成されたと考えられる自然堤防が香住区森の集落に認められる。ただし、その時期を特定することは、現在のところ困難である。なお、明治34年陸地測量部発行1/50,000地形図（第6図）を見ると、矢田川は現在の流れとなっている。



第6図 明治34年の香住

〔註〕

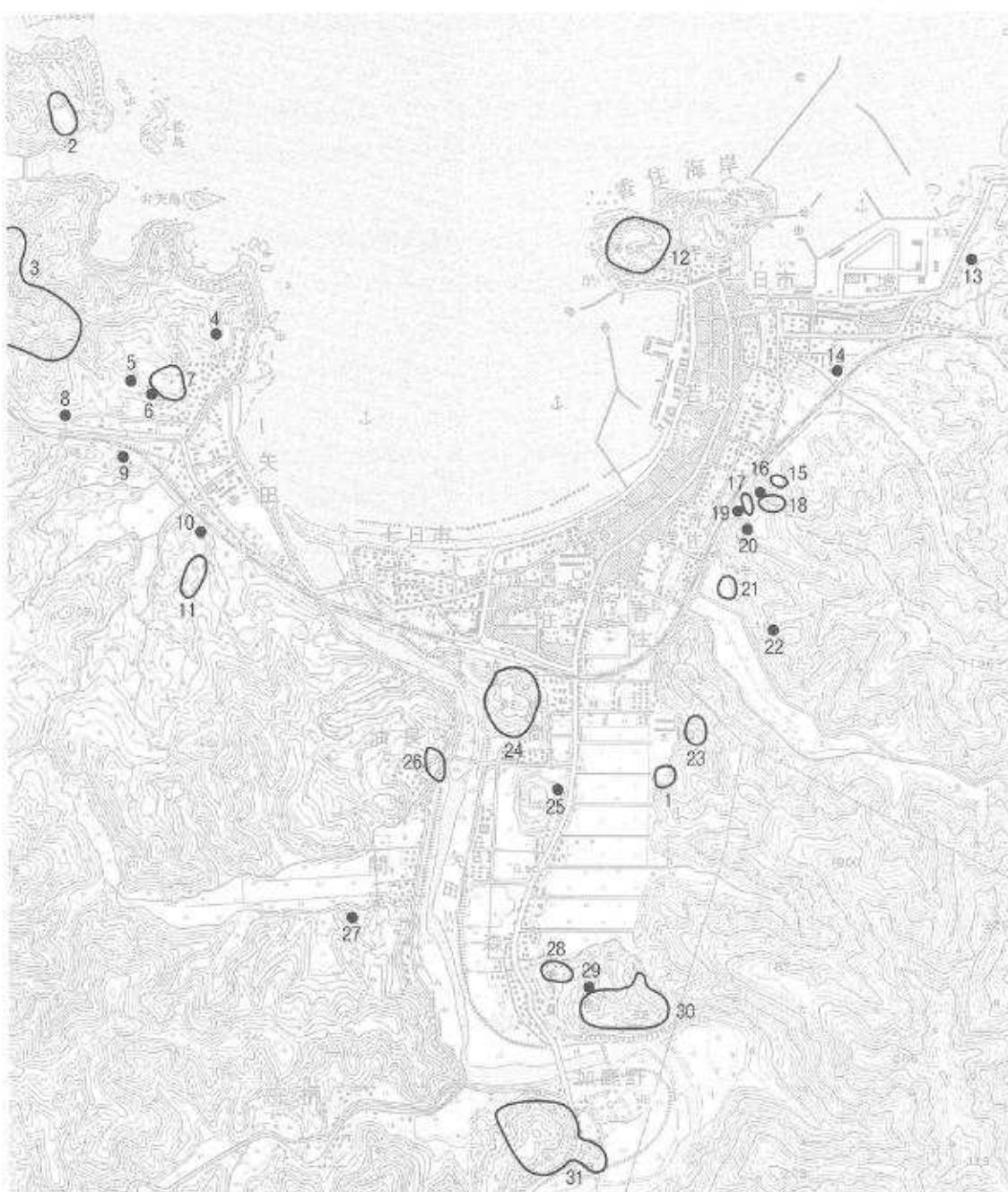
- (1) 谷本 勇「矢田川」「兵庫県大百科事典」神戸新聞出版センター 1983
- (2) 小幡勝次郎「郷土史話 森の下露」（『香住の地誌（2）』1997所収）



第7図 遺跡周辺の微地形

第2節 歴史的環境

- はじめに** 長見寺廃寺址の所在する旧香住町域においては、遺跡は少なからず周知されているが、発掘調査が行われた遺跡はわずかである。当節では、長見寺廃寺址が所在する矢田川下流域を中心とした香住平野を対象に、主要な遺跡を見ていくことにする（第8図）。
- 旧石器時代** 当該期の遺跡は周知されていない。
- 縄文時代** 下ノ浜字観音堂遺跡（7）・唐栗遺跡（18）・月岡下遺跡（19）・岡畠遺跡（28）が周知されている。
- 唐栗遺跡では、平成8年度からはじまった土地区画整理事業に伴い本発掘調査が行われている。⁽¹⁾ この結果、縄文海進によって形成された砂堆上に立地する、前期中葉から後期前半にかけての集落跡であることが明らかとなった。特に、中期中葉の船元式・里木式が時期的中心をなし、住居跡の可能性のある遺構も検出されている。さらに、石鍤・石匙・石鎌なども出土している。⁽²⁾
- 月岡下遺跡でも、1997年に試掘調査・確認調査が行われ、唐栗遺跡とほぼ同時期の集落であることが判明している。
- 岡畠遺跡については、後期中葉（元住吉山I式）・後期後葉（宮窓式）・晩期前葉（滋賀里式）・晩期後葉の土器が採集されている。⁽³⁾ 平成9年度には調査が行われているが、時期を特定できるような良好な遺構は検出されていない。⁽⁴⁾
- 下ノ浜字観音堂遺跡では、調査は行われていないが、独鉛石が出土している。
- 弥生時代** 若松北ガヘ遺跡（15）・矢谷遺跡（23）・油良遺跡（26）・岡畠遺跡（28）が周知されている。
- 当該期の遺跡のなかで最も注目されるのが岡畠遺跡で、調査に伴うものではないが、前期の土器片が採集されている。⁽⁵⁾ これは、但馬地域においても数少ない当該期の土器であり、今回報告する旧河道出土の前期の土器との関連においても注目される。
- この他、若松北ガヘ遺跡では、複合口縁の壺が出土している。矢谷遺跡と油良遺跡については、詳細は不明である。
- 古墳時代** 大きく、古墳と集落跡に分けることができるが、前者が圧倒的である。古墳としては、下ノ浜クラ谷古墳（4）・下ノ浜神さん畑古墳（5）・下ノ浜石田古墳（8）・下ノ浜法庭神社古墳（9）・矢田上野山古墳（10）・矢田上野山南古墳群（11）・宮尾古墳（13）・せんばくま古墳（14）・唐栗古墳群（17）・月岡下古墳（19）・月岡古墳（20）・姫路山古墳（25）・スクネ塚古墳（27）・奥山古墳（29）など、多くの古墳が周知されている。これらの古墳の多くは実態が不明で、多くは後期古墳と考えられている。
- これらの古墳の中で、調査が行われているのは、唐栗古墳群に限られる。須恵器（杯・杯蓋）・玉類等が出土し、7世紀初頭の古墳であることが明らかとなっている。
- この他、月岡下古墳では平成8年度に確認調査が行われ、石室内から柄付きの鐵斧（丁字型利器）が明らかとなっている。また、奥山古墳は現存しないが、かつて箱式石棺があつたとされている。⁽⁶⁾



- | | | |
|---------------------------|-----------------------|---------------------|
| 1. 長見寺廃寺址 (600064) | 12. 塔ノ尾城址 (600067) | 22. 伊原古墳 (600059) |
| 2. トチ三田遺跡 (600006) | 13. 宮尾古墳 (600033) | 23. 矢谷遺跡 (600004) |
| 3. 高木城址 (600075) | 14. せんばくま古墳 (600034) | 24. 志馬比城址 (600063) |
| 4. 下ノ浜クラ谷古墳 (600058) | 15. 若松北ガヘ遺跡 (600035) | 25. 姫路山古墳 (600042) |
| 5. 下ノ浜神さん畠古墳 (600057) | 16. オオカア古墳 (600036) | 26. 油良遺跡 (600003) |
| 6. 下浜八幡神社経塚 (600062) | 17. 唐栗古墳群 (600037・38) | 27. スク木塚古墳 (600050) |
| 7. 下ノ浜宇観音堂遺跡 (600002) | 18. 唐栗遺跡 (600080) | 28. 向廻遺跡 (600001) |
| 8. 下ノ浜石田古墳 (600056) | 19. 月岡下古墳 (600039) | 29. 奥山古墳 (600043) |
| 9. 下ノ浜法庭神社古墳 (600055) | 月岡下遺跡 (600079) | 30. 井上城址 (600072) |
| 10. 矢田上野山古墳 (600054) | 20. 月岡古墳 (600040) | 31. 舞鐘尾城址 (600068) |
| 11. 矢田上野山南古墳群 (600051~53) | 21. 大向遺跡 (600041) | |

第8図 主要周辺遺跡

さらに、月岡古墳に関しては、次節で紹介する長見寺伝承との関連で注目される古墳である（第9図）。

集落跡としては、岡畠遺跡（28）が周知されている。平成9年度に調査が行われ、古墳時代初頭の遺構・遺物が明らかとなっている。⁽⁷⁾ 今回報告する当該期の遺物とはほぼ同時期のものと考えられる。

飛鳥時代

今回報告する長見寺廃寺址以外、周知された遺跡は認められない。

奈良時代

当地域は、律令時代には、但馬国美含郡加須美郷に組み込まれていた。今回報告する長見寺廃寺址以外、周知された遺跡は認められない。

平安時代

岡畠遺跡（28）が周知されている。平成9年度の調査で、掘立柱建物跡が数棟検出されるとともに、遺物も多く出土している。⁽⁸⁾

鎌倉時代

下浜八幡神社経塚（6）が周知されている。青銅製の経筒が出土している。

室町時代以降

平野を取り囲むように、高木城址（3）・塔ノ尾城址（12）・志馬比城址（24）・井上城址（30）・釣鐘尾城址（31）が周知されている。

これらのなかで調査が行われたのは志馬比城址のみで、南北朝期に起源をもつことが明らかとなるとともに、戦国期の畝状堅堀群が検出されている。また、この城は、塔ノ尾城址・釣鐘尾城址とともに、先述した月岡古墳同様、長見寺伝承との関連で注目される遺跡である（第9図）。

他の城址のなかで、釣鐘尾城址では、主郭・土壘・帯曲輪・堀切・堅堀が良好な状態で遺存している。

〔註〕

- (1) 石松 崇「唐栗遺跡」『平成17年度 兵庫県埋蔵文化財調査成果連絡会』 2005
- (2) 石松 崇「香住町の遺跡概要」『香住町の歴史文化遺産－香住町遺跡分布地図－』香住町教育委員会 2005
- (3) 石松 崇「岡畠遺跡周辺の環境と遺跡 2:周辺の遺跡」『岡畠遺跡 重要文化財大乗寺障壁画収蔵庫建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』香住町教育委員会 1999
- (4) 大乗寺埋蔵文化財調査団『岡畠遺跡 重要文化財大乗寺障壁画収蔵庫建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』香住町教育委員会 1999
- (5) 前掲(4)
- (6) 前掲(2)
- (7) 前掲(2)
- (8) 前掲(2)

第3節 長見寺伝承と遺跡の発見

1. 長見寺伝承

はじめに 長見寺廃寺址については、以前は周知されていなかった。ただし、以前、当地に篠部氏の菩提寺である長見寺という寺があったという伝承（以下、「長見寺伝承」）が伝えられていた。その伝承は、やや長くなるが、当遺跡の調査成果を検討する上で、重要な伝承であるので、『但馬の城』⁽¹⁾に掲載されたものをここに紹介する。

伝承の概要 孝徳天皇第一宮有馬皇子は謀反により紀州藤代坂で討たれたと日本書記には記されているが、実はその従者が身代わりに立ち、また追討に向かった者の好意によって、ひそかに丹波に遁れ、のち、船によって香住の地に着き、士馬比山周辺を隠棲の地と定め、海部の比佐を娶り、王子志乃武王をお生みになった。

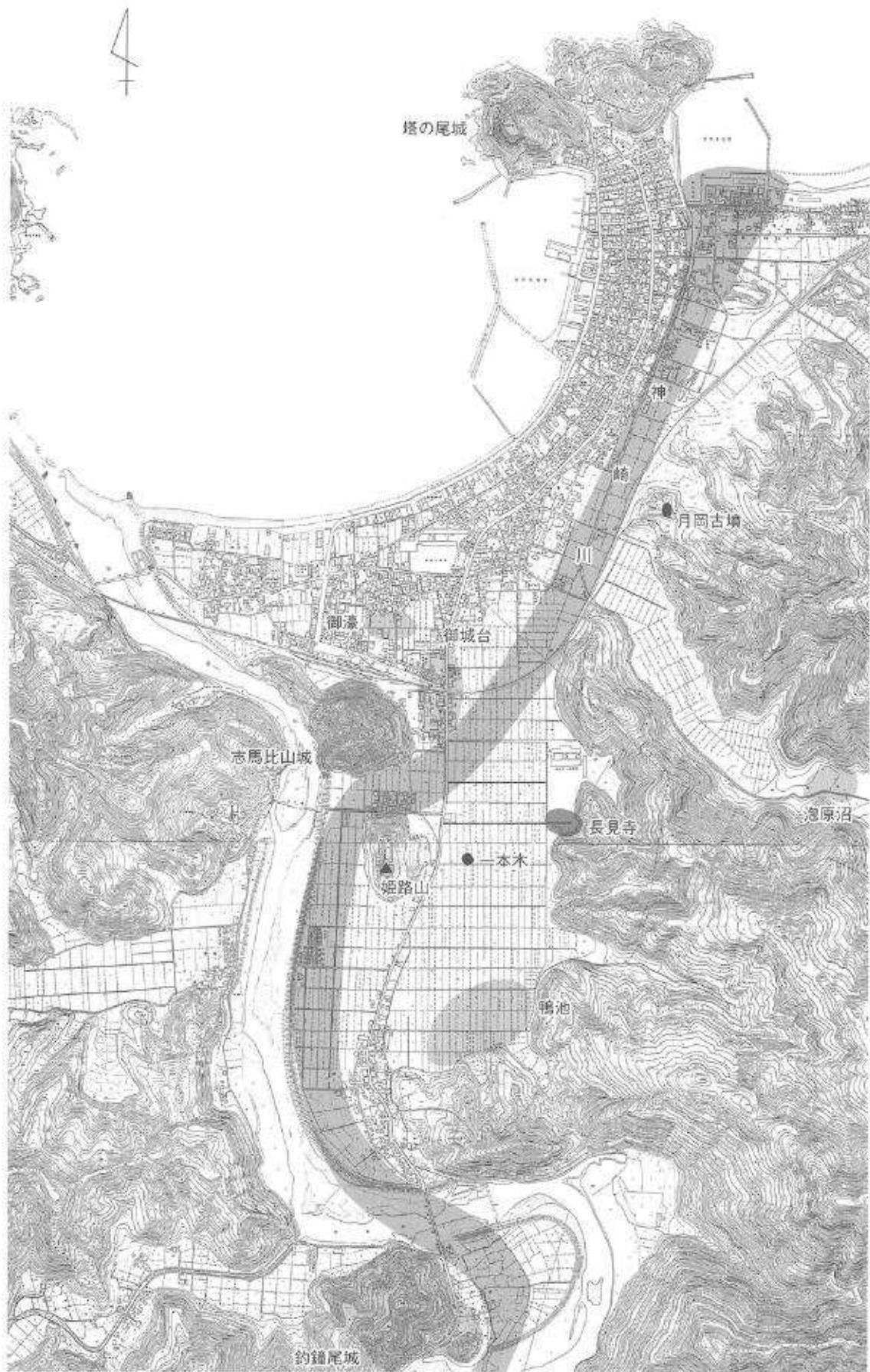
志乃武王は出石小坂の女をむかえ、士馬比山の山上を切り開いて城砦を築き付近を領有された。表米王との対面後間もなく両王とも薨去されたので、これを入江大向うの岡の上に葬り奉った。これが月岡古墳であるといわれている。

さて、この志乃武王の子孫、志乃武有徳はその姓を篠部と改め、その邸宅を山頂から山麓東方の台地に移し、対岸の矢谷に川港の設備をし、壯麗な菩提寺長見寺を建立した。山上には金比羅大権現の社を置くなど、領地内の要衝とされたのだが、何分その間に神崎川が横流していて、交通等に大きな不便が感じられるので、その対策として、河川改修ならびに耕地拡張を企て、着手したのが延喜十二年（912）であった。その後29年を経て天慶三年（940）に、ようやく完成した。

この工事によって今まで河川敷となっていた土地はもちろん、一日市の柳池、七日市の御濠池、香住の泡原沼、森の鳴池等の低湿地は全部埋め立てられて、ここに七十町歩という新しい耕地が出現したのである。

しかも、これらの耕地の大部分はその区画が井字形に整然と区切られている。さらに、この耕地全体の見通しのきく地点に、その時代の地積計量制度である三百六十歩一反の単位、小二百六十歩の区画を置いて、がんじょうなる石疊で固め、面積丈量の基準台とし、その中央にはそのとき用いた丈量繩を埋め、その上に記念樹として楠を植えている（現在も「一本木」という字名が遺存）。なお、四隅には大石を置いて、この頂点と、洪水時に備えるために士馬比山・姫路山間に築いた堤防の頂点の水準が一致するようにねらい、将来において対岸の村落に被害が及ばないよう考慮が払われているなど、實に驚きのほかないのである。

このようにして、有馬皇子在世以来実に五百年間、連綿として徳政をしき領地内の人々の尊敬の的となっていた篠部氏もやがてはろびていく。延元元年（1336）に至り、その子孫の有信が祖先の法要を営むため、長見寺に参詣した時、かねてから領地のことで不和であった長井庄鈴尾城主野石源太が、この時とばかりに、かねて示し合わせてあった塔の尾城に鐘で合図した。ひと手は長見寺、ひと手は留守館へと攻め寄せたので、この不意打ちに驚いた篠部方は、必死となって敵を防いだが、衆寡敵せず、殊に充分の戦備も整えておらず、かつ寺に火を放たれたので、もはやこれまでと主従自刃して火中に投じ悲痛な最



第9図 伝承関連地



第10図 調査地からみた島山（志馬比城）



第11図 釣鐘尾城 堀切

後をとげたのである。一方留守館でも奮戦大いにつとめたが、寺に火がかかったのを見て形勢の不利を知り館に火をかけ一族北村七郎は息子を、日下部新九郎は息女を伴って脱出した。息女は南の山麓で敵の矢に当たり倒れ、息子もまた乱戦の間にゆくえ不明となって、さすがの名門もついにその跡をたつたのである。

しかし、ゆくえ不明であった息子は首尾よく落ちのび、但馬国奈佐宮井城主藤部伊賀守方に身を寄せていたが、再起の望みもうまく行かず、京都に移り現在に及んでいる。

伝承地の比定 上記の伝承を受けて、「昔の香住絵図」（第5図）にも、長見寺の記載が認められる。この絵図をもとに、長見寺伝承関連地をまとめたのが第9図である。多くは、「昔の香住絵図」に描かれたものを参考としたが、「一本木」「泡原沼」は、現在まで遺存する小字地名から復元したものである。

また、「御城台」については、「昔の香住絵図」にも描かれているが、当該地に第7図で復元した微高地が存在する。したがって、その呼称からもこの微高地が「御城台」に相当するものと考えた。この他、「鴨池」と「御濠池」についても、第7図の微地形分析で微凹地に相当する箇所にあたる。

なお、伝承にある「柳池」についてはその位置を復元することはできなかった。

2. 遺跡の発見

遺物の発見 上記の状況のなかで、当地に遺跡の存在が明らかとなったのが、香住第一中学校西側を北流する森谷川の用水路化工事である。この工事の際、土器・瓦・古銭（延喜通宝）・石器が出土している。この際見つかった土器・瓦・石器が、第13図～第15図に掲載したものである。特に、瓦の発見から、当地の長見寺伝承を裏付ける可能性が高いものと考えられるにいたったものである。また、後述するように（13ページ）、平瓦には、発見当時の様子が墨書きされている（写真図版35）。

ただし、現在、これらの遺物が出土した位置を具体的に復元することはできない。香住第一中学校グランドの森谷川を挟んだ西側において、新庁舎建設に伴う確認調査が行われたが、遺構・遺物は明らかとはならなかった。このため、長見寺廃寺址の遺跡の範囲は北側へは拡がらないものと考えられる。したがって、水路部分でも、上記の遺物が出土した地点は、今回報告する調査区により近い箇所ではないかと考えられる（第12図）。

ここで、遺跡発見の契機となった遺物について、簡単に報告する。

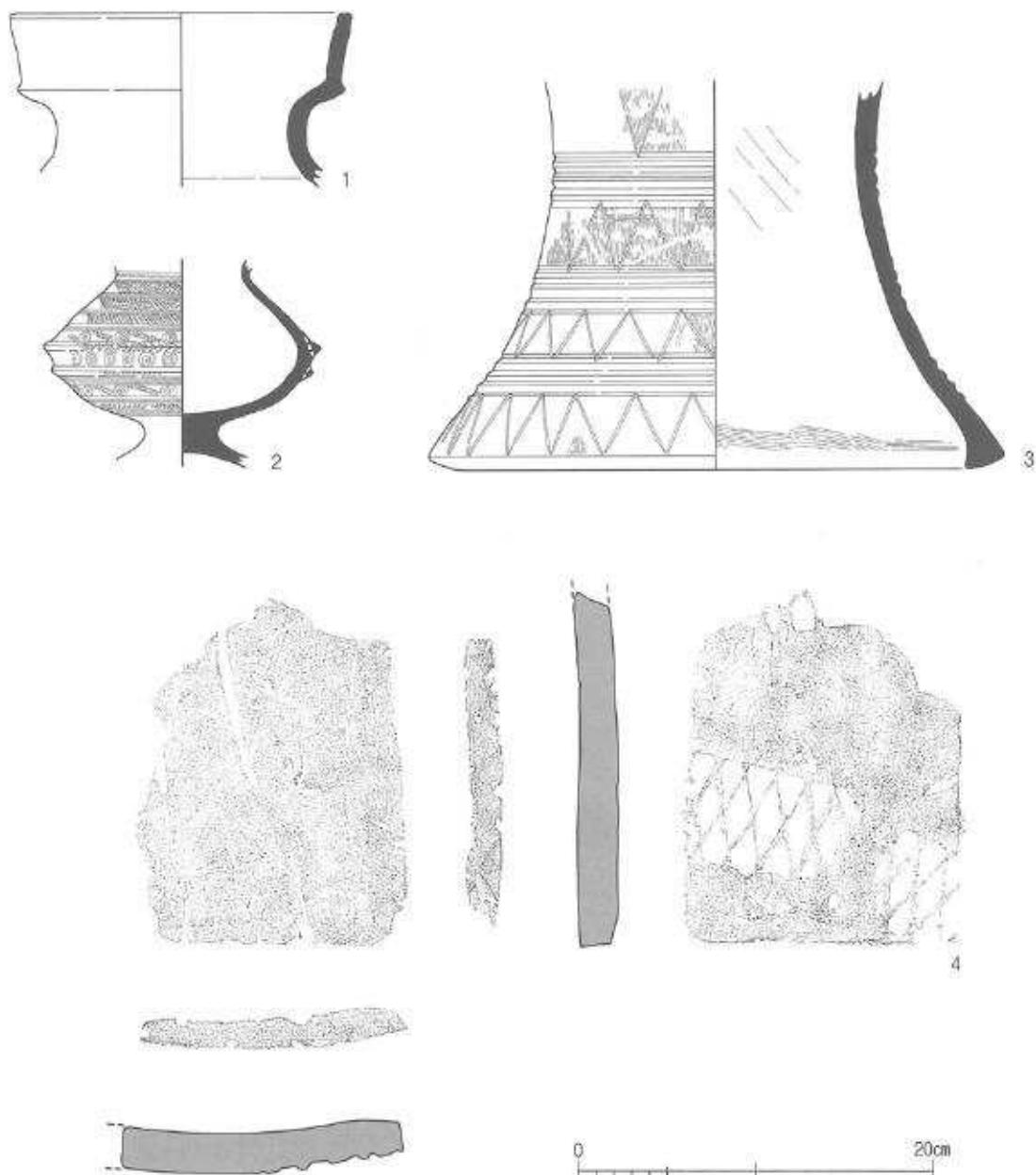


第12図 調査地と水路

土 器 瓢2個体（1・2）と器台1個体（3）が出土している（第13図）。いずれも、弥生時代中期～古墳時代初頭に位置付けられるものである。

瓢は、2個体とも山陰系に分類されるものである。特に2については、小型特殊瓢と称されるもので、装飾性の高いものである。体部中位には2条の断面三角形の突帯が貼り付けられ、渦巻状のスタンプ文が施されている。また、体部の上半と下半には3条を単位とする凹線紋が等間隔に施され、その間に列点紋もしくは渦巻き紋が施されている。列点紋は貝腹を利用したものと考えられる。また、体部中位の渦巻き紋の一部には赤色顔料の付着が認められる（巻首図版11）。なおこの土器は、2片の土器を、同一個体の可能性が高いことから、図上で復元したるものである。また、体部内面はナデ及びヘラナデ、脚部内面はヘラミガキにより仕上げられている。

また、3についても祭祀性の高い大型の土器で、外面は4条を単位とする凹線文が等間



第13図 遺跡発見契機の遺物(1)

隔に施され、その間にヘラ描きによる錦歯紋が描かれている。なお、この土器は、外面をハケ調整、内面をハケ調整→ナテ調整後、装飾が施されている。

瓦

2点(4・5)出土している(第13図・第14図)。いずれも、同タイプに分類される平瓦である。特に5の凸面には、出土の経緯が以下のように墨書きされている(写真図版35)。

「大正九年五月

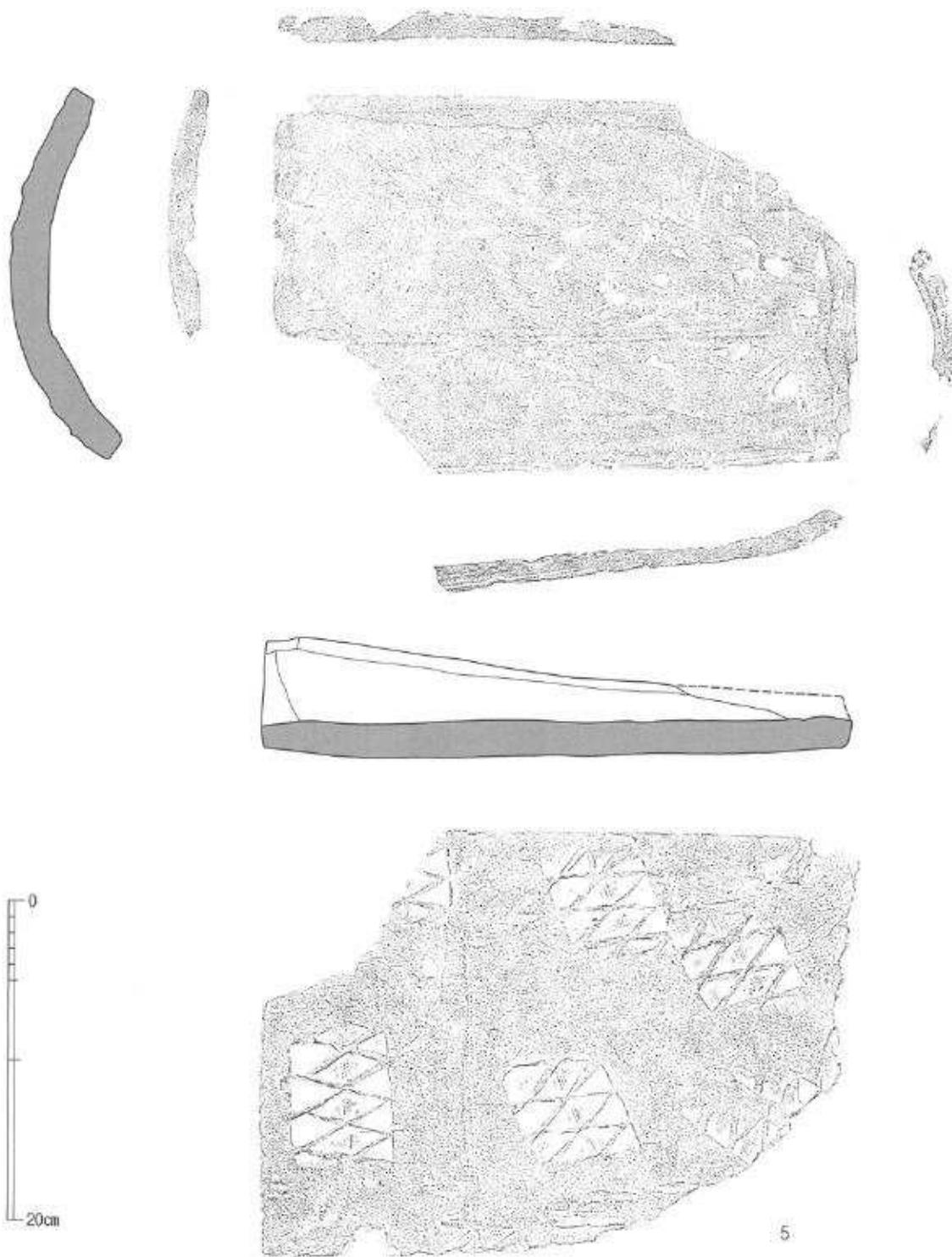
耕地整理工事ニ付発掘古瓦

香住村香住字長見寺ニ於テ

延喜通宝四百文ト共ニ発掘ス

(長見寺趾)」

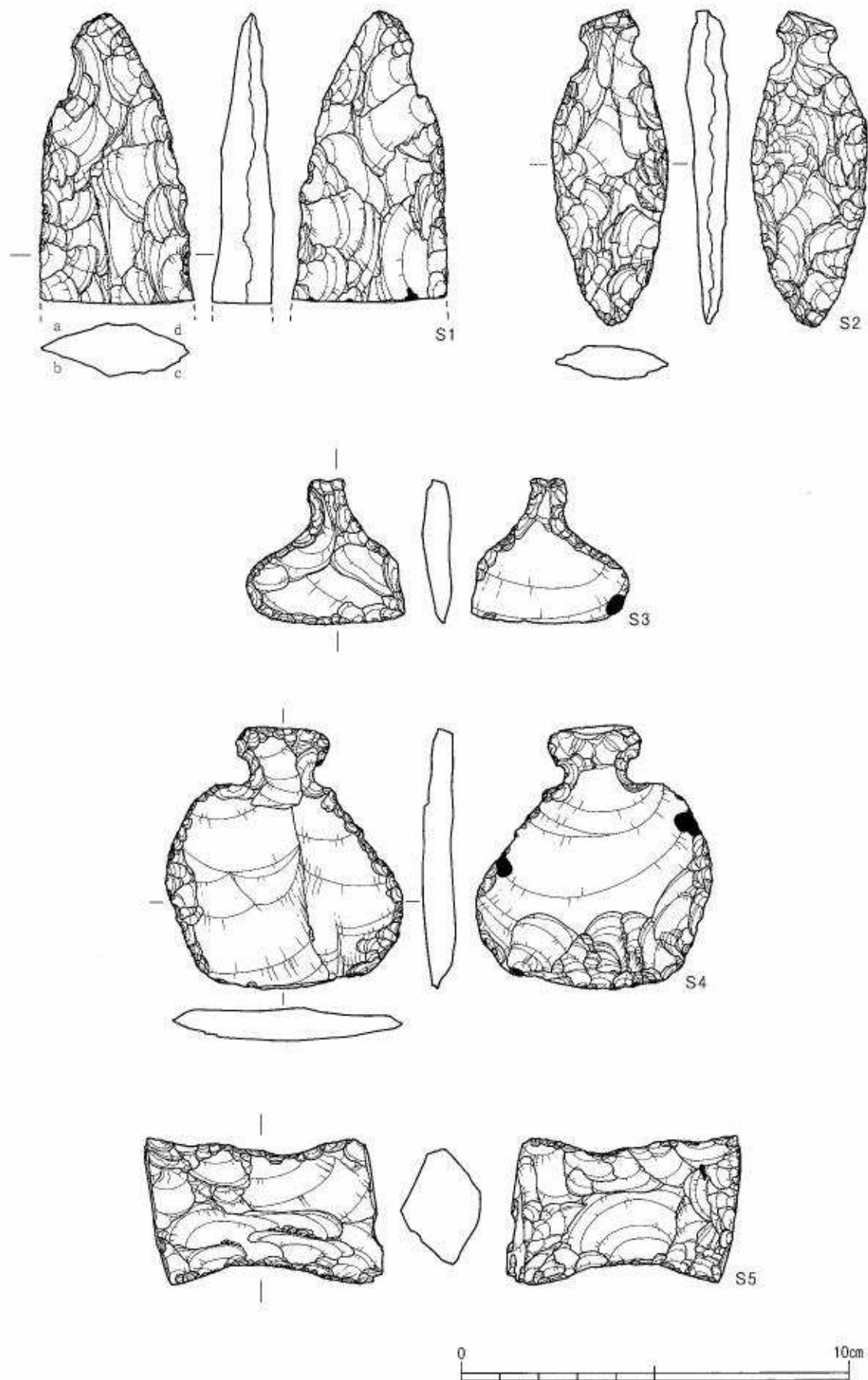
また5は、今回報告する中で最も良好に残存する平瓦である。この瓦の特徴については、第3章2節にて報告する。



第14図 遺跡発見契機の遺物 (2)

石 器 5点 (S 1～S 5) 出土している (第15図)。

S 1は両面加工の槍形尖頭器である。中程で折れ基部側が失われているものの、整った形態に仕上げられている。調整剥離は先端部の一部を除いて、比較的大きな平坦剥離で構成されている。剥離の順を切り合い関係から判断すると、断面図に示す a面と c面が古く、b面と d面が新しい。石器の製作者の立場からこのような剥離を行うとすれば、次のようなになる。まず c面 (a面でもよい) を剥離した後、横に裏返して a面を剥離する。次



第15図 遺跡発見契機の遺物 (3)

に、上下に裏返してa面を、さらに左右に裏返してb面を剥離する。何度も石器を持ち替えることなく、このような最小限の手の動きで石器の製作が行われており、製作者の技量の高さをうかがい知ることができる。

S 2～S 4は石匙である。S 2が縦型、S 3・S 4が横型の形態をとる。

S 2は平坦な打面より剥離された縦長の剥片を素材としており、素材剥片の構成面としては、腹面側にバルブの一部が、背面側上部には3面の剥離面が残っている。背面を構成する剥離面から、上下方向に打面が移動したことが知れる。調整剥離はほぼ全面に及び、平坦な剥離によって両面加工の尖頭器様に成形されている。打面側を急角度の剥離で深く抉って摘み部としている。打面が残されているため、先端部に比べ摘み部側に厚みがある。

S 3は横長剥片を素材とした小型の石匙で、背面側・腹面側とも素材面を大きく残し、打面も残存している。背面の剥離方向は腹面とほぼ同一方向である。調整剥離は背面側では打面部を除く全周に施され、やや角度を持った平坦剥離が連続する。腹面側の調整剥離は摘み部から肩部にかけてのみ施される。刃部は片刃で、末端は直線的となり、一側縁は弧状を成す。

S 4も横長の剥片を素材としている。素材の背面の剥離方向はすべて腹面と同一である。剥片の末端はヒンジーフラクチャーあるいは折れ面となる。調整剥離は縁辺部には限られ、角度をもった平坦剥離を連続させ、両側縁に弧状の刃部を形成している。腹面末端部からは奥まで入り込む剥離が見られるものの、端部に平坦な面を残しているため鋭い刃部にはなっていない。摘み部は急角度の剥離で奥深く抉る。

S 5は厚手の縦長剥片を横に用いた楔形石器である。素材剥片の平坦な打面と腹面のバルブ周辺が残されているが、大半は上下方向からの剥離面で構成されている。上下の縁辺は潰れ状を呈して内湾する。剥片の末端は折れ面となっており、この面からも平坦な加撃が行われている。

以上に示した5点の石器は、S 3が灰褐色の、他は濃い褐色の珪質頁岩が用いられている。珪化の程度はS 1が少し弱いものの、他は極めて良質な石材で特有の光沢を放つ。こうした珪質頁岩は、遺跡周辺ではまったく産しないもので、東北地方日本海側に多く見られるものに最も近い。石匙の形態をみてもS 2のような尖頭器様を呈するものは、岩手・山形・新潟などの縄文時代前期を中心とした時期に多く認めることができるものである。

[註]

- (1) 但馬の城編集委員会「但馬の城」 1975
- (2) 香住町「香住町誌」 1980
- (3) 小幡勝治郎「郷土史話香住の由来」

第2章 調査の経緯

第1節 調査の起因

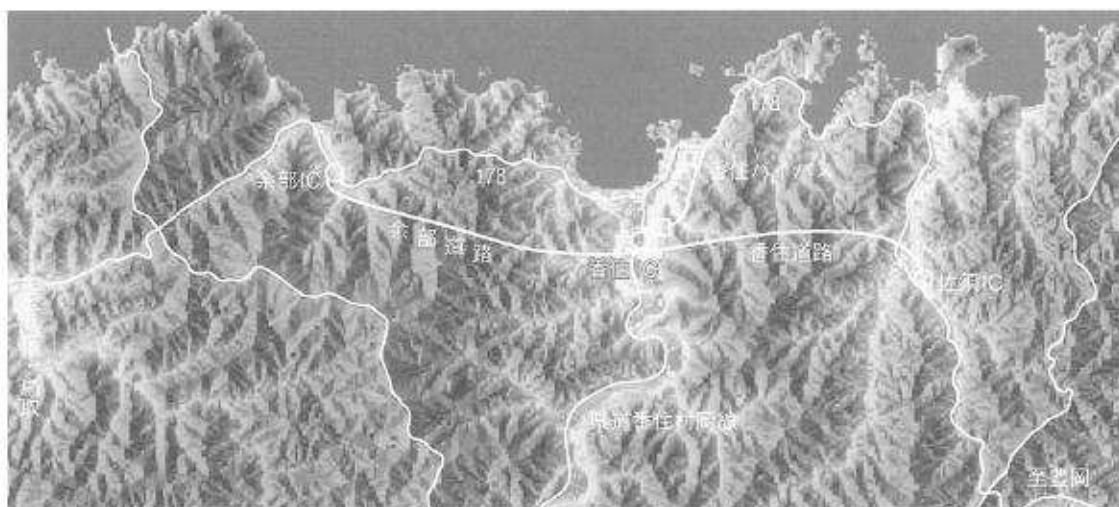
はじめに 調査は、国道178号香住道路ランプ部道路改築事業に先立つものである。当事業は、北東側は国道178号から分岐し（香美町香住区境）、旧香住町の中心部の南東側を迂回し、主要県道香住村岡線（香美町香住区香住）に接続するものである（第18図）。工事延長は1,656mである。

当事業は、地域高規格道路「鳥取豊岡宮津自動車道」の一部の整備区間である「香住道路」と「余部道路」の建設事業と連動するものである。つまり、香美町香住区下岡から同区香住までの香住道路（佐須IC～香住IC）と香美町香住区香住から同区余部までの余部道路（香住IC～余部IC）の中間に位置するのが香住ICである。そして、香住バイパスは当インターチェンジに直結するものである（第17図）。このように、当バイパスは、旧香住町内の交通集中の緩和を目的とした道路である。

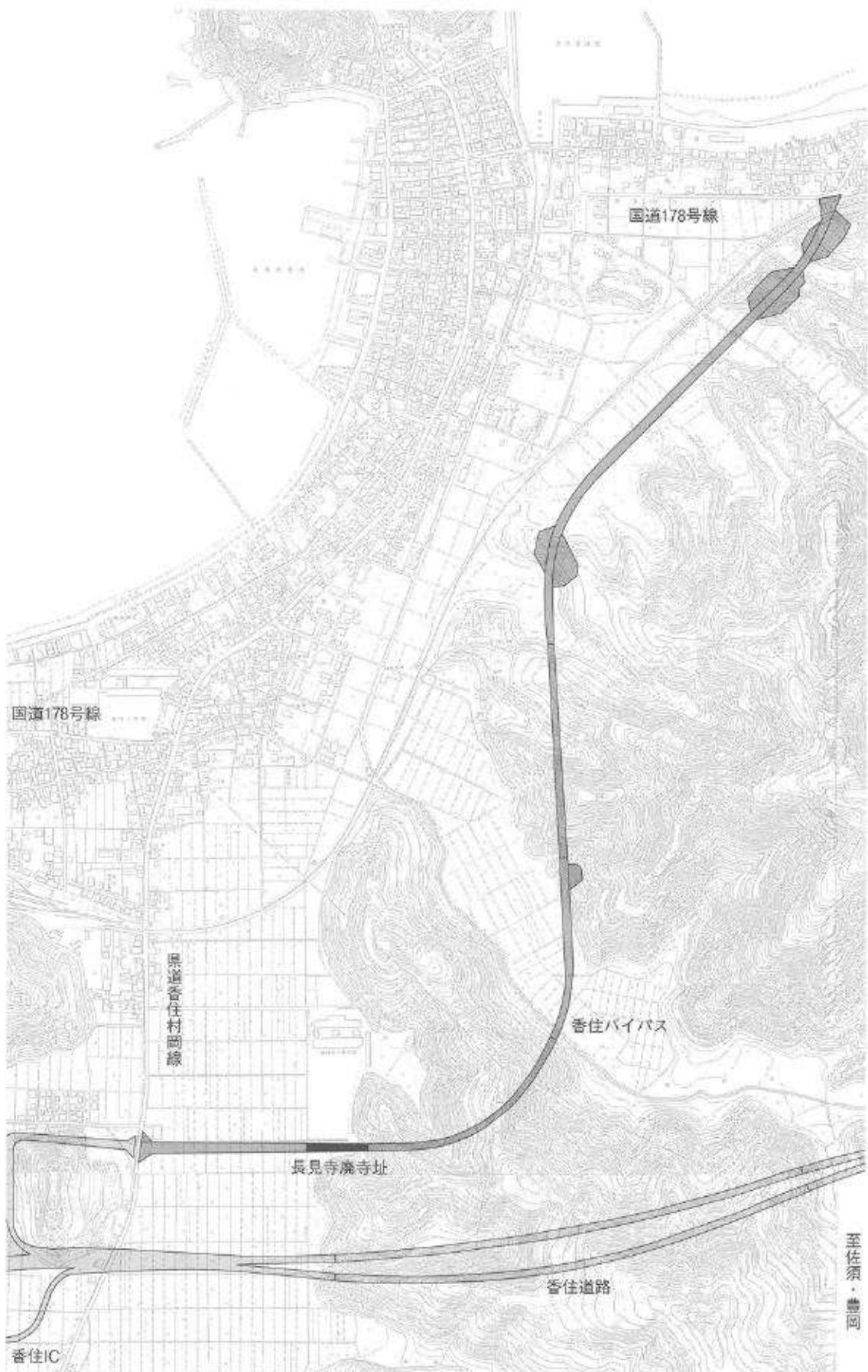
遺跡の調査 上記事業予定地内の中で、今回報告する長見寺廃寺址の調査を実施したのは、矢谷トンネル（395m）西側出入口部分から西側、森谷川までの約95mの区間である（第16図）。本章第2節で報告する確認調査を経て、本発掘調査に至ったものである。



第16図 基工後の矢谷トンネル付近



第17図 日本海沿岸新道路交通網



第18図 香住バイパス

第2節 確認調査

はじめに 確認調査は、2次にわたり行われている（第1次確認調査・第2次確認調査）。

第1次確認調査 平成3年度に兵庫県教育委員会が実施している。主要県道香住村岡線から森谷川までの事業予定地（旧香住町香住字五反田）を対象とした（第19図）。グリッド（2m × 2m）を9箇所に設定し、埋蔵文化財の確認を行った。調査の結果、最も東側のグリッドにおいて古墳時代と奈良時代の土器を確認した。しかし、遺構が全く確認できなかったことから、本発掘の必要はないとの判断に至った。

調査体制等は以下のとおりである。

調査員担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
村上 賢治・矢野 治己

遺跡調査番号 910076

調査期間 平成3年10月8日

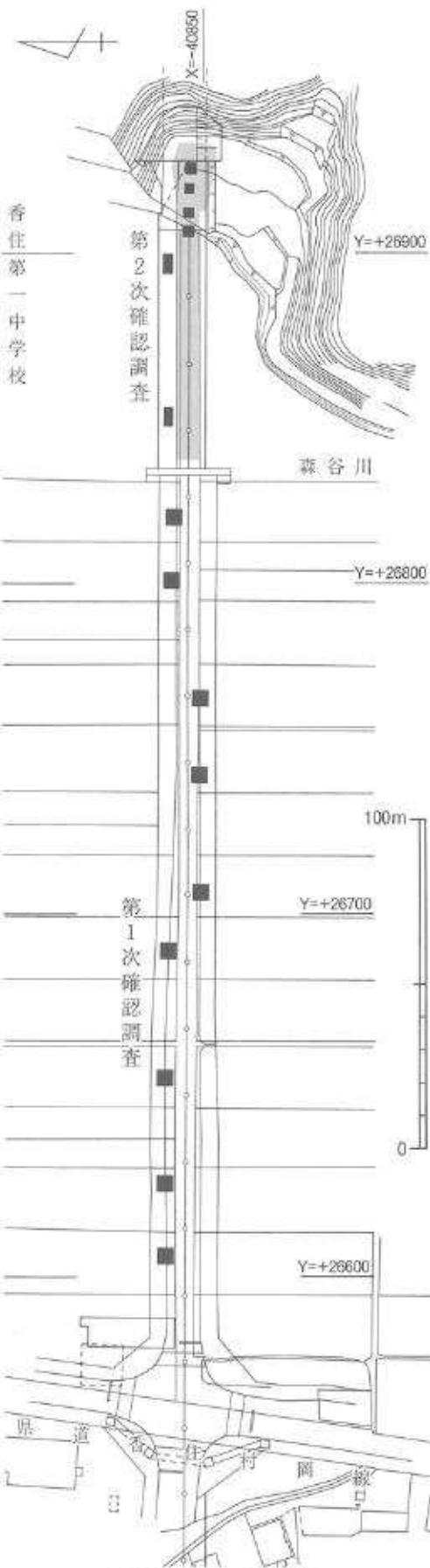
第2次確認調査 平成14年度に兵庫県教育委員会が実施している。第1次確認調査対象地の東側、森谷川から矢谷トンネルまでの区間（旧香住町長見寺）を対象とした（第19図）。グリッド（2m × 2m・2m × 3m）を6箇所に設定し、埋蔵文化財の確認を行った。調査の結果、調査対象地の西側を中心に、溝状遺構・柱穴などの遺構および弥生時代・平安時代前半を中心とした土器を確認した。この結果を受けて実施したのが、今回報告する本発掘調査である。その後、当初想定していた範囲より東側に包蔵地が拡がることが明らかとなり（東拡張区）、調査範囲を拡張している。

調査体制等は以下のとおりである。

調査員担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
平田 博幸

遺跡調査番号 2002099

調査期間 平成14年6月27日・7月12日

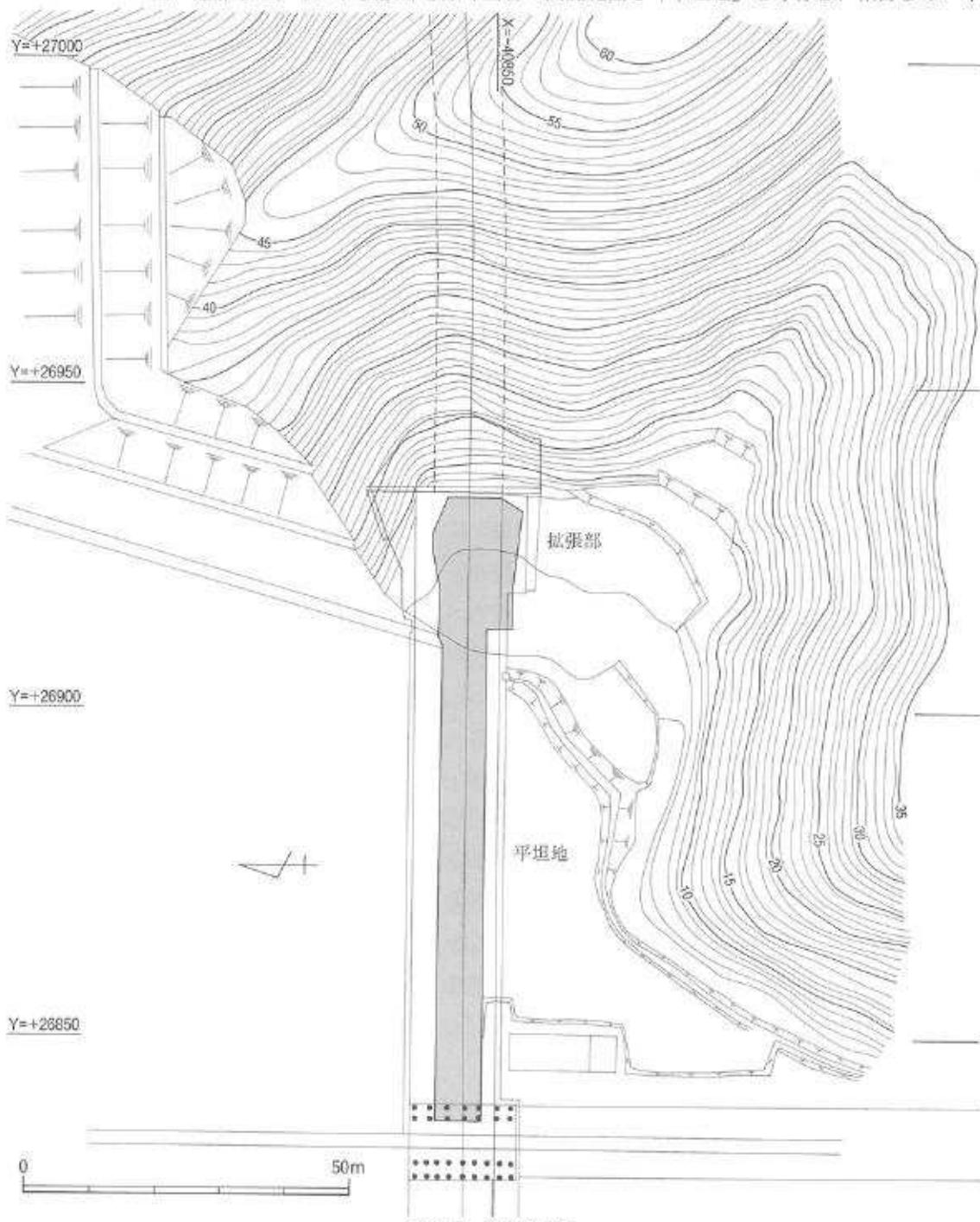


第19図 確認調査位置図

第3節 本発掘調査

はじめに 第2次確認調査の結果を受けて、同じ平成14年度に本発掘調査を実施した（第20図）。工事予定地内には、水路が道路方向と平行して走っており、調査中、後も使用することから、この箇所については、調査対象外とした。

一方、前節でも触れたように、当初、トンネル入口付近については調査対象外であったが、調査の過程で、遺構の拡がりが明らかとなり、この箇所（拡張部）についても調査範囲に追加した。なお、拡張部を除く当初の調査範囲を「平坦地」と呼称し、報告していく。





第21図 調査風景

調査は、盛土層を中心に遺物を包含する層まで重機により掘削し、以下を人力により掘削し、遺構の検出に努めた。遺構検出後は、ヘリコプターによる写真撮影を行うと同時に、空中写真測量により遺構図の作製を行った。また、調査区全域の写真撮影には、高所作業車も使用した。

調査体制等は以下のとおりである。

遺跡調査番号 2002129

調査期間 平成14年10月9日～12月13日

調査面積 876m²

調査員担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
山田 清朝・小川 弦太

調査補助員 柴崎 研夫・田村 由紀・安田 里美



第22図 現場事務所での土器洗い

第4節 普及活動

調査がほぼ終了した段階で、一般市民を対象とした現地説明会を実施した。また、これとは別に町内の小中学校生を対象に、遺跡の見学会を行った。

現地説明会 11月30日に実施した（第23図）。出土遺物の説明および遺構の解説を中心に行なった。約100名の参加を得た。



第23図 現地説明会

遺跡見学会 香住町立香住第一中学校・同長井小学校・同柴山小学校の生徒・児童を対象に実施した。

香住第一中学 12月2日に実施した（第24図・第25図）。約70名が見学した。遺跡全体の説明とともに、検出遺構および出土遺物の見学を行なった。出土した土器・瓦類を手に取り、出土遺物の観察を行なった。



第24図 香住第一中学校生 遺構の見学



第25図 香住第一中学校生 遺物の見学

長井小学校 12月5日と9日に実施した（第26図・第27図）。12月5日は、3・4・5年生約30名が見学した。12月9日は、1・2年生約12名が見学した。両日とも、大型の柱を伴う柱穴の断割り作業を見学するとともに、鳴尾などの瓦類をはじめとした出土遺物を実際に手に取り、その重さを体感した。



第26図 長井小3・4・5年生の見学



第27図 長井小1・2年生の見学

柴山小学校 12月6日に実施した（第28図）。3年生約10名が見学した。大型の柱を伴う柱穴の断割り作業を見学し、柱の大きさを実感した。また、鳴尾などの瓦類をはじめとした出土遺物を実際に手に取り、その重さを体感した。



第28図 柴山小学校生の見学

第5節 整理・保存作業

調査終了後、平成15年度から木製品の保存処理を開始した。その後、平成17年度と同18年度の2箇年で、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて報告書の刊行を目指とした整理作業を行った。各年度の作業内容・体制は、以下のとおりである。

なお、土器の水洗およびネーミング作業については、現場事務所にて、発掘調査と平行して行った（第22図）。

平成15年度 出土木製品（柱）の保存処理作業を魚住分館にて開始した。

また、保存処理を開始する直前に、国立奈良文化財研究所（現独立行政法人奈良文化財研究所）の光谷拓実先生により、年輪年代測定用のサンプリングを行った（第29図）。しかし、材の太さに対して年輪幅が広いため、良好な年代値を得ることはできなかった。

整理担当職員 整理保存班 深江 英憲・中村 弘（保存処理担当）
調査班 山田 清朝
普及活用班 小川 弦太



第29図 年輪年代測定用のサンプリング

平成16年度 大型の柱5本（W1・W2・W5～W7）について、タンクの容量の都合から魚住分館での実施は困難なことから、財団法人元興寺文化財研究所にその処理を委託した。これに合わせて、その直前に、保存処理を委託する柱の実測、および樹種同定用のプレパラートの作成を行った。また、これに先立ち、柱の写真撮影を行った（第30図）。

整理担当職員 整理保存班 長濱 誠司・中村 弘（保存処理担当）
調査班 山田 清朝
普及活用班 小川 弦太



第30図 柱の写真撮影

平成17年度 出土土器の接合・実測・復元、瓦類の写真撮影を行った。

整理担当職員 整理保存班 別府 洋二・藤田 淳（保存処理担当）

調査班 山田 清朝

普及活用班 小川 弦太

嘱託員 島田 留里・岸野奈津子・眞子ふさ恵・島村 順子・木村 淑子

中田 明美・小野 潤子・三好 紗子・奥野 政子・三島 重美

又江 立子・荒木由美子・藤池かづさ

平成18年度 土器の復元・写真撮影、遺構図・実測図の整図・レイアウト・トレース、そして編集作業を行った。

11月2日には、鳥取県斐川町、鳥取県倉吉市・米子市を訪れ、小野遺跡・上淀廃寺・大御堂廃寺出土の山陰型鶴尾を実見した。また、山陰型鶴尾出土遺跡である岩美廃寺・玉鉢等ヶ坪廃寺等を見学した。

11月10日には、帝塚山大学に森 郁夫先生を訪ね、軒丸瓦を実見していただき、御教示いただいた。

また、柱の樹種同定を京都大学木質科学研究所 伊東隆夫先生に依頼し、その報告を得た（第4章第1節）。さらに、大型柱の保存処理作業が本年度で完了し、魚住分館に収納された（第31図）。合わせて、保存処理終了後、柱の写真撮影を円興寺文化財研究所で行った。

整理担当職員 整理保存班 岡田 章一・藤田 淳（保存処理担当）

調査班 山田 清朝・小川 弦太

嘱託員 島田 留里・岸野奈津子・眞子ふさ恵・西口 由紀・木村 淑子

小野 潤子・三好 紗子・奥野 政子・又江 立子・荒木由美子

藤池かづさ



第31図 保存処理後の柱

第3章 調査の成果

第1節 基本層序と遺構の検出

1. 基本層序

概要 当遺跡は、小扇状地（拡張部）から旧河道にかけて立地する。このため、基本層序についても、両者では異なる。この点を考慮しつつ、基本層序についてまとめてみたい。

基本層序 本遺跡の基本土層は、上から①表土層、②盛土・整地層、③旧耕作土・床土層、④土壤層、⑤湿地性堆積層、⑥基盤層とに、大きく分けることができる（第32・33図）。

表土層 拡張部のみに認められる。1層がこれに該当する。調査前の東側拡張区は竹林であったことから、竹によって形成された土壌層である。ただし、この土壌層は、この下層に盛土・整地層が認められることから、この層を基盤として形成されたものと考えられる。そして、盛土・整地層の時期が後述するように昭和時代と新しいことから、この表土層はかなり新しい時期に形成されたものと考えられる。

盛土・整地層 拡張部から旧河道までの調査区全域で認められた。ただし、これらの層の前後関係から、東拡張区から西側へと盛土がなされていったようである。なかでも2～5層は、①層中に缶・ビニール等を含む、②その規模が、東拡張区で厚さ1.25m～1.35m、平坦部において25cm～35cmと大きいことから、昭和時代の盛土層と考えられる。以上から、当地では、比較的新しい時期に大規模な地形改変が行われたことが理解できる。

これに対して11層は、土器・瓦等を含む層より下層にあたることから、古い時期の整地層と考えられる。出土遺物から判断して、飛鳥時代を中心とした時期が考えられる。層中に軟岩の小片を多く含む層であることから、山側（東側）の基盤層を削り、平坦面を造り出しているものと理解できる。拡張部西端から平坦部にかけて認められる。

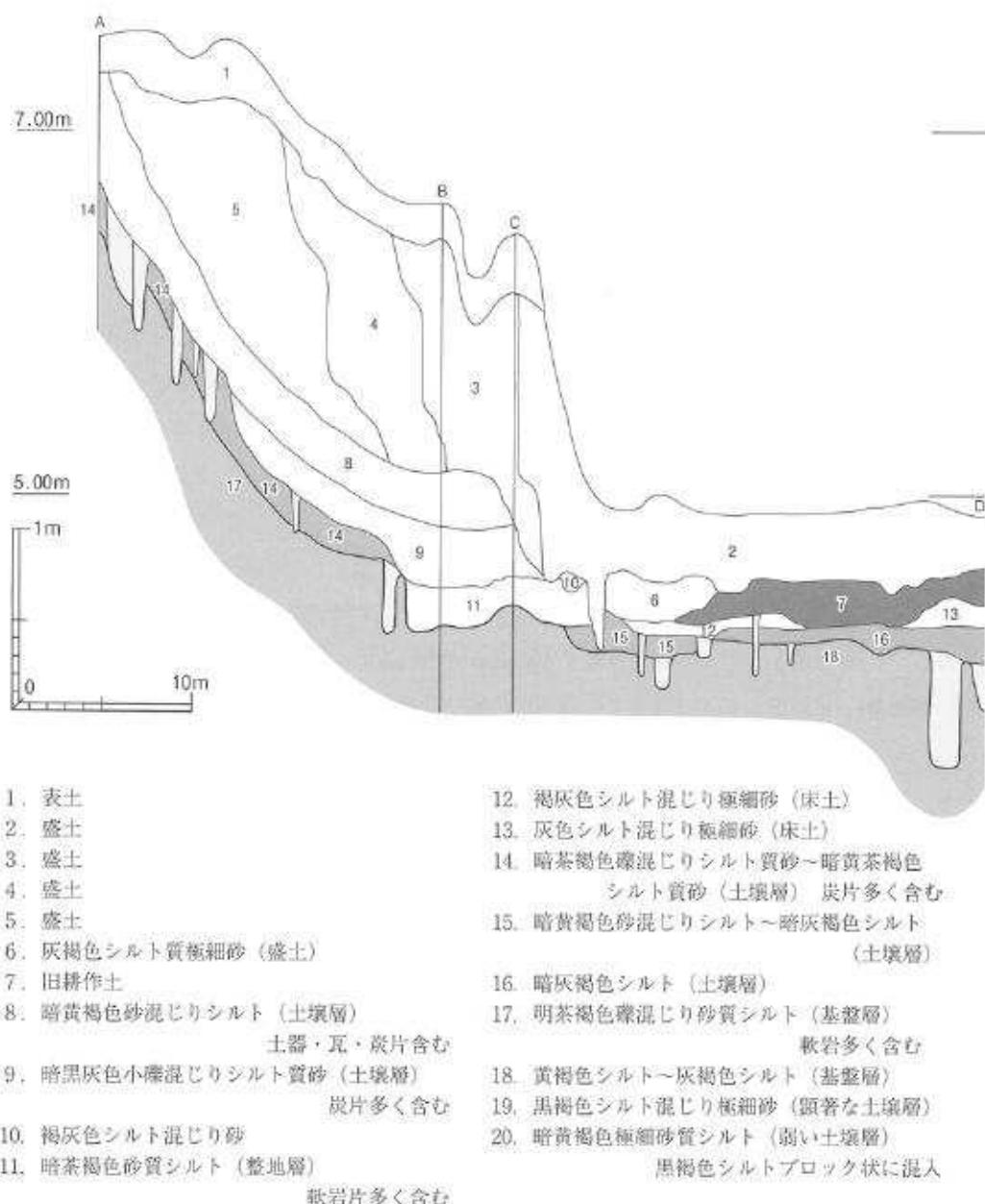
この他、旧河道内の21層と22層が人為的に埋められた層である。その時期は明確にはできなかった。

耕作土・床土 7層が耕作土、12・13層が床土層に相当する。耕作土は、拡張部と旧河道に挟まれた平坦部のみに認められた。この層の上面が、当地が盛土によって大規模な地形改変が行われる以前の地表面と考えられ、平坦部での標高は4.30mである。

一方床土層は、拡張部を除いた一帯で認められた。このことから、耕作土が認められなかった旧河道においては、一端耕作土まで除去した後、整地が行われていることが理解できる。

土壤層 8層・9層・14～16層・19層・20層が該当する。旧河道を除く全域で認められた。なかでも、14～16層・19層は土壤化が著しく、14層は17層と、15・16層は18層と、19層は28層と、それぞれ同じ堆積層であったものが、その上面が地表面であったことから土壤化したものと考えられる。また、19層下の20層については、基盤層である28層が土壤化していく過程の漸移層と考えられる。

したがって、これらの層は、同時期に地表面（表土層）を形成していたことが理解でき



第32図 基本土層(1)

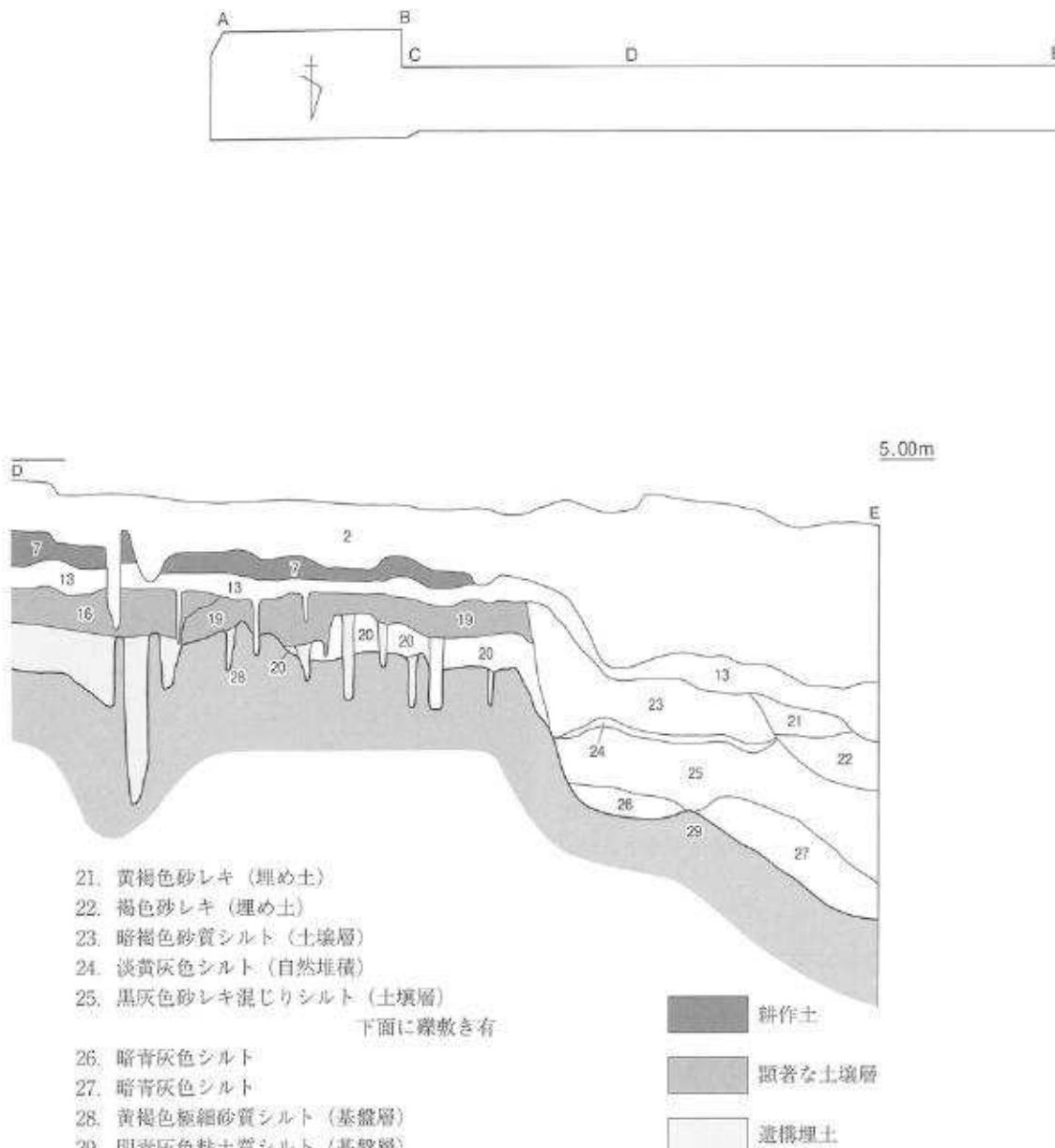
る。そして、検出した遺構は、本来はこれらの土壤層の上面から掘り込まれていたものと考えられる。このため、当該層からは土器をはじめとした遺物の包含は認められなかった。

ただし、平坦部で包含層から土器が出土したことになっている。これは、これらの土器の大半が、19層を掘り下げて行くに際し、19層上面から掘り込まれている遺構から出土したものと考えられる。

19層の後に16層が堆積しているが、大きな時期差の有無については明らかにできない。

また、15層と16層とについては、基本的には同一層の可能性が高い。また、14層と15層との関係については明確にできない。

8層・9層については、いわゆる遺物包含層で、拡張部で認められた。土器・瓦が少なからず出土している。14～16層・19層・20層とはその成因が異なり、調査では明確にはで



第33図 基本土層(2)

きなかったが、整地等人为的要因で形成されたものと考えられる。層中には炭片が多く含まれるとともに、焼土片も少なからず含まれていた。

湿地性堆積層 23層～26層・27層が該当する。旧河道内に限られる。旧河道内に自然的要因で堆積したものと考えられる。また、26層・27層上面で、人为的と考えられる礫敷きが認められたことから、ある時期この面が地表面であったものと考えられる。

基盤層 17層・18層・28層・29層が該当する。先述したように、各層に対応する地表面を形成していた土壤層と同一の成因による層である。この中で、17層については、丘陵を形成する層と考えられる。一方、18層と28層は、自然的要因により堆積した層と考えられる。また、29層については、矢田川下流域平野が埋没する過程で堆積した沖積層と考えられる。

2. 遺構の検出（写真図版1・2）

- 検出面** 遺構を検出した面は1面である。1面で、各時代の遺構を検出している。11層・14層・15層・16層・19層下面が、検出面に相当する（第32図・第33図）。なお、19層下面においては、大半は、その下層の20層下面まで下げて遺構を検出している。
- 検出面の標高** これらの遺構を検出した面は、調査区全体では平坦ではなく、顕著なレベル差が認められる（第36図）。調査区東端部が最も高く、その標高は6.70mを測る。
- 拡張部中央で急激にレベルを落とし、拡張区西端部までわずかに傾斜し、ここから旧河道まではほぼ平坦となる。この平坦部の標高は、4.00m前後である。調査区西端部は旧河道となり、大きく落ち込んでいる。最深部の標高は2.40mである。



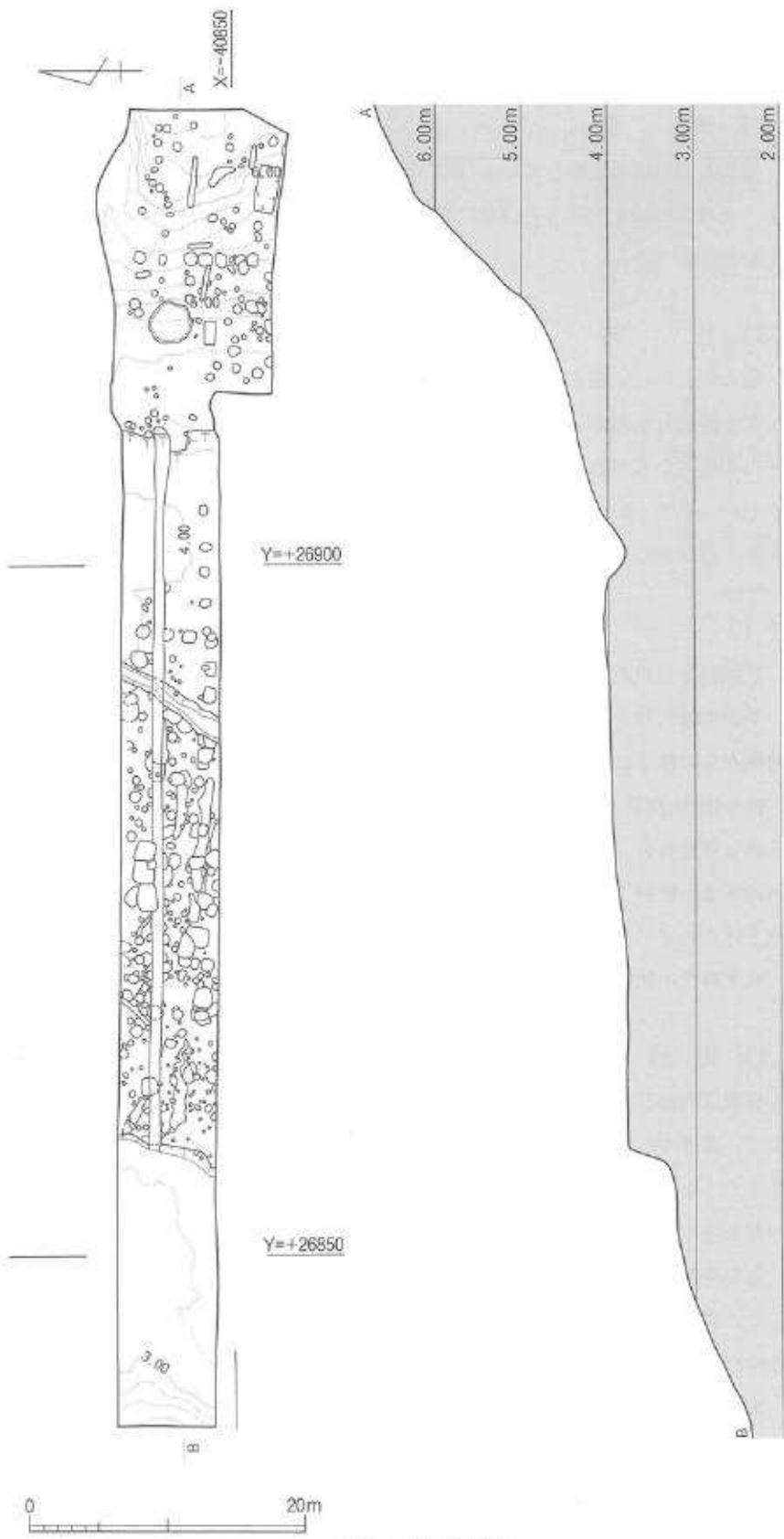
第34図 遺構面の検出



第35図 調査風景

3. 遺構の概要（巻首図版3・4）

- 遺構の時期** 調査では、縄文時代晚期から平安時代後期にかけての遺構・遺物が明らかとなっている。特に遺物からみた連続性を考慮に入れると、大きく①縄文時代～弥生時代後期、②古墳時代前期、③古墳時代後期～奈良時代、④平安時代後期以降の4時期に分けることができる。そこで、本報告では、これら4時期にわけて報告していく。
- 遺構の分布** 調査区西端部では旧河道が検出され、それ以東に柱穴を中心とした遺構が検出されている（第36図）。特に、古墳時代後期～奈良時代の遺構が、この範囲全体で検出されている。また、当該期の遺物も、この範囲で出土している。
- 調査の限界** なお、以下の時期ごとの報告の中で、遺構として掘立柱建物跡を報告する。柱穴の規模・間隔・出土遺物をもとに復元したものである。しかし、掘立柱建物跡の復元にあたっては、限られた調査範囲のなかでのものである。このため、その復元が妥当なものと言いたくはないものも少なからず存在することを、あらかじめ断っておきたい。



第36図 検出遺構

第2節 調査の成果

1. 縄文時代～弥生時代の遺構と遺物

(1) 概要

柱穴と旧河道を検出している(第37図)。遺構は少なく、その検出は平坦部中央以西に限られる。土器の出土もわずかである。

(2) 柱穴

数穴検出したに限られる(第37図)。柱穴内から出土した土器から当該期の遺構と判断したものである。これらの柱穴から建物を復元することは困難である。これらのなかで、出土土器を図化できたP1について、その土器を中心に報告する。

P1

検出状況 平坦部中央以西で検出した。

形状・規模 平面形は円形を呈し、その規模は径50cmを測る。検出面からの深さは、11cmである。

出土土器 鉢1個体(13)が出土している(第38図)。13は大型の鉢と考えられ、口縁部を中心に残存する。口縁部外面に4条の凹線文が施され、以下はヘラミガキにより仕上げられている。内面は磨滅のため観察できない。

時期 弥生時代中期と考えられる。

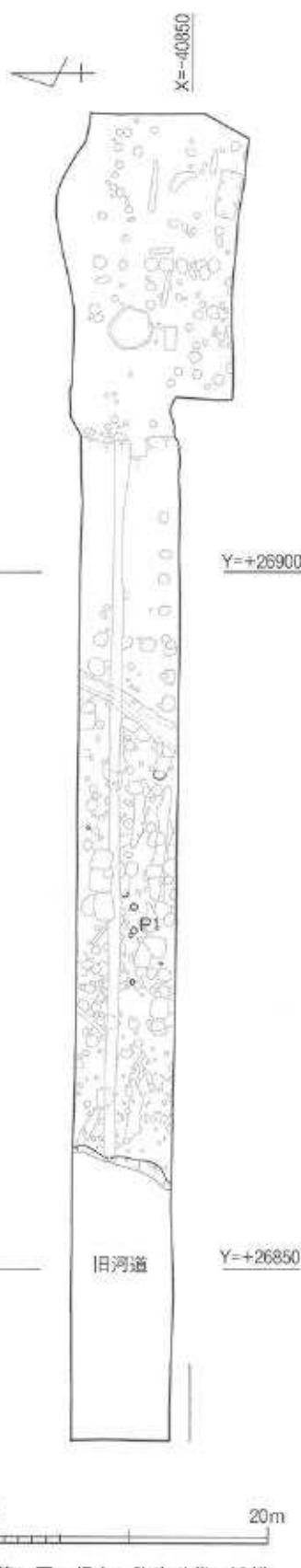
(3) 旧河道(写真図版15)

検出状況 調査区西端部で検出した。南北方向に流れていたもので、調査では東側肩部を中心で検出し、西側肩部は検出できなかった。旧河道というより、大きな低地の一部を検出した可能性も考えられる。

形状・規模 東側肩部を基準とすると、検出面で幅約21mを検出した。横断面は緩やかな逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは1.40mである。

埋没状況 第3章第1節で報告したとおりで、下層は自然堆積により、上層は整地により埋没している。

出土土器 縄文時代晩期・弥生時代前期・弥生時代後期の土器が出土している(第38図)。旧河道内からは平安時代以降の土器も出土しているが、これらの土器は、整地層



第37図 縄文～弥生時代の遺構

の上層から出土している。

縄文時代晚期 壺（6）と鉢（8）が出土している。

6は口縁部がわずかに外反傾向にある直口壺である。体部内面はハケ調整、外面は貝殻条痕により、口縁部は内外面ともナデ調整により仕上げられている。また、口縁端部にはキザミ目が施されている。

8は小型の鉢で、内外面ともナデ調整とユビオサエにより仕上げられている。粗い仕上げで、外面を中心に粘土紐痕が比較的顕著に認められる。下端部外面にわずかに煤の付着が認められる。

弥生時代前期 壺（7）と甕（9）が出土している。

7は広口壺で、体部中位上側に粘土板の貼り付けによる段が明確に観察できる。この部位の内面には、貼り付けの際のユビオサエ痕が顕著に認められる。体部外面は細かいヘラミガキにより、内面はナデ調整とユビオサエにより仕上げられている。口縁部は内外面ともナデ調整により仕上げられている。

9は体部の小片である。内面は板ナデ調整により、外面はハケ調整により仕上げられている。外面の一部にはヘラ削り（下→上）が施されている。

弥生時代後期 高坏（10）1個体が出土している。有稜高坏に分類されるもので、坏部を中心には残存する。全体的に丁寧なヘラミガキにより仕上げられている。また、坏部口縁部外面にわずかに煤の付着が認められる。坏部と脚部の接合は円盤充填によるものと考えられる。

埋没時期 後節で報告するが、上層から平安時代の土器が出土している。したがって、縄文時代晚期から埋没が始まり、平安時代にはほぼ埋没したものと考えられる。

(4) その他の（写真図版15・16・44）

概要 遺構には伴わないが、包含層から当該期の土器と石器が出土している。当遺跡を検討する上で不可欠と考えられる。よって、ここで概要を報告する。

土器 縄文時代晚期・弥生時代前期・弥生時代中期の土器が出土している（第38図）。

縄文時代晚期 鉢（11・14・16）が出土している。

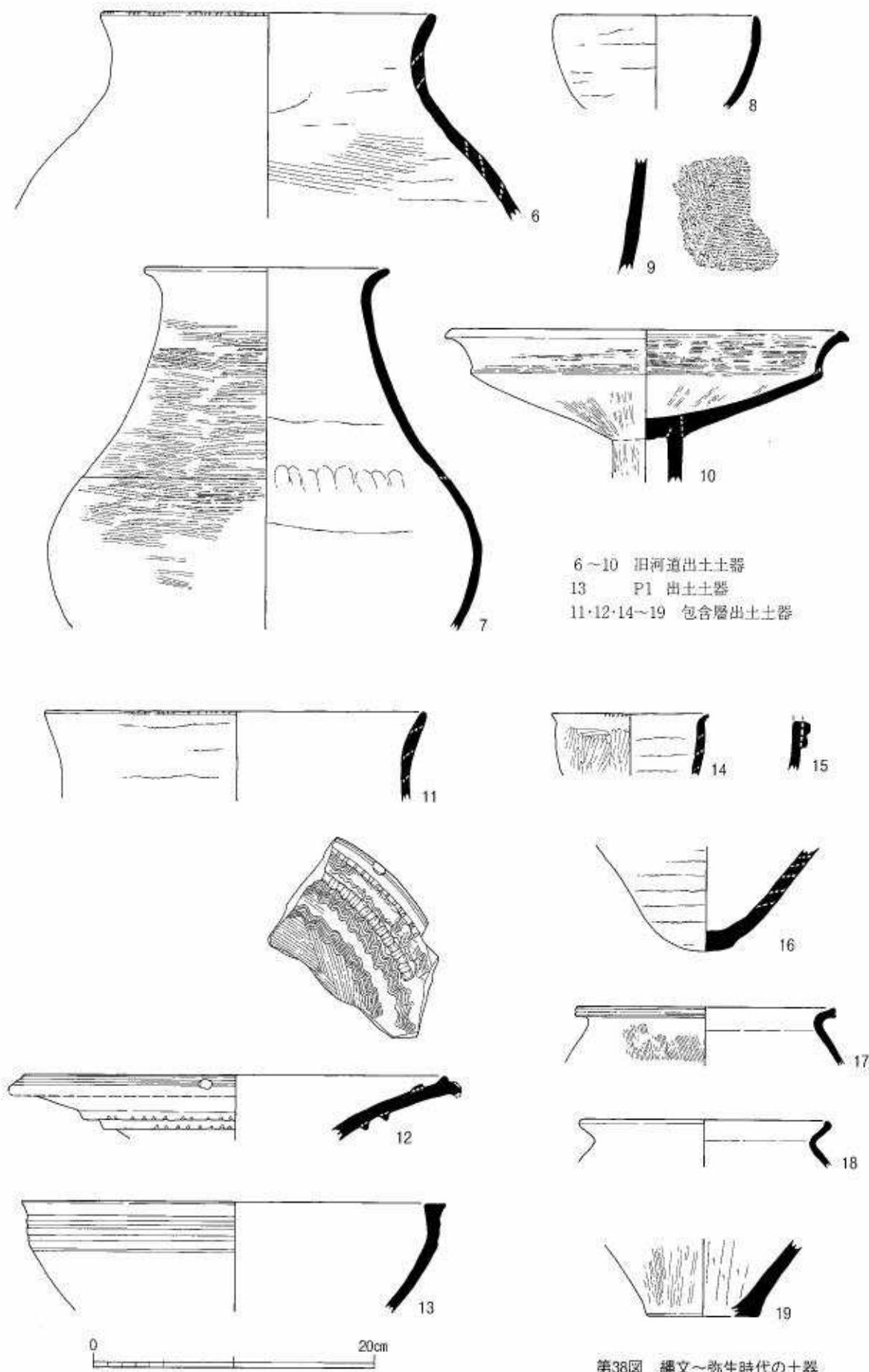
11は深鉢に分類されるものである。内外面ともナデ調整とユビオサエにより仕上げられ、口縁端部にはキザミ目が施されている。

14は小型の鉢で、粘土紐の積上げが内傾接合であることから、当該期の土器と判断した。体部外面がヘラミガキにより仕上げられている以外は、ナデ調整とユビオサエにより仕上げられている。粗い仕上げで、体部内面には粘土紐痕が顕著に観察される。また口縁端部には、キザミ目が施されている。

16も、深鉢の底部と考えられる。内外面ともユビオサエとナデ調整により仕上げられているが、丁寧ではなく外面に粘土紐痕の積上げ痕が顕著である。

弥生時代前期 15の1個体が出土している。小片であるが鉢の一部と考えられる。外面には幅のある突帯が貼り付けられ、その外面にキザミ目が施されている。内面は横方向のハケ調整により仕上げられている。

弥生時代中期 壺（12）と甕（17～19）が出土している。



第38図 桜文～弥生時代の土器

壺 12の1個体である。広口壺の口縁部で、外面には断面三角形の突帯が2条貼り付けられ、その頂部にキザミ目が施されている。また、口縁内端部を上方に拡張させ突帯状をなし、その頂部にキザミ目が施されている。その下側にも断面三角形の突帯が貼り付けられ、指頭圧痕が施されている。この突帯の上側・下側には7本を単位とする櫛描波状文が3帯描かれている。また、口縁端面には円形浮文が貼り付けられている。

甌 17～19の3個体を図化した。完形に復元できたものはないが、いずれも同タイプに分類できるものである。ただし、17の口縁端部には凹線が施されているが、18には施されず、端部がつまみ上げられている。19の内面は縦方向のヘラ削り（下→上）、外面はヘラミガキにより仕上げられている。

石 器 石鎌・剥片石器・磨製石器・敲石・磨石・砥石様石器が出土している（第39・40図）。
S 6はサヌカイト製の平基式石鎌である。両側縁の中程がわずかにくびれた形態をとり、いわゆる五角形鎌に分類されよう。二次加工は周辺部に限られるため、両面に平坦な素材剥離面を大きく残す。

S 7もサヌカイト製の剥片石器で、背面を中心に縁辺のごく一部に二次加工が施されている。素材は両極剥離による剥片が用いられている。形態から石鎌の未製品の可能性を考えられる。

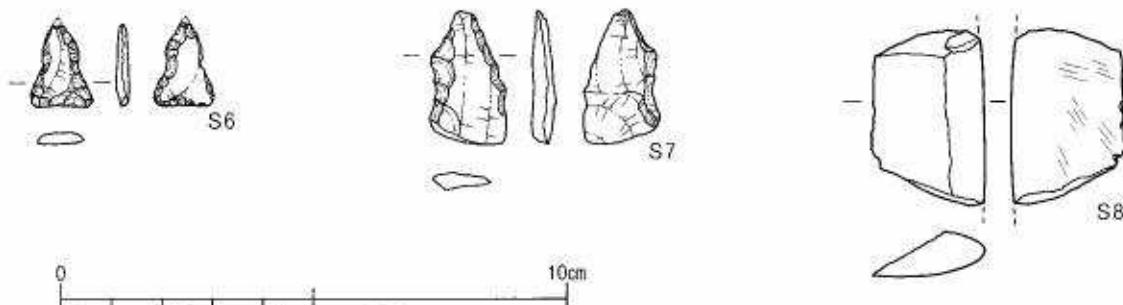
S 8は磨製石器の破片で、断面から判断して扁平な板状の製品と考えられる。石庖丁の背縁部の可能性を指摘しておきたい。

S 9～S 11は敲石である。S 9は太い円柱状の自然礫の一端に敲打痕が、もう一端に磨面が残されている。図で上端の敲打痕は丸みを残すが、下端の磨面は小さいながら平坦な面が形成されている。なお、敲打痕は側面の一部にも認められ、端部近くには受熱によると思われる若干の赤変がある。648.9 g。

S 10とS 11は扁平な円礫の中央に敲打痕が認められる。敲打痕は心持ち浅く窪む程度で、周辺部ほど弱くなっているため自然面との境は曖昧となる。S 11よりもS 10のほうが広くはっきりしており、より使用が進んだ状況とみることができる。なお、S 11の裏面は小さいものの少し深く窪んでいる。S 10は1001.4 g、S 11は512.8 g。

S 12は薄く扁平な砂岩礫の一部に磨面が認められるものである。表面には横方向の縞が観察されるが、石理が浮き出たものと考えられる。

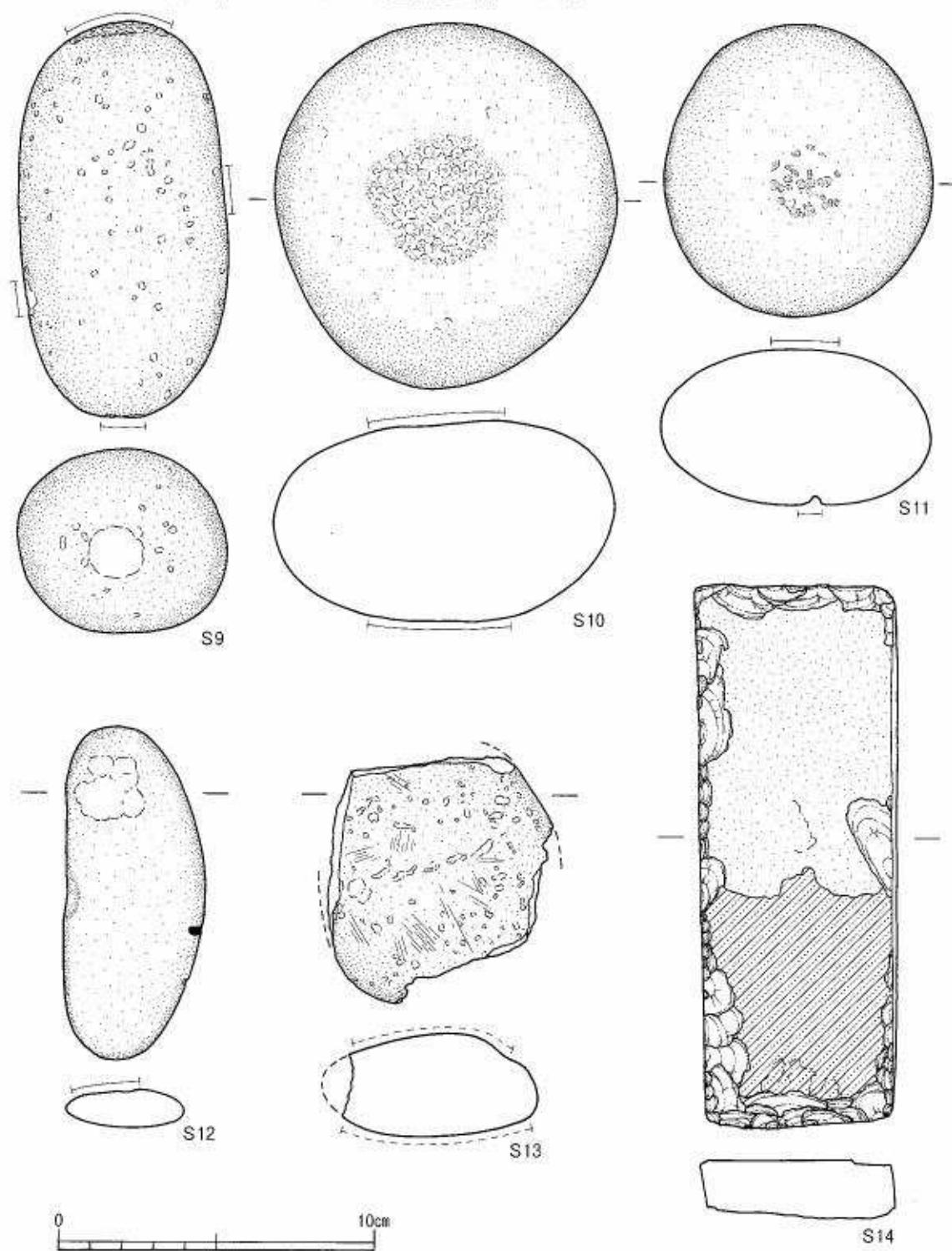
S 13は磨石と考えられる石器である。安山岩風の自然礫であるが、両面とも所々に不定方向の擦痕が認められる。受熱のため暗赤褐色を呈する。



第39図 出土石器(1)

S14は砥石様の石器である。粘板岩の節理に沿って長方形の板状に分割されており、片面の周辺部に剥離が加えられている。石材と形態から砥石と考えたいが、磨かれたような痕跡は認められない。

これらの石器は遺構から出土したものではないため、時期を断定することはできないが、S 6の石鎌やS 9～S 11の磨石は、包含層などから出土している縄文時代後期の土器と同時期を考えるのがもっとも蓋然性が高いだろう。



第40図 出土石器(2)

第1表 縄文～弥生時代土器観察表

No	種別	器種	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存状況	色調	備考	挿図No	図版No
1	土師器	壺		18.8	9.8		口縁部1/5	浅黄橙		13	14
2	土師器	壺			11.6		体部1/4	灰黄褐 ～にぶい黄橙		13	14
3	土師器	器台			21.7	28.3	底部1/4弱	にぶい橙		13	14
6	縄文	壺	旧河道	23.0	14.6		口縁部1/3強	灰白～褐灰		38	15
7	弥生	壺	旧河道	16.9	25.6		口縁部1/7	灰褐～橙		38	15
8	縄文	鉢	旧河道	14.0	6.7		口縁部1/9	にぶい橙～灰褐	外面下端煤付着	38	15
9	弥生	壺	旧河道		8.3		体部一部	褐灰～にぶい橙		38	
10	弥生	高坏	旧河道	27.4	10.9		口縁部1/5	橙～明褐灰	坏部口縁外面に煤付着	38	15
11	縄文	鉢	包含層	26.6	6.4		口縁部1/9	灰白～橙		38	
12	弥生	壺	包含層	29.7	4.6		口縁部1/9	明赤褐～橙		38	15
13	弥生	鉢	P 1	29.8	7.8		口縁部1/12	灰白～褐灰		38	
14	縄文	鉢	包含層	11.0	4.5		口縁部1/7	灰黄褐～黒褐		38	15
15	弥生	鉢	包含層		3.6		体部一部	にぶい橙 ～にぶい褐		38	15
16	縄文	鉢	包含層		7.4		底部完存	橙		38	16
17	弥生	壺	包含層	18.2	4.1		口縁部1/12	灰白		38	
18	弥生	壺	包含層	17.2	3.3		口縁部1/12	灰黄褐～橙	口縁部外面煤付着	38	
19	弥生	壺	包含層		5.5	8.1	底部1/6	にぶい橙 ～灰黄褐		38	

2. 古墳時代前期の遺構と遺物

(1) 概 要

掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝・旧河道を検出している(第41図)。拡張部西端で柱穴1穴を検出した以外は、その分布は平坦部に限られる。平坦部の全域で検出されているが、特に中央部付近に集中する傾向が認められる。

(2) 堀立柱建物跡

SB01とSB02の2棟が検出されている。

SB01(写真図版16)

検出状況 調査区中央部で検出された(第41図)。

建物規模 衍行3間×梁行2間+ α の側柱建物である(第42図)。全体を検出することはできず、南側は調査区外まで拡がっている。衍行方向は北側のみ検出でき、5.75mを測る。梁行方向は、東側で1間分、西側で2間分検出し、西側で3.50mを測る。各柱穴の規模等は、第2表のとおりである。

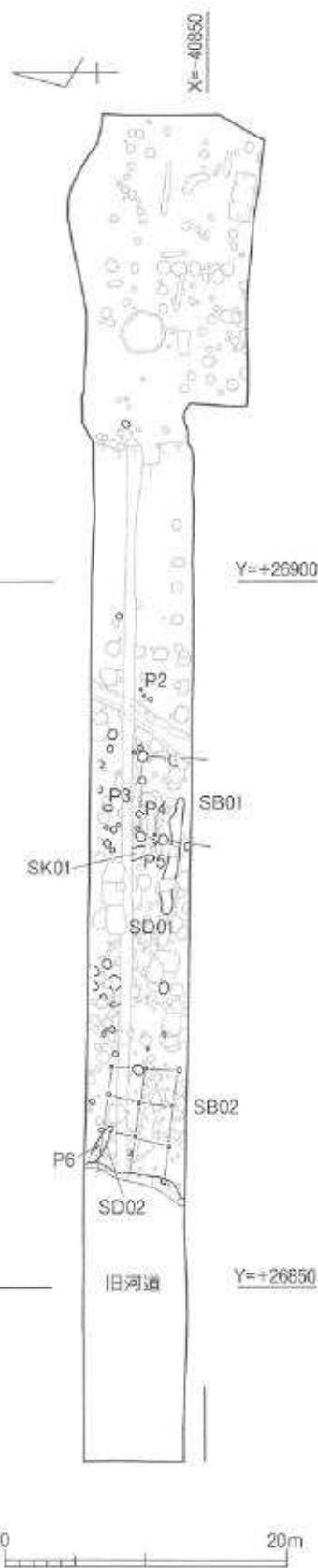
柱 穴 基本的には、平面形は円形をなすが、一部方形傾向の柱穴も認められる。各柱穴の規模等は、第2表のとおりである。

出土遺物 P5から甕(20)が、P2から甕(21)と高坏(22)が出土している(第47図)。

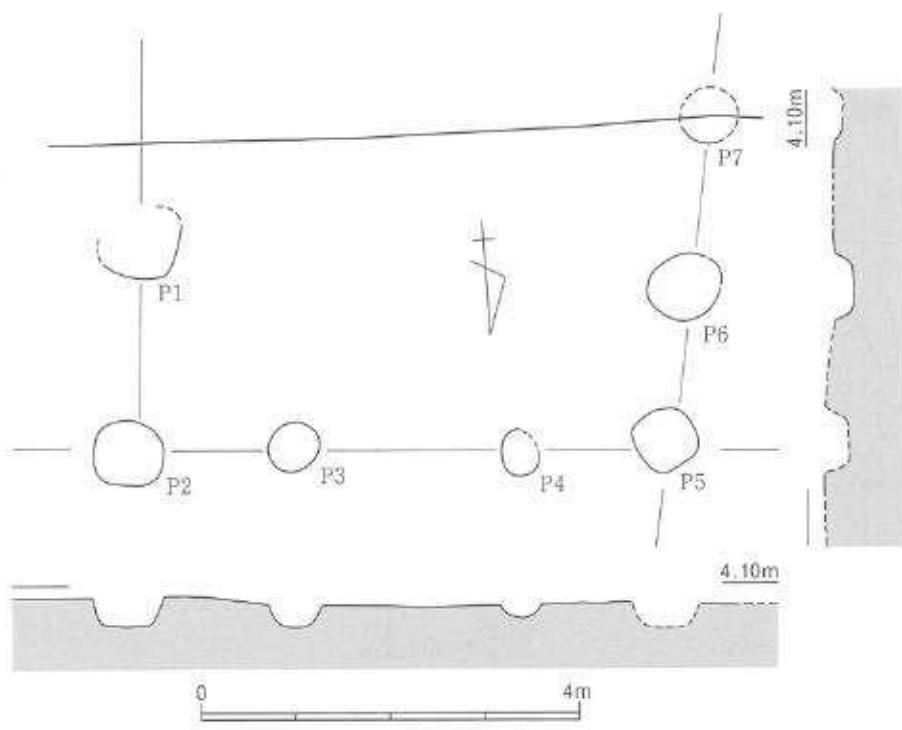
甕 20はいわゆる布留式系の甕で、口縁部から体部にかけて残存する。体部内面はヘラ削り(左→右)、外面はハケ調整により仕上げられている。口縁部内面もハケ調整により仕上げられている。21は、いわゆる山陰系の甕である。胎土は、いわゆる山陰産とは異なる。肩部外面にわずかにハケ目が観察される。

高坏 22の1個体を図化した。脚部のみ残存する。坏部中央下面に、脚部と坏部の接合の際の中心軸痕が残存する。全体的に磨滅が著しい。

時 期 出土土器から判断して、古墳時代前期と考えられる。



第41図 古墳時代前期の遺構



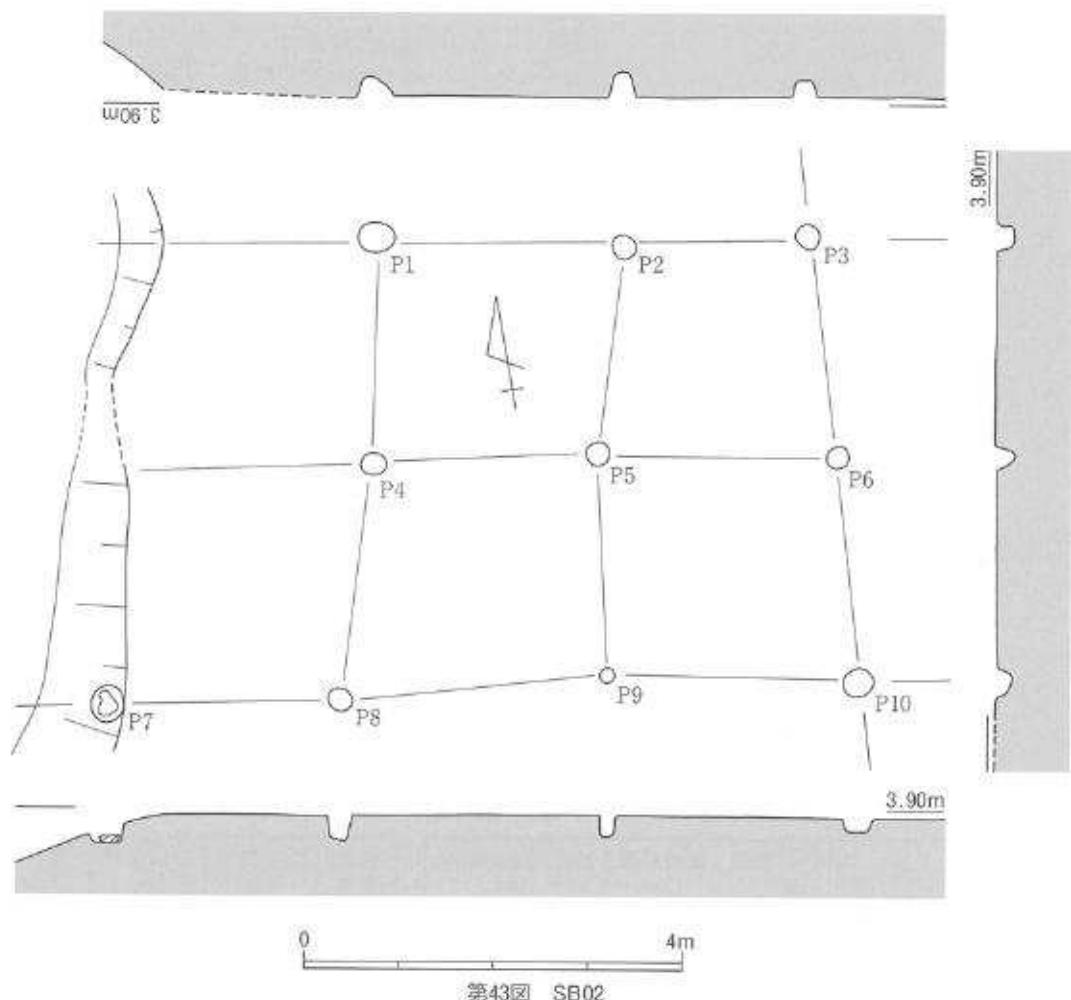
第42図 SB01

第2表 SB01 建物・柱穴規模一覧表

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)	柱穴番号	柱穴規模 (cm)	柱痕規模 (cm)	深さ (cm)
東梁行	P1-P2	2.20	2.20	2.20	P1	(76.0)	—	13.0
北桁行	P2-P3	1.80	5.75	1.92	P2	75.0	—	30.0
	P3-P4	2.40			P3	57.0	—	23.0
	P4-P5	1.55			P4	40.0	—	13.0
西梁行	P5-P6	1.70	3.50	1.75	P5	63.0	—	(22.0)
	P6-P7	1.80			P6	73.0	—	19.0
					P7	—	—	10.0

SB02 (写真図版5)

- 検出状況 調査区西部、旧河道の東側で検出された(第41図)。
- 建物規模 梁行2間×桁行3間+αの総柱建物である(第43図)。梁行方向については全体を検出できたが、桁行方向については、西側が旧河道と切り合い関係にあり、その扯がりを確定させることはできなかった。東側梁行方向で4.75mを測り、桁行方向は南側で8.05mである。各柱穴間の規模等は、第3表のとおりである。
- 柱穴 平面形は円形を基本形とする。SB01と比較して、全体的に小規模である。各柱穴の規模は第3表のとおりである。
- 出土遺物 P2とP5・7から当該期の土器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかつた。
- 時期 出土土器から判断して、古墳時代前期と考えられる。



第43図 SB02

第3表 SB02 建物・柱穴規模一覧表

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)	柱穴番号	柱穴規模 (cm)	柱痕規模 (cm)	深さ (cm)
北桁行	P 1 - P 2	2.60	5.20	2.60	P 1	40.0	—	21.0
	P 2 - P 3	2.60			P 2	28.0	—	26.0
東梁行	P 3 - P 6	2.35	4.75	2.38	P 3	27.0	—	17.0
	P 6 - P 10	2.40			P 4	28.0	—	20.0
南桁行	P 7 - P 8	2.50	8.05	2.67	P 5	24.0	—	19.0
	P 8 - P 9	2.85			P 6	23.0	—	20.0
	P 9 - P 10	2.70			P 7	36.0	—	22.0
					P 8	26.0	—	26.0
					P 9	17.0	—	22.0
					P 10	23.0	—	14.0

(3) 柱 穴

建物を構成する以外の柱穴も検出されている。これらの柱穴のいくつかからは、当遺跡の性格を検討するうえで良好な資料が得られている。ここで、出土遺物を中心に報告する。

P 2

- 検出状況** 平坦部中央、SB01の東側で検出された（第41図）。
- 出土遺物** 壺1個体（30）が出土している（第47図）。布留式系壺の口縁部である。口縁端部は明確な端面を有し、わずかに内側に肥厚している。
- 時期** 出土土器から判断して、古墳時代前期と考えられる。

P 3（写真図版16）

- 検出状況** 平坦部中央、SB01の北側で検出された（第41図）。
- 出土遺物** 台付鉢1個体（31）が出土している（第47図）。台部を中心に残存し、全体の形態は明らかにできない。台部はナデ調整により貼り付けられている。体部は磨滅が顕著である。
- 時期** 出土土器から判断して、古墳時代前期と考えられる。

P 4（写真図版6・16）

- 検出状況** 平坦部中央で検出された（第41図）。SB01と平面的に重複する。
- 出土遺物** 壺（25）・高坏（27・28）・低脚坏（26）が出土している（第47図）。
- 壺の25は、いわゆる布留式系の壺で、内面にわずかにハケ調整の痕跡が認められる。低脚坏の26は、ほぼ完存する個体であるが、全体的に磨滅が著しい。高坏の27は、坏部の小片である。下半は湾曲気味である。一方28は脚部の小片である。全体的に磨滅が著しい。
- 時期** 出土土器から判断して、古墳時代前期と考えられる。

P 5（写真図版16）

- 検出状況** 平坦部中央、SB01の西側で検出された（第41図）。
- 出土遺物** 壺が2個体（23・24）出土している（第47図）。両者ともいわゆる山陰系壺に分類されるものであるが、口縁部の形態的特徴は異なる。24は、口縁部のたち上がりが短い。体部の仕上げ（内面ヘラ削り・外面ハケ調整）は、23と同じである。また、23の胎土もいわゆる山陰産とは異なる。
- 時期** 出土土器から判断して、古墳時代前期と考えられる。

P 6（写真図版16）

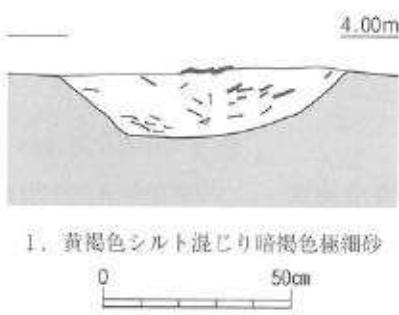
- 検出状況** 平坦部北西隅で検出された（第41図）。SD02と平面的に重複する。SD02を検出した段階で確認したので、SD02との前後関係を明らかにすることはできなかった。
- 出土遺物** 壺1個体（29）が出土している（第47図）。口縁部は複合口縁をなすが、典型的な山陰系壺と比較すると、器壁が厚く、外面の稜のシャープさを欠く。外面は、ヘラナデ調整により仕上げられている。胎土はやや山陰的な特徴を示している。
- 時期** 出土土器から判断して、古墳時代前期と考えられる。

(4) 土 坑

SK01の1基のみ検出されている。

SK01 (写真図版6・17)

検出状況	平坦部中央で検出された(第41図)。SB01-P5の西側、P5の北西側、SD01の北側に位置する。南側を飛鳥時代のSD04に切られ、北側を後世の水路により切られている。このため、全体を検出することはできなかった。
形状・規模	平面形が長方形もしくは橢円形と推定される遺構である。しかし、先述したように両端が切られているため、全体の形状を明らかにすることはできない。主軸方向で90cm残存し、その直交方向で76cmを測る。横断面は緩やかな逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは16cmである。
埋没状況	黄色シルト混じり暗褐色極細砂1層からなる(第44図)。土器の小片および炭化物を多量に含む層である。その層相から判断して、土器とともに人為的に埋められたものと判断される。
出土遺物	量的にまとまって出土しており、一括性の高い資料と考えられる。甕・器台・低脚壺・小型丸底鉢の各器種が出土している(第47図・第48図)。
甕	量的に最も多く出土している。大きく、山陰系(32~37)と布留式(38~42)に分類できる。
山陰系	いずれも口縁部を中心に残存する。全て同タイプに分類できるもので、観察できる範囲において、同手法により仕上げられている。ただし、法量的な差が認められる。また、胎土の特徴として、36に関してはいわゆる山陰地方の特徴を示しているのに対して、32・34・35・37は異なる特徴を示している。
布留式	口縁端部を肥厚させ丸く納めるもの(38~40・42)と、肥厚させ水平な上端面を有するもの(41)の2タイプに細分できる。いずれも、口縁部はナデ調整により仕上げられている。また、最も良好に残存する42は、口縁部から体部にかけての外面をハケ調整により、体部内面がヘラ削り(左→右)により、仕上げられている。
器台	この他、40の胎土は、形態的特徴とは異なり、より山陰的な特徴を示している。
器台	43~45の3個体図化した。いずれも鼓形器台に分類されるものである。口縁部から底部まで完形に復元できたものはない。法量的に、口径に対して深い43と、浅い44・45とに分類できる。胎土の特徴も、両者では異なり、43は在地に近い特徴を示すのに対して、44・45は非在地的特徴を示している。全体的に磨滅が著しいが、44と45の台部内面はヘラ削りにより仕上げられている。
小型丸底鉢	46の1個体である。内外面とも磨滅が著しく、調整は観察できない。胎土は、やや在地的な特徴を示している。
低脚壺	47の1個体である。脚部のみ残存する。内外面ともナデ調整により仕上げられている。
時期	出土土器から判断して、古墳時代前期と考えられる。



第44図 SK01

(5) 溝

SD01とSD02の2条を検出した。

SD01 (写真図版6・18)

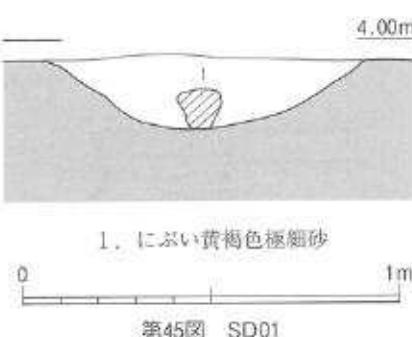
検出状況 平坦部中央で検出された(第41図)。東西方向にほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。一部飛鳥時代～奈良時代の柱穴に切られているが、ほぼ全体を検出することができた。また、東半部はSB01と平面的に重複している。

形状・規模 検出長は8.35mを測る。横断面は緩やかな逆台形をなし、検出面における幅は55cm～85cmを測る。また、最深部における検出面からの深さは19cmで、そのレベルはほぼ一定している。

埋没状況 にぶい黄褐色極細砂1層からなる(第45図)。層中には、中疊および丘陵部を形成する軟岩からなる小疊が含まれることから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 壺2個体(52・53)を図化した(第48図)。2個体とも山陰系に分類されるものであるが、52の胎土は非在地的であるのに対して、53はやや在地的である。

時期 出土土器から判断して、古墳時代前期と考えられる。

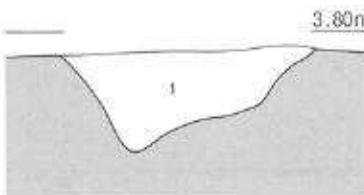


SD02 (写真図版6・18)

検出状況 平坦部北西隅で検出された(第41図)。東南東～西北西にほぼ直線的にのびる溝で、東端は調査区内で収束し、もう一端は旧河道と繋がっている。ただし、両者の前後関係を調査では明らかにすることはできなかった。出土遺物から判断する限り、両者が機能していた時期があるものと考えられる。

また、当該期の柱穴P6と平面的に重複する。先述したように、本遺構を検出した段階でP6を確認したので、P6との前後関係を明らかにすることはできなかった。

形状・規模 検出長は3.00mを測る。横断面は歪んだ逆台形をなし、検出面における幅は最大で73cmを測る。また、最深部における検出面からの深さは27cmで、そのレベルは旧河道に向かって低くなっている。



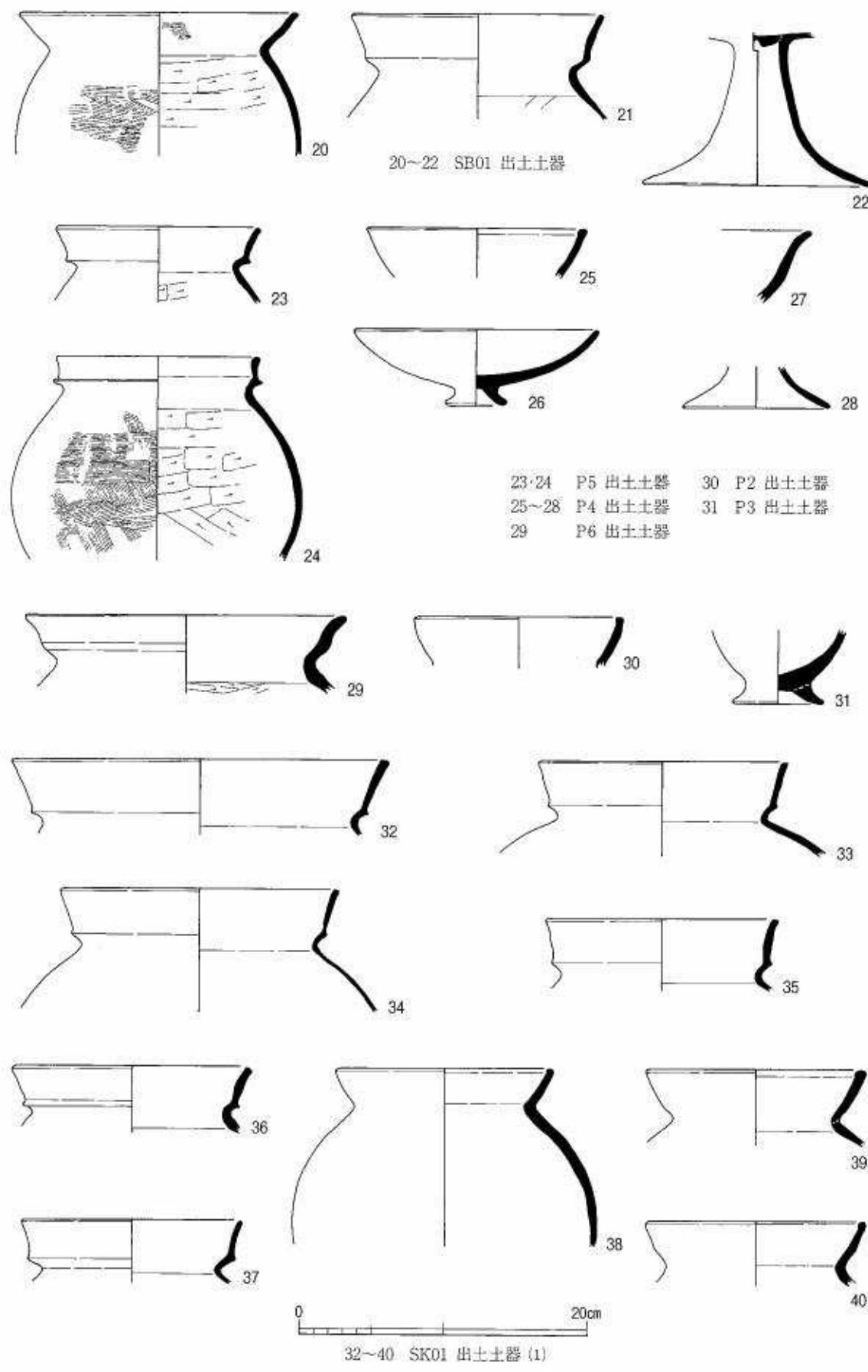
埋没状況 褐色シルト質極細砂1層からなる(第46図)。

出土遺物 壺と器台が出土している(第48図)。

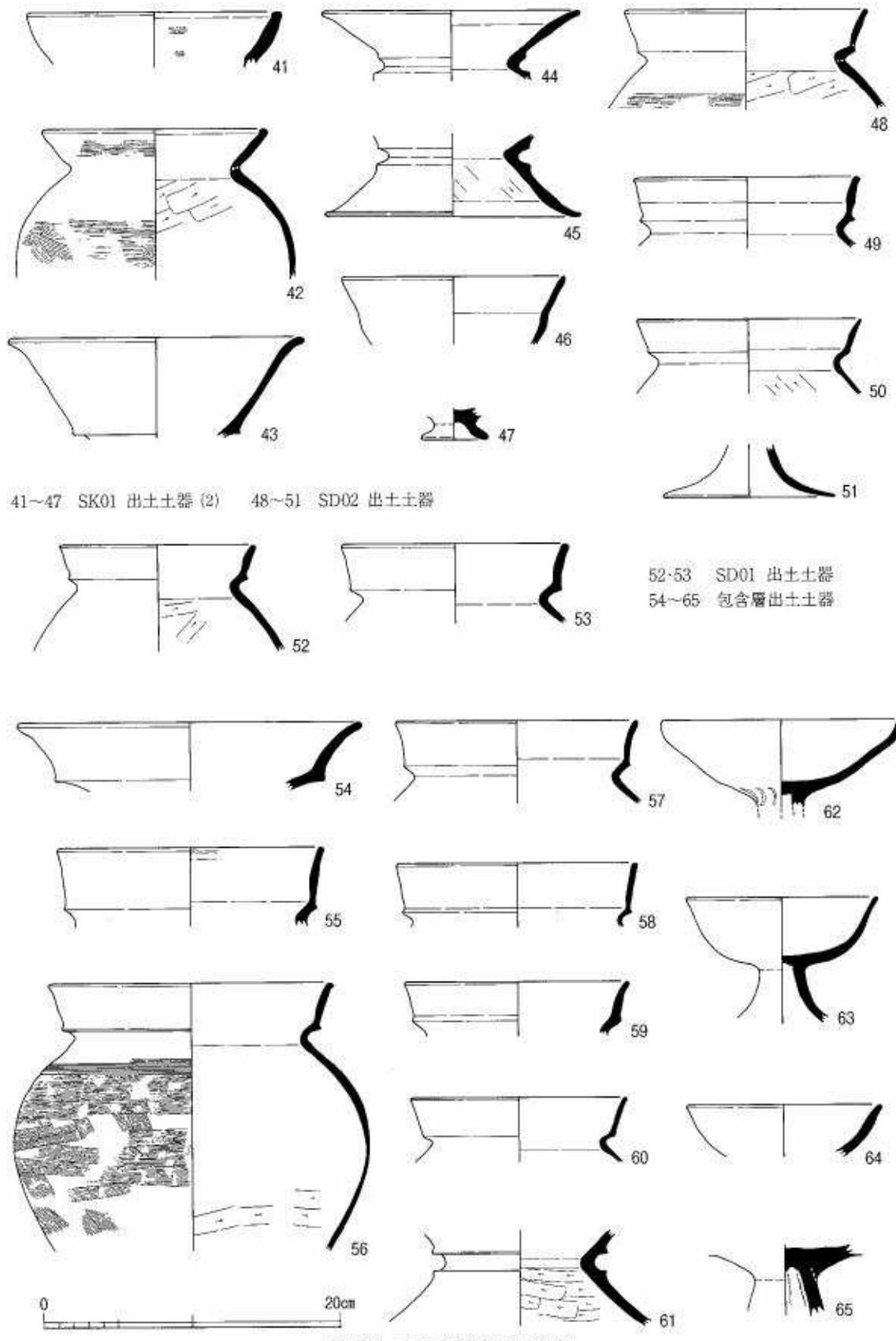
壺 48～50の3個体出土している。いずれも山陰系に分類されるものである。48・49と50とでは若干特徴を異にし、前者の胎土はより在地的であるのに対して、後者は非在地的である。また、48のヘラ削りは左→右方向であるのに対して、50のヘラ削り方向は逆である。

器台 51の1個体である。鼓形器台に分類されるもので、脚部下半が残存する。内外面とも磨滅が顕著である。胎土は、非在地的な特徴を示している。

時期 出土土器から判断して、古墳時代前期と考えられる。



第47図 古墳時代前期の土器 (1)



(6) その他の(写真図版18)

- 概要** 遺構には伴わぬが、包含層から当該期の土器が出土している。当遺跡を検討する上で不可欠と考えられる。そこで、その概要を報告する。器種としては、壺・甕・器台・高坏の各器種が出土している。(第48図)
- 壺** 54の1個体を図化した。いわゆる山陰系に分類されるものである。内外面とも磨滅が顕著である。
- 甕** 55~60の6個体を図化した。いずれも山陰系に分類されるものである。このなかで、56は、今回報告する山陰系甕のなかで最も良好に残存する個体である。体部外面がハケ調整(縦方向→横方向)、内面がヘラ削り(左→右)により仕上げられている。内面上半はその後ナデ調整により仕上げられている。口縁部は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。
- 55・56が在地的な胎土であるのに対して、60は非在地的特徴を示している。
- 器台** 61の1個体である。鼓形器台の脚部下半を中心に残存する。脚部内面はヘラ削り(右→左)により仕上げられている。他はナデ調整により仕上げられている。筒部の稜も、比較的シャープに仕上げられている。胎土は在地的な特徴を示している。
- 高坏** 62~65の4個体を図化した。坏部が残存する62~64のなかで、62と63・64の2タイプに分類が可能である。62は口径に対して坏部高が浅く、底部と口縁部の境が不明瞭である。一方、63と64は、口径に対して坏部高が深く、底部と口縁部の境が比較的明瞭である。いずれも、磨滅が顕著である。
- 65は、坏部と脚部の接合部である。脚部頂部に中心軸痕が認められる(写真図版18)。
- 時期** 以上の土器は、いずれも古墳時代前期に位置付けられるものと考えられる。

第4表 古墳時代前期土器観察表(1)

No	種別	器種	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存状況	色調	備考	挿図No	図版No
20	土師器	甕	SB01	19.0	9.9		口縁部若干	浅黄橙		47	
21	土師器	甕	SB01	17.2	7.3		口縁部若干	にぶい褐~灰褐	非山陰的胎土	47	
22	土師器	高坏	SB01		10.6	15.8	底部若干	浅黄橙		47	16
23	土師器	甕	P 5	13.6	5.3		口縁部1/7	灰白	非山陰的胎土	47	
24	土師器	甕	P 5	13.8	14.1	13.0	口縁部若干	にぶい黄橙~灰白		47	16
25	土師器	甕	P 4	14.8	3.4		口縁部1/7	橙		47	
26	土師器	低脚坏	P 4	16.7	5.3	4.3	ほぼ完存	橙		47	16
27	土師器	高坏	P 4		5.0		口縁部若干	橙		47	
28	土師器	高坏	P 4		2.9	10.2	底部1/4	橙		47	
29	土師器	甕	P 6	21.8	5.4		口縁部1/9	浅黄橙	やや山陰的胎土	47	16
30	土師器	甕	P 2	13.6	3.6		口縁部1/6	橙		47	

第5表 古墳時代前期土器観察表(2)

No	種別	器種	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存状況	色調	備考	挿図No	図版No
31	土師器	台付鉢	P 3		5.2	6.3	底部若干	橙～淡橙		47	16
32	土師器	甕	SK01	25.0	5.2		口縁部1/8	橙～淡橙	非山陰的胎土	47	
33	土師器	甕	SK01	16.6	6.6		口縁部1/7	浅黄橙		47	17
34	土師器	甕	SK01	18.7	8.6		口縁部1/7	浅黄橙	非山陰的胎土	47	
35	土師器	甕	SK01	15.8	5.0		口縁部1/12	橙～浅黄橙	非山陰的胎土	47	17
36	土師器	甕	SK01	16.0	4.7		口縁部1/7	橙	山陰産に近い胎土	47	17
37	土師器	甕	SK01	15.0	4.4		口縁部1/5	にぶい橙～灰白	非山陰産	47	17
38	土師器	甕	SK01	14.5	12.3		口縁部1/4	橙～浅黄橙		47	17
39	土師器	甕	SK01	14.6	5.2		口縁部1/7	橙～灰白	山陰産に近い胎土	47	
40	土師器	甕	SK01	14.8	4.4		口縁部1/7	にぶい橙～灰白	山陰的胎土	47	
41	土師器	甕	SK01	16.9	3.7		口縁部1/6	橙～灰白		48	
42	土師器	甕	SK01	14.4	10.1		口縁部1/7	橙～にぶい橙		48	17
43	土師器	器台	SK01	19.2	6.8		口縁部1/4	浅黄橙	山陰産に近い胎土	48	
44	土師器	器台	SK01	17.0	4.7		口縁部2/3弱	橙	非山陰的胎土	48	17
45	土師器	器台	SK01		5.5	17.1	底部1/2弱	橙～浅黄橙	非山陰的胎土	48	17
46	土師器	鉢	SK01	14.7	4.6		口縁部1/7	浅黄橙	やや山陰産に近い胎土	48	
47	土師器	低脚杯	SK01		2.1	4.2	底部1/2強	灰白～浅黄橙		48	
48	土師器	甕	SD02	16.0	6.7		口縁部1/9	灰白	山陰的胎土	48	18
49	土師器	甕	SD02	14.6	4.7		口縁部1/9	灰白～橙	山陰的胎土	48	
50	土師器	甕	SD02	14.9	5.0		口縁部1/9	灰白～黄灰	非山陰産	48	
51	土師器	器台	SD02		3.5	11.5	底部1/2強	浅黄橙	非山陰的胎土	48	18
52	土師器	甕	SD01	12.8	7.2		口縁部1/12	橙	非山陰的胎土	48	
53	土師器	甕	SD01	14.6	5.3		口縁部2/5	浅黄橙	やや山陰産に近い胎土	48	18
54	土師器	壺	包含層	22.6	4.6		口縁部1/6	浅黄橙		48	18
55	土師器	甕	包含層	17.4	5.3		口縁部1/12	浅黄橙		48	
56	土師器	甕	包含層	18.5	18.0		口縁部1/4弱	浅黄橙～灰褐	山陰産に近い胎土	48	18
57	土師器	甕	包含層	16.0	5.6		口縁部1/5	浅黄橙～にぶい黄橙		48	

第6表 古墳時代前期土器観察表(3)

No	種別	器種	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存状況	色調	備考	挿図No.	図版No.
58	土師器	甕	包含層	16.0	4.4		口縁部1/6	浅黄橙～灰白		48	
59	土師器	甕	包含層	14.9	3.6		口縁部1/8	橙		48	
60	土師器	甕	包含層	14.3	4.3		口縁部1/4	浅黄橙	非山陰的胎土	48	
61	土師器	器台	包含層		6.5		頭部1/4	灰白	山陰產に近い胎土	48	
62	土師器	高坏	包含層	15.8	6.0		口縁部1/5	橙		48	18
63	土師器	高坏	包含層	12.6	8.4		口縁部1/12 ～脚部一部	灰白～灰黃褐		48	18
64	土師器	高坏	包含層	12.9	3.5		口縁部1/7	橙～にぶい褐		48	
65	土師器	高坏	包含層		4.8		坏部 ～脚部一部	灰白～赤		48	18

3. 古墳時代後期～奈良時代の遺構と遺物

(1) 概 要

検出遺構

掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝を検出した（第50図）。

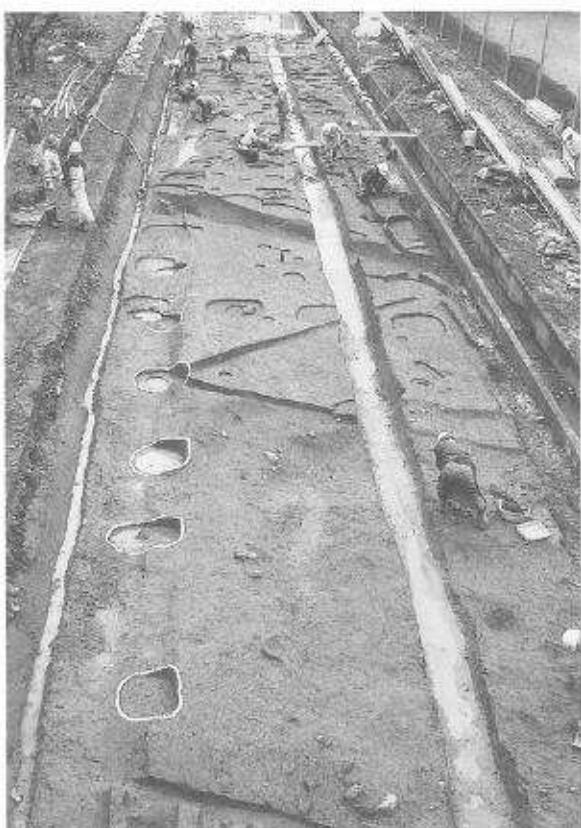
今回の調査で明らかとなった遺構の大半が、当該期の遺構である。

平面的には、調査区全域で当該期の遺構・遺物を確認している。特に、①柱穴の掘り方の大半は、その平面形が方形傾向にあり、かつ大型である。②また、調査区東端部の人為的に高くなった場所（壇状遺構：第51図）で掘立柱建物跡が検出されている、などの点は、当遺跡の性格を考える上で注目される。

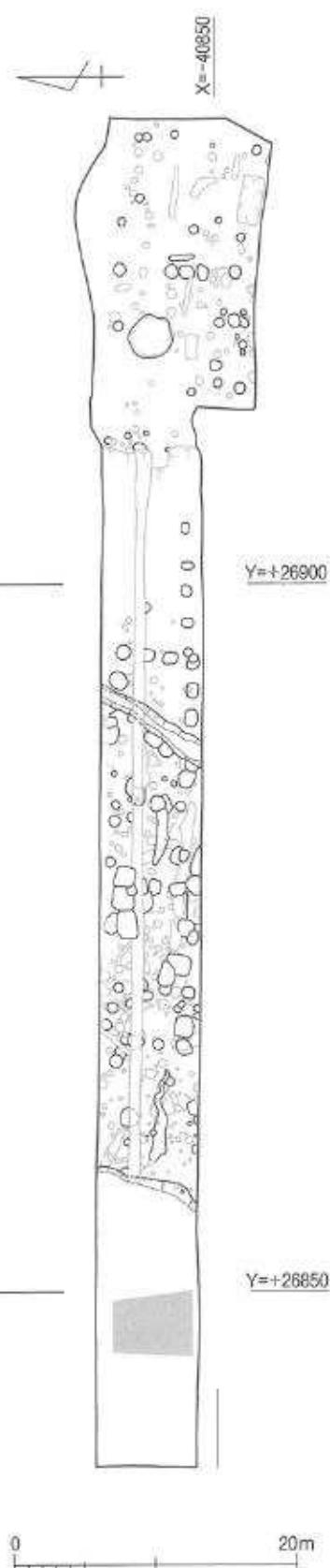
また、旧河道内では人為的に礫が敷かれた箇所（第50図 アミカケ部分）を確認した。拳大以下の円礫を6.5m×4mの範囲に敷き詰めたものである。その層位（第3章第1節：27ページ）から当該期の可能性が高い。

出土遺物

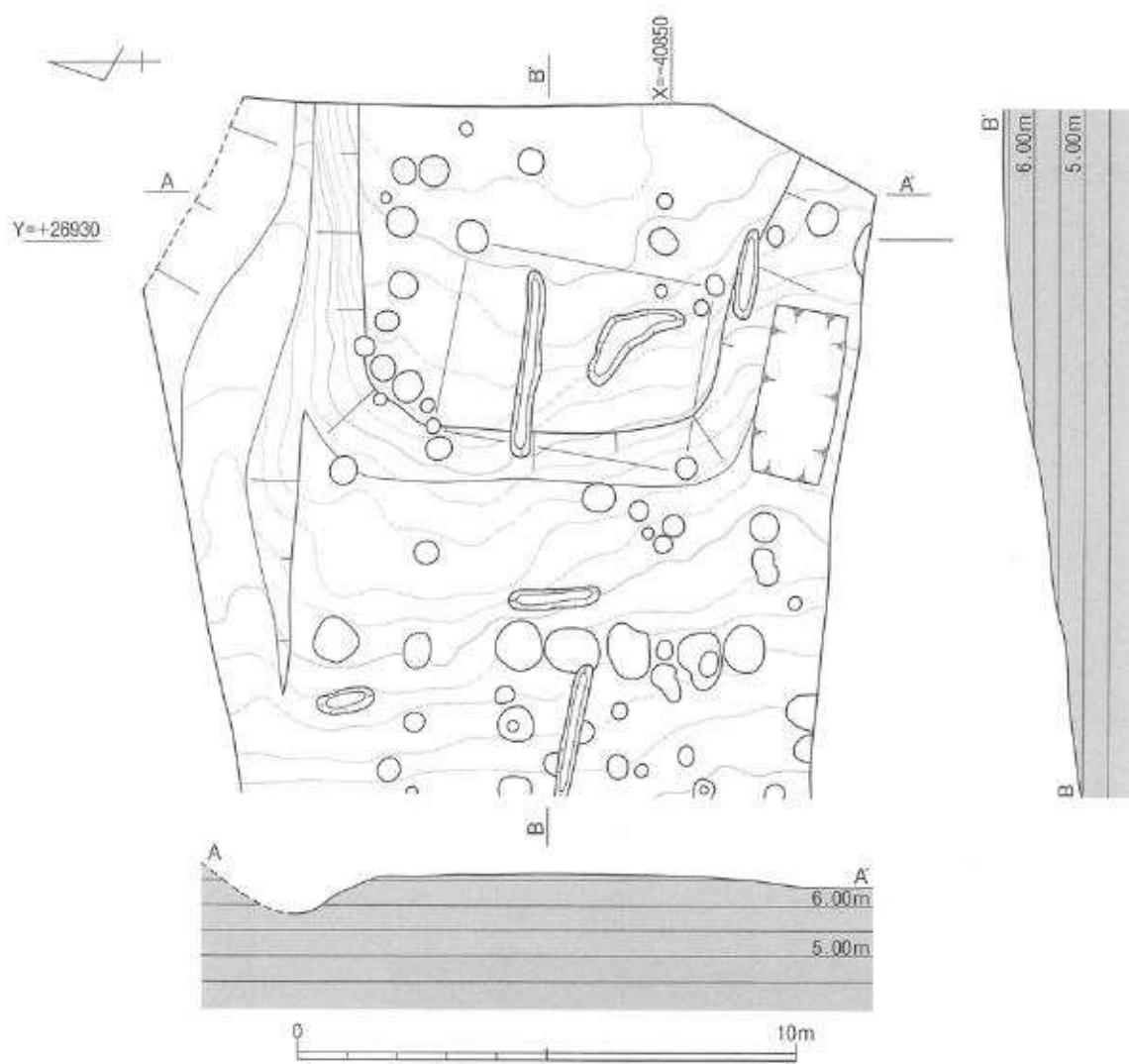
また、出土遺物についても当該期のものが最も多く出土している。特に、山陰系の鷦尾・巨大な柱が注目される。



第49図 古墳時代～奈良時代の遺構検出作業



第50図 古墳時代後期～奈良時代の遺構



第51図 壇状遺構

壇状遺構 調査区東端部が地形的に高いだけではなく、人為的に壇が造りだされている（第51図・写真図版3）。東側を除く周囲を削ることにより、ほぼ平坦な面が造りだされている。特に、北側の削り込みが顕著である。

一方、西側については削り込みが弱く、その傾斜が緩くなっている。南側についても、南東方向を中心に壇状部が擴がる傾向が認められる。このため、壇の範囲が不明瞭で、調査区外まで緩やかに傾斜しているようである。

また、東側については、平面図では調査区外まで続くようであるが、調査区東端部のすぐ東側は丘陵斜面となっている。このため、平坦部が続いても東側へ1mは越えないものと考えられる。

検出した規模は、東西方向で7.50m、南北方向で6.50mを測る。平坦部北側での比高差は60cm、西側での比高差は30cmである。

(2) 掘立柱建物

はじめに 8棟(SB03～SB10)復元することができた(第52図)。東側拡張部から平坦部にかけて、ほぼ全域で検出されている。建物相互で平面的に重複する例が認められることから、これらの建物は全て同時期に機能していたのではなく、幾度か建替えられたものと判断される。SB09を除いては、基本的な棟軸方向はほぼ一致している。

SB03

検出状況 調査区東端部、壇状遺構上で検出した(第52図)。

形状・規模 梁行1間×桁行1間の側柱建物である(第53図)。柱間の規模は第7表のとおりである。

柱穴 基本的に平面形は円形をなす。各柱穴の規模は第8表のとおりである。

出土遺物 P1とP4から土師器片、須恵器の甕が出土しているが、小片のため図化できなかった。

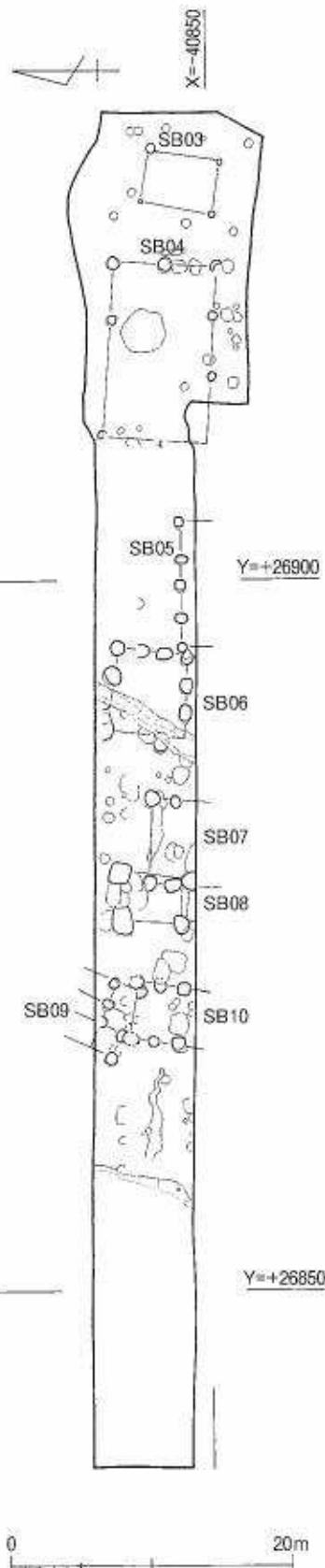
時期 出土遺物から判断して、古墳時代後期と考えられる。

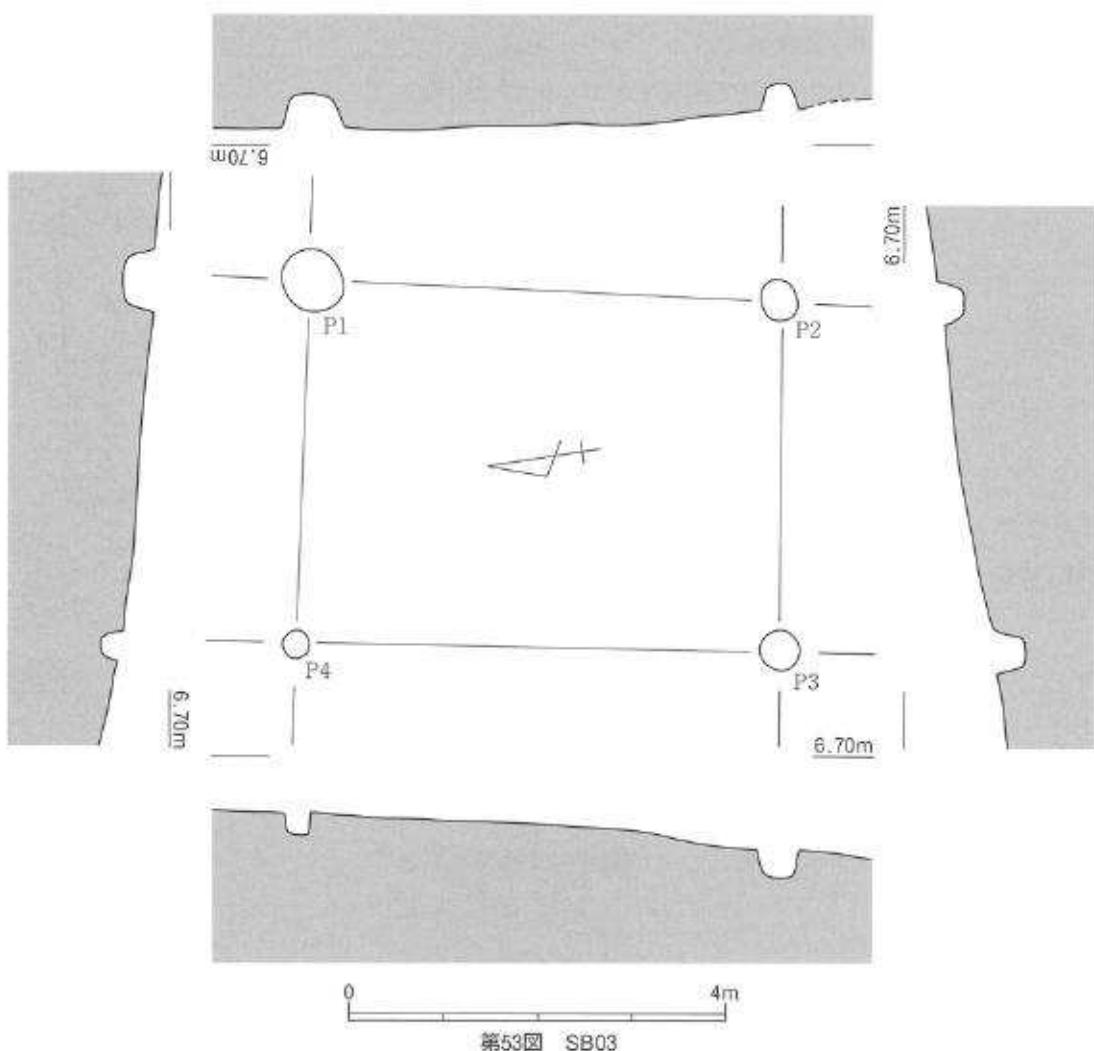
第7表 SB03 遺物規模一覧表

	柱間	柱穴間距離(m)	側面距離(m)	柱穴間平均距離(m)
北桁行	P1-P4	3.8	3.8	3.8
南桁行	P2-P3	3.7	3.7	3.7
東梁行	P1-P2	5.0	5.0	5.0
西梁行	P3-P4	5.2	5.2	5.2

第8表 SB03 柱穴規模一覧表

柱穴番号	柱穴規模(cm)	柱痕規模(cm)	深さ(cm)
P1	60.0	—	32.0
P2	40.0	—	30.0
P3	40.0	—	28.0
P4	30.0	—	20.0

第52図 古墳時代後期～奈良時代の遺構
掘立柱建物跡



SB04 (写真図版7)

検出状況

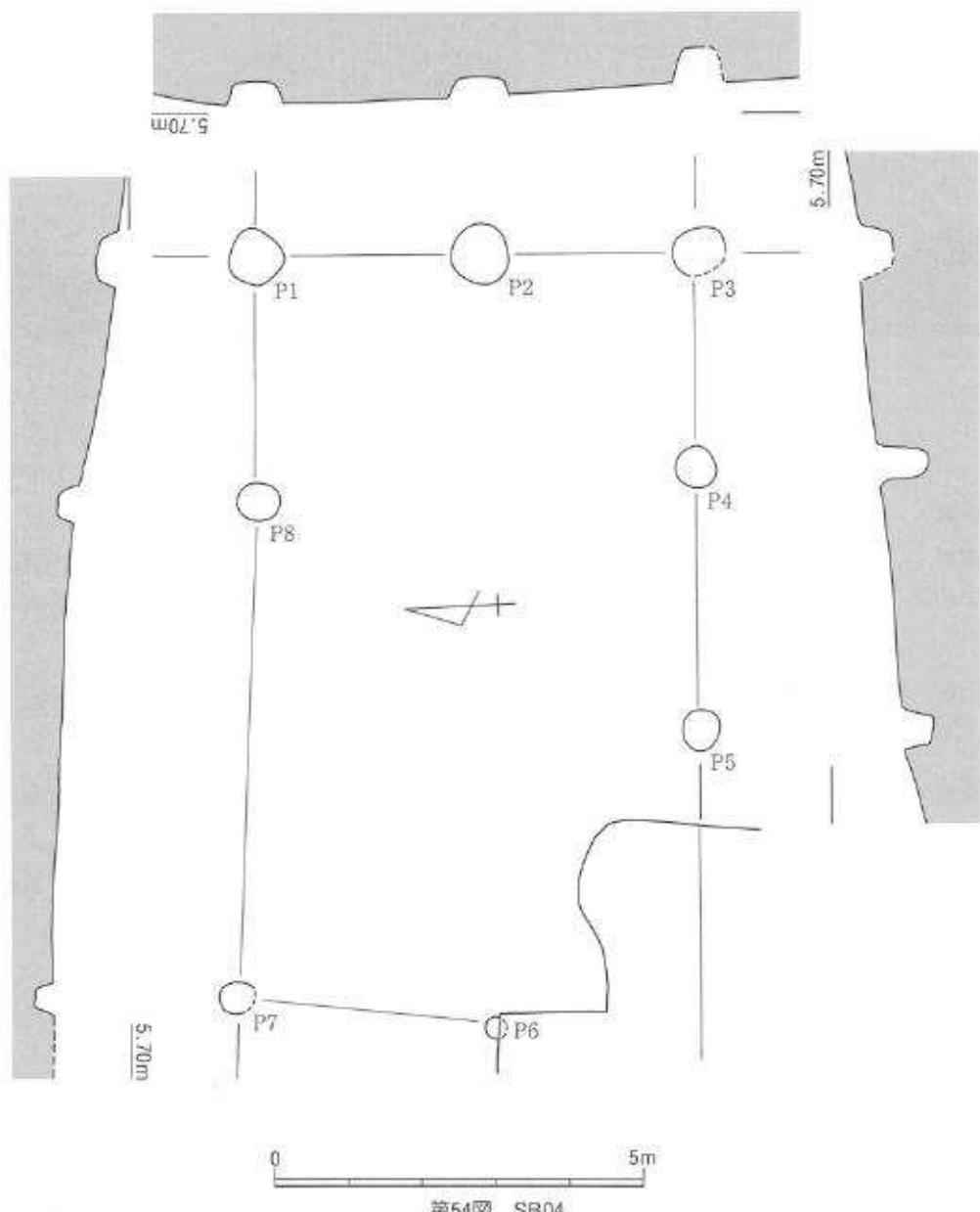
調査区東端部、壇状遺構上で検出した（第52図）。

形状・規模

梁行2間×桁行3間の側柱建物である（第54図）。全体を検出することはできず、南西隅の柱穴1箇所が調査区外となる。北側桁行方向で10.1mを測り、東側梁行方向で5.9mである。各柱穴間の距離などは第9表のとおりである。

第9表 SB04 建物・柱穴規模一覧表

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)	柱穴番号	柱穴規模 (cm)	柱痕規模 (cm)	深さ (cm)
東梁行	P 1 - P 2	3.0	5.9	2.95	P 1	80.0	—	30.0
	P 2 - P 3	2.9			P 2	80.0	—	26.0
南桁行	P 3 - P 4	2.9	6.5	3.25	P 3	70.0	—	46.0
	P 4 - P 5	3.6			P 4	50.0	—	64.0
北桁行	P 1 - P 8	3.3	10.1	5.05	P 5	50.0	—	40.0
	P 7 - P 8	6.8			P 6	30.0	—	
					P 7	44.0	—	20.0
					P 8	60.0	—	22.0



第54図 SB04

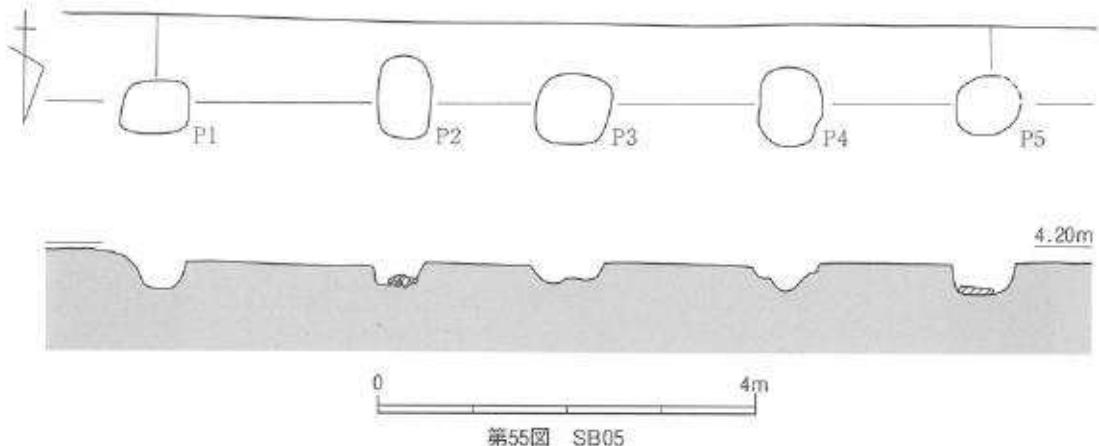
柱 穴 基本的に平面形は円形をなす。各柱穴の規模は第9表のとおりである。

出土 遺 物 柱穴からは土師器、須恵器が出土しているが、小片であり図化できなかった。

時 期 出土遺物から判断して、古墳時代後期と考えられる。

第10表 SB05 建物・柱穴規模一覧表

	柱 間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)	柱穴 番号	柱穴規模 (cm)	柱痕規模 (cm)	深 さ (cm)
北桁行	P 1 - P 2	2.60	8.82	2.2	P 1	70×54	—	38.0
	P 2 - P 3	1.74			P 2	88×56	—	26.0
	P 3 - P 4	2.32			P 3	80×70	—	20.0
	P 4 - P 5	2.16			P 4	80×64	—	40.0
					P 5	70×54	—	40.0

**SB05 (写真図版7・19)**

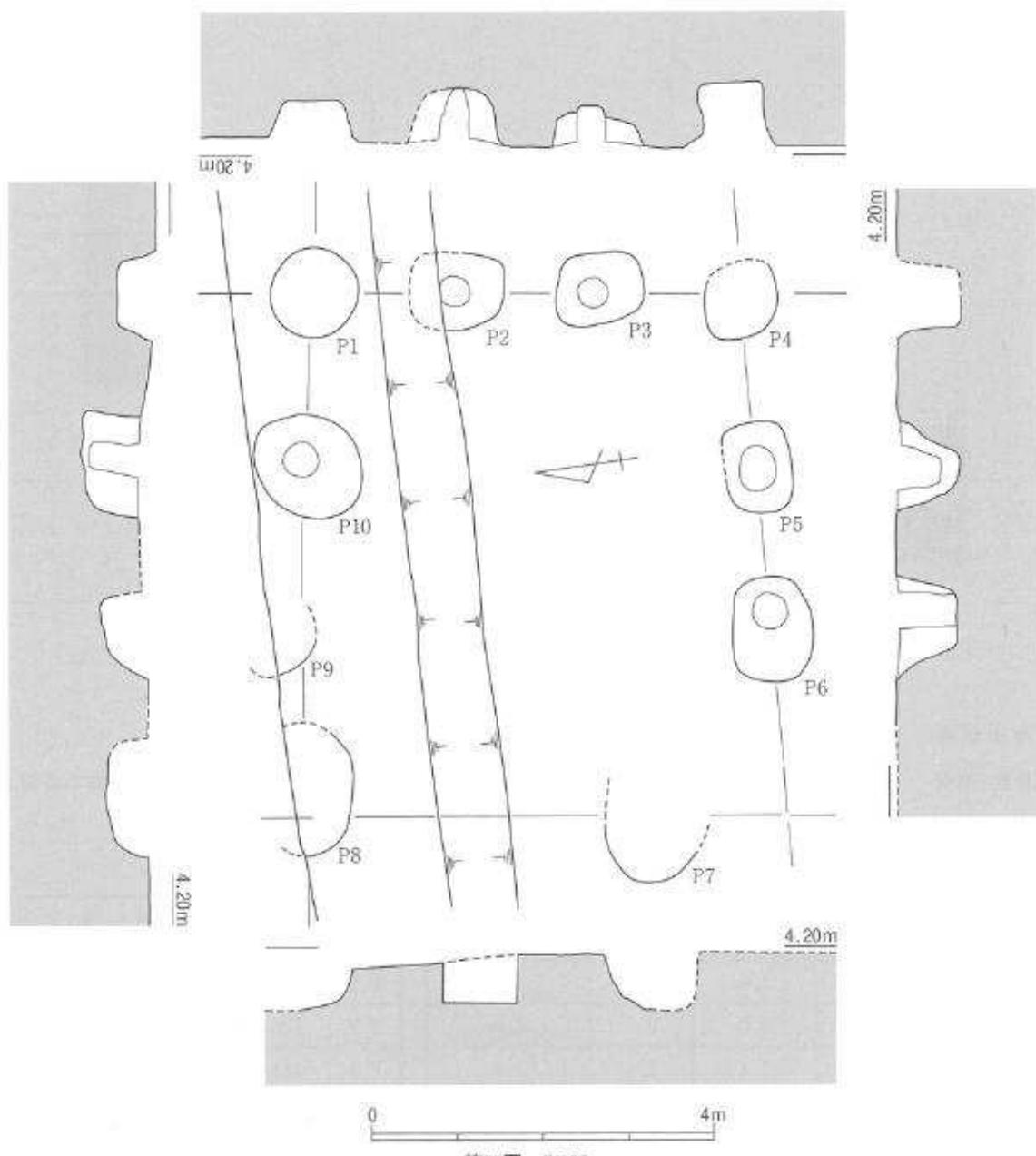
- 検出状況** 調査区中央部で検出した（第52図）。
- 形状・規模** 梁行4間×梁行1間+αの建物である（第55図）。桁行方向は全体を検出しているが、梁行方向は調査区外へ拡がるため、建物の全容は不明である。各柱穴間の距離などは第10表のとおりである。
- 柱穴** 基本的に平面形は方形をなすが、円形傾向の柱穴も認められる。各柱穴の規模は第10表のとおりである。
- 出土遺物** P1から須恵器の壺（66）が出土している（第74図）。66は体部上半にカキ目を施し、下半はナデで仕上げている。体部には部分的に灰かぶりによる自然釉が見られる。
そのほかの柱穴からも、当該期の土師器・須恵器が出土しているが、小片のため図化できなかった。
- 時期** 出土遺物から判断して、7世紀前半と考えられる。

SB06 (写真図版8)

- 検出状況** 調査区中央部、SD06に切られて検出された（第52図）。
- 形状・規模** 梁行3間×桁行3間の側柱建物である（第56図）。SD06および用水路によって西側梁行

第11表 SB06 建物・柱穴規模一覧表

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)	柱穴番号	柱穴規模 (cm)	柱痕規模 (cm)	深さ (cm)
東梁行	P1-P2	1.66	5.00	1.67	P1	100	—	40.0
	P2-P3	1.64			P2	90	30.0	64.0
	P3-P4	1.70			P3	104×80	30.0	48.0
南桁行	P4-P5	2.00	3.70	1.85	P4	90×80	—	74.0
	P5-P6	1.70			P5	106×80	40.0	70.0
北桁行	P8-P9	2.00	6.00	2.00	P6	120×90	40.0	70.0
	P9-P10	2.00			P7	112	—	70.0
	P10-P1	2.00			P8	140	—	50.0
					P9	100	—	50.0
					P10	140×110	40.0	70.0



第56図 SB06

方向で2つ柱穴を欠く。北側桁行方向で6mを測り、東側梁行方向で5mである。各柱穴間の距離等は第11表のとおりである。

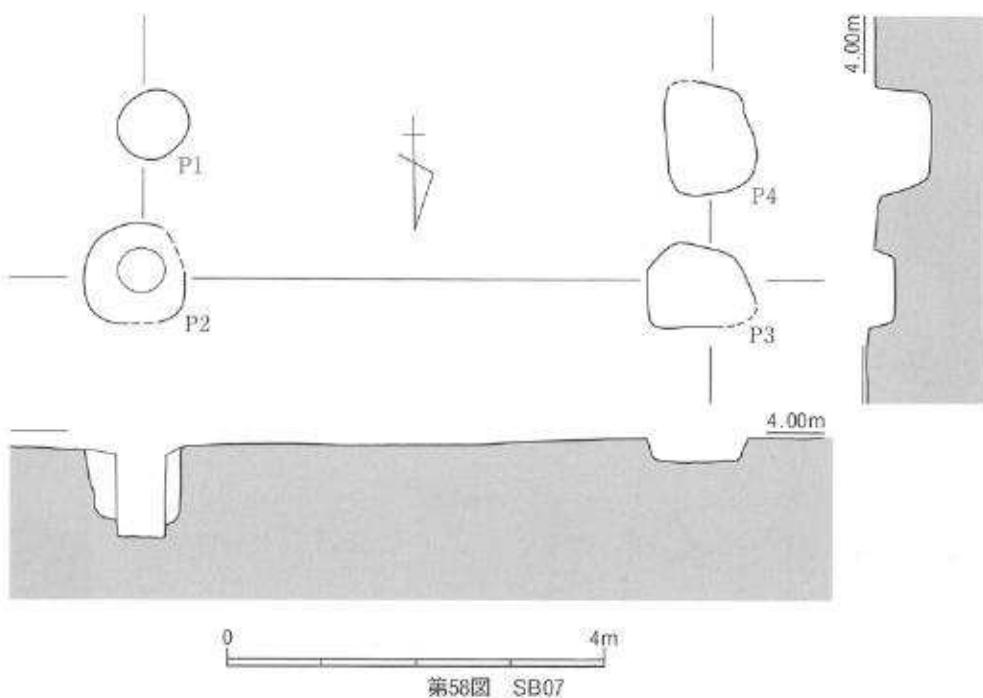
柱穴 基本的に平面形は方形をなすが、やや円形傾向の柱穴も認められる。柱穴の規模が1m前後と大きく、40cm前後の柱が使用されている。各柱穴の規模は第11表のとおりである。

出土遺物 柱穴からは土師器、須恵器が出土しているが、小片であり図化できなかった。

時期 出土遺物から判断して、7世紀後半と考えられる。



第57図 SB06 写真撮影準備



第58図 SB07

SB07 (写真図版8・41)

検出状況

調査区中央部で検出した (第52図)。

形状・規模

梁行1間×桁行1間+αの側柱建物である (第58図)。検出は一部に限られ、建物の南側が調査区外へと拡がる。柱穴間の規模等は第12表のとおりである。

第12表 SB07 建物・柱穴規模一覧表

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
	P 1 - P 2	1.6	1.6	1.6
	P 2 - P 3	6.0	6.0	6.0
	P 3 - P 4	1.4	1.4	1.4

柱穴番号	柱穴規模 (cm)	柱痕規模 (cm)	深さ (cm)
P 1	80.0		15.0
P 2	108.0	50.0	90.0
P 3	114.0		20.0
P 4	120.0		54.0

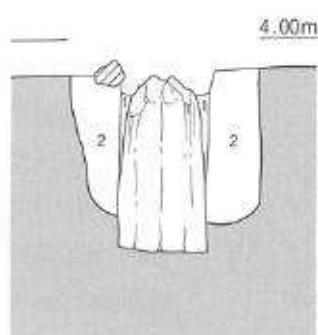
柱 穴 平面形は方形傾向にある。その規模は第12表のとおりである。なお、P 2では柱 (W 5 : 第64図) が遺存していたが、柱が柱穴の掘り方底部より約15cm沈み込んでいた(第59図)。掘り方底部には礎板等は認められなかった。

W 5は、芯持ち材を利用したものである。表面には縦方向の加工痕が認められ、断面形は多角形傾向にある。

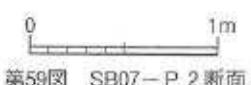
下端部は丁寧に平坦に仕上げられ、手斧による加工痕が顕著である (写真図版41)。全長92.5cm残存し、下端部付近における断面は47cm×48cmと整円形に近い。ヒノキ。

出 土 遺 物 柱穴からは土師器・須恵器が出土しているが、小片であり図化できなかった。

時 期 出土遺物が小片のため、時期は不明である。



1. 灰色シルト
2. 黒灰色シルト混じり黄褐色
砂質シルト



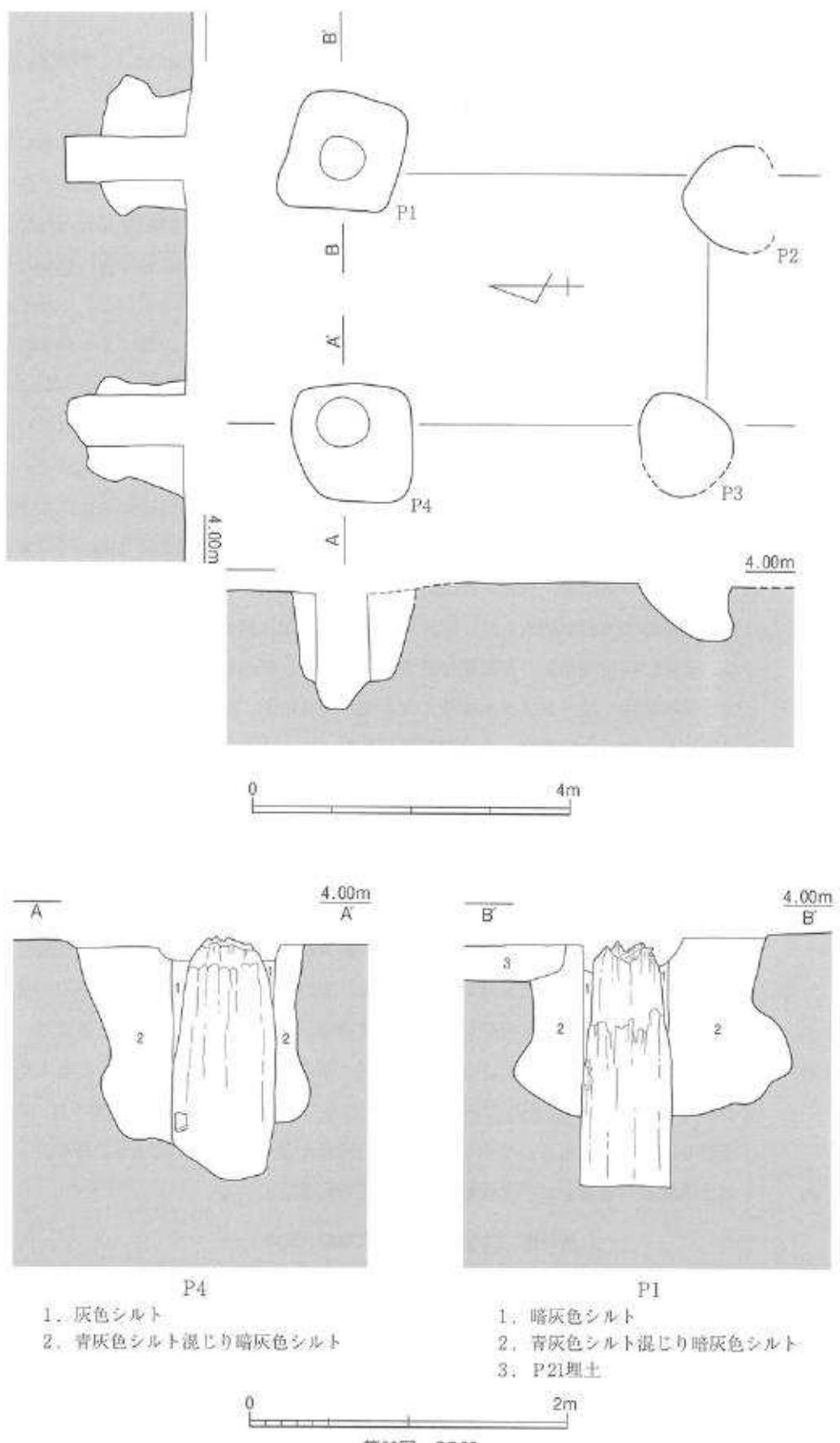
第59図 SB07-P 2断面

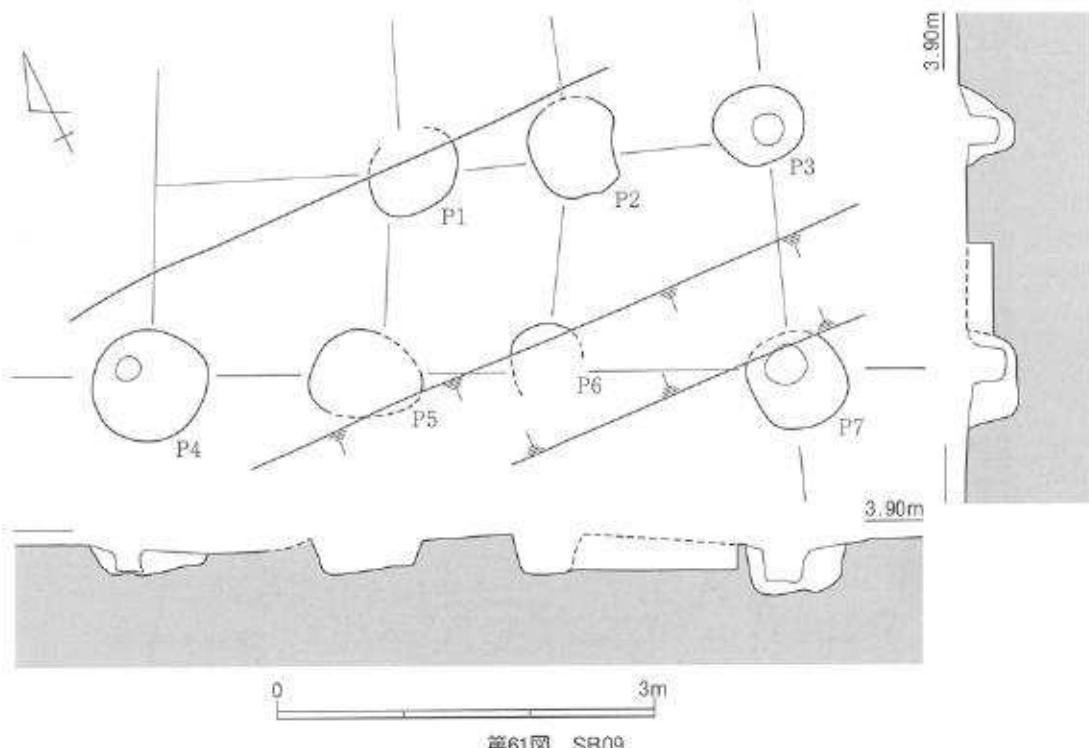
SB08 (巻首図版5・6 写真図版9・19・40)

検出状況	調査区中央部で検出した。(第52図)
形状・規模	梁行1間×桁行1間の側柱建物である(第60図)。北側梁行方向で3.3mを測り、東側桁行方向で5mである。各柱穴間の距離等は第13表のとおりである。
柱 穴	<p>平面形は方形傾向にある。その規模は第13表のとおりである。全ての柱穴において柱が遺存しており(第63・64図)、特にP1・P4では、柱が柱穴掘り方底部より下方へ沈み込んでいた。その深さは、P1が約45cm、P4が約22cmである。礎板は認められなかった。</p> <p>W1(第63図)は、P1から出土している(第60図)。芯持ち材を利用したもので、表面に縦方向の加工痕がわずかに認められ、断面が多角形気味となっている。下端部には筏穴が穿たれている。その規模は、16.50cm×15.00cmの方形を呈し、盤による削り痕が顕著である。また、下端は斧による伐木痕が顕著に認められ、柱方向に対して斜方向に入れられており、柱下端面は平坦ではない。先端は腐食が顕著で、切断痕は認められない。全長1.54m残存し、下端部付近での断面形は、58cm×70cmの楕円形を呈する。ヒノキ。</p> <p>W2は、P4から出土している(第60図)。W1同様、芯持ち材を利用したもので、表面には縦方向の加工が施されている。筏穴も認められるが、下端部より30cmの位置に施されている。その規模は、14cm×12cmの方形を呈し、盤による手斧痕が顕著である。下端にはW1同様の伐木痕が認められ、平坦ではない。先端は腐食が顕著で、切断痕は認められない。全長1.49m残存し、下端部付近での断面形は、63cm×67cmと整円に近い。イヌマキ。</p> <p>W3(第64図)は、P2から出土している(第60図)。この柱も芯持ち材を利用したものであるが、腐食が顕著で、その断面形は整形とはなっていない。このため、加工痕はほとんど認められない。ただし、部分的に縦方向の加工痕が残存し、多角形気味となっている。下端面には斜方向の伐木痕は認められず、平坦となっている。ただし、腐食が顕著で、加工痕などは認められない。先端も腐食が顕著で、切断痕は認められない。全長46cm残存し、下端部付近での断面形は、35.50cm×37.50cmと楕円形傾向である。ヒノキ。</p> <p>W4(第64図)はP3から出土しており、腐食が顕著である。芯持ち材を利用しているが、当初の形状をとどめた箇所はわずかである。また下端部も腐食が顕著である。全長54cm残存し、その断面は、最も良好に遺存する箇所で、40×27.5cmの楕円形を呈する。ヒノキ。</p>
出土遺物	P1から須恵器杯蓋(67)が出土している(第74図)。その他の柱穴からも土師器・須恵器が出土しているが、小片であり図化できなかった。67は杯蓋Heに分類され、天井部はヘラ切り後未調整である。ややゆるやかに口縁部が開く。口径は12.5cmである。
時期	出土遺物から判断して、7世紀後半と考えられる。

第13表 SB08 建物・柱穴規模一覧表

柱 間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)	柱穴 番号	柱穴規模 (cm)	柱痕規模 (cm)	深さ (cm)
東桁行	P1-P2	5.0	5.0	P1	146×140	58.0	
南梁行	P2-P3	3.2	3.2	P2	132.0	35.0	
西桁行	P3-P4	4.4	4.4	P3	120.0	34.0	
北梁行	P4-P1	3.3	3.3	P4	150×150	64.0	





第61図 SB09

SB09 (写真図版10・19)

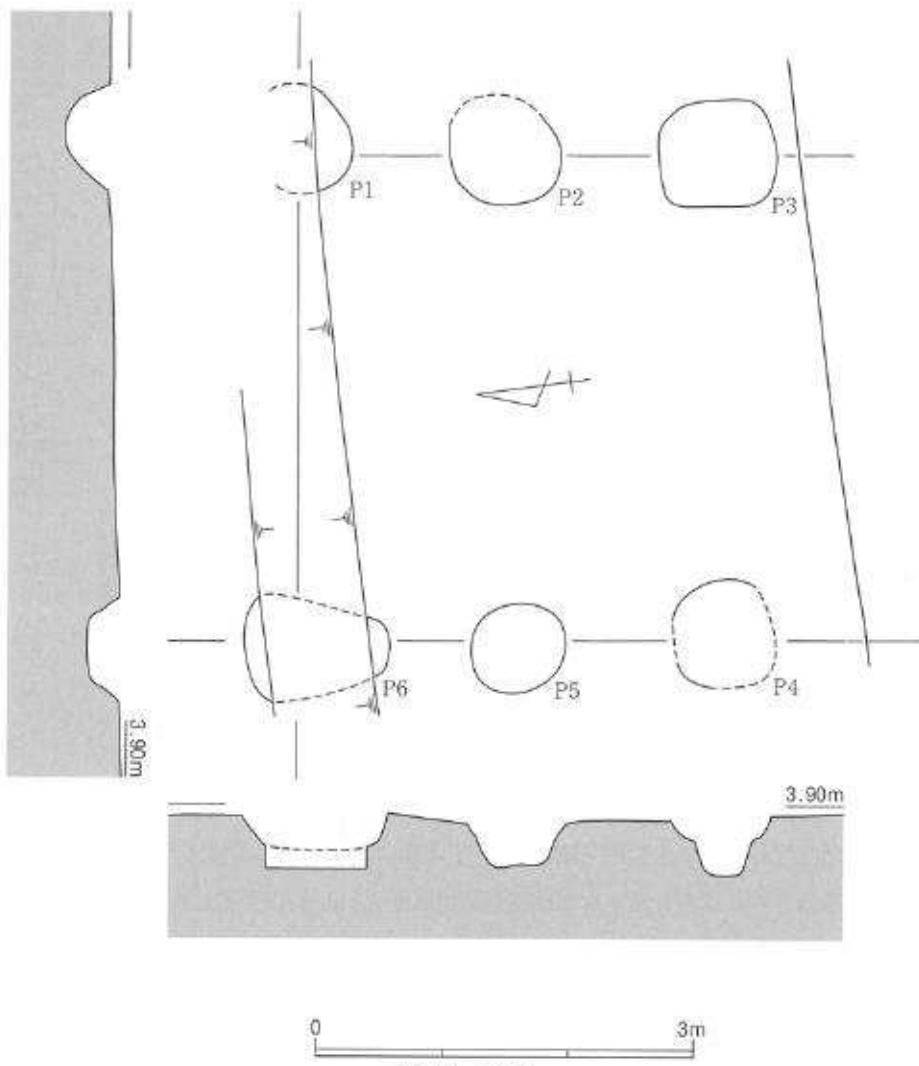
- 検出状況** 調査区西部で検出した（第52図）。用水路によって一部の柱穴が破壊されている。
- 形状・規模** 桁行3間×梁行2間+ α の総柱建物である（第61図）。全体を検出することはできず、建物の北側部分が調査区外となっている。各柱穴間の距離などは第14表のとおりである。
- 柱穴** 基本的に平面形は円形をなす。各柱穴の規模は第14表のとおりである。
- 出土遺物** P.4から須恵器杯蓋（68）が出土している（第74図）。68は杯蓋Hdに分類され、天井部はヘラ切り後未調整である。口径は14.8cmである。
- 時期** 出土遺物から判断して、7世紀後半と考えられる。

第14表 SB09 建物・柱穴規模一覧表

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)	柱穴番号	柱穴規模 (cm)	柱痕規模 (cm)	深さ (cm)
東梁行	P.3-P.7	1.86	1.86	1.86	P.1	75.0	18.0	59.0
南桁行	P.4-P.5	1.72			P.2	65.0	28.0	53.0
	P.5-P.6	1.45	5.07	1.69	P.3	66.0	22.0	40.0
	P.6-P.7	1.90			P.4	86.0	20.0	20.0
					P.5	90.0		42.0
					P.6			32.0
					P.7	66.0	26.0	40.0

SB10 (写真図版10・19)

- 検出状況** 調査区西部で検出した（第52図）。用水路によって一部の柱穴が破壊されている。
- 形状・規模** 梁行1間+ α ×桁行2間+ α の側柱建物である（第62図）。全体を検出することはできず、南北ともに調査区外へ拡がる。柱穴間の規模等は第15表のとおりである。



第62図 SB10

柱 穴 基本的に平面形は方形をなす。各柱穴の規模等は第15表のとおりである。

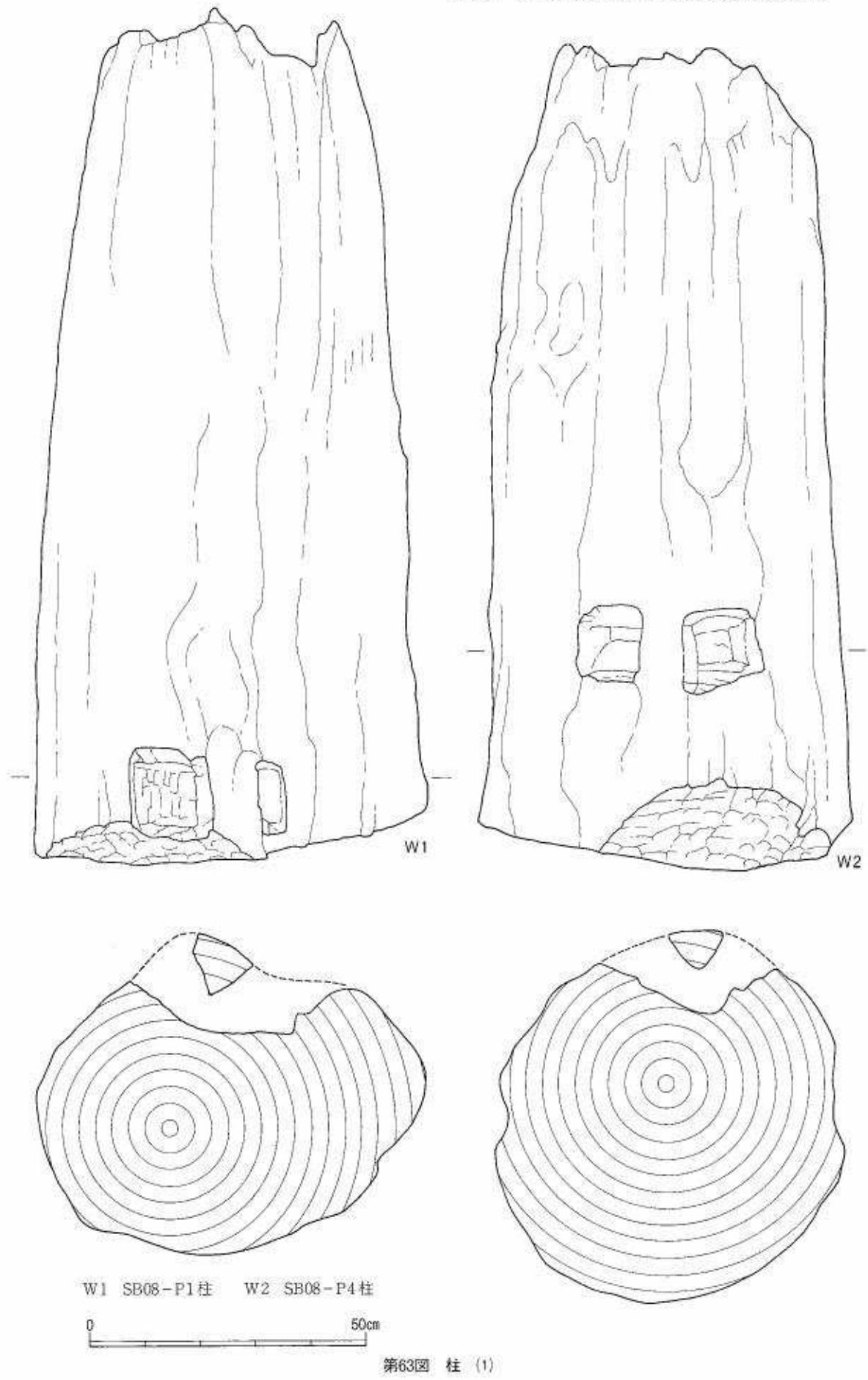
出土 遺 物 P 4 から須恵器杯蓋 (69) が、P 5 から須恵器杯身 (70) が出土している (第74図)。

69は口縁部の小片である。口端部が小さく屈曲する。70は杯身Hdに分類され、底部はヘラ切り後未調整である。口径は11.5cm。

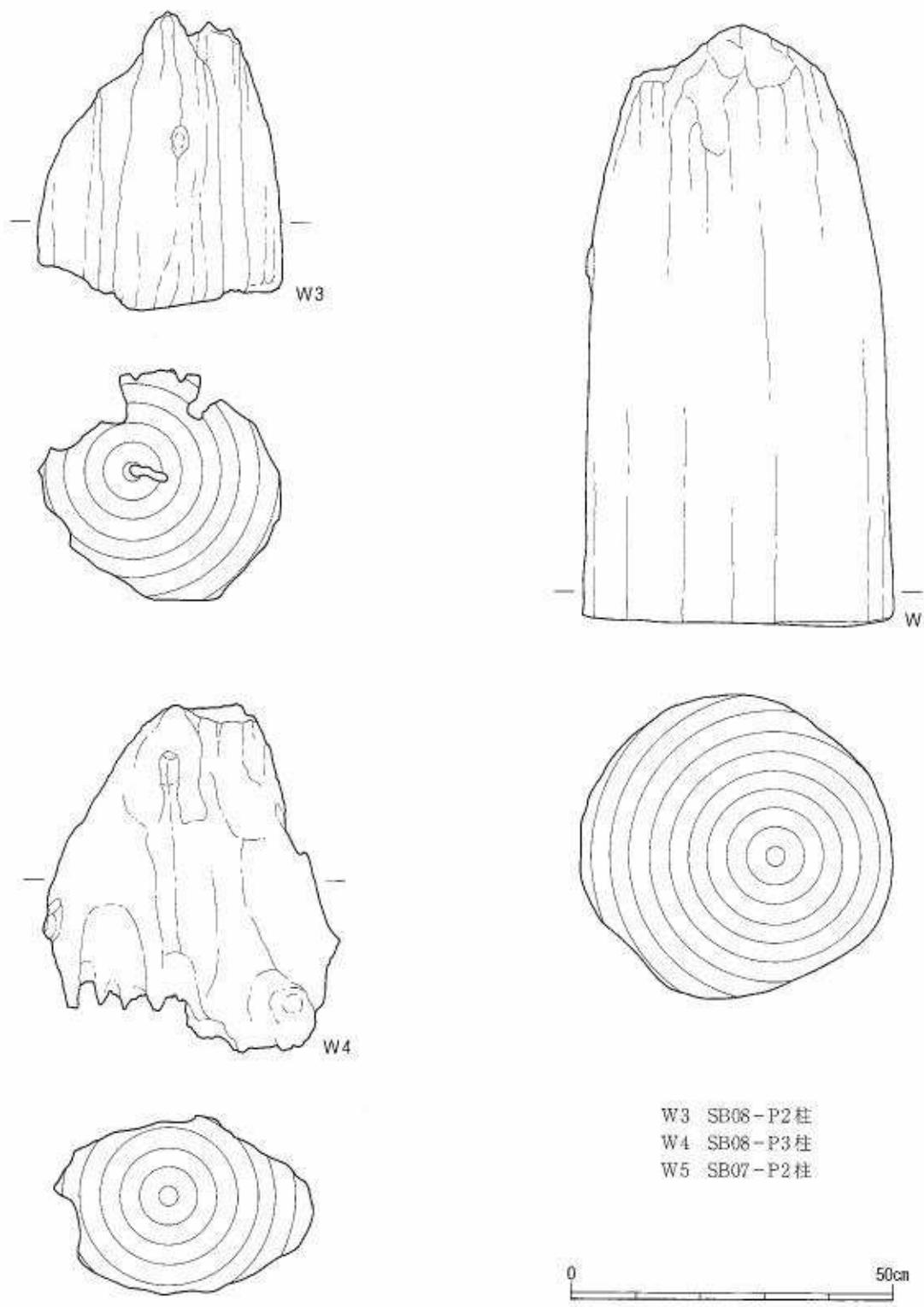
時 期 出土遺物から判断して、7世紀後半と考えられる。

第15表 SB10 建物・柱穴規模一覧表

	柱 間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)	柱穴 番号	柱穴規 模 (cm)	柱痕規 模 (cm)	深 さ (cm)
東桁行	P 1 - P 2	1.60	3.25	1.62	P 1	83.0		36.0
	P 2 - P 3	1.65			P 2	84.0	28.0	21.0
	P 3 - P 4	3.85			P 3	94×84	37.0	40.0
西桁行	P 4 - P 5	1.60	3.36	1.68	P 4	84.0		42.0
	P 5 - P 6	1.76			P 5	76.0		36.0
					P 6	114.0		24.0



第63図 柱 (1)



第64図 柱 (2)

(3) 柱 穴

はじめに

建物を構成する以外にも、当該期の柱穴が多く検出されている。これらの柱穴のなかからは、良好な資料が得られたものが少なからずある。そこで、本項ではこれらの柱穴について、出土遺物を中心で報告する。

概 要

P 7～P 33の27穴について報告する(第65図)。平面的には、拡張区と平坦部西側で検出されている。

P 7 (写真図版20)

検出状況

調査区東部壇状遺構上で検出された(第65図)。

出土遺物

須恵器杯身(76)と土師器甕(77)が出土している(第74図)。

76は杯身Hcに分類され、底部に回転ヘラ削りを施す。口径は8.2cm。77は甕の口縁部小片である。体部外面は摩滅が激しいが、頸部に横方向のナデ調整を施す。

時 期

出土土器から判断して、7世紀前半と考えられる。

P 8 (写真図版20・21)

検出状況

調査区東部壇状遺構上で検出された(第65図)。

出土遺物

須恵器杯蓋(73)・杯身(74)・壺(75)が出土している(第74図)。

73は杯蓋Hbに分類され、天井部と口縁部の境目に浅く凹線が施される。74は杯身Gaに分類され、底部はヘラ切り後未調整である。口径は13.7cm。75は口縁部の小片であり、内面に自然釉が付着する。

時 期

出土土器から判断して、7世紀後半と考えられる。

P 9 (写真図版19)

検出状況

調査区東部壇状遺構上で検出された(第65図)。

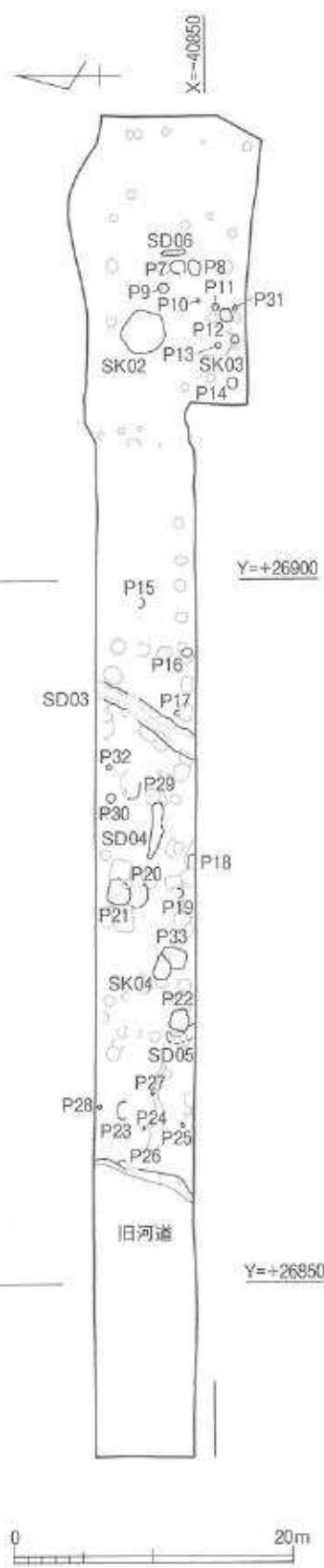
出土遺物

土師器甕(92)が出土している(第74図)。

92は体部内面をヘラ削り、外表面をハケ調整、口縁部外表面をハケ調整の後ナデ調整、口縁端部にナデ調整を施し、内面にはハケ調整を施す。口縁端部外表面には凹線が1条入る。

時 期

出土土器から判断して、7世紀代と考えられる。



第65図 古墳時代後期～奈良時代の遺構
柱穴・土坑・溝

P 10 (写真図版11・21)

- 検出状況 調査区東部壇状遺構上で検出された（第65図）。
- 出土遺物 土師器甕（93）が出土している（第74図）。93は体部内面をヘラ削り、外面をハケ調整、口縁部外面をハケ調整の後ナデ調整、口縁内面にナデ調整を施している。口縁端部外面には凹線が1条に入る。体部外面には部分的に煤が付着している。
- 時期 出土土器から判断して、8世紀前半と考えられる。

P 11 (写真図版27)

- 検出状況 調査区東部壇状遺構上で検出された（第65図）。
- 出土遺物 軒丸瓦（143）が出土している（第79図）。詳細については、後述する（本節（7））。
- 時期 出土土器から判断して、白鳳時代と考えられる。

P 12 (写真図版20)

- 検出状況 調査区東部壇状遺構上で検出された（第65図）。
- 出土遺物 須恵器杯身（81）が出土している（第74図）。81は杯身Hdに分類される。底部を回転ヘラ切り後未調整。口径は9.6cmである。
- 時期 出土土器から判断して、7世紀前半と考えられる。

P 13 (写真図版19)

- 検出状況 調査区東部壇状遺構上で検出された（第65図）。
- 出土遺物 土師器甕（91）が出土している（第74図）。91は体部内面をヘラ削り、外面をハケ調整、口縁部外面をナデ調整、口縁部内面に横方向のハケ調整を施している。体部外面に黒斑が確認できる。
- 時期 出土土器から判断して、古墳時代後期と考えられる。

P 14 (写真図版11・20)

- 検出状況 調査区東部壇状遺構上で検出された（第65図）。
- 出土遺物 須恵器の杯身（85）が出土している（第74図）。85は杯身Bcに分類される。高台は底部周縁近くに貼り付けられ、体部はナデによって成形、調整されている。
- 時期 出土土器から判断して、7世紀後半～8世紀前半と考えられる。

P 15 (写真図版19)

- 検出状況 調査区中央部で検出された（第65図）。
- 出土遺物 須恵器の甕（89）が出土している（第74図）。89は、体部外面を格子ふうのタタキを施した後、カキメを施し、体部内面に同心円紋の当て具痕がある。口縁部はナデ調整を行い、口縁端部に面を持つ。口径は16.6cm。
- 時期 出土土器から判断して、8世紀前半と考えられる。

P 16 (写真図版21)

- 検出状況 調査区中央部、SB06-P 4に重なって検出された（第65図）。
- 出土遺物 須恵器の杯蓋（79）が出土している（第74図）。79は杯蓋Abに分類され、口縁部に返りをもつ。天井部外面に自然釉が付着する。口径は9cmである。
- 時期 出土土器から判断して、7世紀後半と考えられる。

P 17 (写真図版20)

- 検出状況 調査区中央部で検出された（第65図）。
- 出土遺物 須恵器の器台（90）が出土している（第74図）。90はナデによって成形・調整を行い、外面に波状文を施す。
- 時期 出土土器から判断して、古墳時代後期と考えられる。

P 18

- 検出状況 調査区中央部南端の調査区壁沿いで検出された（第65図）。
- 出土遺物 須恵器壺（87）が出土している（第74図）。87はナデによって成形・調整を行う。
- 時期 出土土器から判断して、7世紀後半と考えられる。

P 19 (写真図版20)

- 検出状況 調査区中央部で検出された（第65図）。
- 出土遺物 須恵器杯身（86）が出土している（第74図）。86は杯Bに分類され、回転ナデによって成形・調整を行う。小片であるが、内面が摩耗しているため転用硯と考えられる。
- 時期 出土土器から判断して、7世紀後半～8世紀前半と考えられる。

P 20 (写真図版20)

- 検出状況 調査区中央部で検出された（第65図）。柱穴の北半分は、用水路によって破壊されている。
- 出土遺物 須恵器杯身（82）が出土している（第74図）。82は杯身Hに分類され、ナデによって成形・調整を行う。口径は11.5cmである。
- 時期 出土土器から判断して、7世紀前半と考えられる。

P 21 (写真図版21)

- 検出状況 調査区中央部で検出された（第65図）。柱穴の北半分は、用水路によって破壊されている。
- 出土遺物 須恵器杯蓋（78）が出土している（第74図）。78は杯蓋Hdに分類され、ナデによって成形・調整を行う。
- 時期 出土土器から判断して、7世紀前半と考えられる。

P 22 (写真図版20)

- 検出状況 調査区西部で検出された（第65図）。位置としてはSB10の内部にあたる。
- 出土遺物 須恵器皿（88）が出土している（第74図）。88は底部をヘラ切り後未調整、口縁端部を

丸く仕上げる。口径は12.9cmである。

時 期 出土土器から判断して、9世紀～10世紀と考えられる。

P23 (写真図版20)

検出状況 調査区西部で検出された（第65図）。柱穴の南半分を用水路によって破壊されている。

出土遺物 須恵器杯身（83）が出土している（第74図）。83は杯Gaに分類され、底部をヘラ切り後、ナデ調整を施す。口径は11.8cm。

時 期 出土土器から判断して、7世紀後半と考えられる。

P24 (写真図版21)

検出状況 調査区西部で検出された（第65図）。

出土遺物 須恵器杯蓋（80）が出土している（第74図）。80は端部が直角に折れ曲がり、強いナデによって端部外面が少し窪んでいる。口径は12cmである。

時 期 出土土器から判断して、8世紀前半と考えられる。

P25 (写真図版21)

検出状況 調査区中央部で検出された（第65図）。柱穴の北半分を用水路によって破壊されている。

出土遺物 土師器杯（84）が出土している（第74図）。84は体部をナデによって成形・調整を行う。

時 期 出土土器から判断して、8世紀前半と考えられる。

P26 (写真図版20)

検出状況 調査区西部の旧河道の肩で検出された（第65図）。柱穴の半分を旧河道によって破壊されている。

出土遺物 須恵器杯身（71・72）が出土している（第74図）。

71は立ち上がりの内傾は浅く、端部に段をつくる。内面にはごくわずかに赤色顔料が付着している。口径は12.4cm。72は杯身Baに分類され、高台断面が三角形を呈する。底部内面が磨耗しているため転用硯と考えられる。

時 期 出土土器から判断して、8世紀前半と考えられる。

P27 (写真図版21)

検出状況 調査区西部で検出された（第65図）。

出土遺物 土錐（94）が出土している（第74図）。94はてづくりで成形され、中心に直径4mmの孔があけられている。重さは4.8グラム。

時 期 出土土器から判断して、古墳時代後期～奈良時代と考えられる。

P28 (写真図版21)

検出状況 調査区西部で検出された（第65図）。

出土遺物 土錐（95）が出土している（第74図）。95はてづくりで成形され、中心に直径3.2mmの孔

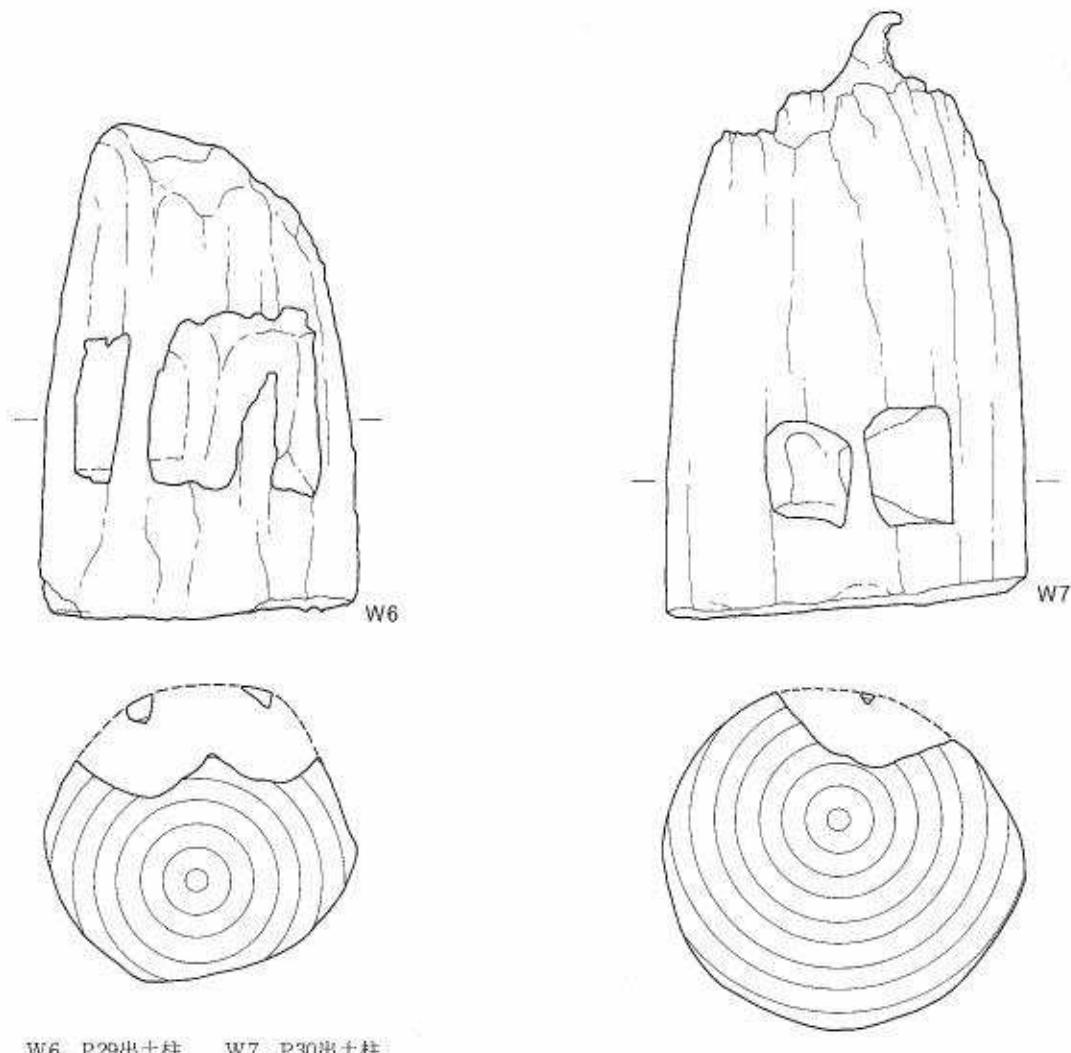
があげられている。全体の1/3が遺存している。重さは1.4グラム。

時 期 出土土器から判断して、古墳時代後期～奈良時代と考えられる。

P29 (写真図版11・41)

検出状況 調査区中央部で検出した（第65図）。調査前まで機能していた水路の底で確認した柱穴である。このため、柱穴掘り方の大半は水路により削平され、その平面形・規模を明らかにすることはできなかった。

柱 W6（第66図）が遺存していた。芯持ち材を利用したものである。表面には縦方向の加工痕がわずかに認められ、断面形が多角形傾向にある。下端部から18.50cmの位置に窓穴が穿たれており、その規模は22cm×12cmの方形をなす。他の柱に認められる窓穴が2箇所であるのとは異なり、3箇所に穿たれている。下端部は平坦に仕上げられているが、腐食が顕著で、加工痕等は観察できない。



第66図 柱 (3)

全長65.50cm残存し、下端部から25cmの位置での断面形は39cm×41cmと、整円形に近い。最大部での規模は42cmを測る。スギ。

P 30 (写真図版11・42)

- 検出状況　　調査区中央部で検出した（第65図）。
- 柱　　W7（第66図）が遺存していた。芯持ち材を利用したものである。表面には縱方向の加工痕がわずかに認められ、断面形が多角形傾向にある。下端部から11.50cmの位置に窓穴が穿たれており、その規模は15cm×11cmの方形をなす。下端部は平坦に仕上げられており、部分的に加工痕が認められる。
- 全長79cm残存し、下端部から18cmの位置での断面形は45.50cm×47.50cmと、整円形に近い。ヒノキ。

P 31

- 検出状況　　拡張部南西部で検出した（第65図）。
- 出土遺物　　平瓦（165）が出土している（第89図）。詳細については、後述する（本節（7））。
- 時期　　出土土器から判断して、7世紀後半と考えられる。

P 32

- 検出状況　　調査区中央部で検出した（第65図）。
- 出土遺物　　平瓦（155）が出土している（第87図）。詳細については、後述する（本節（7））。
- 時期　　出土土器から判断して、7世紀後半と考えられる。

P 33

- 検出状況　　調査区中央部で検出した（第65図）。
- 出土遺物　　丸瓦（150）が出土している（第84図）。詳細については、後述する（本節（7））。
- 時期　　出土土器から判断して、7世紀後半と考えられる。



第67図　柱穴の断割り作業

(4) 土坑

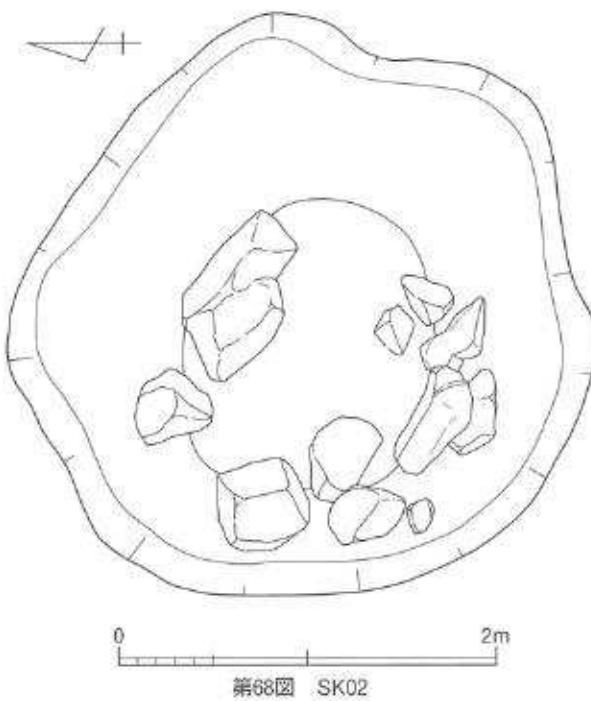
3基 (SK02～SK04) 検出されている。

SK02 (写真図版12・22)

検出状況 調査区東部壇状遺構上で検出された (第65図)。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模 平面形は円形に近く、直径は3mを測る。土坑中央部はやや窪み、20cm～90cmの大きさの砾が環状に入っている。

出土遺物 須恵器杯蓋 (96・97・98) が出土している (第75図)。96は端部がやや内側に屈曲する。天井部に重ね焼きの痕跡がある。口径は15cmを測る。97は内面に墨の痕跡があり、硯として転用されている。口径は15.8cmを測る。98は平坦な天井部で、回転ヘラ削りの調整を施す。口径は17cmを測る。



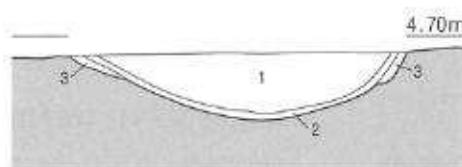
第68図 SK02

時期 出土遺物から判断して、7世紀後半～8世紀前半と考えられる。

SK03 (写真図版12・22)

検出状況 調査区東部壇状遺構上で検出された (第65図)。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模 平面形は円形に近く、直径67cm、深さ最大13cmを測る。土坑には厚さ1～2cmの炭層が堆積しており、土坑の肩は被熱し赤変している (第69図)。



出土遺物 須恵器杯身 (103) が出土している (第75図)。103は杯身日に分類される杯である。立ち上がりが短く、体部は直線的に開く。口径は13cmを測る。

1. にぶい黄褐色細砂シルト
2. 炭層
3. 焼土

時期 出土遺物から判断して、7世紀前半と考えられる。



第69図 SK03

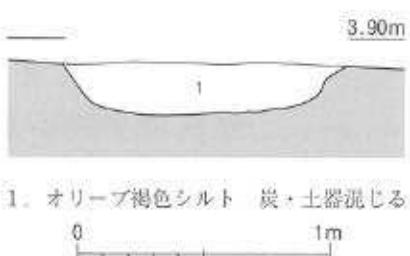
SK04 (写真図版22)

検出状況 調査区中央部で検出された (第65図)。他の遺構と切り合い関係はない。

形状・規模 東西1.25m、南北75cmの方形に近い土坑から、幅30cmほどの溝がさらに70cm東へのびて

いる。深さは方形部で18cm前後、溝部分で10cm前後である（第70図）。

- 出土遺物** 須恵器の高杯（101・102）が出土している（第75図）。101・102は高杯の脚部である。脚部端部は上下に伸びる。底径は101が11.4cm、102が12.8cm。
- 時期** 出土遺物から判断して、7世紀前半と考えられる。



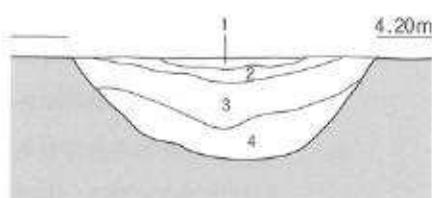
第70図 SK04

(5) 溝

4条（SD03～SD06）検出されている（第65図）。いずれも平坦部で検出されている。拡張部では溝状遺構は検出されているが、確実に当該期に位置付けられるものは認められなかった。

SD03（写真図版12・21・23）

- 検出状況** 調査区中央部で検出された（第65図）。SB07の東側、SB06と切り合い関係にある。ごくわずかに弧状をなす溝で、両端は調査区外へ伸びる。



1. オリーブ褐色シルト
2. 橙色シルト
3. にぶい黄褐色シルト 炭混じる
4. 嚗褐色シルト 土器・炭混じる

第71図 SD03

- 形状・規模** 検出した長さは7.7m、幅は1.2m、深さは40cmを測る。

- 埋没状況** 上からオリーブ褐色シルト・橙色シルト・にぶい黄褐色シルト・暗褐色シルトの4層からなる（第71図）。埋土の特徴から、最下層は人為的に埋められたものと考えられ、他は自然堆積と考えられる。

- 出土遺物** 須恵器の杯身（106・107・108・109）と高杯（110）が出土している（第75図）。

- 杯** 106は杯身Hbに、107は杯身Hd、108・109は杯身Hに分類される。106・107は底部から受部へ湾曲して開き、108・109は直線的に開く。口径は、106は12.2cm、107は10.9cm、108は13.1cm、109は11.8cmを測る。

- 高杯** 110は高杯の杯部の一部である。列点文と凹線による装飾が施されている。

- 時期** 出土遺物から判断して、7世紀前半と考えられる。

SD04（写真図版13・23）

- 検出状況** 調査区中央部で検出した（第65図）。SB01・SB07と重なる位置にあり、SB07の柱穴を切る。東西に直線的にのびる。

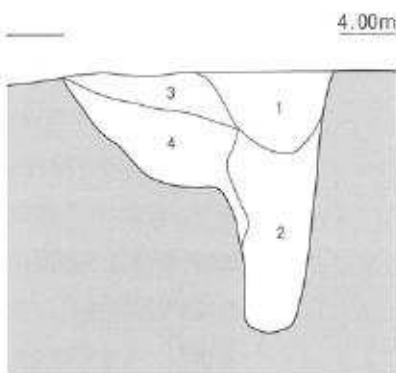
- 形状・規模** 検出した長さは4m、幅は70cm、深さは最大70cmを測る（第72図）。土坑の北部は幅16cmで、一段深く落ちる。一段深い部分の北壁の立ち上がりは垂直に近く、土坑底部は水平である。土坑の形状から、板状のものが土坑に建てられていた可能性が考えられる。

- 埋没状況** 埋土が北部と南部で区別され、北部は上から暗黄褐色砂質シルト・暗黒褐色シルトとなり、南部は黄褐色シルト質砂、暗黄褐色シルトとなる。どちらも2層目の埋土は人為的に

埋められたと考えられる。

出土遺物 須恵器の杯身（112・113）が出土している（第75図）。112は杯身Haに分類される。口縁部の立ち上がりはやや内傾し、口縁端部内面に沈線を持つ。口径は13cm。113は杯身Hbに分類され、底部の調整に回転ヘラ削りを行う。受け部の内面下端はナデにより緩やかに屈曲する。口径は13cm。

時期 出土遺物から判断して、7世紀前半と考えられる。



SD05 (写真図版23)

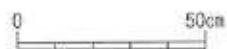
検出状況 調査区西部で検出した（第65図）。P113・P115・P116に切られる。

形状・規模 検出した長さは50cm、最大幅は95cm、深さは6cmを測る。北西方向に伸びる。P115をすぎた時点で幅を狭め、東方向に屈曲し収束する。

出土遺物 平瓶（111）が出土している（第75図）。111は小型の平瓶である。残存している体部上部には直径約3mmの穿孔がある。いわゆる風船技法にともなう空気抜きの孔と考えられる。

時期 出土遺物から判断して、8世紀と考えられる。

1. 暗黄褐色砂質シルト
2. 暗黒褐色シルト 埋土
3. 黄褐色シルト質砂
4. 暗黄褐色シルト 埋土



第72図 SD04

SD06 (写真図版23)

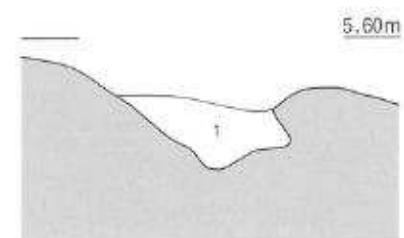
検出状況 調査区東部壇上遺構上で検出した（第65図）。SB03とSB04の間に位置する。

形状・規模 検出した長さは1.8m、最大幅は35cm、深さは9cmを測る。底部は凹凸があり、西壁は部分的にえぐられている。

埋没状況 明褐色極細砂1層からなる。埋土から判断して自然堆積と考えられる。

出土遺物 須恵器の杯蓋（114）が出土している（第75図）。

時期 出土遺物から判断して、8世紀前半と考えられる。



1. 明褐色極細砂



第73図 SD06

(6) 旧河道 (写真図版21・24)

ここでは出土遺物を中心に報告する。

出土遺物 須恵器の杯身（115・116）・杯蓋（117・118）と土錘（119）が出土している（第75図）。

須恵器 115と116は杯Aに分類される杯である。115は底部を回転ヘラ切後未調整、116はヘラ切後ナデを行う。杯蓋の117は環状、118は宝珠形のつまみを持つ。

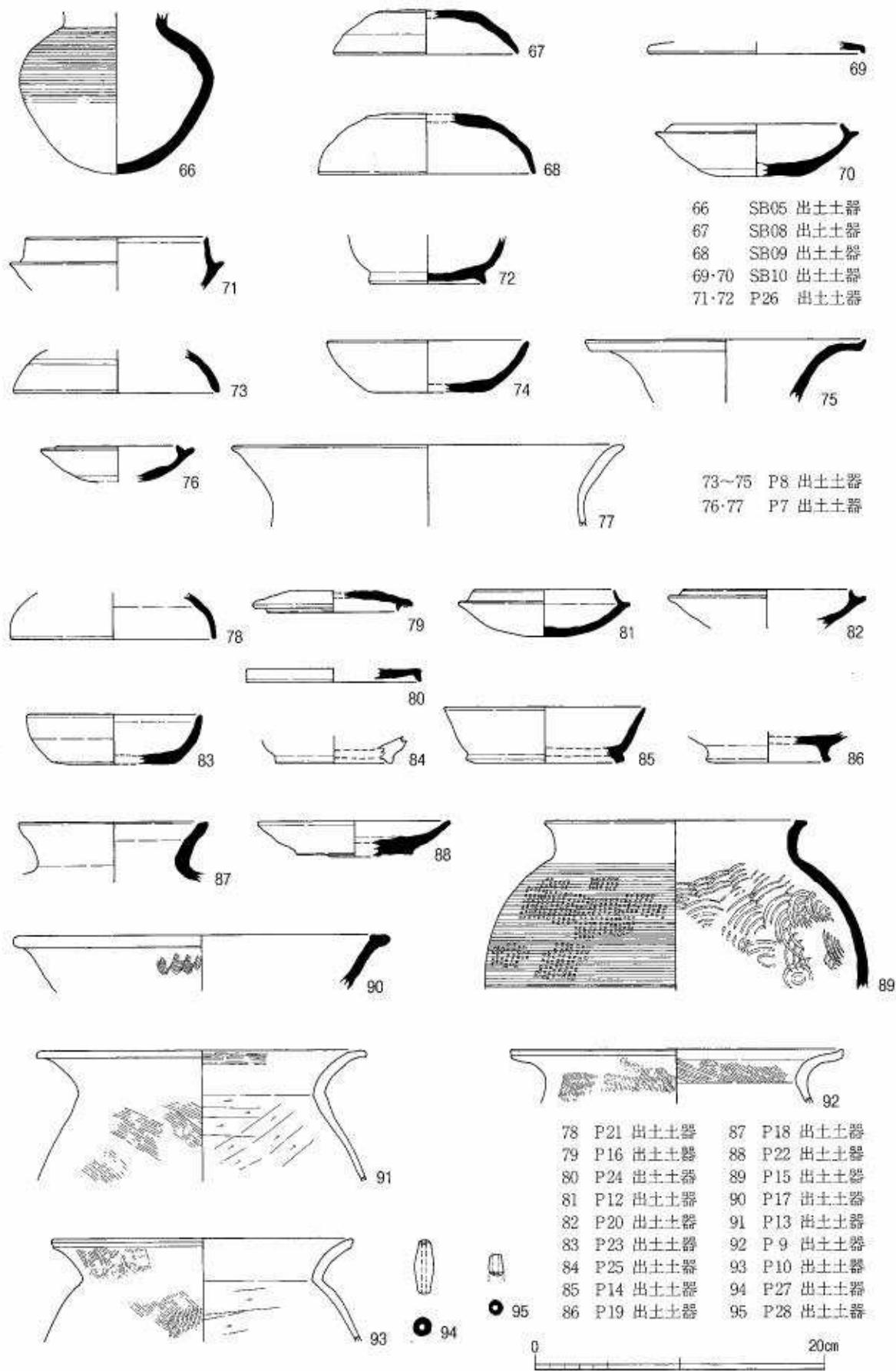
土錘 119は須恵質の土錘である。直径3.4cm、中心に最大径1.3cmの孔が通る。重さは45.4グラム。

時期 出土遺物から判断して、7世紀後半と考えられる。

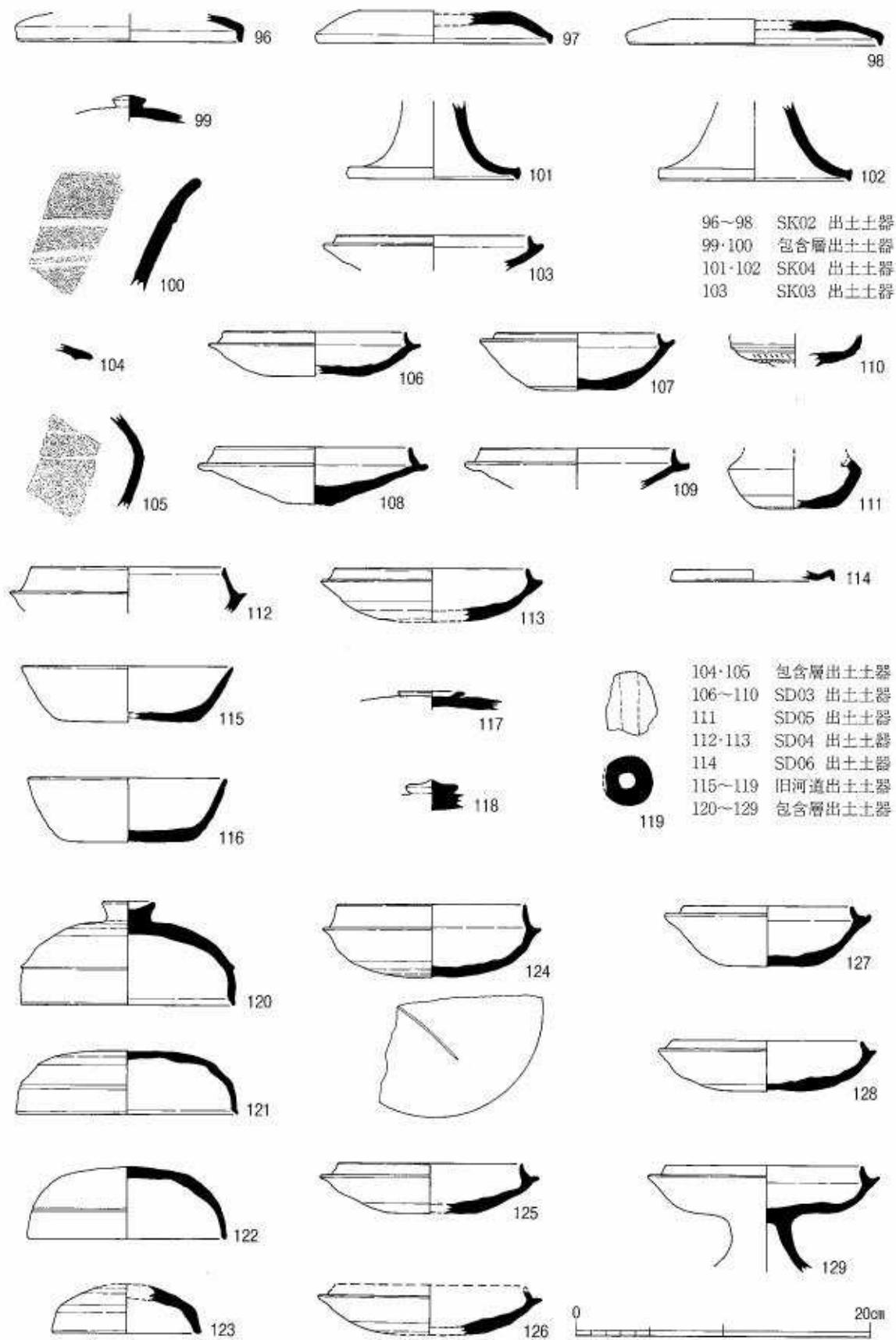
(7) 包含層出土土器（写真図版21・22・24・25）

- 出土遺物** 包含層から出土した須恵器は、杯蓋・杯身・高杯・壺・器台などがある。
- 杯 蓋** 99は宝珠形のつまみを持つ。104は、口縁端部に小さなかえりを持つ。120は天井部が膨らみ、肩部に段を持つ。肩部から口縁部へは垂直に伸び、口縁端部には段がある。121は頂部に回転ヘラ削りを行い、肩部に凹線を施す。口縁部はわずかに外に傾き、内面に段を持つ。122は天井部をヘラ切り後、ナデ調整を施し、肩部に沈線を持つ。口径は13.2cm。123天井部にヘラ削りを施し、口縁端部は丸く仕上げる。口径は9.9cm。124は口縁部の立ち上がりは内傾し、口縁端部に段を持つ。外面に重ね焼きの痕跡がある。底部はヘラ削りを施し、ヘラ記号を持つ。口径は12.6cm。
- 133～136は杯蓋Aに分類される。133～135は環状のつまみを持ち、133は口縁部に身受けのかえりがある。山陰地方の影響が見られる杯蓋である。136は口縁端部が小さく下方へ屈曲する。
- 杯 身** 125～128は杯身Hに分類される。口径は11.3～12.9cm、器高は3.1～4.1cm。いずれも受け部の内面下端はナデにより緩やかに屈曲する。
- 137と138は杯身Bに分類される。いずれも底部は回転ヘラ削りを行い、全体を回転ナデで調整を行う。139は杯の口縁端部外面に強いナデを施す。140は器高が高く、口縁部が内湾ぎみに立ち上がる。
- 高 杯** 129は杯身Hbに脚をつけて高杯としたものである。130～131は高杯脚部である。130は2方向の透かしを持つ。透かしの形状は不明である。
- 壺** 105は体部の破片で、列点文を施す。141は壺Kに分類される。肩の部分に2条の沈線が施される。
- 器 台** 132は長方形の透かしを2段持つ。底部端部は外側に拡張し、接地する部分に面を持つ。
- 甕** 100は、口縁部の破片で、波状文を施す。

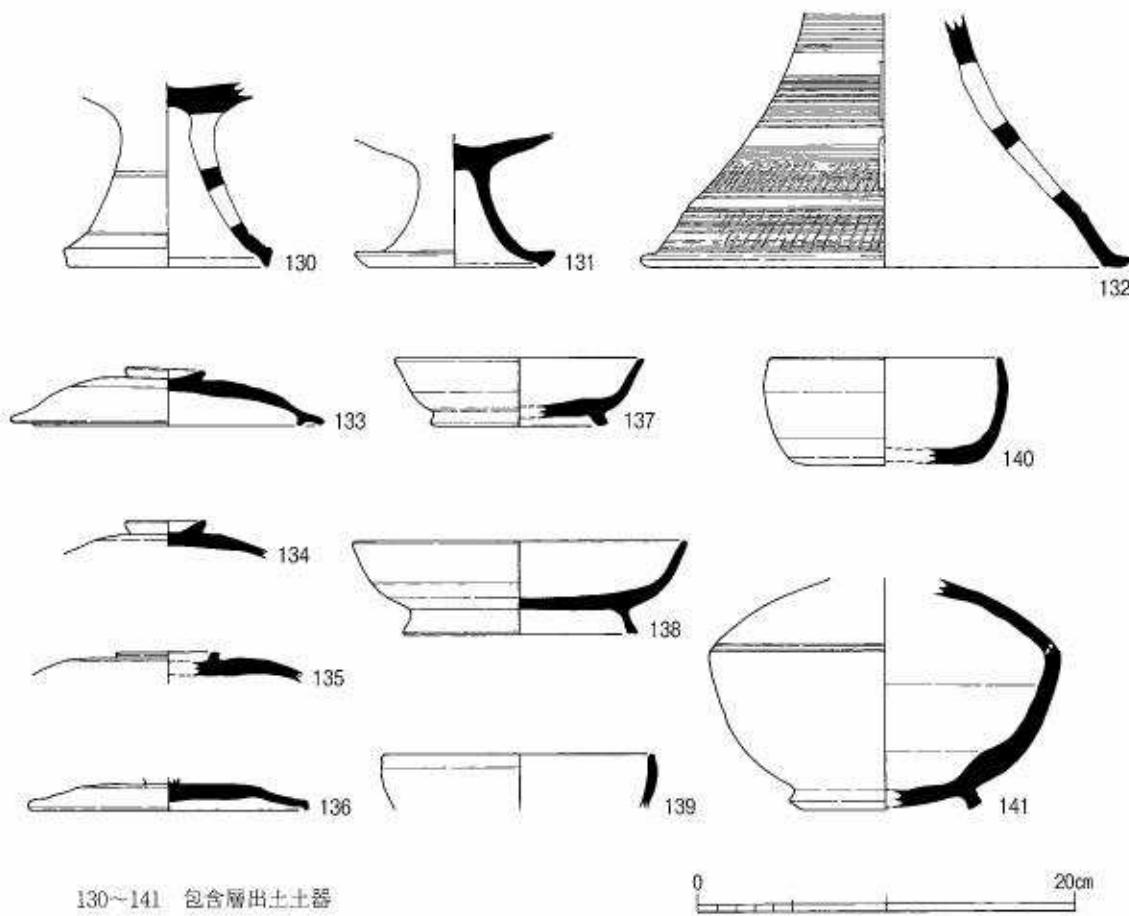
第2節 3. 古墳時代後期～奈良時代の遺構と遺物



第74図 古墳時代後期～奈良時代の土器 (1)



第75図 古墳時代後期～奈良時代の土器(2)



第76図 古墳時代後期～奈良時代の土器 (3)

第16表 古墳時代後期～奈良時代土器観察表 (1)

No.	種別	器種	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存状況	色調	焼成	挿図No.	図版No.
66	須恵器	壺	SB05		11.1		体部～底部完存	灰～暗灰	やや良	74	19
67	須恵器	杯蓋	SB08	12.5	3.0		口縁部1/9	灰	やや良	74	19
68	須恵器	杯蓋	SB09	14.8	4.1		口縁部1/7	灰白	やや不良	74	19
69	須恵器	杯蓋	SB10	14.7	0.8		口縁部1/12	灰白	やや良	74	19
70	須恵器	杯身	SB10	11.6	3.6		口縁部若干	灰白～灰	やや良	74	19
71	須恵器	杯身	P 26	12.4	3.6		口縁部1/6	灰	やや良	74	20
72	須恵器	杯身	P 26		3.4	8.1	底部ほぼ完存	灰	やや良	74	20
73	須恵器	杯蓋	P 8	14.0	3.0		口縁部1/6	灰白	やや不良	74	21
74	須恵器	杯身	P 8	13.7	3.6		口縁部1/12 ～底部1/2	灰白	良	74	20
75	須恵器	壺	P 8	19.2	4.3		口縁部1/7	灰	良	74	20
76	須恵器	杯身	P 7	8.1	2.5		口縁部1/7	灰白	やや良	74	20
77	土師器	壺	P 7	26.7	5.6		口縁部1/9	橙		74	
78	須恵器	杯蓋	P 21	13.9	3.2		口縁部1/6	灰	良好	74	21
79	須恵器	杯蓋	P 16	12.0	1.5		口縁部1/18	灰白 ～オリーブ黒	やや良	74	21

第17表 古墳時代後期～奈良時代土器観察表(2)

No.	種別	器種	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存状況	色調	焼成	挿図No.	図版No.
80	須恵器	杯蓋	P24		1.9	9.9	底部1/12	灰	やや良	74	21
81	須恵器	杯身	P12	9.6	3.2		口縁部1/13	灰	良	74	20
82	須恵器	杯身	P20	11.5	2.7		口縁部1/12	灰	やや良	74	20
83	須恵器	杯身	P23	11.8	3.4		口縁部1/9 ・底部1/4	灰白	やや良好	74	20
84	土師器	杯身	P25		1.9	8.0	底部1/4弱	橙～浅黄橙		74	21
85	須恵器	杯身	P14	13.8	3.9	11.0	口縁部1/12 ～底部1/5	灰白	やや良	74	20
86	須恵器	杯身	P19		2.1	7.8	底部1/7	灰	やや良	74	20
87	須恵器	壺	P18	13.0	4.1		口縁部1/6	灰	良好	74	
88	須恵器	皿	P22	12.9	2.4	8.0	口縁部若干 ～底部1/3	灰	良	74	20
89	須恵器	壺	P15	16.6	11.1		口縁部1/3弱	灰白～灰	やや不良	74	19
90	須恵器	器台	P17	25.2	3.8	26.0	底部1/18	灰	やや良	74	20
91	土師器	壺	P13	22.0	9.1		口縁部1/3強	にぶい橙	やや良	74	19
92	土師器	壺	P9	22.8	3.7		口縁部1/6	にぶい褐	やや良	74	19
93	土師器	壺	P10	20.5	7.1		口縁部1/2弱	にぶい赤褐	やや良	74	21
94	土師器	土鍤	P27	長3.7			完存	にぶい橙	やや良	74	21
95	土師器	土鍤	P28	長1.5			1/3	橙	やや良	74	21
96	須恵器	杯蓋	SK02	15.0	1.9		口縁部1/6	灰	やや良	75	22
97	須恵器	杯蓋	SK02	15.8	2.1		口縁部1/12	灰白	やや不良	75	22
98	須恵器	杯蓋	SK02	17.0	1.7		口縁部1/7	灰	やや良	75	22
99	須恵器	杯蓋	包含層		1.8		つまみ部完存	灰白～灰	やや良	75	24
100	須恵器	壺	包含層		7.2		口縁部一部	灰	良	75	22
101	須恵器	高杯	SK04		5.2	11.4	底部1/9	灰白～灰	やや不良	75	22
102	須恵器	高杯	SK04		5.3	12.8	底部1/7	灰	やや不良	75	22
103	須恵器	杯身	SK03	13.0	2.4		口縁部1/12	灰	やや良	75	22
104	須恵器	杯蓋	包含層		1.0		口縁部一部	灰白～灰	やや良	75	24
105	須恵器	壺	包含層		6.4		体部一部	灰白 ～オリーブ灰	やや良	75	22
106	須恵器	杯身	SD03	12.2	3.0		口縁部1/12	灰	やや良	75	23
107	須恵器	杯身	SD03	10.9	3.8		口縁部1/2弱	灰白～灰	やや良	75	21
108	須恵器	杯身	SD03	13.1	3.9		口縁部一部	灰	やや不良	75	23
109	須恵器	杯身	SD03	13.0	2.7		口縁部若干	灰白	やや不良	75	23
110	須恵器	高杯	SD03		2.2		体部一部	灰～暗灰	やや良	75	23

第18表 古墳時代後期～奈良時代土器観察表(3)

No.	種別	器種	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存状況	色調	焼成	挿図No.	図版No.
111	須恵器	平瓶	SD05		3.5	5.6	底部1/3	灰～灰白	やや良	75	23
112	須恵器	杯身	SD04	13.8	3.1		口縁部1/7	灰	やや良	75	23
113	須恵器	杯身	SD04	13.0	3.6		口縁部若干	灰	やや良	75	23
114	須恵器	杯蓋	SD06	11.0	0.9	9.4	底部1/18	灰～暗灰	やや良	75	23
115	須恵器	杯身	旧河道	14.1	3.7		口縁部1/9	灰白	やや不良	75	24
116	須恵器	杯身	旧河道	13.3	4.3		口縁部1/7	灰白	やや良	75	21
117	須恵器	杯蓋	旧河道		1.2		つまみ部1/2強	灰	やや良	75	24
118	須恵器	杯蓋	旧河道		2.0		つまみ部2/3	灰白	やや良	75	24
119	須恵器	土錘	旧河道	長4.35			1/2	灰白～灰	やや良	75	24
120	須恵器	杯蓋	包含層	14.3	7.0		口縁部1/6 ～天井部	灰	やや不良	75	21
121	須恵器	杯蓋	包含層	15.0	4.3		口縁部1/12	灰～灰白	やや良	75	22
122	須恵器	杯蓋	包含層	13.2	4.8		口縁部1/3強	灰白	不良	75	22
123	須恵器	杯蓋	包含層	9.9	3.3		口縁部1/3弱	灰白～灰	やや不良	75	25
124	須恵器	杯身	包含層	12.6	5.0		口縁部1/7	灰白～灰	やや不良	75	25
125	須恵器	杯身	包含層	12.5	3.4		口縁部若干	灰	やや良	75	24
126	須恵器	杯身	包含層		3.1		受部～底部1/7	灰	やや良	75	24
127	須恵器	杯身	包含層	11.3	4.1		口縁部1/7	灰白～灰	やや良	75	25
128	須恵器	杯身	包含層	12.9	3.4		口縁部1/2弱	灰	やや良	75	25
129	須恵器	高杯	包含層	13.3	7.2		口縁部1/7	灰	やや良	75	25
130	須恵器	高杯	包含層		9.7	10.4	底部1/2	灰白～灰	やや不良	76	25
131	須恵器	高杯	包含層		7.0	9.4	底部1/5	灰白	不良	76	25
132	須恵器	器台	包含層		13.4	25.9	底部1/6	灰	良	76	25
133	須恵器	杯蓋	包含層	14.0	3.0		口縁部1/9 ～天井部	灰	やや不良	76	26
134	須恵器	杯蓋	包含層		2.0		つまみ部3/4 ～天井部一部	灰～灰白	やや不良	76	24
135	須恵器	杯蓋	包含層		1.6		つまみ部1/4強 ～天井部1/9	灰	良	76	24
136	須恵器	杯蓋	包含層	14.7	1.7		口縁部1/12 ～天井部	灰	やや不良	76	24
137	須恵器	杯身	包含層	13.1	3.6	9.4	口縁部1/7 ～底部1/3	灰	良	76	26
138	須恵器	杯身	包含層	17.5	5.0	12.4	口縁部1/12 ～底部1/12	灰白	やや不良	76	22
139	須恵器	杯身	包含層		2.9		口縁部1/7	灰	やや良	76	22
140	須恵器	杯身	包含層	12.0	5.7		口縁部1/7	灰白	やや不良	76	22
141	須恵器	長頸壺	包含層	-	12.2	10.2	底部1/2弱	灰 ～オリーブ灰	やや不良	76	26

(8) 瓦類 (巻首図版7・写真図版27~38)

概要 ここでは、一部遺構内からも出土しているが、ほとんどが包含層からの出土である瓦類について報告する。出土した瓦類には、軒丸瓦・平瓦・丸瓦・鶴尾が認められる。

出土状況 先述したように、出土量は少ない。その出土地点も、ばらつきが目立ち、調査区全域から出土し、特定場所からの集中的な出土傾向は認められない。主な瓦類の出土位置は、第78図のとおりである。

遺構内から出土した瓦類の多くは、遺構に直接伴うものではなく、後世の廃棄に伴い混入したものと考えられる。しかし、瓦が存在していた地点の平面的傾向は理解できるものと考えられる。また、遺構には伴わないが、平面的に比較的多く出土した地点を表したのが、第78図の網掛け部分である。

これによると、瓦類は平坦部中央部と平坦部から拡張部にかけての地区から多く出土していることが理解できる。鶴尾・軒丸瓦の出土地点も、これらと平面的に一致する。特に、後者から出土した瓦類については、包含層及びその上層の整地層(第32図・第33図)中からも少なからず出土している。このことから、この地点より地形的に上側(東側)にある地点で使用されていたものが、廃棄後その下側(西側)へ集中した結果とも考えられる。

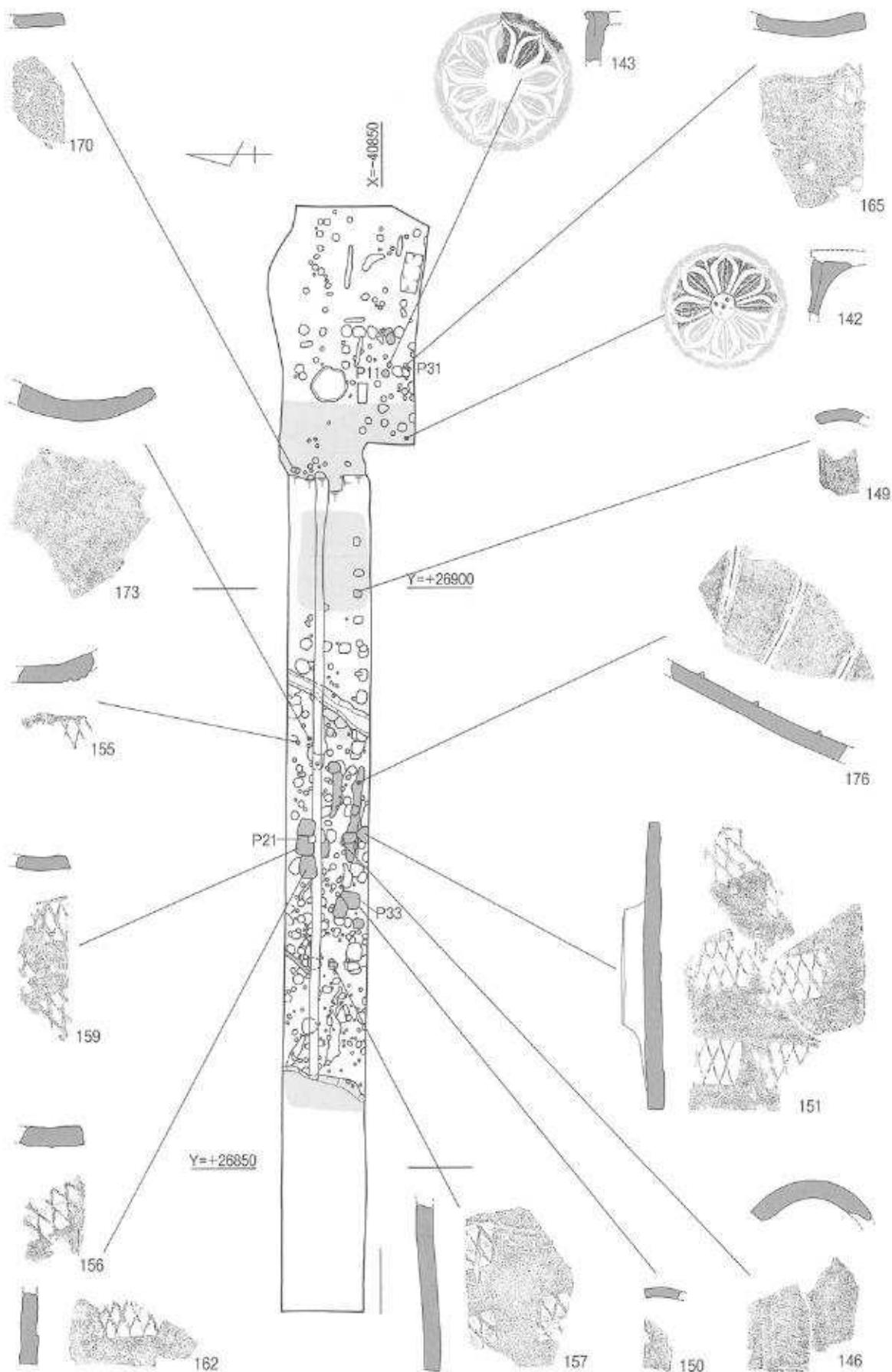
この他、旧河道の肩部付近からも多く出土しているが、これらについても、後世の整地に伴う結果と考えられる。

以上から、瓦類が比較的多く出土した地点は、建物跡と平面的にはほぼ一致する(第78図)。よって、本遺跡出土の瓦類は、これらの建物に使用されていたものと考えられる。ただし、全体的な出土量がわずかであり、これらの建物が掘立柱建物であることから、部分的に葺かれていたものと考えられる。

なお、平瓦・丸瓦とともに完存するものではなく、いずれも小片で出土している。これは、旧表土から遺構面までが浅いため、後世の開墾に起因するものと考えられる。



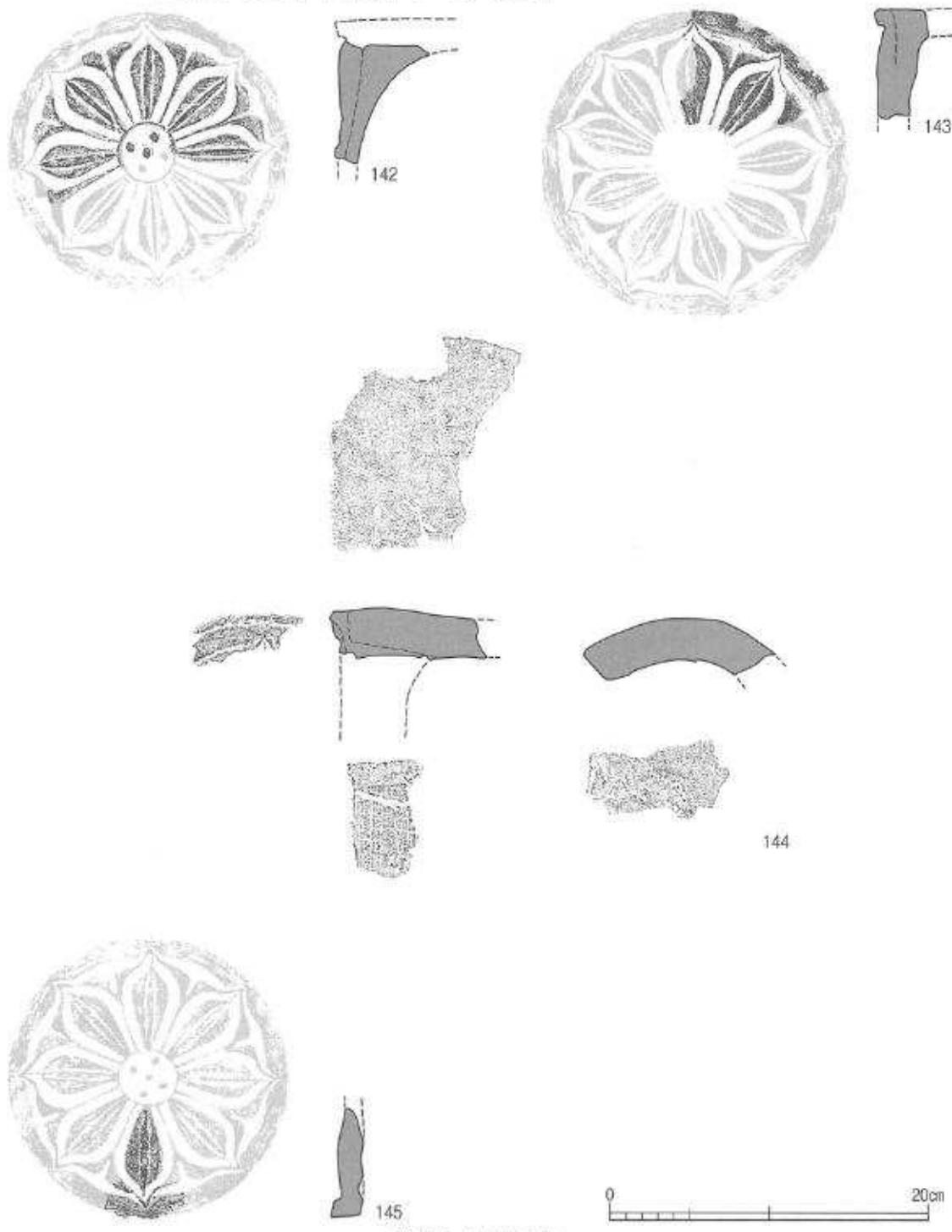
第77図 出土瓦類



第78図 瓦類出土位置

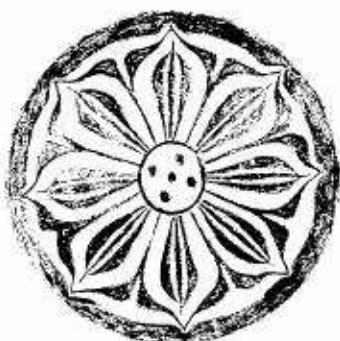
I. 軒 丸 瓦 (巻首図版8・写真図版27・28)

概 要 4点(142~145)出土している(第79図)。瓦当面が完存するものはないが、4点とも基本的には同タイプに分類できるものである。ただし、残存範囲が限られているため、同范とは断定しがたい。特に、複数の花弁が残存する142と143とでは、花弁の大きさが異なり、これをもとに全体を復元すると142は8弁に、143は9弁に復元される。また、143・145と144とでは、外縁の特徴に差が認められる。以上から、4点出土した軒丸瓦を3形式(01形式~03形式)に分類することができる。

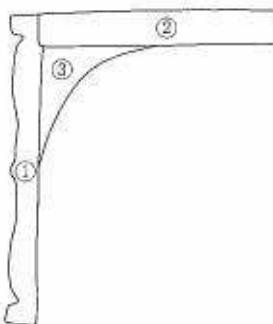


第79図 出土軒丸瓦

- 01 形式** 有軸素弁 8葉蓮華文。142と145の2点である。ただし、花弁の大きさの違いから、同範ではないものと考えられる。これに143の外縁を合成すると、第80図のように復元でき、瓦当径は17.6cmとなる。また、外縁を除いた内区径は15.4cmである。
- 中 房** 瓦当面に対して突出し、中房厚は1.2cmを測り、瓦当面との比高は4mmである。中房径は3.8cmで、瓦当径の21.6%にあたる。中房内には、1+4の蓮子が配されていたものと復元される。蓮子の径は7mmを測り、周間に界線がめぐらされ、界線を含めた径は8mmである。中房面との比高は3mmである。
- 花 弁** 中房同様に突出し、肉彫状をなす。瓦当面との比高は4mmである。その規模は、長さ4.75cm、最大幅2.30cm、中房付近の幅5cmを測る。また、花弁中央には突線が直線的にのび、中房まで達している。最大幅5mmを測る。残存する長さは5.25～5.60cmである。
- 間 弁** 楔形をなし、頭部中央は大きく切れ込み、双葉状をなす。また、その先端は中房まで達している。頭部での幅4cm以上、長さ5cmを測る。間弁も花弁同突出し、花弁間は溝状をなし、花弁突線先端を頭として、花弁と相似形をなす。
- 範** 瓦当面で木目をわずかに観察することができた。比較的良好に観察でき、杣目材に範が彫りこまれたことが復元できる。また、花弁・間弁等の輪郭が比較的シャープであることから、範が新しい段階での使用によるものと考えられる。
- 焼 成** 142は須恵質で、焼成は良好である。胎土中には3mm以下の砂粒が少なからず含まれている。145はやや不良である。
- 丸瓦との接合** 142・145とともに、丸瓦自体は残存しない。しかし、剥離痕から、瓦当と丸瓦の接合方法を復元することができる（第81図）。これによると、丸瓦端部（②）に瓦当（①）を押し当て接合している。そして、丸瓦の凹面側に粘土を貼り付け補強している（③）。この貼付けは粗いユビナデにより行われ、その痕跡を顕著に観察することができる。
- 丸瓦剥離面の延長が瓦当裏面まで5mmほど及んでいることから、丸瓦がある程度乾燥した段階でこの接合が行われたものと考えられる。また、丸瓦の凸面側の粘土補強部剥離面には布目を観察することができる（写真図版27）。この布目は、144に認められる布目とは目の明瞭さが異なる。これは、丸瓦凹面の布目が補強した粘土側に転写されたことによるものと考えられ、先の丸瓦乾燥後の接合を裏付けるものと考えられる。
- 02 形式** 143が該当する。143から、有軸素弁 9葉蓮華文と復元される（第82図）。花弁と外縁の一部が残存し、中房を欠く。瓦当径は9.6cmと復元される。
- 花 弁** 形態的特徴は01形式と同じである。ただし、花弁の規模が若干異なり、長さ5.5cm、最大幅2.4cm、中房付近の幅5.5mmを測る。また、花弁中央の突線の突出が01形式より弱い。これは、後述する範の崩れに起因するものと考えられる。



第80図 01形式復元図



第81図 01形式接合模式図

間弁 基本的特徴は01形式と同じである。間弁端部の端が隣の間弁端と、花弁中央縦線延長上で接合している。その接合部は、外区に達し、山形をなす。

ただし、01形式とは規模・形態が若干異なり、当形式のほうが、頭部の幅が広くなっている。また、01形式より彫り込みが緩やかになっている。さらに、花弁と間弁の間隔が、01形式よりわずかに狭い傾向が認められる。

外区 素文の斜線をなし、瓦當中央部側に傾斜している。

瓦當面との比高4mmを測り、その幅は1.1cm~1.2cm

である。また、頸部の幅は1.50cm~1.85cmである。なお、外区から頸部にかけてはナデ調整により仕上げられており、範端痕は認められない。

範 瓦當面で木目をわずかに観察することができた。なお、01形式と比較して、花弁・間弁の輪郭にシャープさを欠く。よって、01形式より使い込まれた範が使用されたものと考えられる。

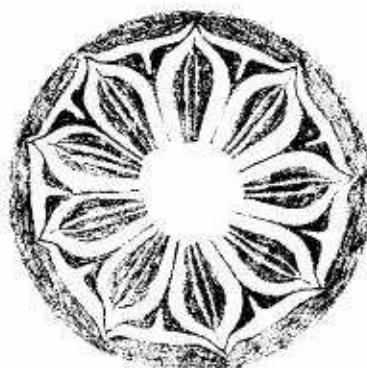
焼成 不良である。また、胎土中には3mm以下の砂粒が少なからず含まれている。

03形式 144が該当する。わずかに残存するのみであるが、外縁幅が02形式と異なり、外縁幅が1.80cmと02形式より広くなっている。01形式との関係は明確にできない。

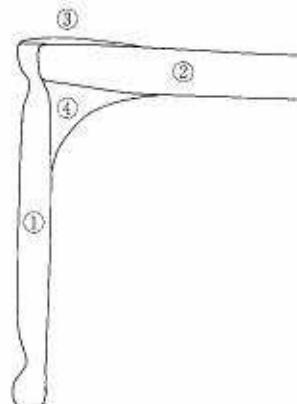
焼成 不十分である。また、胎土中には3mm以下の砂粒が少なからず含まれている。

丸瓦との接合 01形式同様、瓦當と丸瓦を別に製作後、接合している(第83図)。つまり、丸瓦(②)の端部に瓦當(①)を接合し、丸瓦の凸面側(③)と凹面側(④)に粘土を貼り付け補強している。丸瓦の凹面側の粘土補強部剥離面には布目を観察することができる(写真図版28)。

丸瓦 凸面はナデ調整により仕上げられている。



第82図 02型式復元図

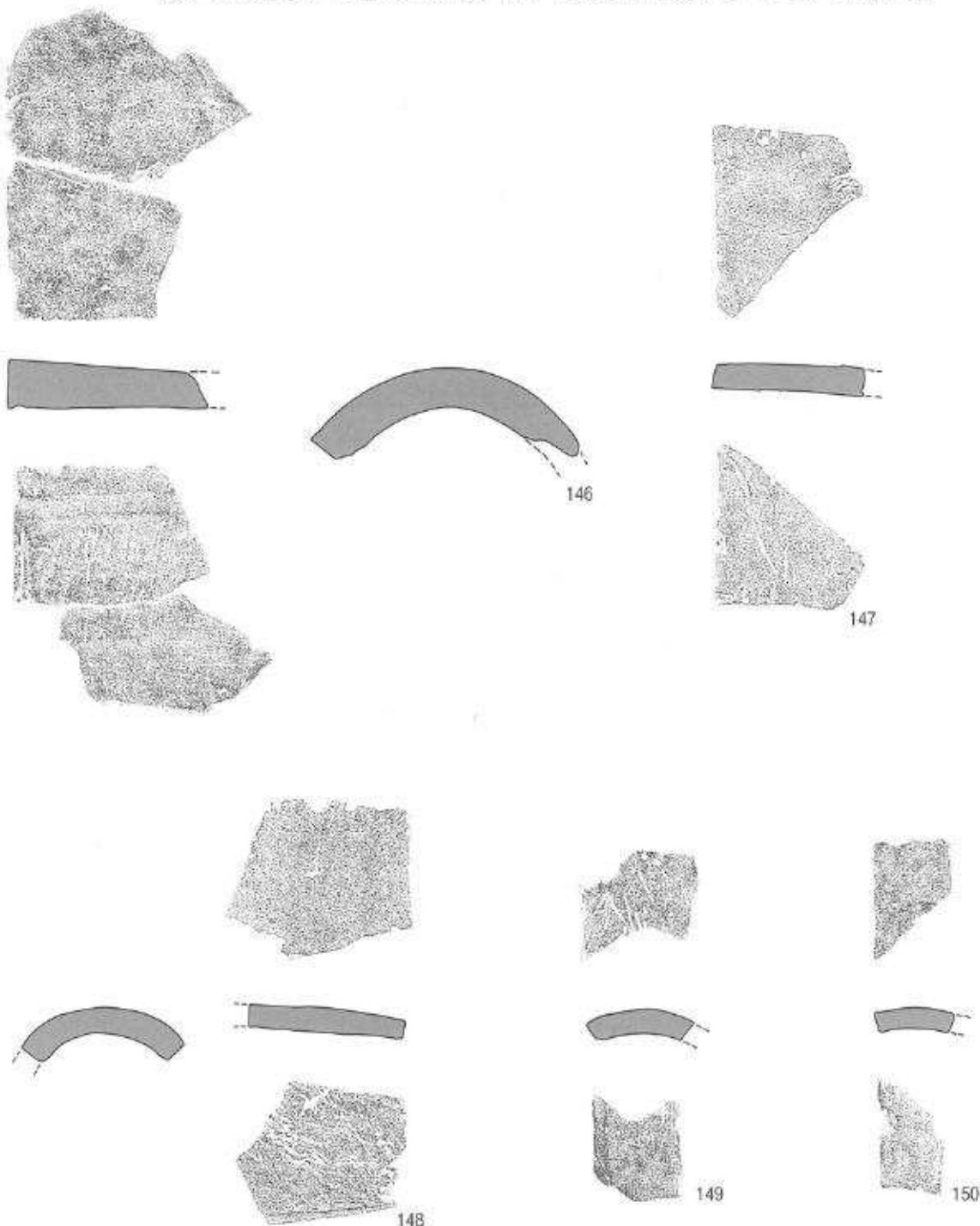


第83図 03型式接合模式図

II. 丸 瓦 (写真図版29・30)

5点(146～150) 図化した(第84図)。平瓦と比べて、量的に少ない。全体を観察できるものではなく、全てが小片での出土である。図化できなかったものも含めて、いわゆる玉縁式のものは認められなかった。

残存する範囲で、凹面は布目が認められ、凸面はナデ調整により仕上げられている。



第84図 出土丸瓦

III. 平 瓦

概要 24点(151~174) 図化した(第86~90図)。今回報告する瓦類の中で最も多く出土している。完存するものではなく、最も良好に残存するのが、当遺跡発見の契機となった瓦(5:第14図)である。今回の調査で明らかになった平瓦も、基本的にはこの瓦と同タイプあるいはその類型として理解できるものである。

本項では、凸面の整形、特に叩きを基準に分類するが、バリエーションは多くはない。

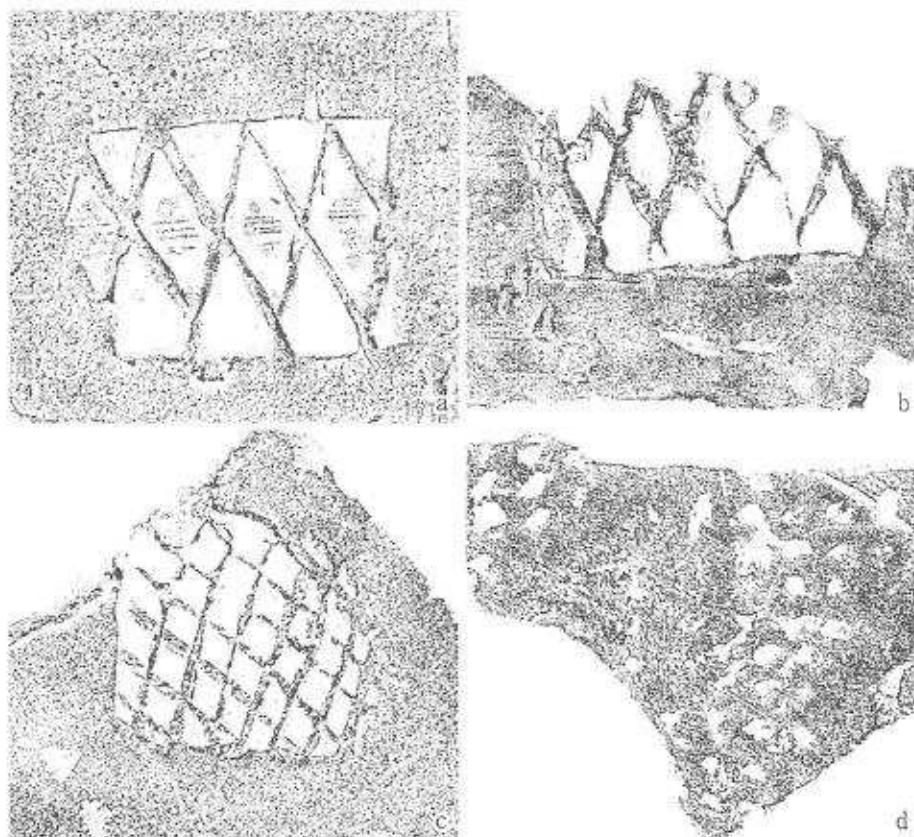
大きく、①斜格子(a・b)、②格子(c)、③不明の3タイプに分類できる(第85図)。

斜格子 長方形の枠内が斜格子状に溝が彫られた叩きである。格子の大きさから、1辺2.5cmの叩き(斜格子I)と、1辺1.5cmの叩き(斜格子II)の2タイプに分類できる。また、叩き中央部には、主軸に対して直交方向のハケ状の筋が認められる。

格子 2タイプに分類できる。一つは、長方形の枠内が格子状に溝が掘られた叩き(格子I)である。もう一つは、長方形の枠がなく格子状を呈するもの(格子II)である。

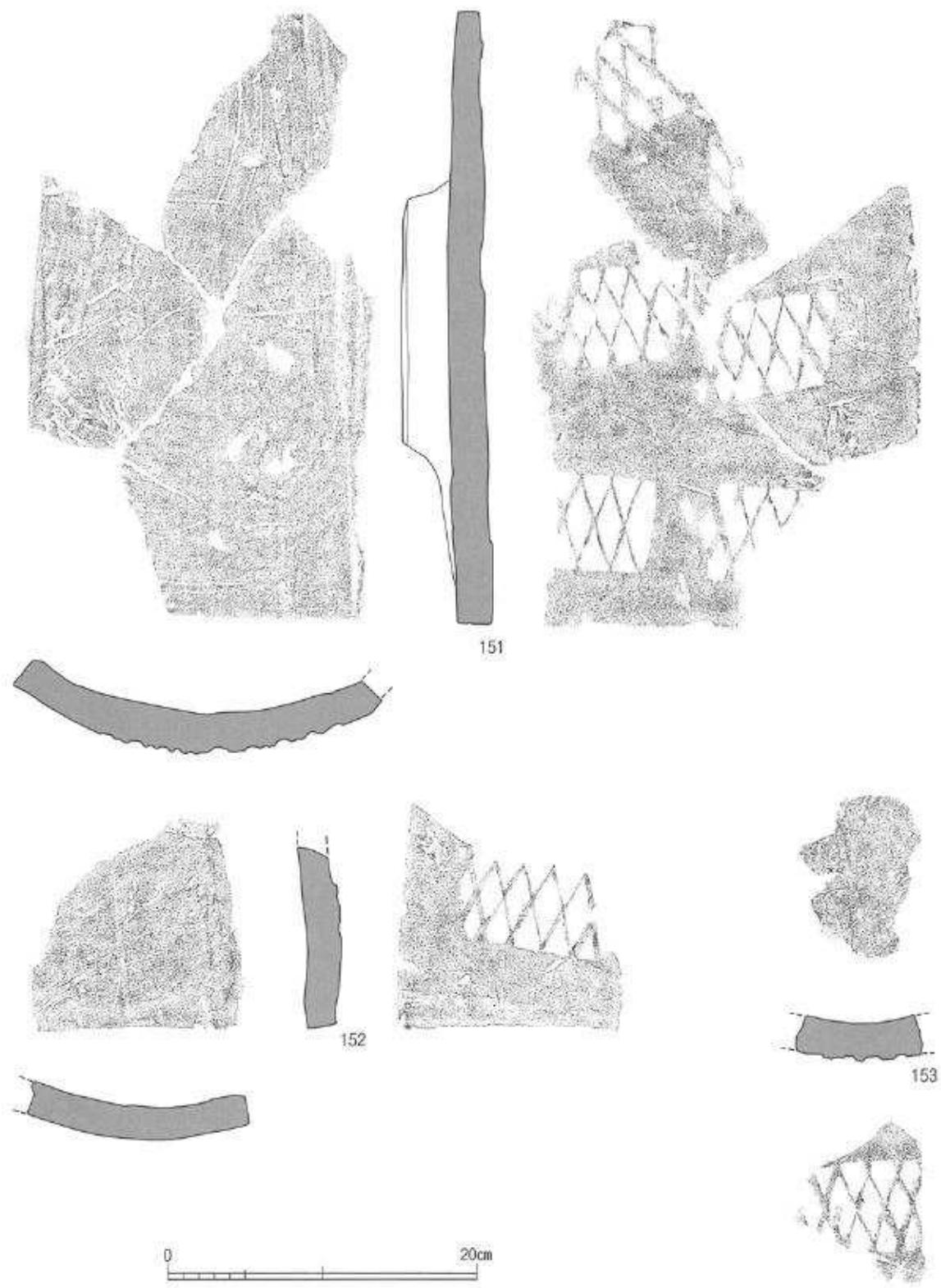
前者は166の1点のみである。6cm×6cmの枠内に、一辺7~8mmの格子が刻まれた叩きである。後者は、168・169・171の3点である。3点とも叩き整形後ナデ調整が施されており、格子目を詳細に観察することは困難である。

不明 叩きが観察できないものである。斜格子・格子叩きが前面に施されていないことから、両タイプの一部の可能性も考えられる。172の1点を図化している。

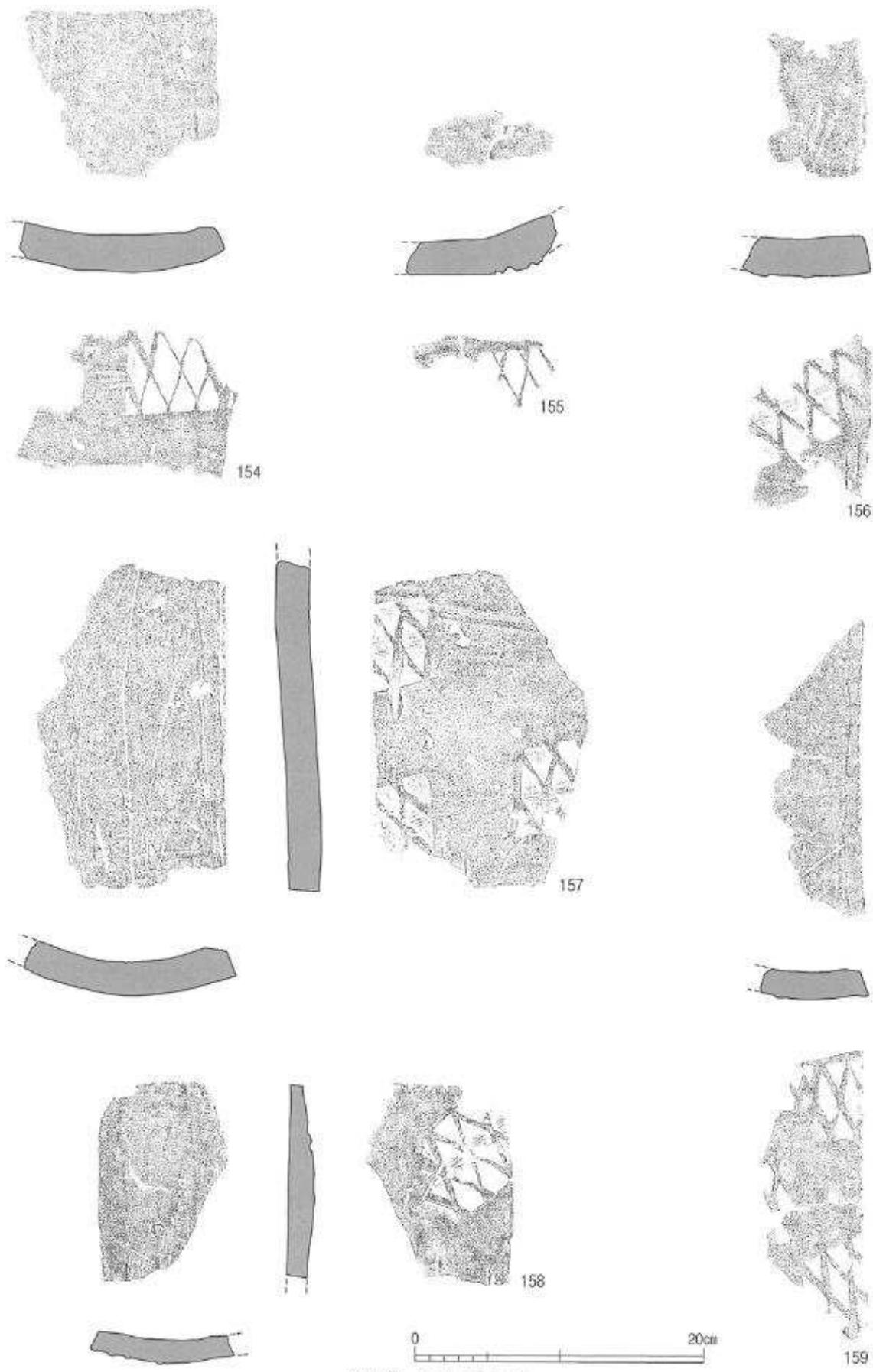


a: 斜格子 I b: 斜格子 II c: 格子 I d: 格子 II

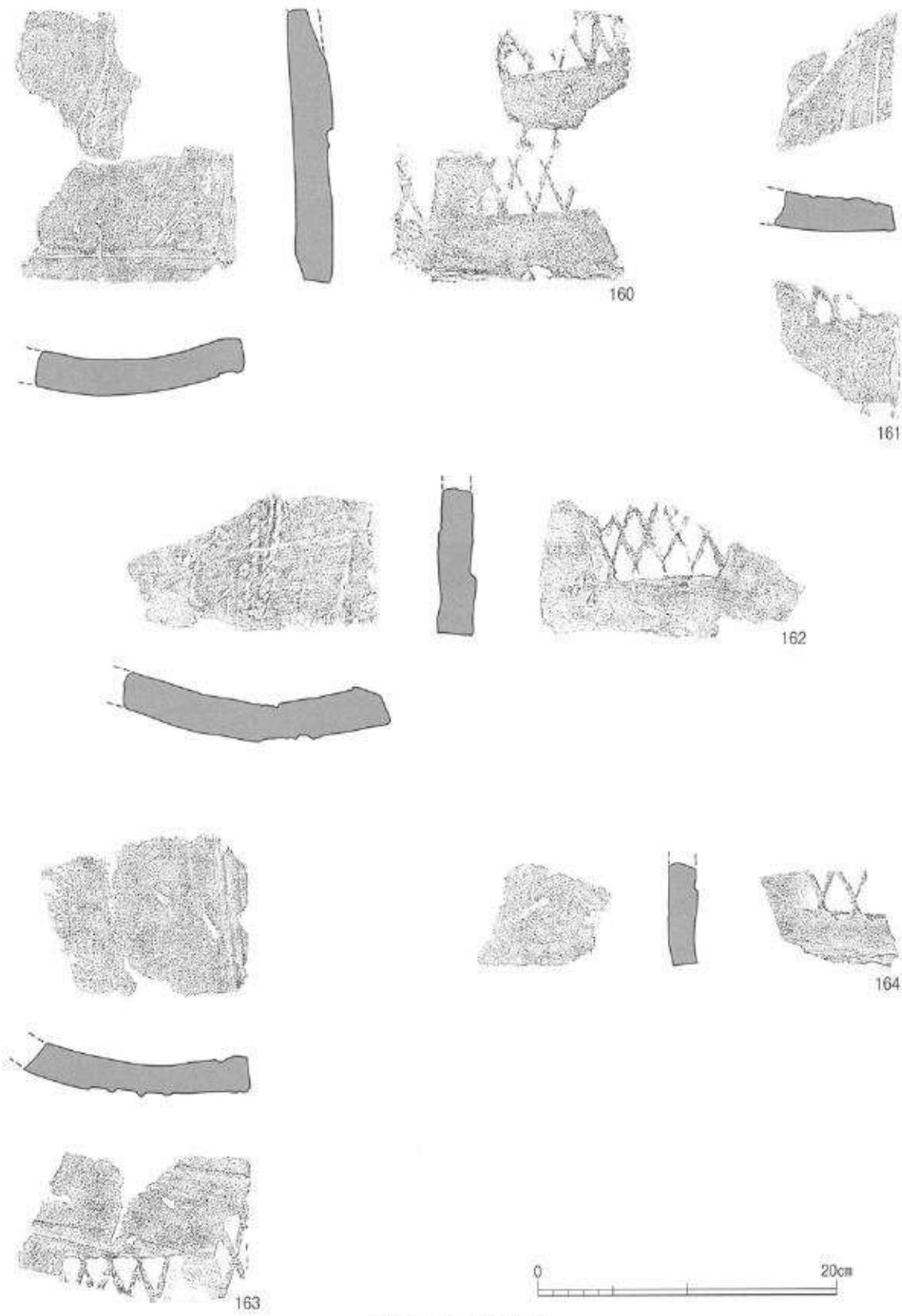
第85図 叩きの種類



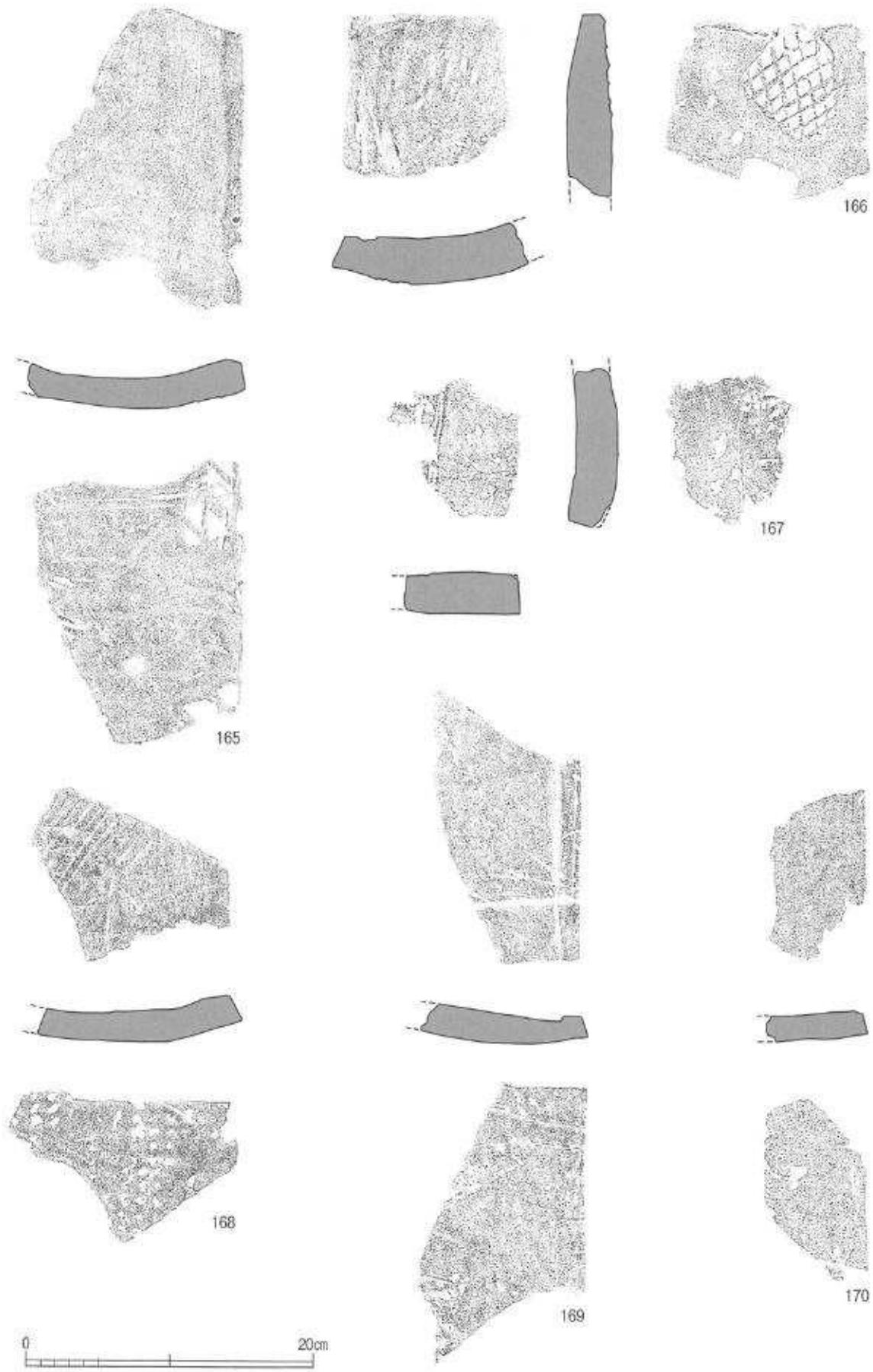
第86図 出土平瓦 (1)



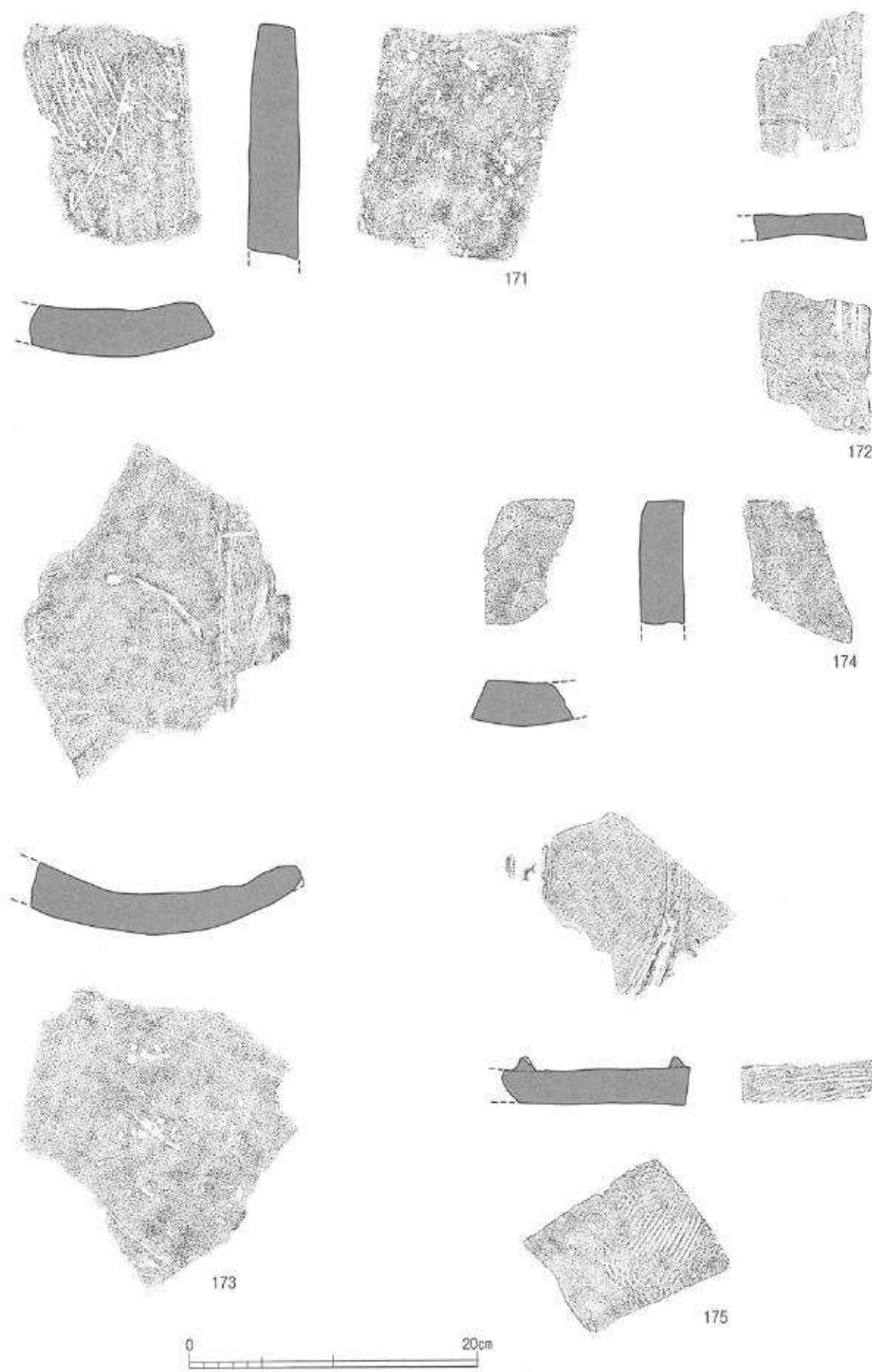
第87図 出土平瓦(2)



第88図 出土平瓦(3)



第89図 出土平瓦(4)

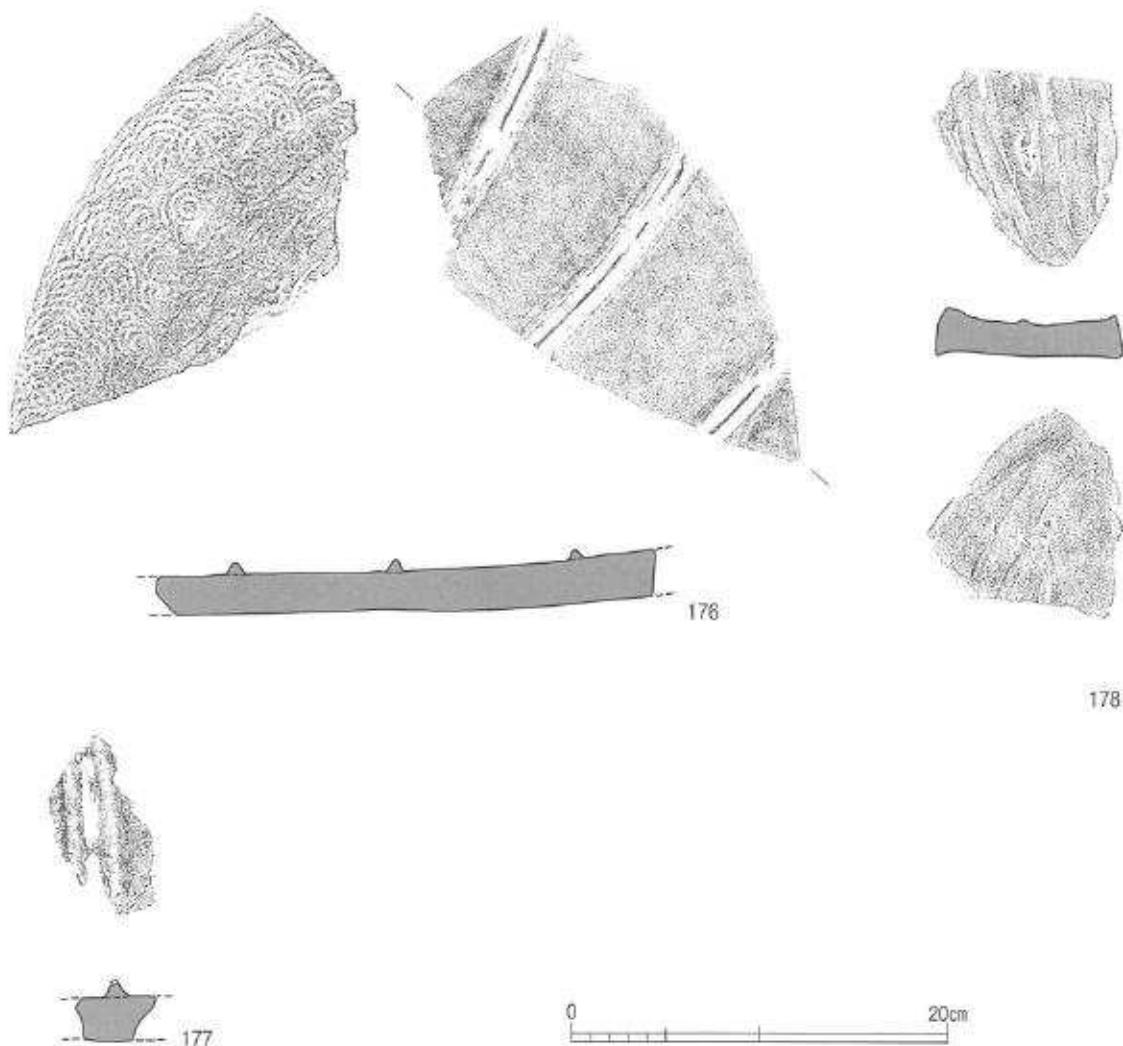


第90図 出土平瓦 (5)・鴟尾 (1)

IV. 鳥 尾 (巻首図版9・写真図版36~38)

4点(175~178)出土している(第90図・第91図)。

175は、鰯部の小片である。表面が叩き整形により仕上げられ、その後断面三角形をなす突帯が2条貼り付けられ、横ナデ調整により仕上げられている。突帯の間隔は10cmを測



第91図 出土 鳥尾(2)

第19表 瓦観察表(1)

No.	遺構名	種類	残存	残存部位	重量(g)	厚み(cm)	焼成	色調	胎土
4		平瓦	1/4以下	D	1,080	2.90	良好	灰	5mm以下の砂粒含む
5		平瓦	一部欠損	狹端 広端	3,400	2.35	良好	灰	3mm以下の砂粒含む
142	包含層	軒丸瓦	1/2	瓦当面	450		やや良好	灰~暗灰	2mm以下の砂粒含む
143	P11	軒丸瓦	1/4以下	花弁	150		不良	暗灰~灰	2.5mm以下の砂粒含む
144	包含層	軒丸瓦	一部	瓦当 外縁部	425		不良	灰~灰白	2mm以下の砂粒含む
145	包含層	軒丸瓦	1/4以下	花弁	50		やや不良	灰	4mm以下の長石含む
146	包含層	丸瓦	1/4以下	狹端部	755	2.80	不良	にぶい橙~橙	3mm以下の長石・雲母・石英含む

る。一部突帯が剥離した箇所が認められ、突帯と平面的に一致する沈線を確認することができた。突帯を貼り付けるための割付線と考えられる。

裏面は、表面の叩き整形に対応する当て具痕（車輪文）が認められる。また、車輪文を消すように平行叩きが認められ、表面の叩き整形後、裏面に対しても叩き整形が施されている。この他、側面も叩き整形により仕上げられている。突帯の規模は、高さが7～9mm、底部幅が1.2cm～1.6cmを測る。また、鰭部の厚さは2.3cmである。焼成は176と比較して不十分である。

176は、今回報告する鷲尾のなかで最も良好に残存するものである。175同様、鰭部が残存する。製作技法も同様であるが、表面は叩き整形後、ナデ調整がていねいに施され、叩き目はわずかに観察されるにすぎない。裏面は同心円文が比較的良好に残存する。表面には、横ナデ調整により断面三角形の突帯が貼り付けられている。突帯は3条残存し、その規模は、底部で8mm～1cm、高さは6～7mmを測る。突帯間の間隔は、側面付近において9.8cm・11.5cmを測る。最後に、側面がヘラ削りにより（上→下）仕上げられている。鰭部の厚さは2.2cmを測る。焼成は良好で、須恵質をなす。

177も、175・176と同タイプの鷲尾で、鰭部の小片である。断面三角形の突帯を中心にはじかに残存し、全体の調整は観察できない。突帯の規模は、底部で1.2cm、高さ8mmを測る。また、鰭部の厚さは3.1cmである。焼き上がりは須恵質ではあるが、焼成はやや不十分である。

178は、上記3点とは特徴を異にする。後背頂部先端と考えられ、舟先状の頂部を中心にはじかに残存する。内外面ともナデ調整により仕上げられ、特に一方の面は粗く仕上げられて、指先の当りが頭著に観察できる。側面の仕上げは平面の後で、2面ともヘラナデ調整により仕上げられている。最大幅10.0cmを測り、その直交方向で11.5cm残存する。中央部の厚さは、1.7cmを測る。

第20表 瓦観察表(2)

凹面	布目 (本/cm)	凸面	端面 形態	端面整形	側面 形態	側面整形	図版	写真 図版
布目・糸切り	11×12	格子叩き・ナデ	d型式	ヘラ削り(左→右)	F型式	ヘラ削り(上→下)	13	34
布目・糸切り	9×11	ナデ→格子叩き	c型式	ヘラ削り(左→右)	C型式 F型式	ヘラ削り(下→上)	14	35
							79	27
							79	27
							79	28
							79	27
布目・糸切り	9×8	ナデ		ヘラ削り(左→右)			84	29

第21表 瓦観察表(3)

No.	遺構名	種類	残存	残存部位	重量(g)	厚み(cm)	焼成	色調	胎土
147	包含層	丸瓦	1/4以下	狭端部	215	1.65	良好	暗灰	3mm以下の砂粒含む
148	包含層	丸瓦	1/4以下	広端部	230	1.50	良好	灰	6mm以下の砂粒含む
149	SB05-P3	丸瓦	1/4以下	側部	80	1.50	不良	にぶい橙	4mm以下の長石・雲母含む
150	P33	丸瓦	小片		50	1.20	不良	浅黄橙	4mm以下の長石等含む
151	SB08-P2	平瓦	1/2	C	2,380	2.70	不良	灰	3.5mm以下の砂粒含む
152	P29	平瓦	1/4以下	D	585	2.20	やや良好	灰	5mm以下の砂粒含む
153	包含層	平瓦	1/4以下	一部	230	2.40	不良	浅黄橙	9.5mm以下の長石等を含む
154	包含層	平瓦	小片		520	2.40	不良	橙	7.5mm以下の長石・雲母含む
155	P32	平瓦	1/4以下	一部	125	2.40	不良	にぶい黄橙	3mm以下の長石・雲母含む
156	SB08-P4	平瓦	1/4以下	一部	345	2.65	不良	にぶい橙～橙	2.5mm以下の長石・雲母等含む
157	SB10-P5	平瓦	約1/4	A	1,155	2.30	良好	灰	6mm以下の砂粒含む
158	包含層	平瓦	1/4以下	A	310	1.70	やや良好	灰～橙	5mm以下の長石等含む
159	P21	平瓦	1/4以下	一部	380	1.85	やや良好	灰～橙	7mm以下の長石等を含む
160	包含層	平瓦	1/4	D	710	2.40	やや不良	灰白～橙	5mm以下の砂粒・5mm以上の小礫含む
161	包含層	平瓦	1/4以下	A?	200	2.30	やや不良	灰	9mm以下の砂粒含む
162	SB08-P4	平瓦	1/4以下	D	530	2.50	不良	にぶい橙	7mm以下の砂粒含む
163	包含層	平瓦	1/4以下	側部	490	2.30	やや良好	灰～橙	5mm以下の砂粒含む
164	旧河道	平瓦	1/4以下	A	165	1.90	やや良好	灰～橙	1cm以下の砂粒含む
165	P31	平瓦	1/4以下	側部	795	2.00	不良	橙	4mm以下の長石・雲母含む
166	包含層	平瓦	1/4以下	A	630	3.20	不良	灰～灰白	2mm以下の石粒含む
167	包含層	平瓦	1/4以下	C	350	2.85	不良	灰	2mm以下の砂粒含む
168	包含層	平瓦	小片		415	2.20	良好	灰	2.3mm以下の砂粒含む
169	包含層	平瓦	1/4以下	一部	465	2.10	不良	灰～灰白	4mm以下の砂粒含む
170	SB04-P7	平瓦	1/4以下	側部	235	1.70	良好	灰～赤灰	1.8mm以下の砂粒含む
171	包含層	平瓦	1/4以下	B	935	3.25	不良	灰～灰白	3mm以下の砂粒を含む
172	包含層	平瓦	1/4以下	側部	205	1.70	良好	灰～赤灰	4mm以下の砂粒含む
173	包含層	平瓦	小片		1,320	2.80	不良	灰白～にぶい橙	2mm以下の砂粒含む
174	包含層	平瓦	小片	a	260	3.00	良好	灰～暗灰	2.5mm以下の砂粒含む
175	包含層	鶴尾	一部	鱗部	505	2.30	やや良好	暗灰～灰白	2mm以下の砂粒含む
176	包含層	鶴尾	一部	鱗	1,145	2.20	良好	灰	2.5mm以下の砂粒含む
177	包含層	鶴尾	一部	鱗	110	3.10	やや不良	灰～杯白	
178	包含層	鶴尾	1/4以下		280	1.70	やや不良	灰白	2.5mm以下の砂粒含む

第22表 瓦観察表(4)

凹面	布目 (本/cm)	凸面	端面 形態	端面整形	側面 形態	側面整形	図版	写真 図版
布目・糸切り	8×8	ナデ		ヘラ削り(左→右)			84	29
布目	10×10	ナデ		ヘラ削り?			84	30
布目	10×10	ナデ				ヘラ削り?	84	
布目・糸切り	9×7	ナデ仕上げ			A型式	ヘラ削り(左→右)	84	
布目・糸切り	10×9	格子叩き	a型式	ヘラ削り(左→右)	C型式	ヘラ削り(上→下)	86	30
布目・糸切り・ 模骨痕	11×10	ナデ	c型式	ヘラ削り(左→右)	G型式	ヘラ削り(上→下)	86	31
布目		格子叩き					86	33
布目・糸切り・ 模骨痕	9×10	格子叩き→ナデ			C型式	ヘラ削り(上→下)	87	35
布目・糸切り	11×10	格子叩き					87	
布目・糸切り		ナデ→格子叩き			A型式	ヘラ削り	87	
布目・糸切り	9×10	ナデ→格子叩き	a型式	ヘラ削り(右→左)	C型式	ヘラ削り(上→下)	87	31
布目→部分的に ヘラナデ	10×10	格子叩き+ナデ	b型式	ヘラ削り(右→左)	F型式	ヘラ削り(下→上)	87	32
布目・糸切り	10×9	格子叩き+ナデ			C	ヘラ削り(上→下)	87	32
布目・糸切り	9×9	格子叩き・ナデ	d型式	ヘラ削り(右→左)	C型式	ヘラ削り(上→下)・ ヘラ削り(方向不明)	88	33
布目・糸切り	10×9	ナデ→格子叩き			F型式	ヘラ削り(下→上)	88	33
布目・糸切り・ 縫痕	10×10	ナデ→格子叩き	e型式	ヘラ削り(右→左)	F型式	ヘラ削り(上→下)	88	33
布目	10×9	ナデ→格子叩き			C型式	ヘラ削り(上→下)	88	
布目・糸切り・ 模骨痕	9×9	格子叩き+ナデ	c型式	ヘラ削り (左→右・右→左)			88	
布目・糸切り	10×10	ナデ→叩き			H型式	ヘラ削り(下→上)	89	
布目		格子叩き	f型式	ヘラ削り(右→左)	C型式	ヘラ削り(?)	89	
布目	10×7	ナデ	d型式	ヘラ削り(右→左)	A型式	ヘラ削り(方向不明)	89	
布目・糸切り	7×11	格子叩き→ナデ			F型式	ヘラ削り (上→下)(下→上)	89	
布目・模骨痕	8×9	格子叩き→ナデ			F型式	ヘラ削り(上→下)	89	
布目・部分的に ナデ	11×10	ナデ			D型式	ヘラ削り(上→下)	89	
布目・糸切り・ 模骨痕	9×9	格子叩き	a型式	ヘラ削り(右→左)	B型式	ヘラ削り(?)	90	
布目	11×10	ナデ			F型式	ヘラ削り(上→下)	90	
布目・糸切り・ ヘラ削り	8×10	格子叩き→ナデ				ヘラ削り(上→下)	90	
		ナデ仕上げ		ヘラ削り	E型式	ヘラ削り(上→下)	90	36
							90	36
							91	37
							91	37
							91	38

4. 平安時代後期以降の遺構と遺物

(1) 概要

はじめに 遺構は、柱穴と旧河道に限られる（第92図）。柱穴は数穴検出されているが、建物を復元することはできなかった。その分布は、平坦部西半部以西に限られる。

(2) 柱穴

はじめに 建物を構成する柱穴は検出されなかったが、これらの柱穴のなかからは、良好な資料が得られたものがある。そこで、本項ではこれらの柱穴、P34とP35について、出土遺物を中心に報告する。

P34

検出状況 平坦部北西部、旧河道肩部東側に位置する（第92図）。

出土遺物 土師器の椀底部1個体（179）が出土している（第93図）。平高台の一部が残存し、底部は回転糸切りにより切り離されている。

時期 出土土器から判断して、平安時代後期と考えられる。

P35

検出状況 平坦部南西部、旧河道肩部の東側に位置する（第92図）。P34の南西に位置する。

出土遺物 土師器の托の底部1個体（180）が出土している（第93図）。高台を中心には残存し、横ナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から判断して、平安時代後期と考えられる。

(3) 旧河道（写真図版26）

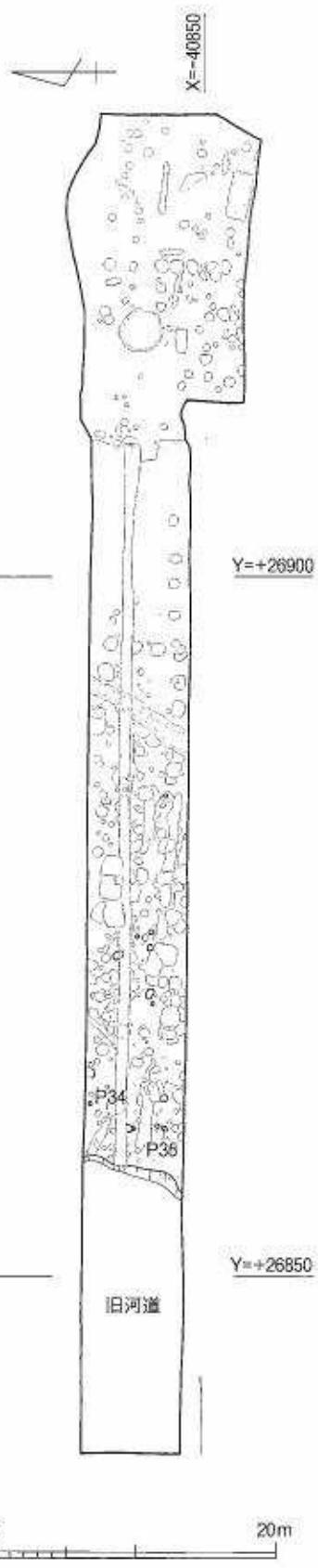
出土遺物を中心に報告する。

出土遺物 須恵器と青磁が出土している（第93図）。

須恵器 椗（181）と甕（183）が出土している。181の楕は底部から体部にかけて残存し、底部は回転糸切りにより切り離されている。183の甕は、口縁部を中心に残存する。外面を平行叩きにより整形後、横ナデ調整により仕上げられている。

青磁 瓢の底部（182）が出土している。回転ヘラ削りにより仕上げられ、高台疊付より内側は露胎している。

時期 出土土器から判断して、平安時代後期と考えられる。



第92図 平安時代後期以降の遺構

(4) その他の(写真図版26)

概要 遺構には伴わないが、包含層から当該期の土器が出土している。当遺跡を検討する上で不可欠と考えられる。よって、ここで概要を報告する。

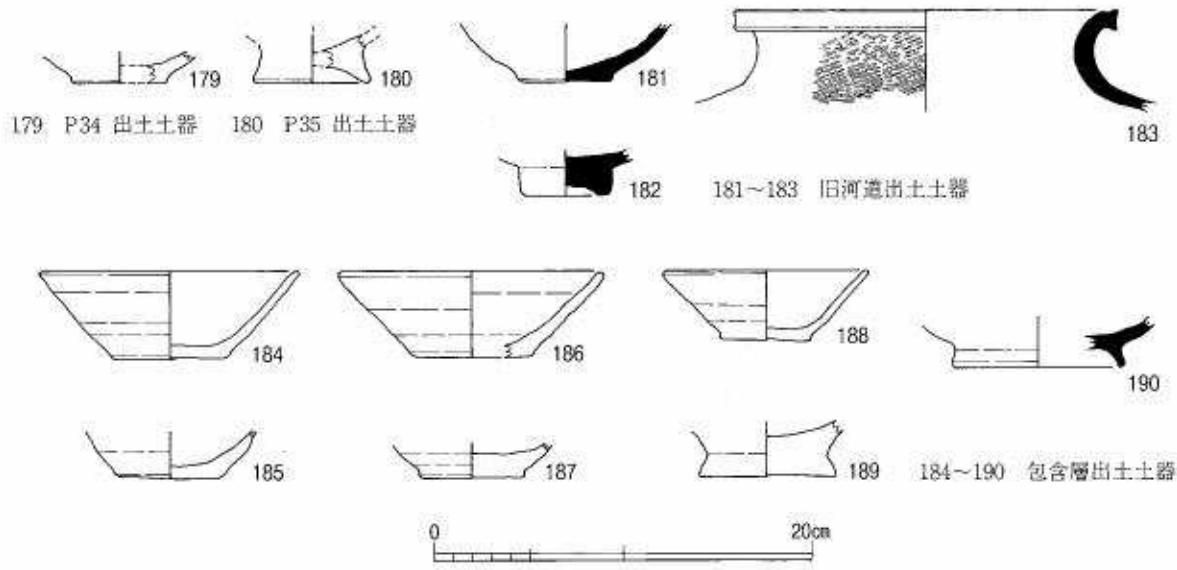
出土遺物 土師器と須恵器が出土している(第93図)。

土師器 梶(184~188)と托(189)が出土している。梶の184~188は同タイプに分類されるもので、平底を特徴とする。ただし、187はわずかに平高台の痕跡が認められる。いずれも、底部は回転糸切りにより切り離されている。

托の189は、突出した平高台を特色とする。底部は磨滅が著しく充分観察できないが、ナブ調整により仕上げられている。糸切り痕は観察できない。

須恵器 梶の底部(190)が出土している。高台を中心には存する。

時期 出土土器から判断して、平安時代後期と考えられる。



第93図 平安時代後期以降の土器

第23表 平安時代後期以降の土器観察表

No	種別	器種	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存状況	色調	焼成	挿図No.	図版No.
179	土師器	梶	P34		1.7	5.0	底部1/4	橙		93	
180	土師器	托	P35		2.6	6.2	底部1/6	橙		93	
181	須恵器	梶	旧河造		3.1	5.0	底部1/2弱	灰白~灰	やや不良	93	26
182	青磁	梶	旧河造		2.4	4.7	底部若干	オリーブ灰~にぶい橙	良	93	
183	須恵器	甕	旧河造	20.0	5.4		口縁部若干	灰	やや良	93	26
184	土師器	梶	包含層	13.5	4.7	6.3	口縁部1/4~底部1/2	橙		93	26
185	土師器	梶	包含層		2.5	5.8	底部完存	橙		93	
186	土師器	梶	包含層	13.6	4.6	6.6	口縁部1/9弱~底部1/4	浅黄橙~にぶい橙		93	
187	土師器	梶	包含層		1.9	5.6	底部1/2	橙		93	
188	土師器	梶	包含層	10.7	3.7	4.8	口縁部3/4~底部完存	橙		93	26
189	土師器	托	包含層		3.0	7.2	底部1/2弱	橙		93	
190	須恵器	梶	包含層		2.7	9.0	底部1/4弱	灰	やや良	93	26

第4章 自然科学分析

第1節 長見寺廃寺址出土柱材の樹種

伊東 隆夫（京都大学名誉教授）

兵庫県美方郡香美町香住区香住字長見寺に所在する長見寺廃寺址は、平成14年度に、国道178号香住道路ランプ部道路改築事業に伴い、調査が実施された。古墳時代後期（6世紀後半）～平安時代前半（9世紀）に関する遺構・遺物が当遺跡の中心をなすもので、特に白鳳時代（7世紀後半）の遺構・遺物が顕著である。調査では、縄文時代晩期～古墳時代初頭、古墳時代後期（6世紀後半）～平安時代前半（9世紀）、平安時代後期以降の大きく3時期の遺構・遺物が明らかとなった。白鳳時代の遺構としては、掘立柱建物跡・柱穴がほとんどで、今回同定の対象となった大半の柱（W1～W7）も、この時期の遺構に伴うものである。W1～W7以外の柱は、旧河道内から出土している。時期の特定は困難であるが、およそ、白鳳時代から奈良時代と考えられる。柱穴に伴う柱（W1～W7）は、いずれも柱穴内に立てられた状態で出土している。これらの柱の特徴は、その径が40cmを超える大型のもので、計7本出土している。最大のもの（W1）で、長さは1.54m、断面の規模は58×70cmを測る。当該期の遺跡の性格については、瓦・鶴尾および硯に使用された土器の出土から、寺跡の可能性が考えられる。

定法にしたがい、樹種の同定を行った。

イヌマキ (*Podocarpus macrophylla* D. Don) :

樹脂道を欠く。樹脂細胞は年輪内にはほぼ均一に分布する。

ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* Endle) :

樹脂道を欠く。晚材が狭く、樹脂細胞が晚材付近に接線状に散在する。典型的なヒノキ型の分野壁孔を有する。

スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don) :

樹脂道を欠く。晚材が広く、樹脂細胞が晚材付近に接線状に散在する。典型的なスギ型の分野壁孔を有する。

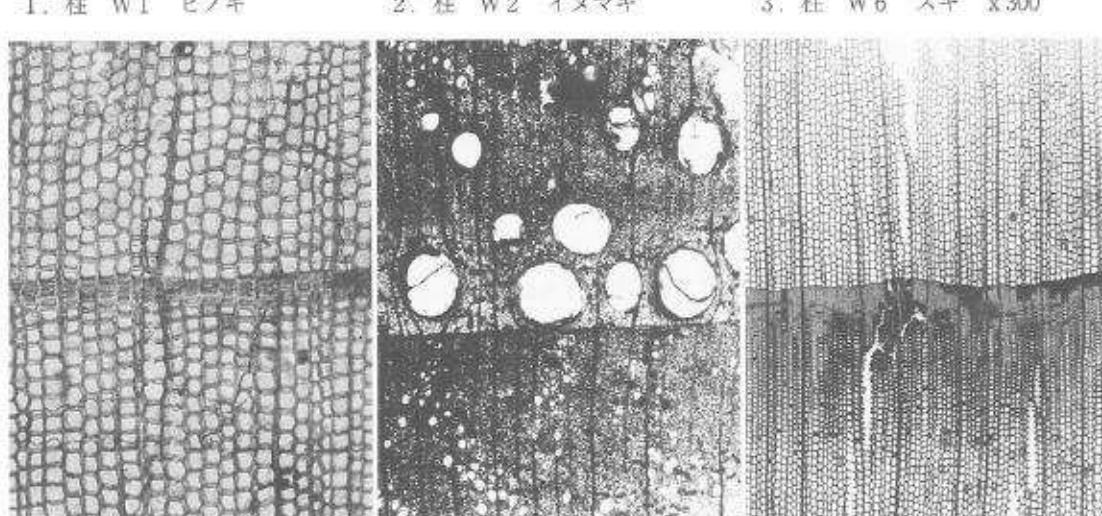
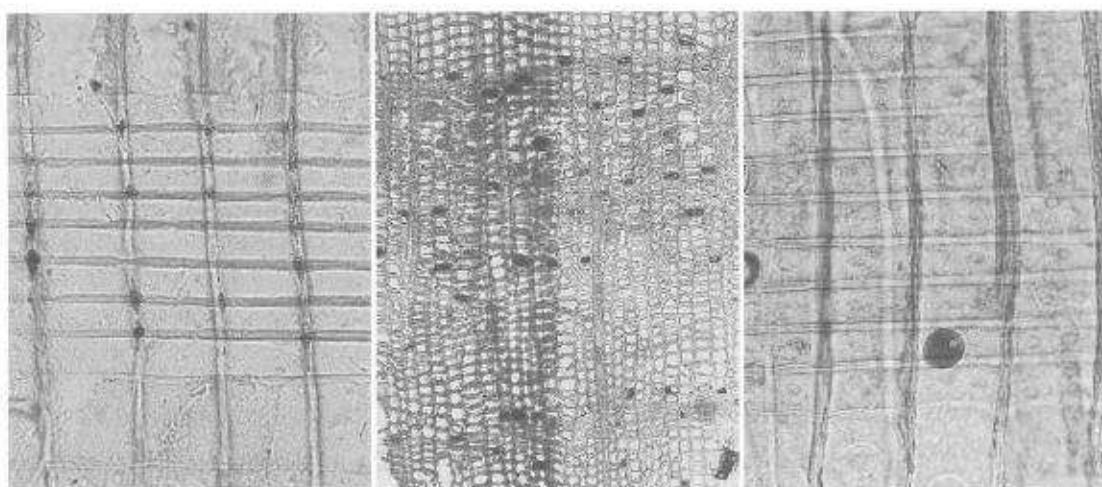
クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) :

環孔材。孔圈道管は大きい。孔圈外道管は火炎状となる。単穿孔。放射組織は単列同性。

樹種同定の結果は第24表に示す。この表から樹種の利用頻度の高い順に並べると、ヒノキ9点、スギ3点、イヌマキ、クリ各1点という結果であった。やはり、柱材としてヒノキが多用されていたことがうかがえる。柱材14点のうちW1からW7の柱は掘立柱として用いられていたもので、前述のように直径40cmを超える太さである。そのうちのW6がスギであったのであるが、過去の調査例からすると、掘立柱としてスギが用いられる例は多くなく、めずらしい。

第24表 樹種同定一覧表

資料No	報告No	遺物名	報告遺構名	時 期	樹 種 名
1	W1	柱	SB08-P1	白鳳時代（7世紀後半）	ヒノキ
2	W2	柱	SB08-P4	白鳳時代（7世紀後半）	イヌマキ
3	W3	柱	SB08-P2	白鳳時代（7世紀後半）	ヒノキ
4	W4	柱	SB08-P3	白鳳時代（7世紀後半）	ヒノキ
5	W5	柱	SB07-P2	白鳳時代（7世紀後半）	ヒノキ
6	W6	柱	P29	白鳳時代（7世紀後半）	スギ
7	W7	柱	P30	白鳳時代（7世紀後半）	ヒノキ
8	W8	柱	旧河道	白鳳時代～奈良時代	ヒノキ
9	W9	柱	旧河道	白鳳時代～奈良時代	ヒノキ
10	W10	柱	旧河道	白鳳時代～奈良時代	クリ
11	W11	柱	旧河道	白鳳時代～奈良時代	ヒノキ
12	W12	柱	旧河道	白鳳時代～奈良時代	スギ
13	W13	柱	柱穴	白鳳時代（7世紀後半）	ヒノキ
14	W14	柱	旧河道	白鳳時代～奈良時代	スギ



第94図 長見寺廃寺址出土柱材の顕微鏡写真

第2節 長見寺廃寺址における地形環境

青木 哲哉（立命館大学非常勤講師）

1. はじめに

地表は人間の活動舞台であり、そこに現出する地形環境は人間生活に大きな影響をおよぼす。こうした地形環境は過去を通じて変化してきた。人間は時代の流れとともに進展する自らの生活を地形環境に巧みに対応させて活動し、時には地形環境を改変することがあった。地形環境と人間活動とは密接に関わってきたと考えられ、地形環境は人間生活や遺跡の立地を理解する上で重要な要素となる。

人間活動に対応する地形環境は細かいオーダーで考察する必要がある。そのためには、地形環境を考古遺跡の発掘調査にともなって考察することが有効な手段となる。考古遺跡の発掘調査区では、微地形や堆積物が直接かつ詳細に観察できる。そのため、細かいオーダーでの地形環境を復原することが可能である。復原された地形環境の時期については、発掘調査で検出された考古遺物から知られる。その上、考古学的な調査成果を加味することによって、地形環境と人間活動との関係をも解明できるのである。

本稿では、矢田川下流平野に位置する長見寺廃寺址の地形環境について明らかにしたい。調査では、①主に1万分の1空中写真の判読と現地踏査による矢田川下流平野の地形区分、②ボーリング資料に基づく沖積層の解析、③遺跡調査区における微地形と地質断面の観察を行った。

2. 矢田川下流平野の地形

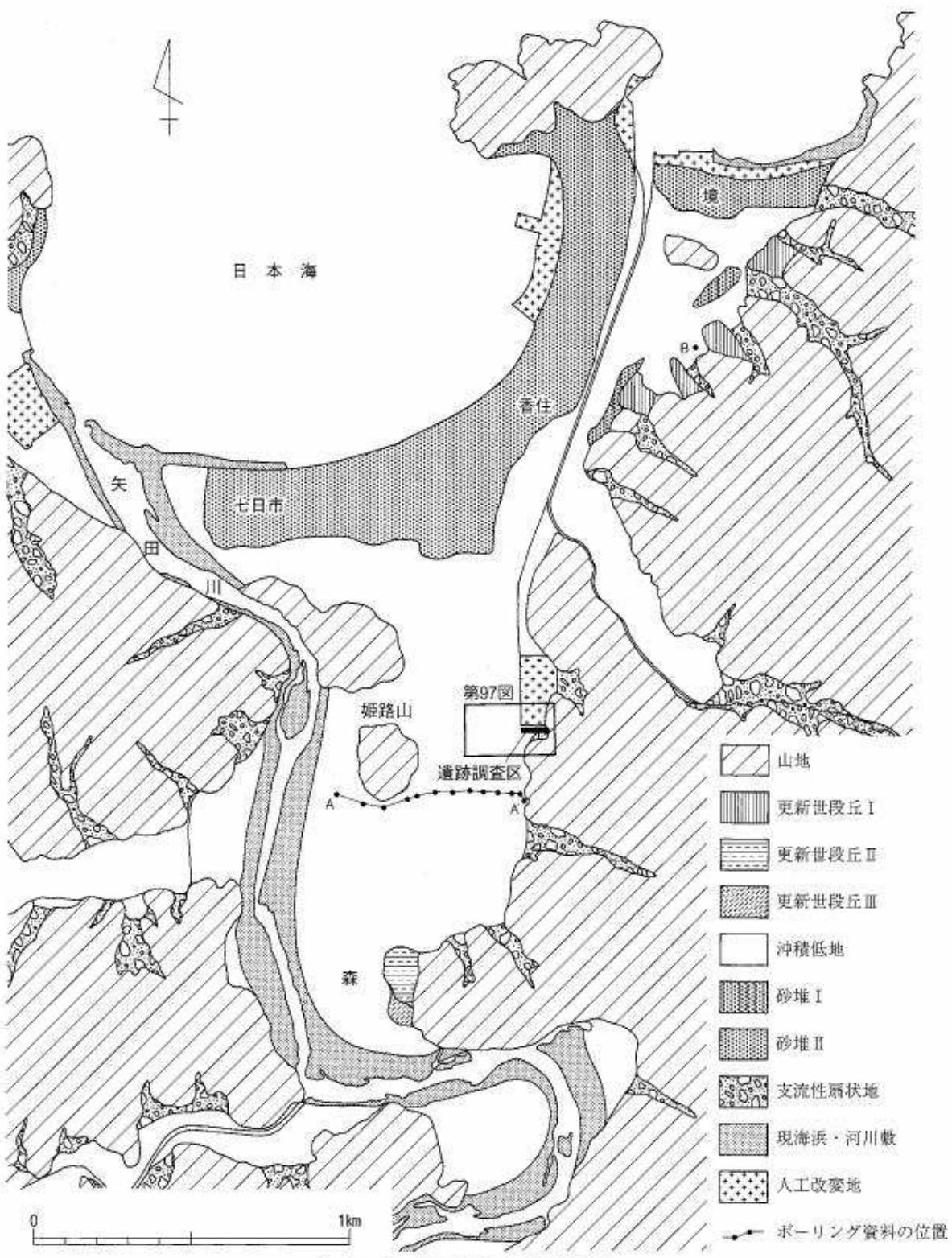
矢田川は、山地間の狭長な谷を概ね北流し、日本海に注ぐ。その下流部には、長さ約3km、幅およそ800mの小規模な平野がみられる。平野の周囲には、標高100~200mの山地が分布し、平野内にも姫路山をはじめとする独立丘陵がいくつか存在する。これらの山地は主に凝灰岩類（安山岩質凝灰岩や玄武岩質凝灰岩）からなる。

矢田川下流平野は3面の更新世段丘と沖積低地に大きく分けられ、海岸付近の沖積低地には2列の砂堆が、また山麓には支流性扇状地が認められる（第95図）。本稿では、更新世段丘を高位のものから順に更新世段丘Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、また砂堆を内陸ものから砂堆Ⅰ・Ⅱと呼ぶことにする。各地形の特徴は次のとおりである。

〔更新世段丘Ⅰ〕 これは海成段丘に相当する。この段丘は香住東方の山地に接して点在し、そこは現海岸線より300~500m内陸側である。段丘面は、背後の山地から延びる谷に分断され、段丘形成後の侵食によって原形をほとんど留めていない。これらは、比高10m前後の崖を有し、円礫を中心としたシルト質砂礫からなる。

〔更新世段丘Ⅱ・Ⅲ〕 これらはともに河成段丘である。矢田川下流平野では、小規模なものが森付近に分布するだけで、発達がわるい。第95図より上流側でも、矢田川が流下する狭長な谷中にこれらの段丘が断続的に分布する。これらは最終氷期の間に形成されたと考えられる。

〔沖積低地〕 これは約2万年前以降に形成された低地である。矢田川下流平野では、この低地が最も広範囲に分布する。現地表はほぼ平坦で、そこでは洪水のおよぶ可能性がある。矢田川下流部の沖積低地では、森付近より北側（下流側）が三角州に相当し、海岸付近の沖積低地には砂堆が分布する。



第95図 矢田川下流平野の地形分類図

[砂堆] 砂堆Ⅰは沖積低地の北東部に認められる。これらは、比高20~30cm、幅30~50mの小規模なもので、砂堆形成後の侵食によって断続的に分布する。砂堆Ⅰは約6,000年前の縄文海進頂期に形成されたと考えられる。砂堆Ⅱは、現海岸線に沿ってみられる。ひとつは七日市から境の西側にかけて延び、他の一つは沖積低地北東端の境付近に存在する。中でも前者は大規模なもので、幅が200~300m、比高は約2mある。この砂堆は北方の独立丘陵に接続しており、陸繋砂州の様相を呈する。

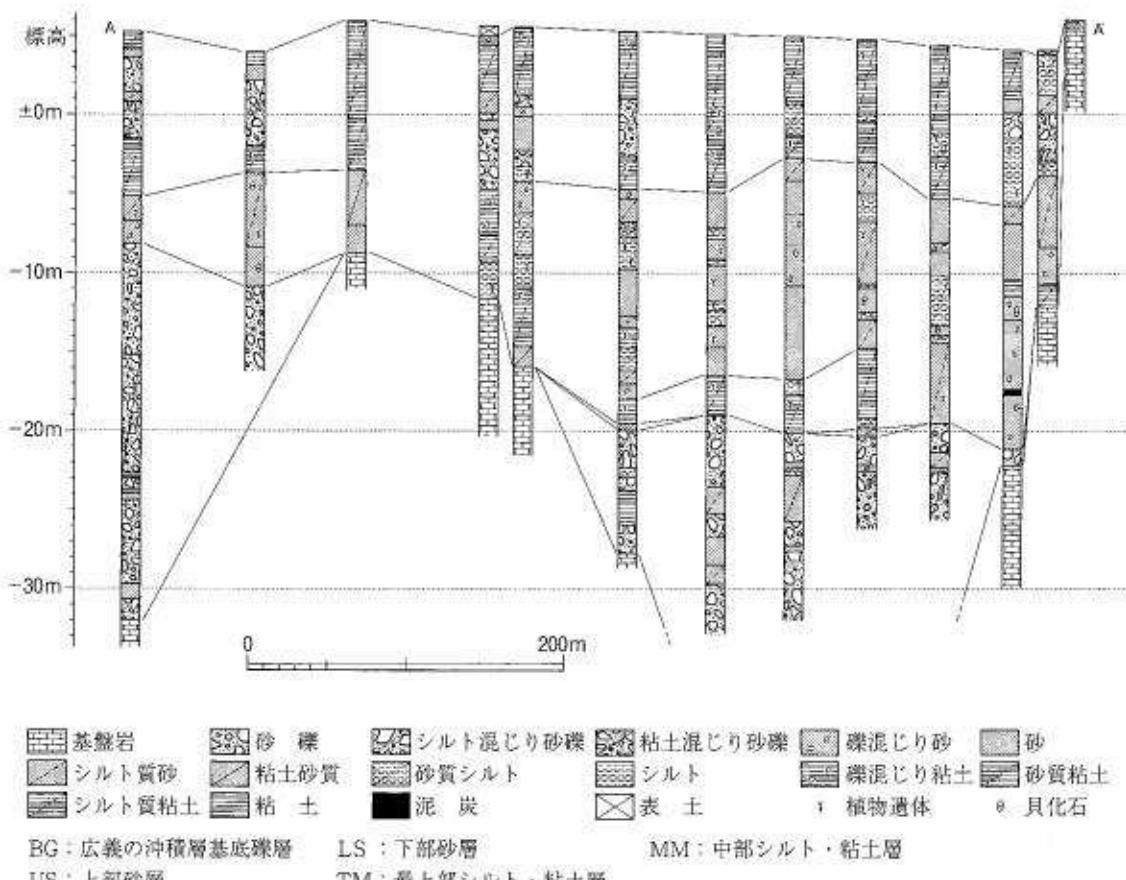
【支流性扇状地】 この地形は主に山地を刻む小規模な谷中に認められる。背後の山地から堆積物が供給されて形成されたもので、矢田川下流平野の縁辺に数多く点在する。地表の傾斜は大きく、10%前後である。地表高度が下がるにつれて傾斜が緩やかになり、末端では沖積低地と傾斜変換線で接している。

3. 矢田川下流部の沖積層と沖積低地の形成過程

本平野の沖積層は、広義の沖積層基底礫層(BG)⁽¹⁾の上に15~26mの厚さで認められ、下位から順に中部シルト・粘土層(MM)、上部砂層(US)、および最上部シルト・粘土層(TM)⁽²⁾に分けられる(第96図)。これらの3層はわが国的一般的な沖積層である中部泥層、上部砂層、ならびに沖積陸成層にそれぞれ対比される。ただし、矢田川下流部では中部泥層の下位に位置する下部砂層がほとんどみられず、また最上部シルト・粘土層には沖積陸成層と異なる特徴がある。矢田川下流部の沖積層と広義の沖積層基底礫層は次のような特徴をもつ。

【広義の沖積層基底礫層】 この層は、N値50以上のよく締まった砂礫からなり、矢田川下流部の沖積低地下に連続して分布する。第96図によると沖積層基底礫層の上面は、姫路山の東側で現海面下10m前後、西側で現海面下およそ20mであり、東側の方が深い。これは沖積低地東部の沖積層下に埋没谷が存在することを示す。埋没谷の幅はおよそ140mである。

【中部シルト・粘土層】 これは、N値が6~9と軟弱で、埋没谷の中に2~4mの厚さで堆積している。この層が対比される中部泥層には、一般に貝化石が混入する。第96図で使用したボーリング資料では、



第96図 A-A' 地質断面図

中部シルト・粘土層に貝化石の存在が記載されていなかったものの、この層は中部泥層と同様に縄文海進とともにあって拡大した海の底に堆積したと推定される。約6,000年前の縄文海進頂期には海域が森付近まで進入し、沖積低地には溺れ谷が形成されていたと考えられる。

〔上部砂層〕 この砂層は矢田川下流部にみられる沖積低地のほぼ全域で認められる。N値は15~30で、7~14mの厚さで堆積している。層中にはシルトや粘土などがはさまれ、砂には貝化石が混入する。上部砂層は、内陸まで侵入した約6,000年前の海域に、その後河川が搬出したものである。

〔最上部シルト・粘土層〕 この堆積物はN値5以下の細粒堆積物である。層中には、河床礫と思われる砂礫が所々ではさまれる。この砂礫より下部では、貝化石が混入している。第95図のB地点では、マッドサンプラーによる掘削調査の結果、最上部シルト・粘土層の下部に相当する層準から海棲の貝化石が採取された。その⁽⁴⁾^{14C}年代測定値から、およそ6,000年前以降に退いていった海は約4,000年前になつても現海岸線より内陸に残存していたことが知られている。最上部シルト・粘土層の上部は河成堆積物がほとんどを占める。これは河川の氾濫によって沖積低地が発達したことを物語る。

以上の事柄をまとめると、矢田川下流部では縄文海進によって東部の埋没谷中に海が進入した。拡大する海の底にはシルトや粘土（中部シルト・粘土層）が堆積し、やがて海域が埋没段丘面上にも広がった。約6,000年前には縄文海進が頂期を迎える、森付近より北側に溺れ谷が形成されるとともに、砂堆Ⅰがつくられた。

その後、海は徐々に退き、そこに河川が砂を中心とした堆積物（上部砂層）を搬出した。海は埋積されていき、三角州が発達していった。海域は約4,000年前になつても現海岸線より内陸に残り、その海底にはシルトや粘土（最上部シルト・粘土層の下部）の堆積がみられた。やがて砂堆Ⅱの形成が開始されるとともに、矢田川下流部はほぼ完全に陸化した。沖積低地上では、河川の氾濫が相次ぎ、砂礫や細粒堆積物（最上部シルト・粘土層の上部）がさらに堆積していった。

4. 調査区付近の微地形と堆積物

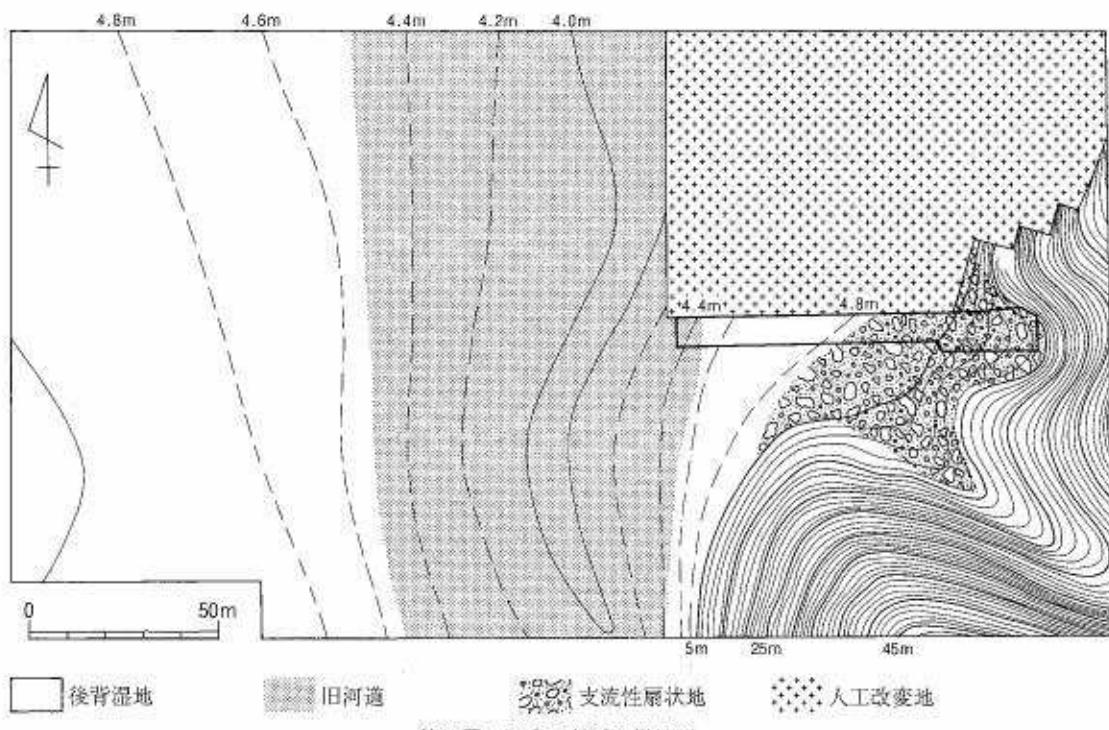
（1）調査区における微地形の分布

本遺跡の調査区は、矢田川下流平野の東端に位置し、そこは平野の東側に分布する山地の西麓にあたる（第95図）。調査区は東西に長く、そこには複数の地形が認められる。調査区の東半部は支流性扇状地に、また西半部は沖積低地に位置する。沖積低地はさらに後背湿地と旧河道に分けられ、調査区中央付近から西部にかけては後背湿地に、調査区の西端には旧河道がみられる（第97図）。

調査区東半部の支流性扇状地は、約11.4%という極めて急な地表傾斜で西方へ高度を下げる。この傾斜は西に向かって急速に減少し、支流性扇状地は調査区中央付近で沖積低地と接する。それより西側の後背湿地はほぼ平坦である。ただし、詳細に観察すると地表高度は西に向かってわずかに減じていく。また、調査区西端の旧河道はほぼ南北に延び、その東部が発掘調査で検出されている。この旧河道は、80~90mの幅をもつと推定され、矢田川の本流跡あるいはそれに近い規模の分流跡と考えられる。

（2）調査区における堆積物の特徴

調査区で観察された堆積物の基本層序は、下位から順に緑灰色のシルト（第98図の堆積物17）、黄褐色の砂質シルト（堆積物16）、黄褐色のシルト（堆積物15）、灰褐色の礫混じり砂質シルト（堆積物14）、



第97図 調査区付近の微地形

黒褐～暗褐色のシルト（堆積物13）、灰色のシルト（堆積物5）と暗黄褐色のシルト（堆積物4）、耕地整理直前の旧耕土（堆積物3）、近年の盛土（堆積物2）、および表土（堆積物1）である。

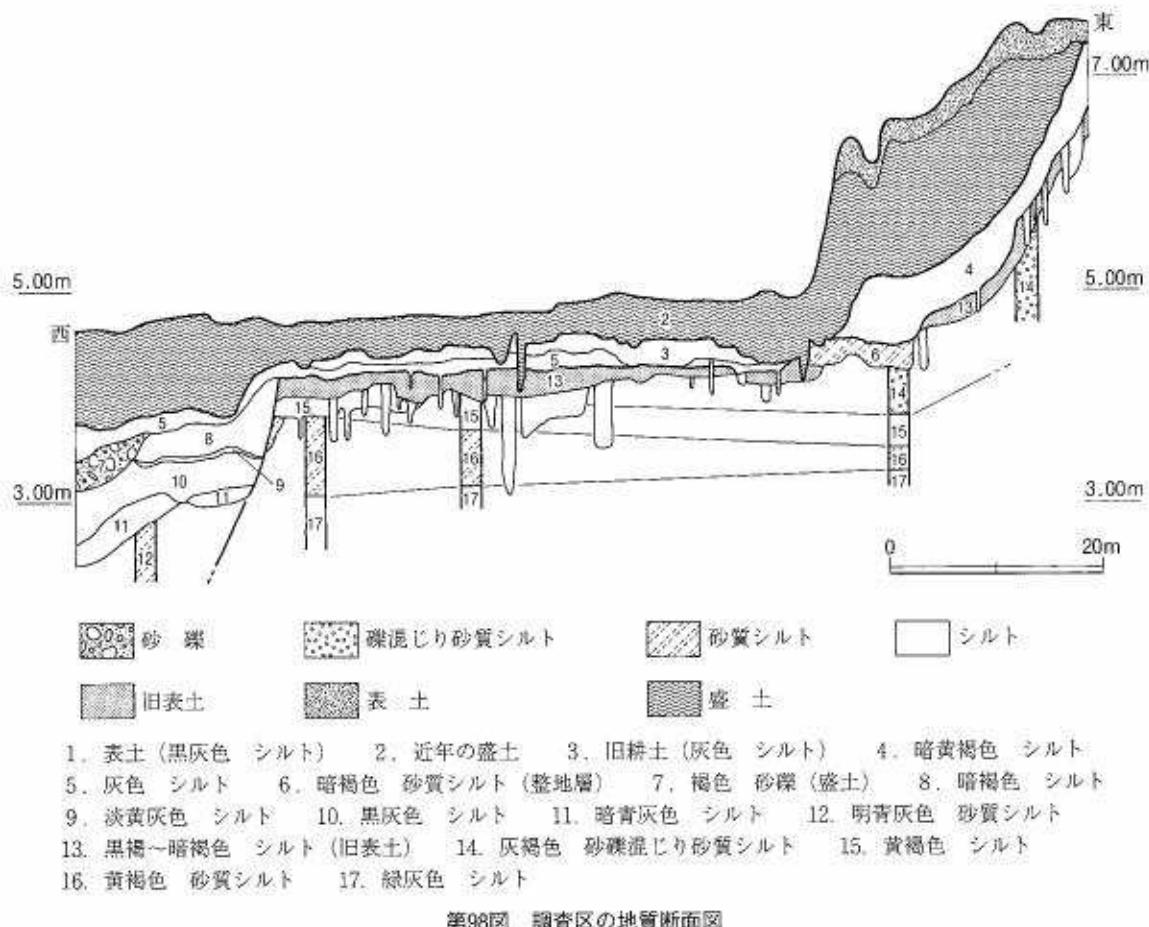
最下位で観察される緑灰色のシルト、黄褐色の砂質シルト、および黄褐色のシルトは矢田川の氾濫にともなう洪水堆積物である。これらは調査区の東端を除くほぼ全域に分布する。各堆積物は西ほど厚くなり、調査区西部では3つの堆積物が1.4m以上の厚さで認められる。調査区では、これらの堆積によって後背湿地が形成されたと考えられる。

灰褐色の礫混じり砂質シルトは調査区東半部で認められる。これは支流性扇状地を構成する堆積物で、東に向かって厚くなる。堆積物には、径1～9cmの角礫が多く混入しており、径50cmのものもみられる。礫の大部分は背後（東側）の山地を構成する安山岩質凝灰岩であり、これはこの堆積物が調査区東側の山地から供給されたことを示す。堆積物は、無層理の状態で、土石流によってたらされたと考えられる。

黒褐～暗褐色のシルトは調査区のほぼ全域に分布する。この堆積物は土壤化が著しく進んだ旧表土と考えられる。堆積物には、古墳時代前期、6～9世紀、および11世紀以降の遺物が含まれ、その下面からは同時代の遺構が多数検出されている。これは、このシルトが短くとも古墳時代前期から11世紀にかけて表土であり続け、その間調査区には洪水がおよばなかったことを物語る。

灰色のシルトと暗黄褐色のシルトは、同じ層準に位置し、11世紀以降のほぼ同時期に堆積したと考えられる。それらのうち灰色のシルトは、矢田川の洪水堆積物で、調査区中央付近から西部にかけて分布する。一方、暗黄褐色のシルトは東側の山地からもたらされたもので、調査区東部にみられる。

調査区西端で検出された旧河道は黒褐～暗褐色のシルトの上面から切り込んでいる。旧河道の堆積物は下位から明青灰色の砂質シルト（第98図の堆積物12）、暗青灰色のシルト（堆積物11）、黒灰色のシルト（堆積物10）、淡黄灰色のシルト（堆積物9）、暗褐色のシルト（堆積物8）、ならびに褐色の砂礫（堆積物7）であり、旧河道の底はこれらのさらに下方にあると考えられる。なお、これらのうち褐色の砂



疊は盛土である。

旧河道を埋積する堆積物はいずれも細粒堆積物であり、それは比較的緩やかな洪水によって埋積されたことが知られる。旧河道堆積物のうち暗青灰色のシルトには、縄文時代晩期や弥生時代中期の遺物が混入し、これらは二次堆積のものでない。また、その上位に位置する黒灰色のシルトには、6～9世紀を中心とする遺物が含まれる。これらのことから、調査区西端では縄文時代晩期以前に矢田川の本流または分流が流下し、その流路は9世紀まで完全に埋積されていなかったと考えられる。この旧河道は調査区中央付近から連続する灰色のシルト（堆積物5）に被覆されている。

(3) 調査区付近の地形環境

これまでに述べた事柄から次のような地形環境の変遷が考察される。

〔縄文時代前期〕 約6,000年前の縄文海進頂期には、矢田川下流部の沖積低地に溺れ谷が形成された。この時期、調査区西半部は海域となり、沖積低地の北東部には砂堆Ⅰがつくられた。

〔縄文時代中・後期〕 約6,000年前以降、海退が起こり、古矢田川の搬出した砂とシルト・粘土が溺れ谷を順次埋積していく。調査区西半部に広がっていた海もやがて埋め立てられ、その付近は陸化した。調査区では、その後まず古矢田川の洪水によってシルトや砂質シルトが堆積し、後背湿地が形成された。ついで東側の山地から土石流が発生した。その結果調査区東半部には、疊混じり砂質シルトが堆積し、支流性扇状地の発達がみられた。

〔縄文時代晩期～弥生時代中期〕 縄文時代晩期の直前に調査区西端を古矢田川の本流または大規模な

分流が流下した。その流路は洪水によって徐々に埋積され、縄文時代晩期以降には浅くなった流路内を矢田川の支流が流れていると考えられる。

〔弥生時代後期～11世紀〕 支流性扇状地が発達して以降、調査区の西端を除く範囲では洪水の発生しない安定した環境が続いた。当時の表土は土壤化が進み、調査区では古墳時代前期、6～9世紀、ならびに11世紀以降に人間活動がなされた。特に6～9世紀には、支流性扇状地の末端付近に長見寺に関連する建物が建てられた。

〔11世紀以降〕 調査区東部には東側の山地からシルトがもたらされた。他方、調査区中央付近から西部にかけてはシルトが洪水とともに堆積した。調査区西端の流路はすでに埋積されており、旧河道は洪水堆積物であるシルトに被覆された。

4. おわりに

本遺跡の調査区は東半部が支流性扇状地に位置し、西部には後背湿地、また西端には旧河道が認められる。それらのうち支流性扇状地は、縄文時代前期から晩期までのある時期に、東側の山地から発生した土石流によって発達した。長見寺に関連する建物はこのような支流性扇状地の末端付近に立地する。調査区付近では、6～9世紀に至るまで長期間にわたって洪水のおよばない安定した環境が続いていた。その間、調査区中央付近にあたる支流性扇状地の末端は後背湿地よりわずかに高かった。この付近の地表には、西へ向かう極めて緩やかな傾斜がみられ、6～9世紀には建物の西側（調査区西端）にまだ完全に埋積されていない流路が存在していた。そのため、支流性扇状地の末端付近では、この流路への排水が容易であったと考えられる。長見寺に関連する建物が支流性扇状地の末端付近に建てられた要因は、これらの点にあったといえよう。

〔註〕

- (1) 沖積層とは沖積低地を構成する堆積物である。
- (2) 広義の沖積層基底礫層とは、約3万年前に堆積した砂礫（低位段丘堆積物）と、それを刻む埋没谷底の砂礫（狭義の沖積層基底礫層）とを指す。約3万年前に堆積した砂礫は最終氷期最寒冷期（約2万年前）に向かう時期の海面低下にともなって下刻された。その結果、そこには巨大な谷が形成され、その周辺は段丘化した。最終氷期最寒冷期を過ぎると、谷の底には砂礫の堆積がみられた。これらの砂礫は類似しているため、ボーリング資料では見分けがつきにくい。
- (3) 埋没谷とは、河川下流部の沖積低地下に埋もれている巨大な谷のことである。この谷は、約2万年前の最終氷期最寒冷期に向かう時期に、海面低下にともなって河川の下刻が行われたために形成された。
- (4) 青木哲哉ほか「山陰海岸東部、矢田川下流低地における完新層の¹⁴C年代」立命館地理学5
1993年

第5章 ま　と　め

第1節 遺　物

1. 縄文時代～弥生時代

- 概　　要** 当該期の土器の出土量は、当遺跡のなかでは多くはない。縄文時代晚期・弥生時代前期・弥生時代中期・弥生時代後期の土器が出土している。
- 縄文時代晚期** 6・8・11・14・16が該当する。いずれも、旧河道および包含層から出土したもので、明確な遺構に伴う資料は認められない。旧河道から出土した土器は、当該河道が埋没し始める時期を示す資料と考えられる。
- 11については、口縁端部にキザミ目があり、滋賀里Ⅲ式に位置付けられる。6については、形態的には弥生時代前期の壺と類似するが、内傾接合である点から、縄文土器の範疇で理解できる。また、胎土も前期の土器とは異なる。また、14についても、内傾接合であることから、同様に考えられる。
- この他、8と16については、無紋粗製土器に分類されるものである。なかでも16については、古海遺跡（鳥取市）B区出土土器の中に類例が認められる。⁽¹⁾
- 弥生時代前期** 7・9・15が該当する。この中で7については、段を有し、前期のなかでも最も古い段階に位置付けられる。⁽²⁾ 弥生時代前期の土器については旧香住町町内では岡畠遺跡で採集された土器に限られていた。この土器は、岡畠遺跡の土器より古く位置付けられるもので、当地における最古の弥生土器と位置付けることができる。
- さらに、但馬においても、段を有する土器は駿坂川原遺跡（豊岡市）に限られ、但馬地域に範囲を広げても、最古級に位置付けることができる。⁽³⁾
- 弥生時代中期** 12・13・17～19が該当する。これらの土器のなかで、12が最も古く、中期前半に位置付けられる。他はほぼ同時期と考えられ、中期後半に位置付けられる。
- 弥生時代後期** 10の1点のみである。後期前半に位置付けられる。

〔註〕

- (1) 平川 誠「古海遺跡発掘調査概報」鳥取市教育委員会 1981
- (2) 大乗寺埋蔵文化財調査団『岡畠遺跡 重要文化財大乗寺障壁画収蔵庫建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』香住町教育委員会 1999
- (3) 谷本 進「但馬地域」「弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編」 1992

2. 古墳時代前期

概要 古墳時代後期の土器に次いで多く出土している。器種としては、壺・甕・高坏・低脚坏・鼓形器台が出土している(第99図)。ここでは、遺跡発見の契機となった土器(第13図)についても、合わせて検討する。特に、一部を除く甕・高坏・低脚坏・器台については、明らかに山陰系の特徴を示している。そこで、当該地域の編年⁽¹⁾を参考に、時期的な検討を加えていくことにしたい。

(1) 器種分類

壺 調査で明らかとなった54と、遺跡発見の契機となった1・2の3個体に限られる。いわゆる山陰系に分類されるAタイプ(1・54)と、小型特殊壺と称されるBタイプ(2)の2タイプに分類できる。

Aタイプ 54と1とでは、口縁部の外傾度に差が認められる。

Bタイプ 2の1個体に限られる。この土器は、台付装飾壺あるいは小型特殊壺と称されるもので、陰刻渦文に分類されるスタンプ文と貝殻腹縁による刺突文によって装飾が施されている。松井⁽²⁾潔によると、当タイプの土器は因幡・東伯耆に分布の中心があり、Ⅷ期(弥生時代後期後半)に限定的に見られるようである。

なお、当タイプの壺については、但馬地域での出土例は報告されていない。

甕 当該期の土器のなかで量的に最も多く出土している。いわゆる山陰系に分類される甕Aと、畿内系に分類される甕B、甕Aと甕Bの折衷型の甕Cの3タイプに分類できる。

甕 A 口縁部の形態的特徴から、より一般的な山陰系のaと、口縁部上半の立ち上がりが短く直立気味のbに細分することができる。

bは24の1個体に限られ、他は全てaに分類される。aの中で最も良好に残存する56を中心に検討すると、①口縁端部を外方へ若干つまみ出す、②体部最大径が肩部付近にある、③体部内面のヘラ削り方向が右方向である、④口縁部の調整は横ナデ調整のみである、といった点を指摘することができる。

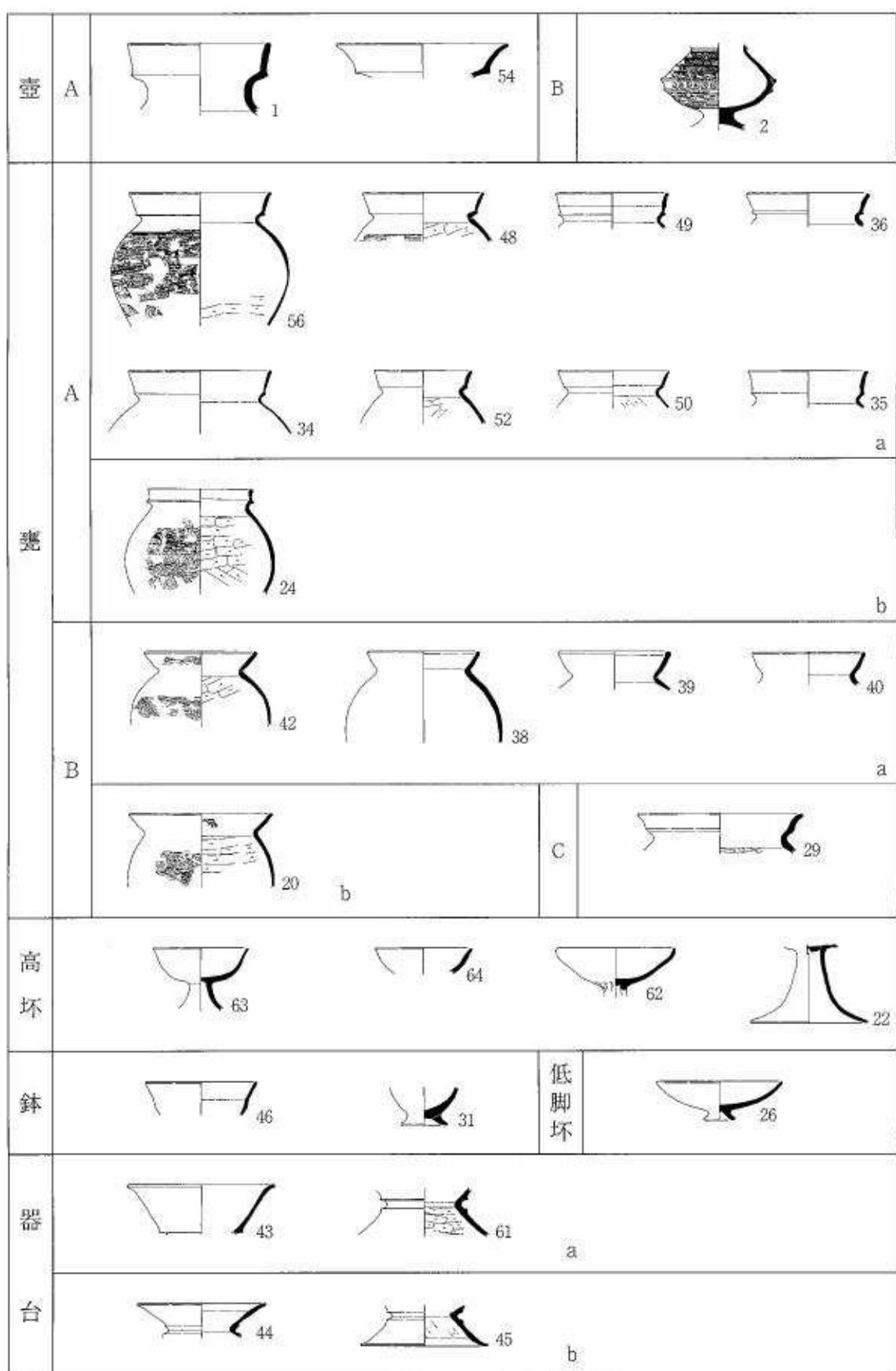
これらの特徴は、松井編年のXⅠ期～XⅡ期に、岩吉遺跡における編年案のV期に、対応するものと考えられる。いずれも、畿内の庄内期に平行するものである。ただし、aについては、若干個体差が認められ、後述するように胎土の特徴にも差が認められることから、時期差を内包しているものと考えられる。

特に36のように、口縁端部に面を有するものはより新しい要素と考えられ、布留式まで下がるものと考えられる。

また、当タイプの甕については、その胎土の特徴から、①より山陰的なもの、②より在地的なもの、の2タイプに細分できる。

bについても、類例は多くないが、上記編年案において、aとほぼ同様の時期あるいはそれ以降の時期に位置付けることができる。

甕 B いわゆる布留式甕の特徴を有するものである。口縁端部の特徴から、a内端面を玉縁状に肥厚させるもの、b端部を肥厚させないもの(20)、の2タイプに細分できる。いずれも、甕Aよりは新しい時期に位置付けられるものである。



第99図 古墳時代前期の土器の分類

甕 C	口縁部は複合口縁をなすが、複合部の稜が緩やかで、器壁も厚い特徴を有する。29の1個体である。布留式甕と山陰系甕の折衷型と考える土器である。このため、甕Bとほぼ同様の時期を考えたい。
高 壱	壺部を中心に分類する。壺部が壺形に近いタイプ(27・63・64)と皿形に近いタイプ(62)に分けることができる。前者については、松井編年のXⅡ～XⅢ期に位置付けられる。脚部と杯部の円盤充填による接合方法も、時期的に一致する。
鉢	31と46の2個体が出土している。31は、秋里遺跡で低脚杯として報告されており、庄内併行期～布留式初頭に位置付けられている。46は小型丸底鉢の一部と考えられる。 ⁽³⁾
低 脚 壱	ほぼ完存する26と脚部のみ残存する47の2個体出土している。当器種については、庄内併行期(谷口編年V期)に出現し、松井編年によると布留式段階まで存続するようである。このなかで、XⅢ期のものに類似する。よって、布留式初頭に位置付けられるものと理解したい。
器 台	43～45・61の4個体出土しているが、いずれも山陰地方に特有の鼓形器台と称されるものである。法量的に、深いタイプ(a)と浅いタイプ(b)に分類できる。最も新しいタイプは、筒部が太く短くなるようで、その極致が庄内式段階のようである。 ⁽⁴⁾ a・bともに当該期に位置付けられると考えられる。さらにa→bと形式的に変化するものと考えられるが、中川によると、両タイプの共伴例が多いようである。 ⁽⁵⁾

(2) 一括資料の検討

以上の検討結果を踏まえ、当該期の遺構に伴う資料の時期について検討を加える。

SB01	甕Bbの共伴から、布留式段階に位置付けられる。共伴する甕Aも布留式の範疇で理解できるもので、高壺もほぼ同様の時期で齟齬は認められない。
P 2	甕Baから、布留式に位置付けられる。
P 3	鉢から、庄内併行期～布留式初頭に位置付けられる。
P 4	甕Baが共伴することから、布留式に位置付けられる。
P 5	甕Aaと甕Abが共伴するが、前者の口縁部の特徴は布留式の範疇で理解できるものである。
P 6	甕Cから、布留式に位置付けられる。
SK01	甕A・甕B・鼓形器台・低脚壺・高壺が共伴する良好な一括資料である。個々の土器をみると庄内式までさかのほるものもあるが、総体的にみて布留式に位置付けられる。

(3) 小 結

以上の検討結果から、各遺構の時期は、概ね布留式の範疇で理解できるものである。当該期の遺構はほぼ同時期に機能していたものと考えられ、遺構相互の時期差を抽出することは困難である。

なお、布留式のなかでのより細かな時期であるが、当地域の編年が確立していないことから、その特定は困難である。ただし、一括資料中に庄内式の範疇で理解できる土器も含まれることから、より庄内式に近い時期を考えたい。

〔註〕

- (1) 松井 潔「東の土器、南の土器—山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態—」『古代吉備 第19集』 1997
谷口恭子『岩吉遺跡Ⅲ 中小河川改修事業大井手川改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査』鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1991
谷口恭子「因幡における弥生時代後期から庄内式併行期の土器について」『庄内式土器研究』22 庄内式土器研究会 2000
湯村 功「庄内式併行期の山陰の様相」『庄内式土器研究』18 庄内式土器研究会 1998
- (2) 前掲(1)
- (3) 加藤利晴・平川 誠『秋里遺跡Ⅰ 建設省、鳥取バイパス及び狐川改修事業に伴う緊急発掘調査の概要』鳥取市教育委員会 1976
- (4) 中川 寧「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」『島根県考古学会誌』第13集 島根県考古学会 1996
- (5) 中川 寧「いわゆる『山陰系土器』についての若干の考察—古墳時代初頭に見られる小型の鼓形器台を中心として—」『立命館大学考古学論集Ⅰ』立命館大学考古学論集刊行会 1997

3. 古墳時代後期～奈良時代の土器

長見寺廃寺から出土した須恵器の多くは包含層および旧河道から出土したものである。その数は図化できた遺物の三分の一以上を占める。遺構出土の遺物に関しては単体での出土が多いため、共伴関係や遺構同士の切り合い、層位的な前後関係による遺物の時期的な検討を行うことは困難である。そのため、須恵器について分類を行った上で、形態的特長を捉えやすい蓋杯を基軸とし時期的な検討を行うこととする。年代の検討を行うにあたっては田辺昭三氏の研究である陶邑古窯跡の編年を基本とし、地域的な特徴を補うため但馬地域の須恵器編年⁽¹⁾のうち、主に鬼神谷窯跡の編年⁽²⁾を参考にする。

須恵器の分類 長見寺廃寺址から出土した須恵器は次のとおりに分類できる（第100図）。

杯蓋 A かえりのある蓋。

Aa 口径が大きい。

Ab 口径が小さい。

B かえりのない蓋。

Ba 器高が高い。

Bb 器高が低い。

H 杯Hに分類される蓋である。

Ha 平坦な天井部をし、肩部に段を持つ。口縁端部に沈線がある。

Hb 天井部にヘラ削りを施し、口径が13～15cm前後。

Hc 天井部にヘラ削りを施し、口径が10cm前後。

Hd 天井部の調整がヘラ切りのみで、口径が13～15cm前後。

He 天井部の調整がヘラ切りのみで、口径が12cm前後。

杯身 A 高台のない杯。

B 高台のある杯。

Ba 体部と底部の境が丸みを帯び、高台の断面が三角形を呈する。

Bb 体部と底部の境より高台が内側に入り、高台の断面が四角形を呈する。

Bc 体部と底部の境ちかくに高台がある。高台の断面が四角形を呈する。

Bd 口径が大きく、長く伸びた高台の断面が台形を呈する。

G 杯蓋Hの天地を逆転させた形態。

Ga 器高が低く、口縁部が開く。

Gb 器高が高く、口縁部が内傾する。

H 立ち上がりのある杯身。杯蓋Hと組み合う。形態的特長から5種類に細分できる。

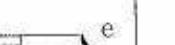
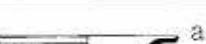
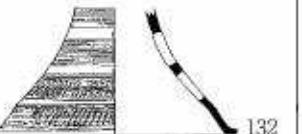
Ha 口縁部の立ち上がりが長く、底部にヘラ削りを施す。

Hb 口縁部の立ち上がりが短く、底部にヘラ削りを施す。口径が13cm前後。

Hc 口縁部の立ち上がりが短く、底部にヘラ削りを施す。口径が9cm前後。

Hd 口縁部の立ち上がりが短く、底部はヘラ切りだがナデを施すものもある。口径が11cm前後。

He 口縁部の立ち上がりはやや長く、底部はヘラ切り後未調整。底部から体部が直線的に開く。口径が13cm前後。

杯 蓋	A	a  b 		
	B	a  b 		
	H	a  b  c  d  e 		
杯 身	A			
	B	a  b  c  d 		
	G	a  b 		
高 杯	H	a  b  c  d  e 		
				
		a  b  c  d 		
壺		a  b  c 		
甕		a  b 	器 台	
平 瓶			土 錘	

第100図 須恵器の分類

高 杯	杯の部分と脚の部分が出土している。 蓋 肩部に段、口縁端部に段を持ちつまみがつく。 a 杯部下半部に列点紋を施す。 b 杯Hに透かしのない短い脚をつけたもの。 c 2段の透かしを持つ脚。 d 透かしのない短い脚。
壺	口縁部分と体部のみが出土している。 a 口縁部が屈曲して開き、口縁端部を上方にのばす。 b 肩部が膨らみ、高台のない丸底の壺。 c 肩部が張り、高台を持つ壺。
甕	口縁部が出土している。 a 「く」の字に短く開いた口縁端部に凹線を持つ。 b 短く直立する口縁部で口縁端部が外反する。
器 台	上下2段の透かしを持つ。
平 瓶	肩が張り稜を持つ小型の平瓶。体部に空気抜きの孔を穿つ。
皿	平高台から短く直線的にのびる体部。底部はヘラ切りのみ。
土 錘	須恵質の土錘。
蓋杯の検討	以上分類を行った上で、蓋杯の形態的特徴から検討を行う。出土した須恵器ではいわゆる杯H・杯Gに分類できるものが多い。特に、杯Hは、調整手法の省略や形態の退化などを捉えることで、時期的な検討が広く行われている。このことから、杯Hの形態的特長を捉え検討を行うこととする。 長見寺廃寺址出土の杯蓋H・杯身Hは、ともにヘラ削りが施されるものと、省略されるものに分けられる。杯蓋、杯身共にHa、Hb、Hcではヘラ削りが施され、Hd、Heでは省略される。杯蓋Haは肩部や口縁端部に段があること、杯身Haは受け部の立ち上がりが長いことから、分類した杯Hのなかでも型式学的にやや古い様相を示す。そのため、蓋の口縁端部に段を持たず、身の立ち上がりの矮小化が進んだHb～Heとは区別する。 杯蓋・杯身Hb～Heでは口径の大きいものと小さいものが認められる。陶邑など畿内における傾向として、杯Hのヘラ削りの省略とともに口径が縮小していることが認められている。しかし、但馬地域においてはヘラ削りの省略が行われる段階でも口径の縮小化が遅れることが八代宮ノ谷窯の研究で指摘されている。 ⁽³⁾ したがって杯Hにおけるヘラ削りの有無を年代の手がかりを得るひとつの指標とすることができる。 そこで近隣の生産遺跡である豊岡市鬼神谷窯跡編年によると、ヘラ削りが省略される杯Hを「IV段階」に位置づけ、その時期を7世紀第二四半期としている。長見寺廃寺址の杯蓋・杯身Hd、Heが形態や法量、調整手法においてこれに似た様相を持つ。これは田辺氏の陶邑編年『Ⅲ期』TK217段階にあたる。続く鬼神谷窯跡編年の「V段階」においてはかえりのついた杯蓋が出現し、長見寺廃寺址の杯蓋A・杯身Gが近似する。また、杯蓋Aは輪状のつまみがつく特徴的な蓋である。これは7世紀後半、出雲を中心とする山陰地方に広く見られるつまみの形態である。八橋第8・9遺跡の編年において、輪状つまみのあ

る蓋の出現は「八橋IX期新」、陶邑編年におけるTK48に推定されている。⁽⁵⁾このことから、長見寺廃寺址の杯蓋A、杯身Gを7世紀後半とする。

以上のように年代を推定した上で、今回行った分類にあてはめると、杯蓋・杯身Hd～Heに形式学的に先行する杯蓋・杯身Hb～Hcを7世紀第一四半期、杯蓋・杯身Haをさらにその前段階の6世紀後半に位置づけることができる。杯Gに続く器種として杯蓋・杯身Bをあげられるが、杯Bの出現期は一般的に7世紀後半からである。長見寺廃寺址出土の須恵器が7世紀代に集中していることから、杯蓋・杯身Bを7世紀後半～8世紀前半と考える。

蓋杯以外の須恵器についても形態的特徴から年代を推定することに止まる。高杯は蓋が1点出土して、そのほかはすべて杯や脚部のみの出土である。脚部であるc・dは透かしの簡略化や省略が行われており、杯Hや杯Gと同時期と考えられる。壺aは、杯蓋Hbと同じ遺構から出土しているが、杯Gaも同じ柱穴から出土しているため、7世紀代とおおまかに捉えることができる。そのほかの須恵器に関しては、特徴的な要素を抽出しにくいため時期を推定することは困難である。

以上、形態的特徴から年代を推定したうえで、須恵器出土の各遺構の時期を求めたのが第25表である。

第25表 古墳時代後期～奈良時代の遺構一覧

時 期		掘立柱建物	土 坑	溝	柱 穴
6世紀	後半			SD04	
7世紀	前半	SB05	SK03 SK04	SD03	P 7・P 12・P 20・P 21
	後半	SB03・SB04・SB06・SB07 SB08・SB09・SB10	SK02		P 8・P 9・P 14・P 16・P 19 P 23・P 26
8世紀	前半			SD06 (SD05)	P 10・P 15・P 24・P 25

() 実測した須恵器以外の須恵器細片や土師器から時期を求める遺構。

土 師 器 須恵器に比べ土師器の出土量は少なく、大部分は破片での出土である。出土した土師器

の器種は壺・土錐であり、壺が大半を占める。ここでは壺について時期的な検討を行う。

出土した壺は、いずれも口縁部から体部にかけての破片ではあるが、口縁部の形態から若干の時期差を見出せる。77は須恵器杯H cと共に、7世紀前半と考えられる。91・92・93は強く外反する口縁部を持つが、91は口縁端部が若干薄くなり、92・93は口縁端部が小さく突起する。これらの傾向は91がより古墳時代に近く、92・93がより奈良時代に近いと言えるが、同時代にも存在している。⁽⁶⁾そのため出土している須恵器の傾向と合わせて、これら土師器の壺は7世紀～8世紀前半にかけての時期に位置づけられる。

遺構の時期 以上の検討結果から、各遺構の時期については次のようにまとめられる。

6世紀後半に建つ掘立柱建物ではなく、7世紀前半になり壇上遺構西側の平坦面にSB05が建てられる。続く7世紀後半になると壇上遺構上にはSB03・SB04、平坦面にはSB06～SB10が建てられる。SB07とSB08、SB09とSB10は重なり合っているため、建物の時期差が

考えられる。SB07とSB08の前後関係は不明であるが、SB10はSB09廃絶後に建てられている。8世紀代に入る掘立柱建物は無いが、柱穴は確認できるため、調査区外に存在する可能性がある。

土坑は7世紀代に収まる。SK03・SK04は、出土した土器から7世紀前半でも第2四半期と考えられる。SK02は返りのない杯蓋がまとまって出土しているため、7世紀後半から8世紀前半と考えられる。

溝は、各時期に存在し、SD04が6世紀後半と最も古くなる。旧河道から出土する須恵器は6世紀代から存在し、出土量が最も多いのが7世紀代の杯である。

柱穴は、7世紀から8世紀前半にかけて存在する。7世紀前半の柱穴のうち、P7だけが第1四半期と考えられ、その他の柱穴は第2四半期に収まる。7世紀後半から8世紀までの柱穴が最も多く、掘立柱建物の増加傾向と類似している。

〔註〕

- (1) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- (2) 竹野町教育委員会『鬼神谷窯跡発掘調査報告』 1990
- (3) 前掲(2)
- (4) 中原 齊「IV 山陰（鳥取、島根）」『須恵器集成図録 第5巻 西日本編』雄山閣 1996
菱田哲郎「近畿地方西部・山陰・山陽」『古代の土器研究会第5回シンポジウム 古代の土器研究 一律令的土器様式の西・東5 7世紀の土器』古代の土器研究会 1997
財団法人松江市教育文化振興事業団『大井窯跡 山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書』 2006
- (5) 小口英一郎・北島大輔・原あづさ「八橋第8・9遺跡における6～7世紀の土器」『八橋第8・9遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団 2004
- (6) 加賀見省一氏の集成による7世紀初頭の箕谷2号墳の甕には、口縁端部が上方に突起するものはなく、8世紀前半と位置づけられた薬師寺遺跡出土の甕には上方に突起する甕が見られる。また、豊岡市山宮遺跡からは杯Bを出土した堅穴住居の床面から、口縁部端部の突起のある甕と無い甕が出土している。加賀見省一「但馬」『古代の土器4 煮沸具（近畿編）』古代の土器研究会 1996
兵庫県教育委員会『山宮遺跡』 1998

〔参考文献〕

- (1) 加賀見省一・山根実生子「但馬」『古代の土器研究5-2 7世紀の土器（近畿西部編）』古代の土器研究会 1998
- (2) 北野博司「須恵器成形技法研究の現状と課題」『古代の土器研究会第6回シンポジウム 古代の土器研究 律令的土器様式の西・東6 須恵器の製作技法とその転換』古代の土器研究会 2001
- (3) 金田明大「宮都出土須恵器の製作技法」『古代の土器研究会第6回シンポジウム 古代の土器研究 律令的土器様式の西・東6 須恵器の製作技法とその転換』古代の土器研究会 2001
- (4) 大阪府立近つ飛鳥博物館『年代のものさし—陶邑の須恵器』大阪府立近つ飛鳥博物館図録40 2006

4. 瓦類

はじめに

第3章第2節で報告したとおり、遺構に伴わないものも含めて、多量とはいえないが、瓦類が出土している（第19表～第22表）。しかし、これらの瓦類は、当遺跡の特徴を検討するうえで、欠かせないものである。以下、時期を中心に検討を加えていきたい。

なお、出土瓦類の内訳は、軒丸瓦・平瓦・鷺尾の3種で、軒平瓦は1片も出土していない。各瓦の出土重量は、軒丸瓦が1.07kg(3%)、丸瓦が6.48kg(21%)、平瓦が21.85kg(70%)、鷺尾が2.04kg(6%)となり、平瓦の出土量が圧倒的に多い。

(1) 軒丸瓦

形式的特徴

4点出土し、3形式に分類した。基本的な特徴は同じであり、ほぼ同時期の所産と考えられる。主な特徴として、①単弁である、②瓦当径に対して中房径が小さい（中房率=中房径+内区径=24）、③中房内の蓮子の数が少ない、④花弁中央に突線が認められる、⑤弁間が楔形文である、⑥花弁が相互に離隔している、⑦瓦当が薄く仕上げられている、⑧周縁が比較的高い、などを指摘することができる。

特に、④⑤⑥⑧などの特徴から、高句麗系に分類されるものと考えられる。⁽¹⁾しかし、この類例は、但馬はもとより日本国内においても認められない。⁽²⁾このため、類例からの時期的検討は困難である。

時期的検討

そこで、先に指摘した形式的特徴から時期を判断すると、7世紀第3四半期～第4四半期を中心とした時期に位置付けられるものと考えられる。ただし、類似する九頭神廃寺例・交野廃寺例の時期・中房率等から、より古く位置付けられる可能性も考えられる。

一方、143の裏面縁部は土手状を呈している（写真図版27）。これは一見したところ、一本作りによる結果を想定させるものである。⁽⁴⁾しかし、瓦当断面の観察（写真図版27）からは、明らかに一本作りによるものではない。このことは、143の瓦は一本作りによる軒丸瓦を知る工人により造られたものと考えられる。一本作り技法の初例は南滋賀廃寺例（660年代創建）⁽³⁾とされている。したがって、この点からも、先に検討した年代が妥当と考えられる。

(2) 丸瓦

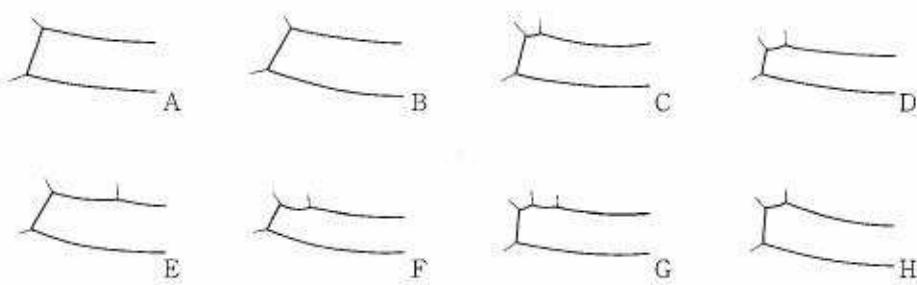
出土量はわずかである。このため、詳細に検討することは困難である。一つの特徴として指摘できる点は、いわゆる玉縁式の丸瓦は1点も認められないことである。

(3) 平瓦

I：叩き

先述したとおり、a～dの4タイプに分類することができた（第85図）。特に、aタイプが圧倒的に多い。ところで、このタイプの叩きは、但馬地域では類例が認められない。さらに、その範囲を西側の因幡・伯耆にむけても、類例は認められない。

ただし、敢えて類例を求めるならば、距離的には離れるが、越前の深草廃寺出土平瓦を指摘することができる。SH IIに分類されるもので、白鳳時代創建とされている。ただし、



第101図 平瓦側面の整形技法

SHⅡは補修瓦として位置付けられているため、時期的にはやや下がるようである。

II : 側面・端面の整形

当遺跡出土の平瓦の側面・端面の整形は基本的にヘラ削りにより行われている。このヘラ削りの施し方により、数型式に分類できる。

側面の分類

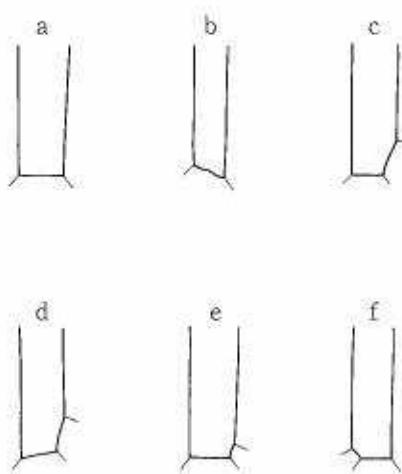
A型式からH型式の8型式に分類できる（第101図：上側が凹面）。

- A型式** 分割面を削り込まずにヘラ削りを施し、断面形がコ字形をなすもの。ヘラ削りは1回。
- B型式** 分割面の凹面側を削り込み、断面が鋭角をなすもの。ヘラ削りは1回。
- C型式** A型式と同様にヘラ削り後、凹面側をヘラ削りによりわずかに面取りするもの。ヘラ削りは2回。
- D型式** 基本的にはC型式と同じであるが、凹面側の面取りが大きく削り込まれるもの。ヘラ削りは2回。
- E型式** B型式と同様にヘラ削り後、凹面側をヘラ削りにより浅く幅広く面取りするもの。ヘラ削りは2回。
- F型式** 基本的にはE型式と同じであるが、面取りの規模がE形式より小さいもの。ヘラ削りは2回。
- G型式** A型式と同様にヘラ削り後、凹面側を2回におよびヘラ削りにより面取りするもの。ヘラ削りは3回。
- H型式** 凸面側・凹面側とともにヘラ削りにより削り込むもの。凸面側の削り込みのほうがわずかである。ヘラ削りは2回。

端面の分類

a型式からf型式の6タイプに分類できる（第102図：右側が凹面）。

- a型式** 端面凸面側を大きく削り込み、断面形がコの字形をなすもの。ヘラ削りは1回。
- b型式** 端面凸面側をa型式より大きく削り込み、断面形が鋭角をなすもの。ヘラ削りは1回。
- c型式** 端面凸面側を大きく削り込むとともに、凹面側をヘラ削りにより面取りするもの。ヘラ削りは2回。
- d型式** 端面分割面をヘラ削りにより整形後、凹面側をヘラ削りにより面取りするもの。ヘラ削りは2回。



第102図 平瓦端面の整形技法

e型式 基本的にはc型式と同じであるが、凹面側の面取りがわずかであるもの。ヘラ削りは2回。

f型式 端面凸面側を大きく削り込み、さらに凸面側をヘラ削りにより面取りするもの。面取りの規模はわずかである。ヘラ削りは2回。

整形技法の検討 以上、側面・端面の整形技法の分類を行った。以下、その特徴について検討してみたい。

側面 最も多く認められる整形型式はC型式とF型式の2型式で、ついでA型式が多い（第19表～第22表）。他の型式については、1点ずつ認められるに過ぎない。よって、当遺跡出土平瓦の側面整形は、C型式とF型式が主流であったとみることができる。

ところで、最も良好に残存する5（第14図）においては、両側面が残存する。ここで注目されるのは、両側の整形技法が異なり、その技法が先に主流をなすとされたC型式とF型式であることである。したがって、C型式・F型式の2型式は、同じ工人あるいは工人組織内において使用された技法であるものと理解できる。

次に、ヘラ削りの方向について検討する。主流型式のなかで、C型式では、その方向を確認できたものは全て上→下の方向（広端面を下にした場合）である。一方、F型式については、上→下方向が多数を占めるが、逆方向も認められた。

端面 a型式が3例、c型式とd型式が2例認められた以外は、いずれも1例ずつにとどまり、側面整形のように特定の型式に集中する傾向は認められない（第19表～第22表）。

ヘラ削りの方向は、右→左方向が多いが、整形技法との密接な関係は認められない。

III：他の特徴

ここでは、布目・胎土・焼成について検討する。

布目 1cmあたり9本～10本の布目が最も多く認められる。粗いもので7本、細かいもので12本の布目が認められる。このほか、一部で紺痕が認められたが、その縫い目を観察することはできなかった。

胎土 いずれの瓦も数mm大の砂粒が含まれている。3・4mm大のものが多い。

焼成 全体的に良好なものはわずかで、焼成が不十分なものが多い。良好なものは須恵器に焼成されている。

IV：小結

年代 以上の検討結果を踏まえ、当遺跡出土平瓦の年代的な検討をしたい。先に検討したように、類例を欠くため、類例からの検討は困難である。ただし、凹面の観察から、桶巻造りにより造られていることから、7世紀代の所産と考えたい。

(4) 鳥尾

山陰型鳥尾 4点出土している。178を除く3点については、いわゆる「山陰型鳥尾」（第103図）と称されるものである。「山陰型鳥尾」の特徴として、一般的に以下の点が指摘されている。

①鳥取県から島根県にかけて分布する、②縦帯と段を細い貼付け突帯で表現する、③縦帯の前方に鱗状の文様を沈線であらわす、④内外面に須恵器と同じように平行あるいは同

心円状の叩き痕を残す例が多く、須恵器工人集団により製作されたと考えられる、等である。

類 例 まず、先に紹介した山陰型鷲尾の特徴でその分布が鳥取県から島根県といわれるよう、長見寺廃寺例を除いては、山陰型鷲尾の出土は、但馬はもとより兵庫県内では例を見ないものである。

鳥取県および島根県での類例を列挙すると、現在報告書等で確認できるのは、13遺跡で出土例が確認されている⁽⁶⁾（第26・27表）。その分布は因幡・伯耆・出雲に限られる（第104・105図）。遺跡の種類は、山津窯出土例などを除いては、寺院跡からの出土例が圧倒的である。また、その年代的

位置付けであるが、古くは山津窯で7世紀初頭まで遡らせている以外は、白鳳時代を中心にして位置付けられている。

既往の研究 これらの類例をもとに、大脇潔⁽⁷⁾・中原齊⁽⁸⁾・岸本浩忠らによって山陰型鷲尾についての検討がなされている。

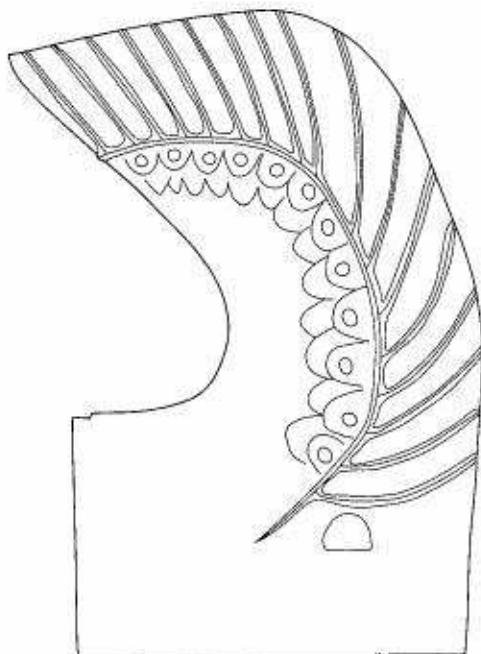
まず、大脇潔は、全国の鷲尾を集大成するなかで、縦帶や鱗の放射線を突帯で、縦帶内側を沈線表現する一群を第二様式第三形式に分類し、鳥取県地方独特の鷲尾と指摘している。その後、類例の増加に伴い、「山陰系の鷲尾」と表現し、縦帶と段を細い貼付け突帯で表現する点を共通の属性として指摘されている。また、山陰型鷲尾が出土する寺では、「古新羅系軒丸瓦」をもつ寺が多いと指摘されている。

中原齊は、上淀廃寺の報告において、鳥取県・島根県で8遺跡の分布を確認し、はじめて「山陰型鷲尾」の呼称を与えていた。そして、玉鉢等ヶ坪廃寺例との紋様・調整等の類似から、山陰型鷲尾は同系列工房で製作された可能性が高いと指摘されている。また、近年では、山陰型鷲尾の成立を、高句麗や新羅の鷲尾の影響のもとで成立したものとの考え方を示している。⁽¹⁰⁾

岸本浩忠は、山陰型鷲尾の出土例を集めるとともに、縦帶・鱗部等の表現方法から、①縦帶が沈線で、鱗部を削りで表現する型式、②縦帶を貼り付け突帯、鱗部を削りで表現する型式、③縦帶・鱗部を貼り付け突帯で表現し、鱗文様内に珠文を持つ型式、の3タイプに分類している。そして、①→②・③と変遷するとし、前者を7世紀第3四半期に、後者を7世紀第4四半期に位置付けている。

長見寺例の検討 最も良好に残存する176を中心に検討する。鱗部を突帯で表現することから、岸本分類の③型式に分類されるものである。よって、長見寺廃寺例も7世紀第4四半期を中心とした時期に位置付けられるものと考えられる。これは、軒丸瓦の時期と一致するものである。

また、上淀廃寺では、鷲尾を鷲尾A・鷲尾B・鷲尾Cの3タイプに復元されている。⁽¹¹⁾ こ



第103図 山陰型鷲尾

のなかで、鷲尾Aと鷲尾Bは大型であるのに対して、鷲尾Cはより小型であるとされている。これをもとに突帯の規模・鱗部の厚さから判断して、長見寺廃寺出土例は小型の鷲尾Cに相当するものと考えられる。⁽¹²⁾ ただし、厳密には、長見寺廃寺例のほうが突帯の規模が小型であることから、より小規模な鷲尾であったことが想定される。

なお、突帯については、長見寺廃寺例がかなりシャープなつくりであるのに対して、小野遺跡例は、断面形が蒲鉾形をなし、明らかに異なる。したがって、岸本分類の③型式については、将来的には細分が可能と考えられる。さらに、長見寺廃寺例の胎土の特徴は、小野遺跡例とは明らかに異なり、上淀廃寺例に類似する。よって、上記の細分可能の前提として、製作工人あるいは生産地の違いも考慮に入れる必要があろう。

(5) 小 結

瓦類の年代 以上、軒丸瓦・平瓦・鷲尾について検討してきた。この結果、長見寺廃寺址出土瓦類は、いずれも7世紀第4四半期を中心とした時期に位置付けられることが明らかとなった。

山陰型鷲尾 また、長見寺廃寺址での山陰型鷲尾の出土から、その分布がより東の但馬まで拡がることが明らかとなった。これは、長見寺の創建にあたって、因幡・伯耆との繋がりがあったことを意味するものと考えられる。前項での当該期の須恵器の分析においても、山陰地域に特徴的な杯身(138)・杯蓋(133)が出土していることも、一連の動きと理解することができる。

また、中原が山陰型鷲尾の成立にあたって高句麗・新羅の影響を考えているが、長見寺廃寺から出土した軒丸瓦が高句麗系の特徴を有する点は注目される。

なお、鷲尾等が出土しているものの、先述したように、平瓦・丸瓦の出土量は極めて少ない。後世の搅乱・移動も考えられるが、当初からその量は少なかったものと考えたい。このことから、屋根全面に瓦が葺かれていたのではなく、その一部に限定して葺かれていたのではないかと考えられる。つまり、大棟上部に平瓦と軒丸瓦を使用し、その両端に鷲尾が据えられていた様子が想定できる。

最後に、この鷲尾については、遺跡周辺で焼成されたのではなく、上淀廃寺例との胎土の類似から、山津窯を含めた山陰地方で生産されたものが持ち込まれたものと考えたい。このルートについては、当地が当時の主要官道である山陰道から外れていることから、陸上ルートよりも海上ルートを考える必要があるのではないかと考えられる。

〔註〕

- (1) 上田 瞳「高句麗系軒丸瓦と渡来系氏族—出土瓦から見た河内の古代寺院と氏族3—」『瓦衣千年—森 郁夫先生還暦記念論文集—』森 郁夫先生還暦記念論文集刊行会 1999
- (2) 森 郁夫先生に実見していただいたところ、同文の類例はないとの御教示をいただいた。ただし、花弁の特徴が類似するものとして、九頭神廃寺例(大阪府枚方市)・交野廃寺例(大阪府交野市)があげられるとのことである。ただし、間弁の特徴は明らかに異なる。
- (3) 前掲(1)において、第2四半期中頃に位置付けられている。
- (4) 類例として老司式軒丸瓦が挙げられる。森 郁夫『日本の古代瓦』雄山閣 1991

第26表 山陰型鷲尾一覧表 (1)

No	遺跡名	旧国名	住所	時期	残存部位	胎土	焼成
1	岩井廃寺	因幡	鳥取県岩美郡岩美町大字岩井字大野138番地	白鳳～奈良時代	鰐部	須恵質	
2	吉岡大海廃寺	因幡	鳥取県鳥取市吉岡温泉町字丸山	奈良時代初頭	鰐部		
3	玉鉢等ヶ坪廃寺跡	因幡	鳥取県岩美郡国府町大字玉鉢字等ヶ坪	7世紀後半	反羽端・胴部・縦帶部	瓦質	良好
4	大権寺遺跡	因幡	鳥取県岩美郡国府町	白鳳時代			
5	上原南遺跡	因幡	鳥取県鳥取市氣高町				
6	上流廃寺	伯耆	鳥取県西伯郡淀江町大字福岡	白鳳時代	縦帶・鰐部	須恵質	良好
7	大御堂廃寺	伯耆	鳥取県倉吉市馳経寺町字大御堂	奈良時代	縦帶	須恵質	
8	野方・弥陀ヶ平廃寺	伯耆	鳥取県東伯郡東郷町野方字宝垣・字西ノ尾	7世紀後半	鰐部		
9	山津窯跡 1号窯	出雲	島根県松江市大井町	TK209平行期(7世紀初頭)	縦帶～鰐部	須恵質	良好
10	山津窯跡 2号窯	出雲	島根県松江市大井町	7世紀代	縦帶・鰐部		
11	寺の前遺跡 (四天王寺跡)	出雲	島根県松江市山代町				
12	小野遺跡	出雲	島根県簸川郡簸川町神水小野	8世紀～9世紀	縦帶・鰐部	須恵質	良好
13	来美廃寺	出雲	島根県松江市矢田町	7世紀後半	腹部左側	須恵質	
14	長見寺廃寺址	但馬	兵庫県美方郡香美町香住区長見寺	7世紀後半	鰐部	須恵質	良好

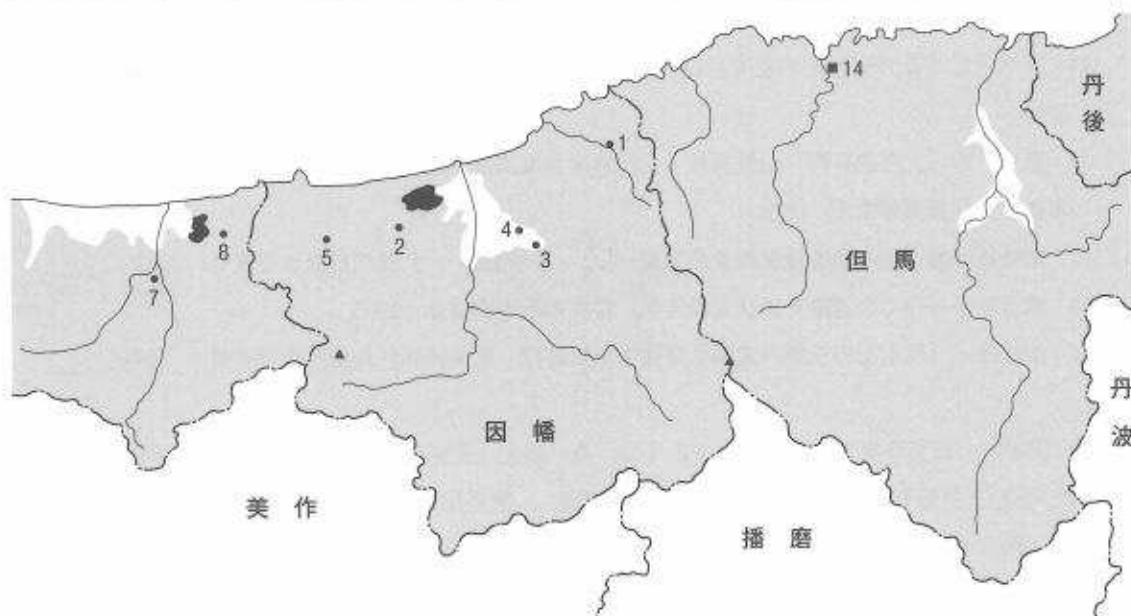
* 時期等の表現は、文献に使用されたものを使用した。



第104図 山陰型鷲尾出土遺跡の分布 (1)

第27表 山陰型鶴尾一覧表(2)

調整(表面)	調整(裏面)	備考	遺跡の特徴	立地	文献
平行叩き	同心円文	具体的記述なし・出土地点は本文と表とでは異なる。	寺跡	斜面	①
		報文では「玉鉢等ヶ坪廃寺・野方・弥陀ヶ平廃寺例に近い」	寺跡	段丘面	②
叩き目	同心円文	実見	寺跡	沖積低地	③
		詳細不明・出土したとの記述のみ	寺院?		④
					⑤
平行叩き→ナデ調整	同心円文	実見	寺跡	支流性扇状地	⑥~⑧
平行叩き	同心円文	創建は7世紀中頃。 断面三角形突帯。実見。	寺跡	沖積低地	⑨
			寺跡	丘陵	⑩
ナデ調整	叩きの痕跡 (腹部)	報文写真で確認。	窯跡		⑪
	ハケ調整	厚み2.5~4.5cm。焼成・調整等詳細不明。 「来美廃寺と類似」との記載。	窯跡		⑫
					⑬
平行叩き	同心円紋	実見。	郡寺 or 豪族施設	支流性扇状地 ・沖積低地	
ナデ調整	同心円文	器壁2.6cm	寺跡	丘陵	⑭
平行叩き	同心円文		寺跡	支流性扇状地 ・沖積低地	



第105図 山陰型鶴尾出土遺跡の分布(2)

- (5) 斎藤秀一『深草廃寺 第4次発掘調査概要報告』福井県武生市教育委員会 1996
- (6) 岸本浩忠「鳥取県内の鷦尾—山陰系鷦尾を中心に—」『郷土と博物館』第93号 鳥取県立博物館 2004
- (7) 大脇 潔『日本古代の鷦尾』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980
大脇 潔『日本の美術 第392号 鷦尾』1999
- (8) 中原 齊『第5章 出土遺物 第1節 瓦』『上淀廃寺』鳥取県淀江町教育委員会 1995
- (9) 前掲(6)。なお、第26・27表作成にあたっては、中原 齊氏から御教示をいただいた。
- (10) 中原 齊氏の御教示による。
- (11) 中原 齊他『上淀廃寺』鳥取県淀江町教育委員会 1995
- (12) 米子市教育委員会岩田文章氏のご好意により実見させていただき、実際に長見寺廃寺出土例と比較・検討させていただいた。
- (13) 島根県斐川町教育委員会宍道年弘氏のご好意により、実見させていただいた。

〔第27表参考文献〕

- ① 中島伸二『岩美町内遺跡発掘調査報告書VI (大谷地区・岩井地区)』岩美町教育委員会 2002
- ② 船井武彦『面影山古墳群・吉岡遺跡発掘調査概要報告書』鳥取市教育委員会 1987
- ③ 津川ひとみ『玉鉢等ヶ坪廃寺跡発掘調査報告書—一般県道津ノ井国府線拡幅工事に伴う発掘調査報告書一』鳥取県岩美郡国府町教育委員会 1991
- ④ 岸本浩忠「鳥取県内の鷦尾—山陰系鷦尾を中心に—」『郷土と博物館』第93号 鳥取県立博物館 2004
- ⑤ 中原 齊『上淀廃寺』鳥取県淀江町教育委員会 1995
- ⑥ 岩田文章『上淀廃寺跡IV 第10次～第12次発掘調査報告書』淀江町教育委員会 2004
- ⑦ 岩田文章『上淀廃寺跡V 第14次発掘調査報告書』淀江町教育委員会 2004
- ⑧ 岩田文章『福岡柳谷遺跡 (上淀廃寺第9次調査含む) 発掘調査報告書』淀江町教育委員会 2002
- ⑨ 真田廣幸『史跡 大御堂廃寺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会 2001
- ⑩ 岸本活忠「野方弥陀ヶ平廃寺」「鳥取県立博物館所蔵 古代寺院関係資料集」鳥取県立博物館 2003
- ⑪ 藤原 哲『大井窯跡群 山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2006
- ⑫ 岡崎雄二郎『山津窯跡発掘調査報告書—2・3号窯跡—』松江市教育委員会 2003
- ⑬ 濑古涼子『寺の前遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会 1995
- ⑭ 柳浦俊一『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書12 来美廃寺』島根県教育委員会 1998

※ 最後に、長見寺廃寺址出土瓦については、森 郁夫（帝塚山大学）・真田廣幸（鳥取県倉吉市教育委員会）・根鈴智津子（鳥取県倉吉市教育委員会）・岡平拓也（鳥取県倉吉市教育委員会）・中原 齊（鳥取県教育委員会）・菱田哲郎（京都府立大学）・岩田文章（鳥取県米子市教育委員会）・宍道年弘（島根県斐川町教育委員会）の各氏に瓦類を実見していただき、多くの御教示をいただいた。改めて、感謝の意を表したい。

5. 平安時代後期の土器

- はじめに** 当該期の土器は、量的には少ない。また、遺構に伴うものは柱穴から出土した2点と、旧河道から出土した3点に限られる。ここでは、時期的な検討を主眼とする。
- 器種** 土師器・須恵器・青磁が出土しているが、土師器の椀が圧倒的に多く出土している。
- 土師器椀** 梗と托に分類できる。
- 椀** 底部にわずかに平高台の痕跡をとどめる点を特徴とする。底部は全て、回転糸切りにより切り離されている。
 類例については、香美町内では、古く八原南住遺跡の調査で明らかになっている。⁽¹⁾ また、矢田川上流域にあたる美方・宮ノ前遺跡（現香美町）においても、出土例が認められる。⁽²⁾
 八原南住遺跡の報告では、C-7拡大調査区堅穴遺構出土の土師器椀が、特に底部が椀のなかでも平底に近いタイプに分類できるものである。そして、「12~13世紀代より古く位置づけられる」と判断されている。
- また潮崎 誠は、柄江大ヶ崎遺跡（豊岡市）の報告において、当該遺跡出土の土師器の検討を行っている。⁽³⁾ 八原南住遺跡例を含めた椀を「回転台土師器」として理解し、第2群に分類するとともに、11世紀~12世紀のなかで理解できるものと結論付けられている。
- さらに、鳥取県において、八峰 興により、当該期の土師器の編年が行われている。⁽⁴⁾ これによると、同タイプの土師器椀は鳥取県においても一般的で、鳥取中世Ⅰ期（11世紀）に位置付けられている。これは、但馬における検討結果とも一致する。
- 托** 180と189の2個体が出土している。椀と異なり、底部に糸切りの痕跡は認められない。底部のみで詳細な検討は困難であるが、時期的には、椀とほぼ同様の時期と考えられる。
- 須恵器椀** 底部形態が平高台を有するタイプ（椀A）と輪高台を有するタイプ（椀B）に分類できる。ただし、椀Aは181、椀Bは190の、それぞれ1個体である。
 梗Aについては、その形態から、11世紀~12世紀の時期が考えられる。一方椀Bについては椀Aよりも古く位置付けられ、10世紀~11世紀代が考えられる。
- 他** 須恵器の甕については、須恵器椀Aとほぼ同時期と考えられる。
- 小結** 以上から、当該期の土器は、概ね11世紀を中心とした時期に位置付けることができる。したがって、当該期の土器を伴う柱穴については、11世紀代と位置付けたい。また、旧河道に関しては、11世紀代にはほぼ埋没したものと考えることができる。

[註]

- (1) 濑戸谷 啓「城崎郡香住町八原南住遺跡発掘調査報告」『兵庫県埋蔵文化財調査集報 第3集』兵庫県社会文化協会 1976
- (2) 濑戸谷 啓『美方・宮ノ前遺跡一団体営土地改良総合整備事業にかかる確認調査事業概要報告書一』美方町教育委員会 1991
- (3) 潮崎 誠「柄江大ヶ崎遺跡確認調査概要報告」「とよおか発掘情報」第2号 豊岡市出土文化財管理センター 1996
- (4) 八峰 興「山陰における中世土器の変遷について」「中近世土器の基礎研究XIII」日本中世土器研究会 1998

第2節 遺構

1. 遺構の変遷

はじめに 前節において、今回の調査で明らかとなった遺物について、時期等を中心に検討を加えてきた。以下では、この検討結果をもとに、遺構の切り合い関係等を踏まえて、遺構の変遷についてまとめていきたい。

時期については、第3章でも報告してきたように、①縄文時代から古墳時代前期、②古墳時代後期から奈良時代、③平安時代以降、の大きく3時期に分けることができる。そこで、この3時期をⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期と呼称し、時期ごとに遺構の変遷をまとめていくことにする。

(1) Ⅰ期（縄文時代～古墳時代前期：第106図）

縄文時代晩期～弥生時代前期（Ⅰ-1期）・弥生時代中期（Ⅰ-2期）、古墳時代前期（Ⅰ-3期）とに、分けることができる。

I-1期 前節での検討結果から、縄文時代晩期～弥生時代前期の土器が出土している。遺構としては、旧河道に限られる。なお、本遺跡発見の契機となった石器は、縄文時代前期まで遡るものである。今回の調査では当該期の遺構・遺物は見つからなかったが、当該期まで遡る可能性を指摘しておきたい。

I-2期 弥生時代中期が該当する。遺構としては、柱穴数穴に限られる。その分布も平坦部に限られる。また、旧河道内から弥生時代後期の土器が出土していることから、当期についても、ある程度機能していたものと考えられる。

I-3期 古墳時代前期が該当する。遺構としては、掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝が検出されている。当該期の遺構についても、その分布は平坦部に限られる。また、旧河道についても、次の時期の状況から、当期においても機能していたものと考えられる。

なお、当該期の一括資料に関しては、時期差を見出すことはできなかった。しかし、遺構の分布からは、一部平面的に重複している。よって、全ての遺構が同時期に機能したのではなく、わずかに時期幅を内包しているものと考えられる。

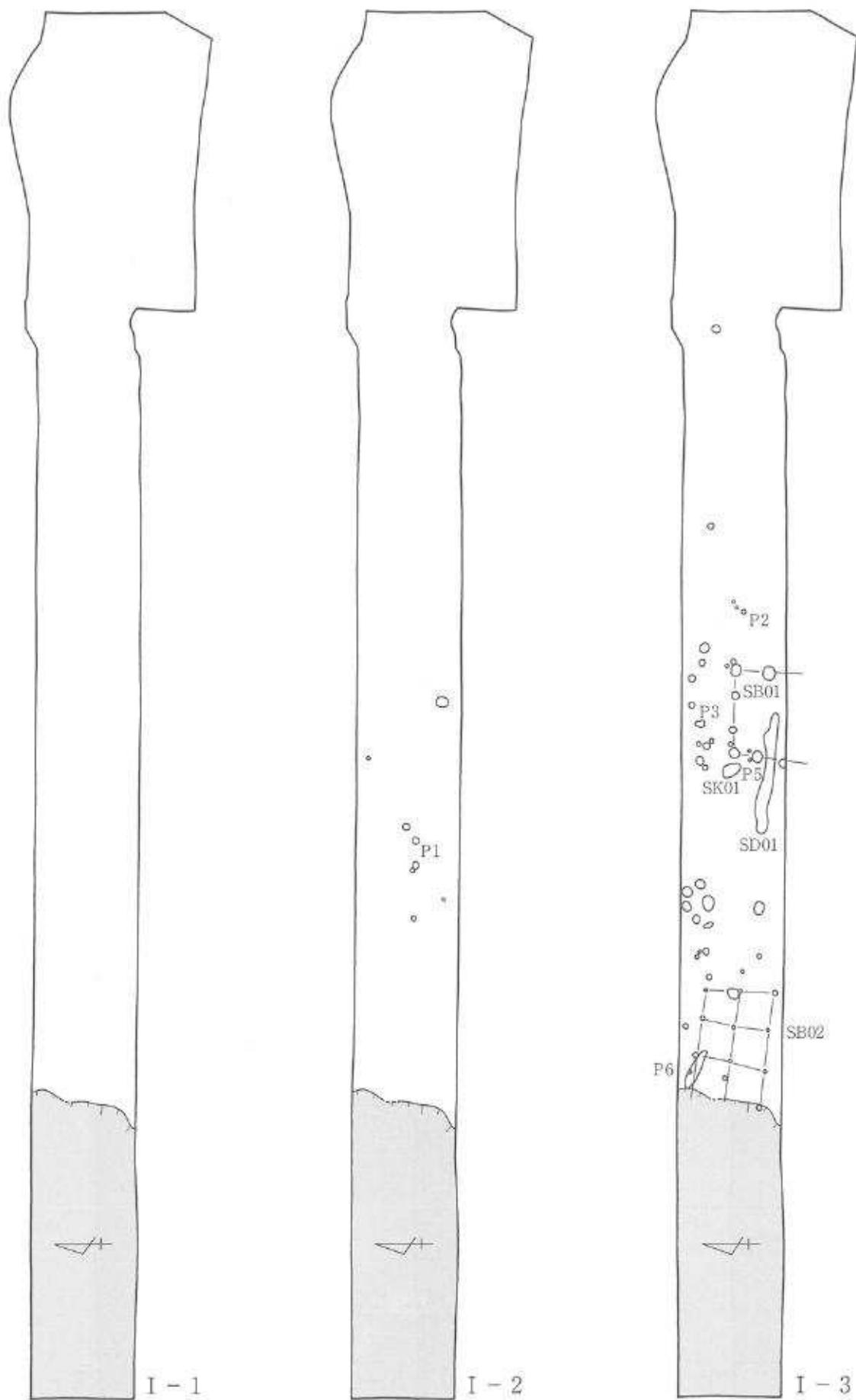
(2) Ⅱ期（古墳時代後期～奈良時代：第107図・第108図）

6世紀後半（Ⅱ-1期）・7世紀前半（Ⅱ-2期）・7世紀後半（Ⅱ-3期）・8世紀前半（Ⅱ-4期）の4期に細分できる。

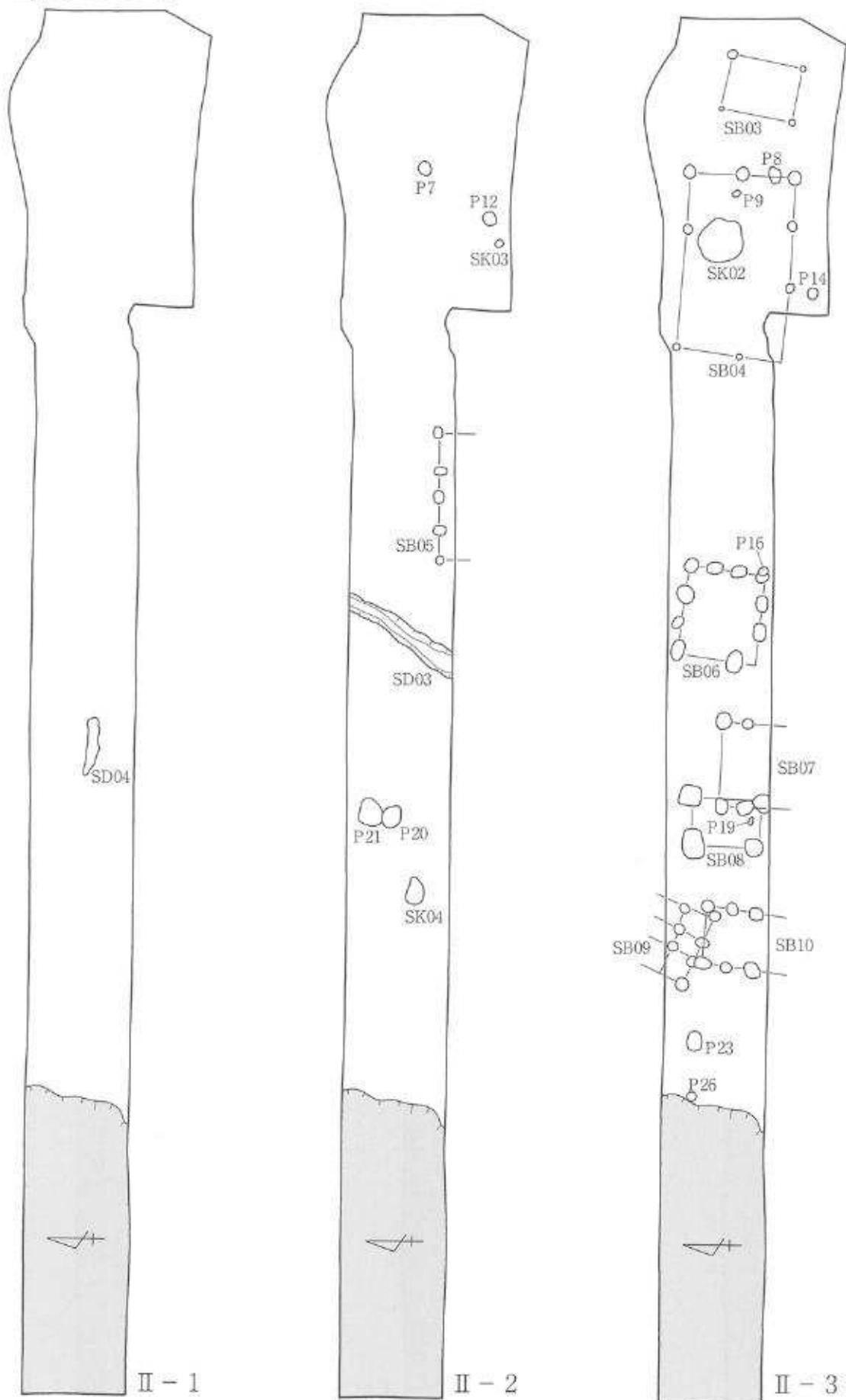
Ⅱ-1期 確実に当該期に位置付けられるのは、SD04のみである。溝状遺構として報告しているが、その断面形から判断して、水路・区画の機能よりも板状のものを建てるための機能が考えられる。ただし、これに付随する遺構は検出されていないため、その性格を特定することは困難である。

なお、当該期の遺物は須恵器を中心と少なからず出土している。よって、当該期の遺構は、周辺には存在するものと考えられる。そして、当該期が、後述する長見寺建立の基礎となったものと考えられる。

第2節 1. 遺構の変遷

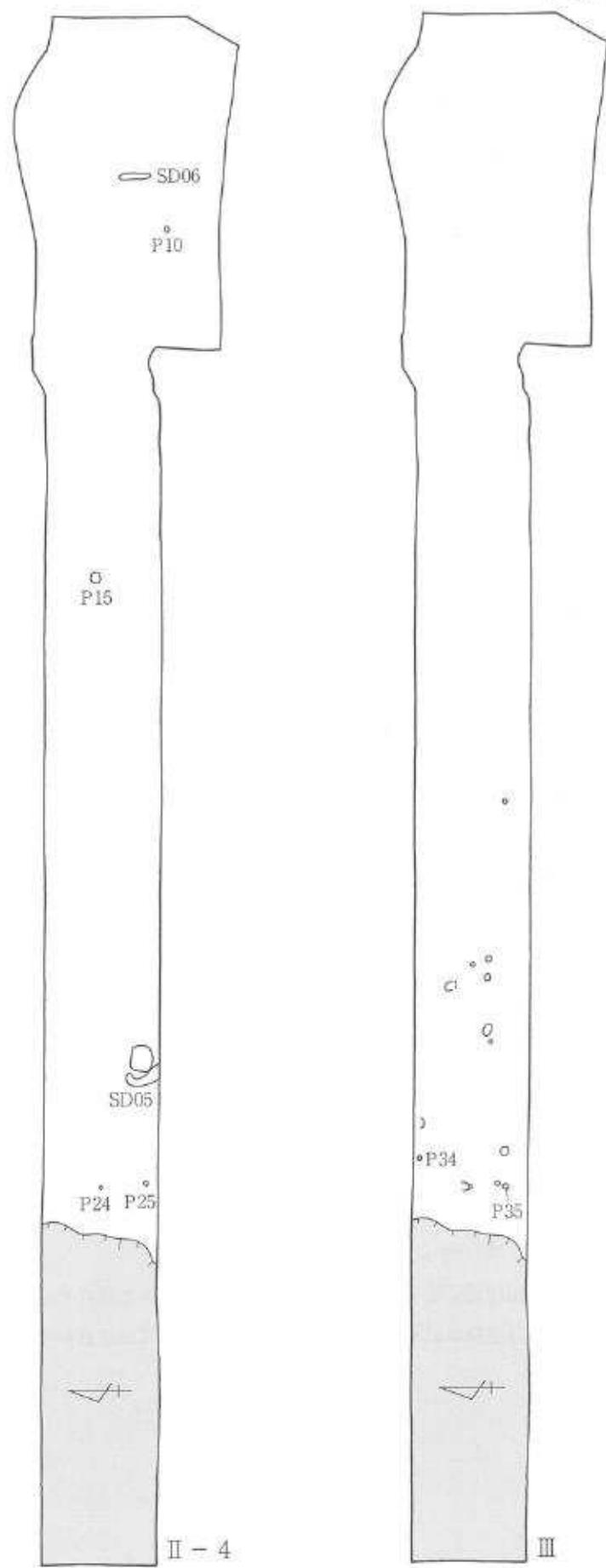


第106図 I期の遺構



第107図 II期の遺構 (1)

第2節 1. 遺構の変遷



第106図 II期の遺構(2)・III期の遺構

II - 2 期 掘立柱建物跡 1 棟 (SB05)・柱穴 4 穴 (P 7・P 12・P 20・P 21)・土坑 2 基 (SK03・SK04)・溝 1 条 (SD03) が検出されている。

遺構は、拡張部から平坦部にかけて検出されている。ただし、壇状遺構上では当該期の遺構は検出されていない。なお、建物は SB05 の 1 棟のみであるが、その棟軸方向は、後述する II - 3 期とほぼ同じである。

II - 3 期 掘立柱建物跡 7 棟 (SB03・SB04・SB06・SB07・SB08・SB09・SB10)・柱穴 7 穴 (P 8・P 9・P 14・P 16・P 19・P 23・P 26)・土坑 1 基 (SK02) が検出されている。今回の調査で検出された遺構のなかで、当期の遺構が最も多く検出されている。遺構の分布に顕著な偏りは認められず、調査区全域で検出されている。この他、旧河道についても当該期においても機能していたものと考えられる。さらに、当該期になってはじめて壇状遺構上で遺構が検出されている。よって、当該期に壇状遺構が造られたものと考えられる。

掘立柱建物も、大半が当期に集中している。しかし、平面的に建物相互が重複するものがあり、その棟軸方向に顕著な差が認められることから、実際には時期差が存在したものと考えられる。

また、壇状遺構上で検出された SB03 については、柱穴の規模が小さく、建物自体も小規模である。このため、SB03 が当該期の中心的な建物であったかは疑問である。

特に、時期の特定は困難であるが、旧河道内で確認した礫敷きについても、当該期を中心とした時期を考えたい。

このほか、直接遺構からは出土していないが、軒丸瓦・山陰型鷲尾も当該期に位置付けられる遺物である。これらの遺物出土位置の分布は、調査区全域に拡がり、遺構の分布と一致するものである。

なお、当期の遺構の性格については、次項で検討する。

II - 4 期 柱穴 4 穴 (P 10・P 15・P 24・P 25)・溝 2 条 (SD05・SD06) が検出されている。当該期の遺構は、前期と比較して極端に少なくなり、その分布も、拡張部と平坦部西側に偏り、平坦部中央部ではほとんど認められなくなる。また、その規模も小規模なものである。遺物の出土量も明らかに少ない。

なお、次期に旧河道が埋め立てられることから、当該期においても旧河道は機能していたものと考えられる。

(3) III 期 (平安時代後期: 第108図)

柱穴数穴と旧河道に限られる。柱穴は、P 34・P 35など数穴で、平坦部の西側に分布する。拡張部では遺構は認められない。そして、当該期に旧河道がほぼ埋め立てられる。

2. 長見寺廃寺について

はじめに

今回の調査で明らかとなった遺構で、最も注目されるのがⅡ期の遺構である。特に、当地に残存する長見寺廃寺伝承とのからみも含めて、7世紀第4四半期に位置付けられるⅡ-3期の遺構が注目される。当該期は、遺構・遺物が今回の調査のなかで最も多く、本遺跡の中心をなす時期と考えられる。そこで、本項では、当該期の遺構・遺物から、その遺構群の性格を検討してみたい。

(1) Ⅱ-3期の遺構・遺物についての検討

遺 構

掘立柱建物跡・柱穴等が検出されている。特に、掘立柱建物跡を構成する柱穴・および他の柱穴の多くはその掘り方の平面形が方形を意識しており、その規模も大型である。

また、柱穴に関して、特にSB08-P1・P4でみつかった巨大な柱が注目される。直径70cm弱からなる柱で、残存する当該期の建物に使用された柱のなかでも大型に分類されるものである。ちなみに、6世紀中葉創建とされる山田寺金堂に使用されていた柱の直径は60cmとされており、⁽¹⁾長見寺廃寺例はこれを上回るものである。このような巨大な柱から、当該期の遺構については、官衙あるいは寺院跡を想定させるものである。さらには、基壇状の遺構（壇状遺構）についても、この想定をより大きくさせるものである。

一方、巨大な柱を建てた柱穴掘り方内には礎板等の基礎は認められず、柱が大きく沈み込んでいる様子が観察された（巻首図版5・6）。建築技術の未熟さが感じられる。

遺 物

当該期の遺物として注目されるのが、瓦類である。当該期の遺構に直接伴うものではないが、先に検討した瓦類の時期と一致する。なかでも、鷲尾の出土が注目される。

鷲尾は寺院・生産窯・官衙等から出土するが、寺院から出土する例がほとんどである。長見寺廃寺址と同じ山陰型鷲尾が出土した遺跡（第26・27表）をみると、生産地・官衙関連遺跡を除いては、寺院関連遺跡が大半である。さらに、第26・27表で官衙関連遺跡とされる小野遺跡（島根県斐川町）についても、郡寺の可能性も考えられ、⁽²⁾鷲尾を出土する遺跡と寺院との相関性はかなり高いものといえる。

なお、長見寺廃寺址が所在する現美方郡香美町は、律令時代には美含郡加須美郷に組み込まれていた（第1章第2節）。当時、美含郡の郡衙は香美町香住区もしくは農岡市竹野町に比定されているが、実態は不明である。このため、官衙の可能性を完全に否定することは困難であるが、鷲尾の出土から、当該期の遺構に関しては、寺院に関連する遺構と考えたい。

(2) 寺院の性格について

建物の特徴

まず、今回の調査で明らかとなった限り、寺院を構成する建物が礎石を伴わない掘立柱建物である点が一つの特徴として指摘できる。これは、一般的には瓦類の出土と対応しない。しかし、SB08を構成する柱穴の沈み込み（巻首図版5・6）を考えると、地盤が軟弱であることを考慮に入れても、瓦が葺かれていた可能性が十分考えられる。ただし、先に検討したように（前節4）、全面ではなく屋根の一部のみに葺かれていたものと考えられる。これは、瓦類の出土量が少ない点からも理解できるものである。

寺院の規模 ここで、長見寺廃寺の規模・伽藍等について検討してみたい。当遺跡は支流性扇状地から沖積低地にかけて立地する（第4章第2節）。景観的には、極めて狹小な谷に建てられた寺、といったイメージである。

まず東西方向については、調査成果から確定することができ、最大で75mである。南北方向については、北側がグランド造成により、旧地形が改変されている。しかし、第18図の改変前の地形図から、現在の中学校南東側法面のライン（第20図）が当時の丘陵裾部のラインに近いことがわかる。

以上、当地に復元できる旧地形から判断して、75m四方の寺域の想定は困難である。50m四方がせいぜいと考えられる。地形的に、100m四方のいわゆる七堂伽藍を構える余裕はないものと考えられる。さらに、当該期の遺構をみると、調査区東側（拡張部）で検出された掘立柱建物は、平坦部で検出された掘立柱建物と比較して明らかに小規模である。

大脇 潔は、当時の寺院には、造営者の階層に対応して、①本格的寺院、②金堂または塔のみからなる寺、③瓦葺あるいは瓦を葺かない小規模な堂1棟からなる寺、と三段階の規模を想定している。⁽³⁾長見寺廃寺は、②もしくは③に相当するものと考えられる。

その一方、鷗尾が使用される建物は、ある程度の伽藍規模を整えた寺院の主要な建物に偏る傾向があると指摘されている。⁽⁴⁾しかし、長見寺廃寺に関しては、鷗尾の出土とはイメージ的に結びつけにくい。ただし、同じく鷗尾が出土している大原廃寺（鳥取県倉吉市）は、⁽⁵⁾69m～81m四方の規模に復元されている。

ところで、鷗尾が大型柱を伴うSB08の東側で出土している（第78図）ことを考え合わせると、SB08が主要建物の可能性が考えられる。しかし、SB08は、調査範囲の限界もあるが、平面的に大規模な建物を想定することは困難である。周囲に対するシンボル的な構造物であった可能性も考えられる。

小 結 以上の検討結果から、長見寺廃寺は、7世紀第4四半期を中心とした時期には創建されていた小規模な寺院と位置付けることができる。この時期は、大脇 潔の第Ⅲ期にあたり、⁽⁶⁾寺院が全国各地に波及する時期にあたる。但馬においては、8世紀前半の薬師寺廃寺が最古の寺院とされてきた。しかし、長見寺廃寺は、法興寺とともにこれをさらに遡らせるものである。よって、但馬における最古級の寺院と位置付けることができよう。

（3）長見寺伝承の検討

以上の検討結果から、当地に寺院があったことが明らかとなった。そこで浮上してくるのが、第1章第3節で紹介した長見寺伝承との関連である。そこで、最後に長見寺伝承について検討したい。

長見寺伝承を時系列でまとめたのが、第28表である。ここでは、この表の記載事項と、調査で明らかとなった事実との関係について比較検討してみたい。

事例 1 まずこの伝承の始まりが斎明天王4年（658）まで遡ることである。この時期は、寺院の可能性が高いとされるⅡ～Ⅲ期にあたる。ただし、続く事例2～事例8については年代が残されていないが、事例1に近い時期なのかどうかも考える必要がある。斎明天王の時代＝長見寺創建というイメージが強かった結果とも考えられる。

- 事例 2 この事例に直接関連するものはみつかっていない。
- 事例 3 土馬比山は、第9図のとおり、本遺跡の北西の独立丘陵の比定されている。そして、志馬比城址として周知されている（第8図）。しかし、調査等は行われておらず、この山の開発が当該期まで遡るかどうかについては、判断できない。
- 事例 4 月岡古墳は、土馬比山とは沖積低地を挟んだ矢田川下流域平野東側の丘陵部上に立地している（第8図）。この沖積低地は、当時は「入江」であった可能性は充分考えられる。よって、「入江」「岡の上」の記述と一致する。しかし、月岡古墳は、古墳時代後期の古墳であり（第1章第2節）、時期的には合致しない。
- 事例 5 この事例に直接関連するものはない。
- 事例 6 「山麓東方」とは土馬比山の東側と考えられる。今回、矢田川下流域平野の微地形分類を行ったところ、土馬比山の東側に微高地の存在が明らかとなった（第7図）。これは、「昔の香住絵図」（第5図）にある「御城台」と位置的に一致する。したがって、この微高地が「台地」に該当する可能性が高いものと考えられる。
- 事例 7 第7図に復元した微地形では、「台地」の東側は谷地形となっており、これが矢田川の旧流路と考えられる。そして、この流路は、「台地」の南側から東側にかけて、南西-北東方向に流れていたものと復元できる。そして、今回の調査地は、この旧流路の対岸にあたる。さらに、充分な調査ができなかっただため、詳細な報告はできなかっただが、旧河道内で数本の柱を確認している。これらの柱は直線的な並びであったことから、建物の一部である可能性は低いものと考えられる。したがって、これらの柱については、伝承にいう河港施設の一部の可能性も考えられる。また、旧河道内26層・27層上面で人為的と考えられる疊敷きを確認している（第3章第1節・第50図網掛け部分）。これも、河港に関連する一部

第28表 長見寺伝承

事例	年号	西暦	伝承
1	斎明天王4年	658	孝徳天皇第一宮有馬皇子、謀反により香住に逃れ、志馬比山周辺に隠れ住む。
2			有馬皇子、海部の比佐を娶り、王子志乃武王生まれる。
3			志乃武王、出石小坂の女を迎え、土馬比山の山上を切り開き、城砦を築き領有する。
4			志乃武王は、表米王との対面後間もなく薨去されたので、これを入江大向うの岡の上に葬り奉った。これが月岡古墳であるといわれている。
5			志乃武王の子孫、志乃武有徳、姓を篠部（しのべ）と改める。
6			志乃武有徳、邸宅を山麓東方の台地に移す。
7			対岸の矢谷に河港を整備し、長見寺を建立。山上には金比羅大権現の社を置く
8	延喜12年	912	河川改修・耕地拡張に着手。
9	天慶3年	940	河川改修・耕地拡張の完成。今まで河川敷となっていた土地はもちろん、一日市の柳池、七日市の御濠池、香住の泡原沼、森の鴨池等の低湿地は全部埋め立てられて、ここに七十町歩という新しい耕地が出現。耕地の大部分はその区画が井字形に整然と区切られている。
10	延元元年	1336	篠部有信、長井庄鈴尾城主野石源太に攻められ自害。この際長見寺に火が放たれる。

の可能性も考えられる。

そして、前項までの検討結果から、今回の調査で寺跡があったとの結論に至っている。加えて、当地には「長見寺」という字名が遺存している。つまり、今回の調査で明らかとなつたⅡ-3期の寺跡が、「長見寺」である可能性が高い。

事例 8 ここでいう「河川改修」の具体的に意味する内容は不明である。ただし、当地での河川改修というと、矢田川の付替えが浮かんでくる。事例10から、矢田川下流域平野全域に係ることと考えられ、矢田川の付替えも含まれる可能性が高い。

ただし、矢田川の付け替えが行われたのは史実であるが、その時期は、天保年間から明治時代にかけてと検討した（第1章第1節）ように、伝承の年代とは一致しない。

事例 9 事例8で検討したように、河川改修の時期は史実とは一致しない。しかし、旧河道の埋没時期は、11世紀代と考えられ、人为的に埋められている（第5章第1節）。これは、伝承にある時期より約1世紀遅れるものであるが、ほぼ同年代の事柄と捉えることが可能である。このことから、規模の大小はあれ、この時期に低地の埋めたて＝整地作業が行われたのは事実と考えられる。

事例 10 14世紀中頃のこととして記載されている。しかし、今回の調査では、当該期の遺構・遺物は見つからなかった。

ただし、一部の遺構（SD03）内の埋土、さらには包含層中から焼土層を少なからず確認している。また、いくつかの柱穴内の埋土にも、炭片・焼土片が含まれていた。さらには、拡張部の遺物包含層中（8層・9層：第32図）にも、炭片が多く認められたとともに、焼土塊も認められた。これは、長見寺が放火により焼失した事実の反映と解釈することもできる。

なお、釣鐘尾城に関しては、矢田川下流域平野の南端部の丘陵上に比定され、山城址が存在する（第8図）。発掘調査は行われていないため、詳細は不明であるが、戦国時代を中心とした時期に比定されている。ただし、当該期まで遡る可能性は充分に考えられる。実際に、鎌倉時代から室町時代の陶器が採集されている。⁽⁸⁾

小 緒 以上が、長見寺伝承と今回の調査で明らかとなった事実との比較である。多くの点で両者に共通する点を指摘することができた。したがって、長見寺伝承は、その中に多くの史実を反映しているものと理解することができる。

〔註〕

- (1) 坪井清足「川原寺と山田寺」『古代日本を発掘する2 飛鳥の寺と国分寺』岩波書店 1985
- (2) 島根県斐川町教育委員会宍道年弘氏の御教示による。
- (3) 大脇 潔「七堂伽藍の建設」『古代史復元8 古代の宮殿と寺院』町田章編 1989
- (4) 廣岡孝信「鴟尾と使用建物」『網干善教先生古希記念考古学論集』 1998
- (5) 加藤誠司「考察 2 遺構」『史跡 大原廃寺発掘調査報告書』倉吉市教育委員会 1999
- (6) 大脇 潔 前掲 (3)
- (7) 田畠 基「法興寺跡」和田山町教育委員会 7世紀中頃まで遡る軒丸瓦の出土が報告されている。
- (8) 平成18年3月に踏査した際に表採。

第3節 総括

最後に、当節では、これまで報告・検討してきた点を箇条書きにし、本報告のまとめとしたい。

1. 繩文時代晩期・弥生時代前期・弥生時代中期・弥生時代後期・古墳時代前期・古墳時代後期～奈良時代・平安時代後期の遺構・遺物が明らかとなった。これらの遺構・遺物は、大きくⅠ期（縄文時代晩期～古墳時代前期）・Ⅱ期（古墳時代後期～奈良時代）・Ⅲ期（平安時代後期）の3時期に区分することができ、その中心をⅡ期に求めることができる。
2. Ⅱ期のなかでも、Ⅱ～Ⅲ期の遺構群は、出土遺物から判断して、寺院（長見寺廃寺）の可能性が高い。ただし、伽藍配置等は不明である。また、その立地から判断して、その範囲は75m四方を越えるものではないと、推定される。
3. 長見寺廃寺に関しては、年代的な点を除くと、長見寺伝承と多くの点で一致し、注目される。長見寺廃絶後も、この寺が香住の地に伝承として長く伝えられていたものと考えられる。
4. Ⅱ～Ⅲ期の遺構が寺院址である可能性を強めたのが、山陰型鷲尾の出土である。本遺跡の調査以前は、その分布は因幡から出雲に限られていた。今回の発見はその分布域を東側へ広げるもので、兵庫県下では初めての出土例として位置付けられる。
また、軒丸瓦についても、他に類例の認めらないもので、注目される。
5. 最後に、当遺跡は但馬に所在するが、各時代を通して、鳥取県を中心とした西側からの影響が顕著である。古墳時代前期の土器群、Ⅱ～Ⅲ期の須恵器の杯蓋・杯身、山陰型鷲尾などがその代表例である。

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ちょうけんじはいじあと							
書名	長見寺廃寺址							
副書名	国道178号香住道路ランプ部道路改築事業に伴う埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名	兵庫県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第315冊							
編著者名	山田 清朝・小川 弦太・藤田 淳・青木 哲哉・伊東 隆夫							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号				TEL 078-531-7011			
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号				TEL 078-362-3784			
発行年月日	西暦2007(平成19)年3月20日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長見寺廃寺址	ひょうごけん 兵庫県 みかたぐん 美方郡 かみちよう 香美町 かみまち 香住区 かすみくに 長見寺	28585	600064	35度 37分 53秒	134度 37分 48秒	平成14年 10月9日 ～12月13日	876m ²	国道178号 香住道路 ランプ部 道路改築 事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長見寺廃寺址	集落跡	縄文時代晩期	旧河道	土器・石器				
		弥生時代前期	旧河道	土器		但馬最古級の弥生土器		
		弥生時代中期後半	柱穴	土器				
		弥生時代後期	旧河道	土器				
		古墳時代前期	掘立柱建物跡・ 柱穴・溝	山陰系土器・ 布留式土器				
		古墳時代後期	掘立柱建物跡・ 柱穴	土師器・須恵器・ 土錘				
	寺跡	飛鳥時代 ～奈良時代	掘立柱建物跡・ 柱穴・溝・旧河道	軒丸瓦・平瓦 丸瓦・鷲尾 須恵器・土師器・柱		山陰型鷲尾 巨大な柱・長見寺伝承 高句麗系軒丸瓦		
	集落跡	平安時代	柱穴	土師器・須恵器 青磁碗				

写 真 図 版

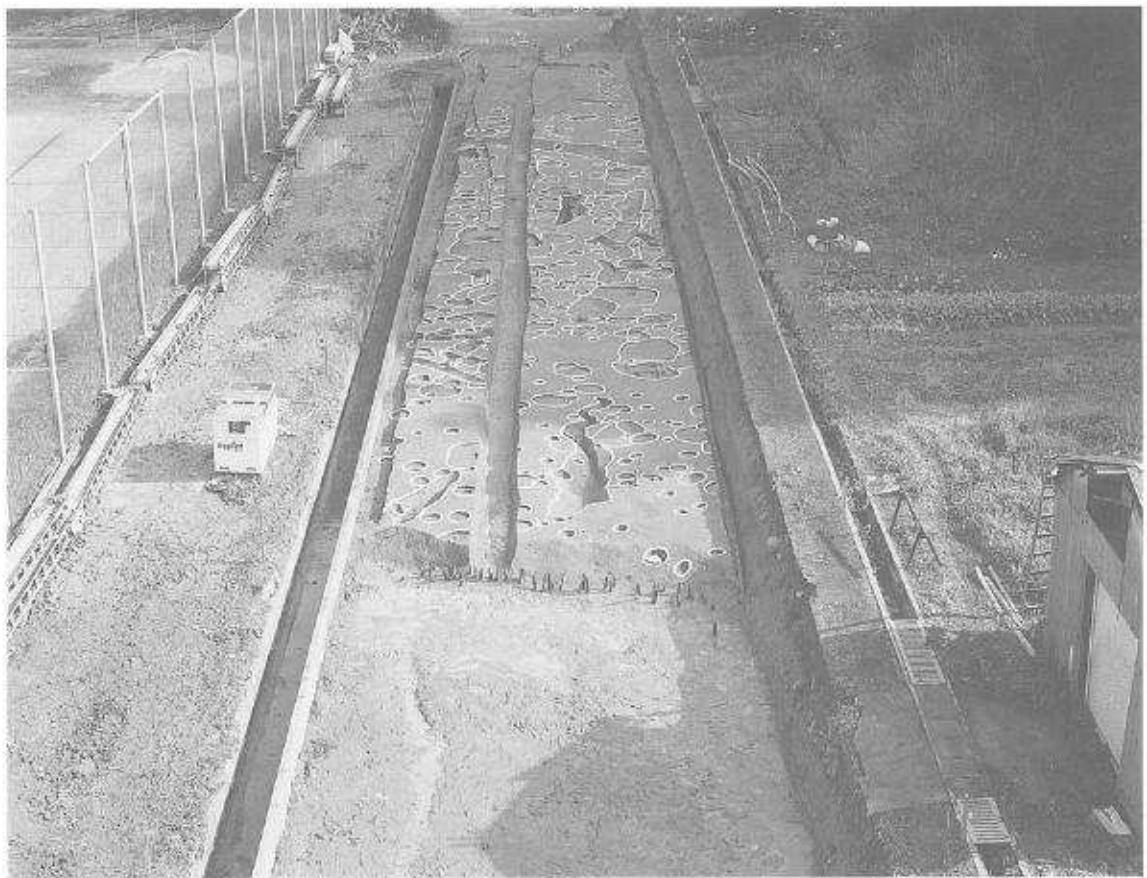


写真図版 1 遺構



全景 上空から

写真図版 2 遺構



全景 西から



全景 東から

写真図版3 遺構



拡張部全景 西から



拡張部全景 北から



壇状遺構 北西から

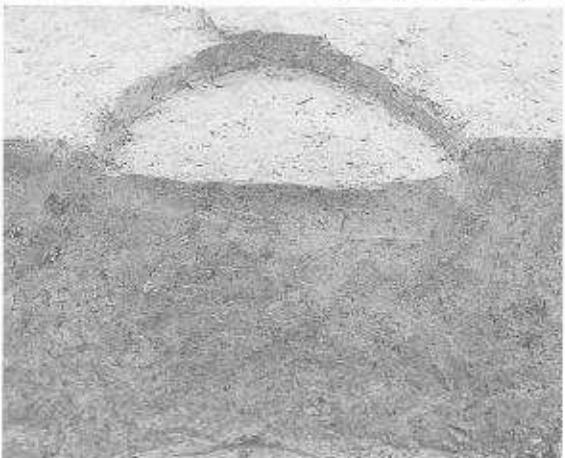


平坦部全景 俯瞰

写真図版5 遺構



SB02 北から



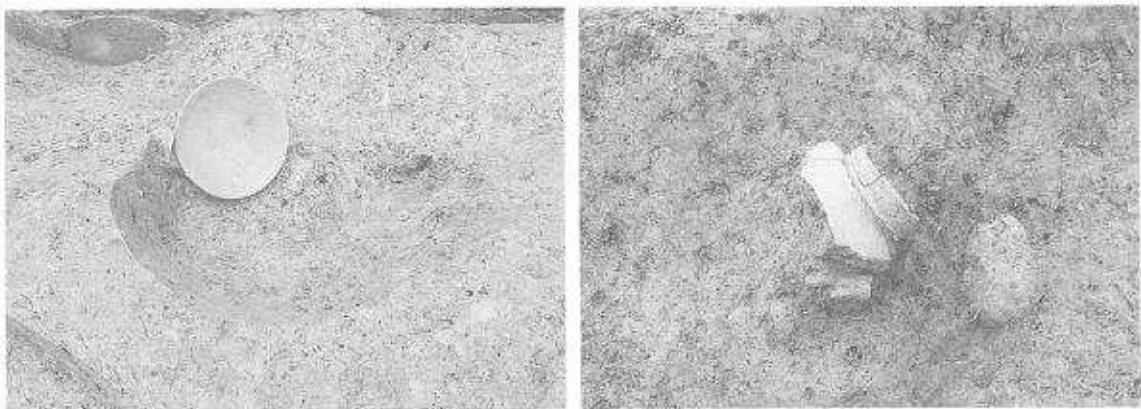
SB02
(左) P 3 東から
(右) P 4 西から



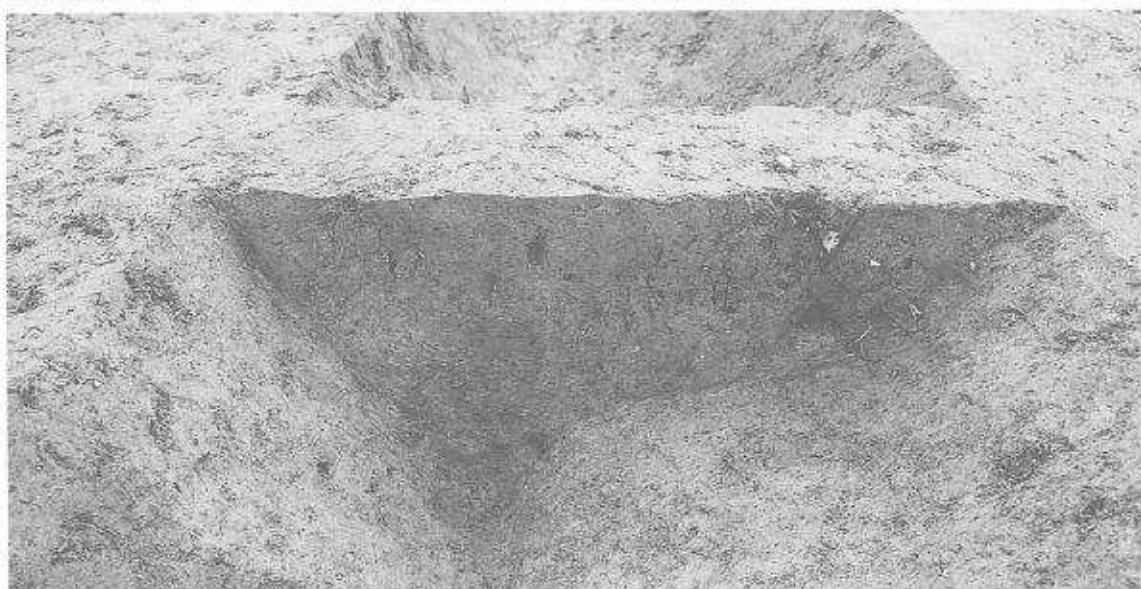
SB02
(左) P 8 西から
(右) P 9 西から

写真図版 6 遺構

(左) P 4
土器出土状況
南から
(右) SD02
土器出土状況
北から



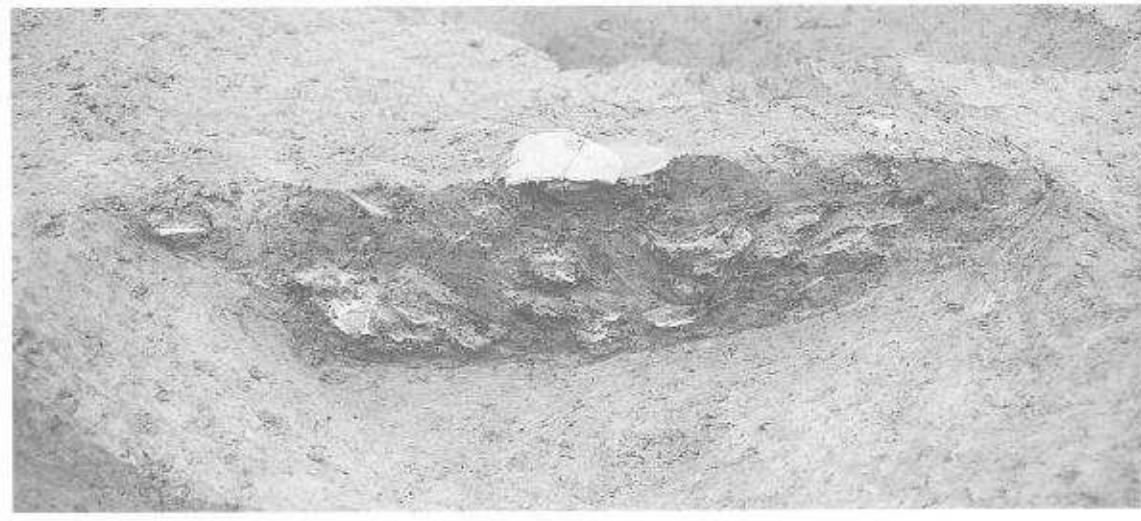
SD02 西から



SD01 西から



SK01 北から

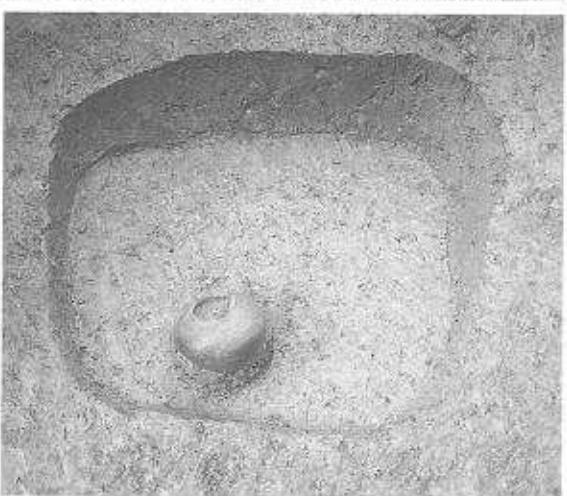


写真図版 7 遺構



SB04

(左) P 4 北から
(右) P 5 西から



SB05

(左) 全景 東から
(右上) P 1 南から
(右下) P 1 南から



SB05

(左) P 2 北から
(右) P 3 北から

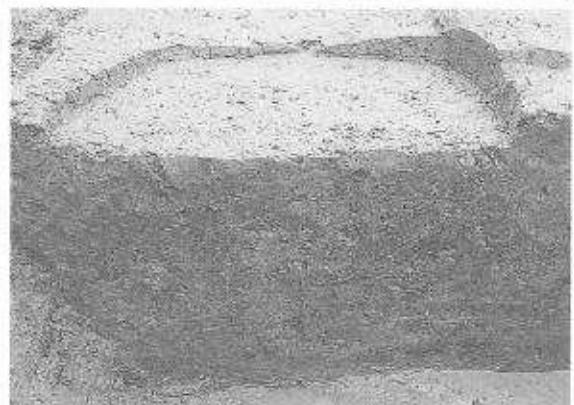


SB06 全景 北から



SB06

(左) P 1 東から
(右) P 2 北から



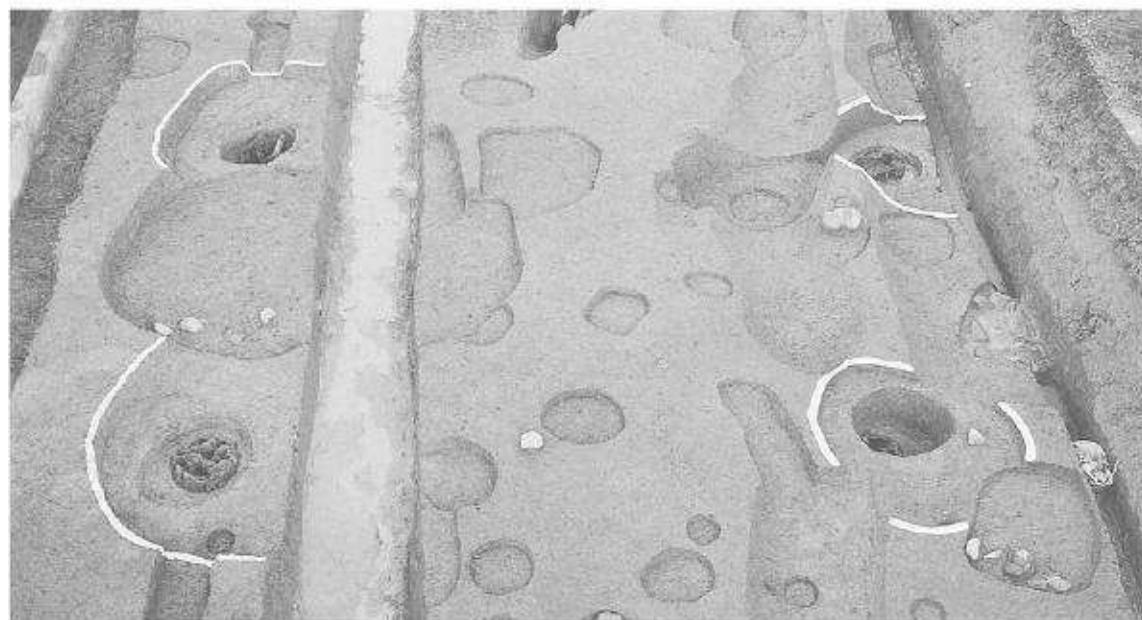
SB06

(左) P 4 東から
(右) P 6 東から



SB07 P 2 西から

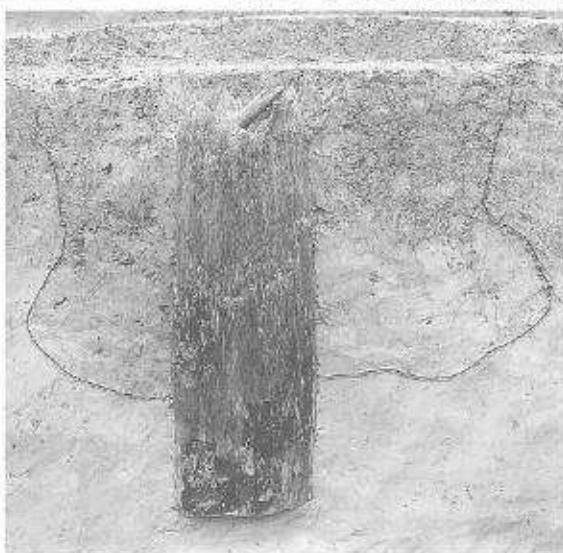
写真図版9 遺構



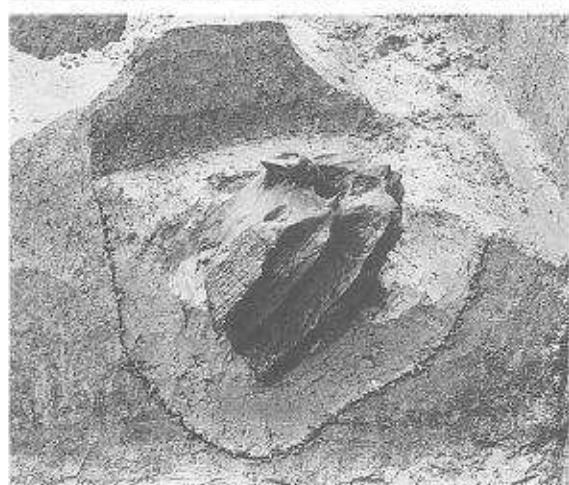
SB08 西から



SB08
P 1・P 4 南から



SB08
(左) P 4 南から
(右) P 1 南から



SB08
(左) P 2 西から
(右) P 3 西から

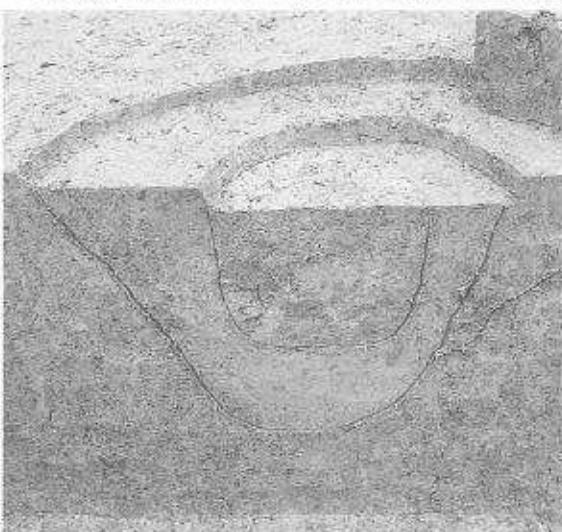


SB09 北東から



SB09

(左) P 1 北東から
(右) P 3 北東から



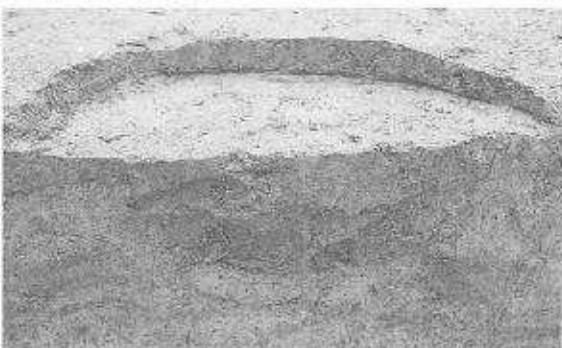
SB09

(左) P 5 南西から
(右) P 7 北東から



SB10

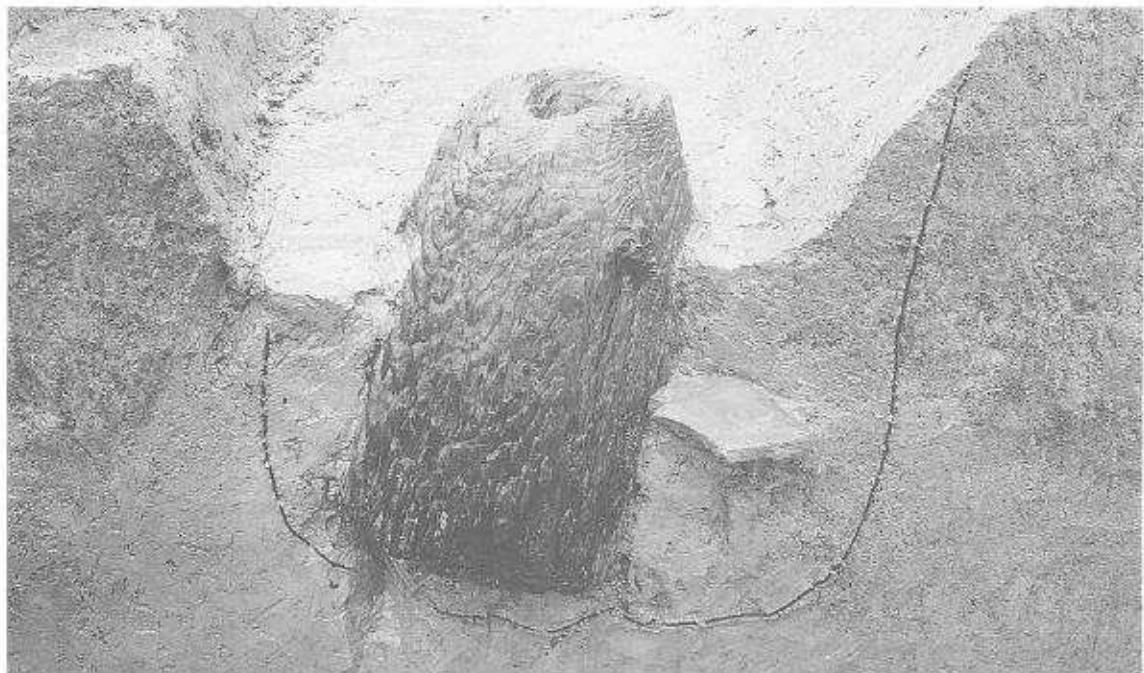
(左) P 5 西から
(右) P 6 北から



写真図版11 遺構



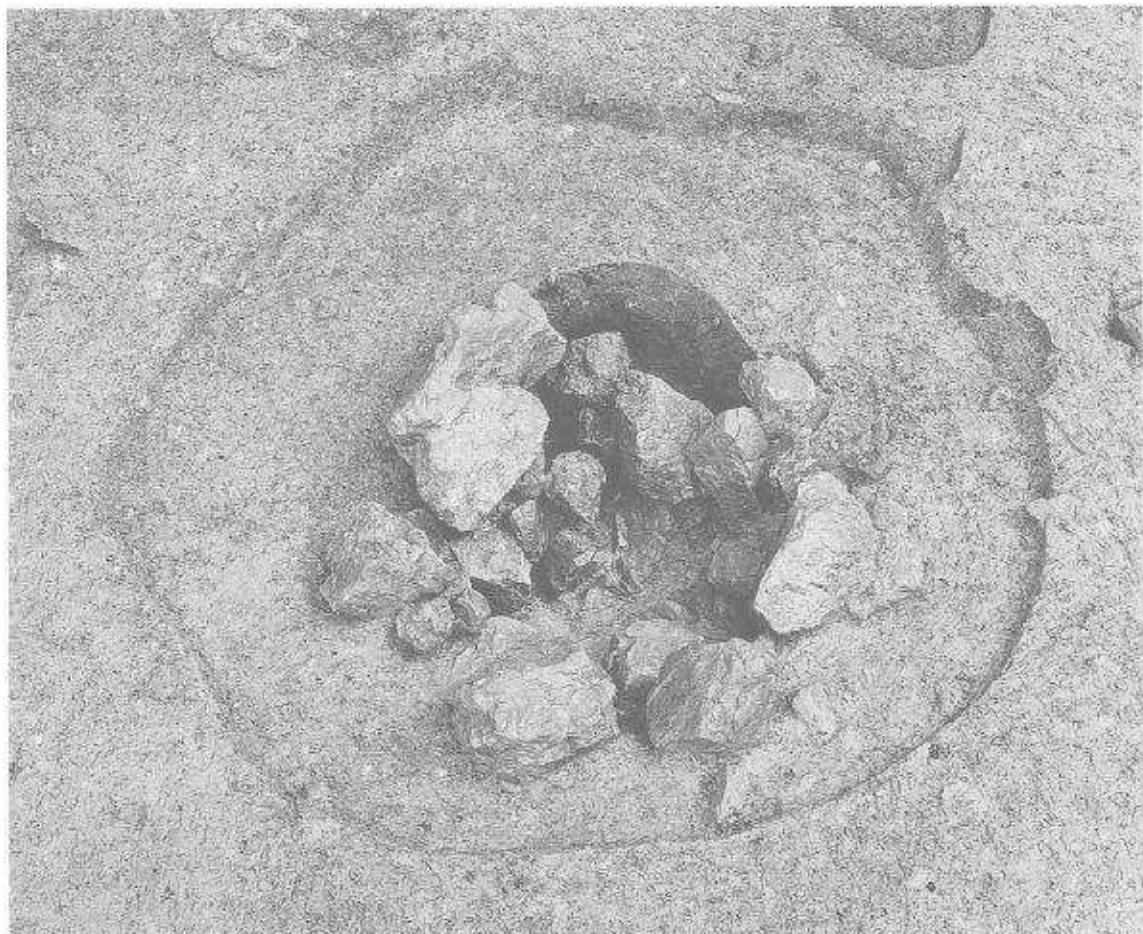
(左) P10 東から
(右) P14 西から



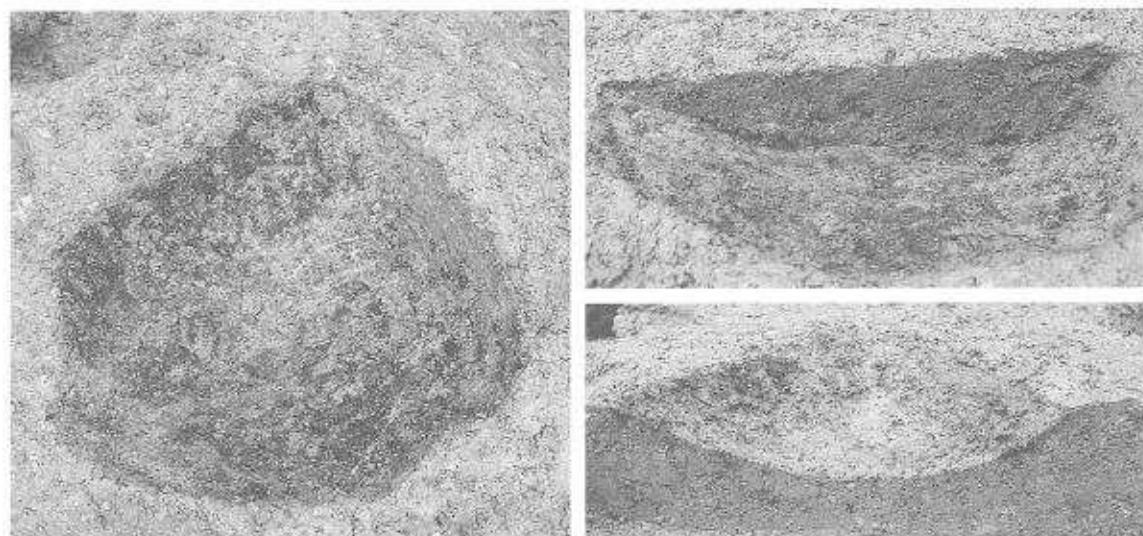
P29 西から



P30 西から



SK02 西から



SK03

- (左) 全景 西から
(右上) 断面 西から
(右下) 断面 西から



SD03 北東から

写真図版13 遺構



SD04 全景 南西から

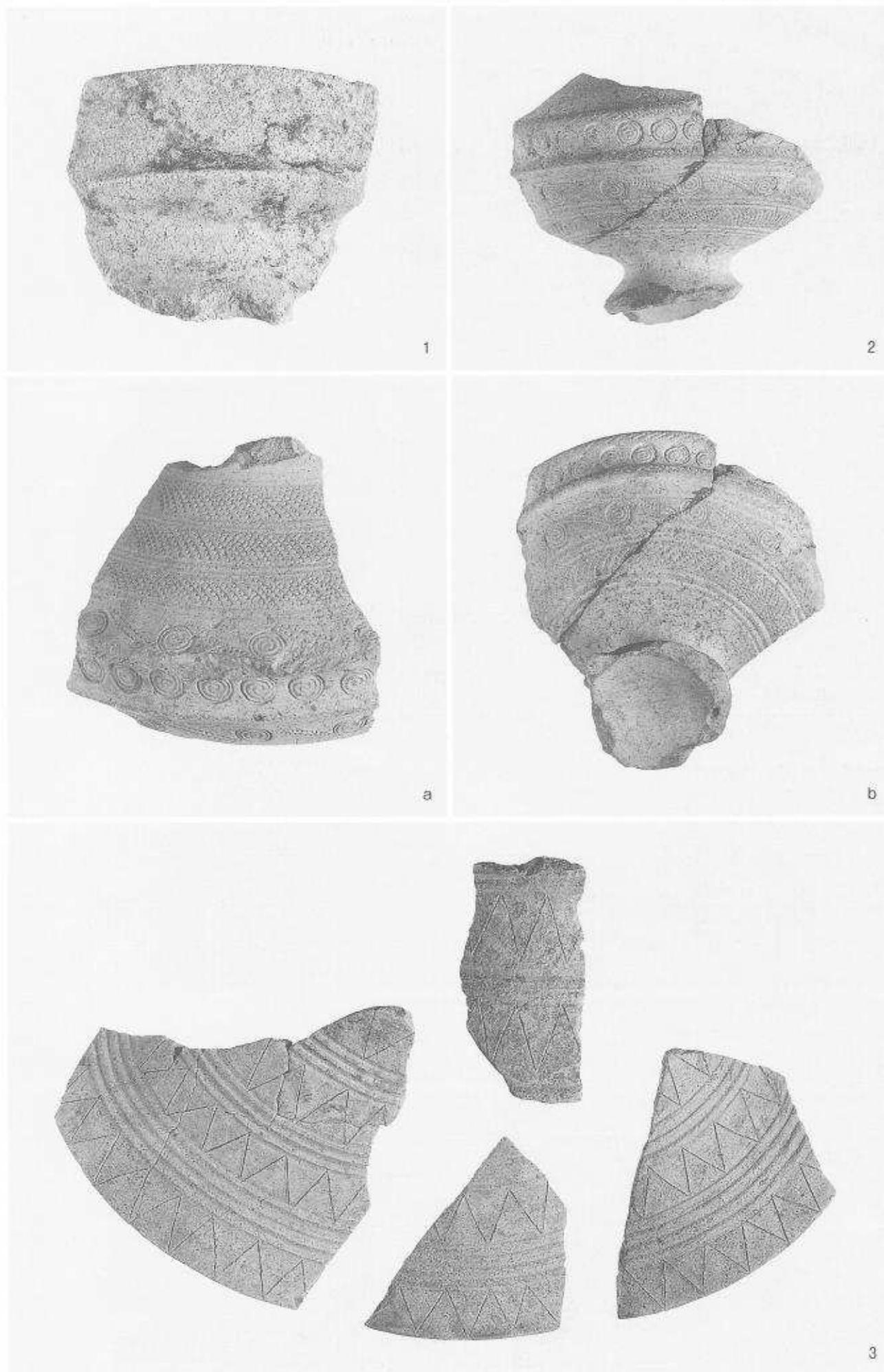


SD04

(左) 全景 東から
(右) 断面 東から



SD04 東から



1～3：遺跡発見契機の土器

a：2上半部 b：2下半部

写真図版15 遺物



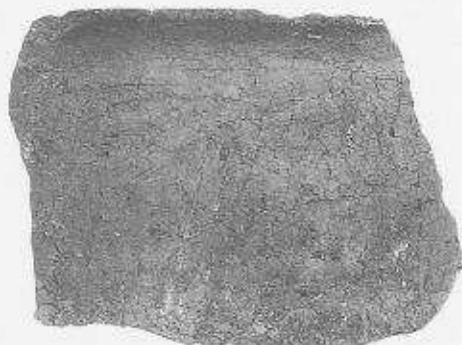
6



10



7



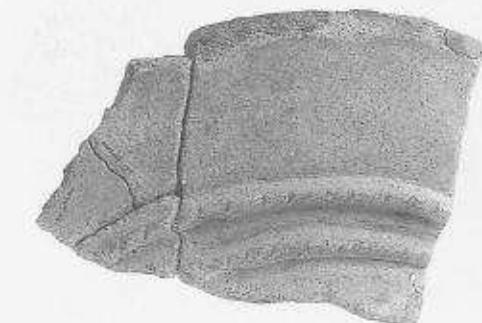
14



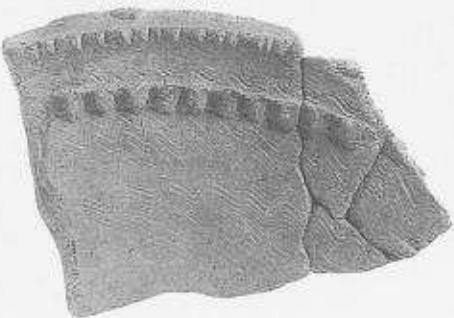
8



15

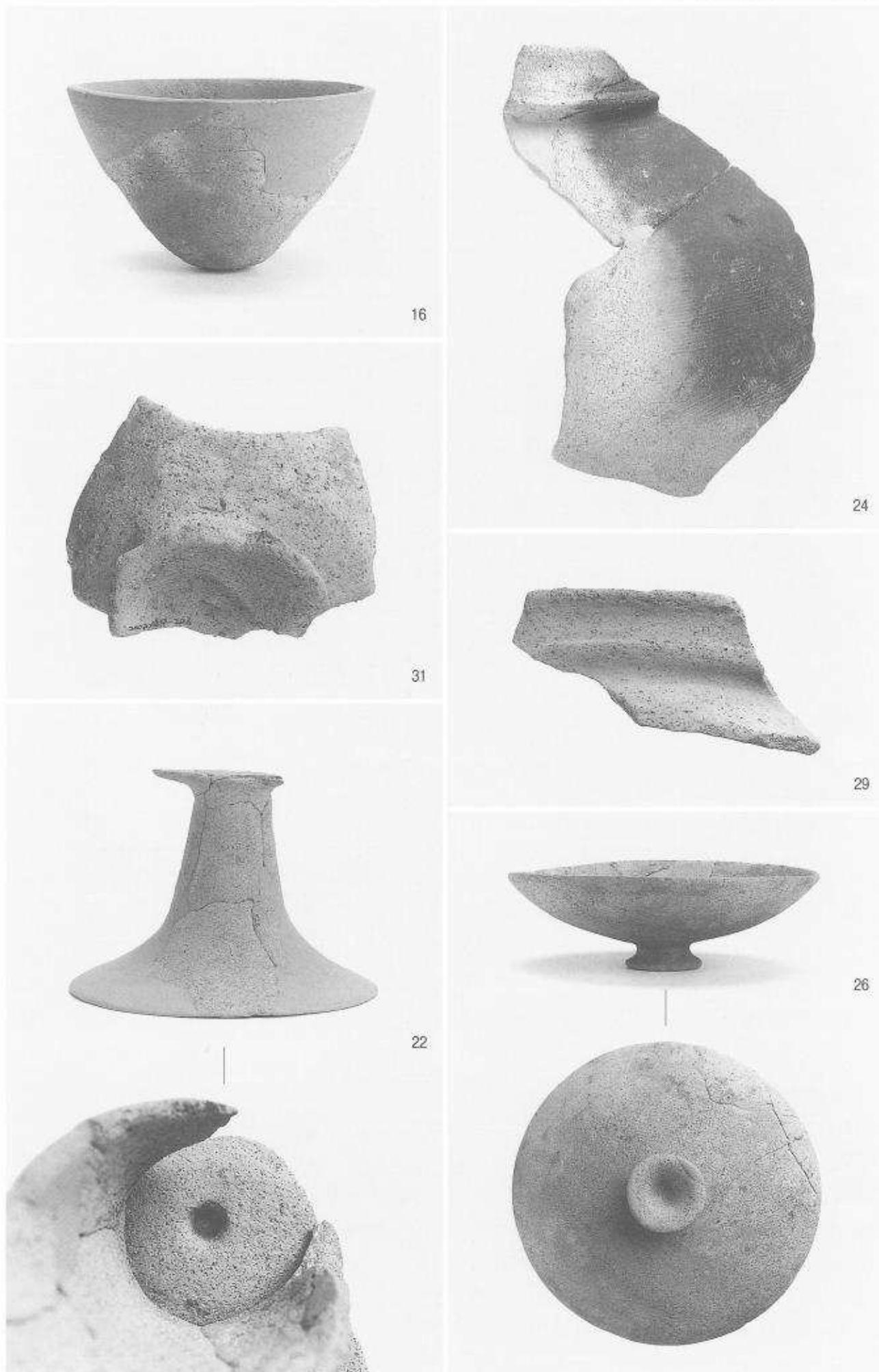


—



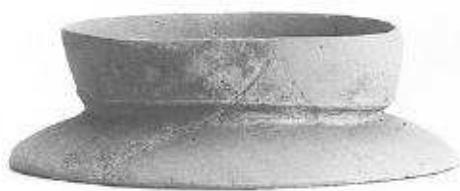
12

6・7・8・10：旧河道出土土器 12・14・15：包含層出土土器



16：包含層出土土器 22：SB01出土土器 24：P 5出土土器 26：P 4出土土器 29：P 6出土土器
31：P 3出土土器

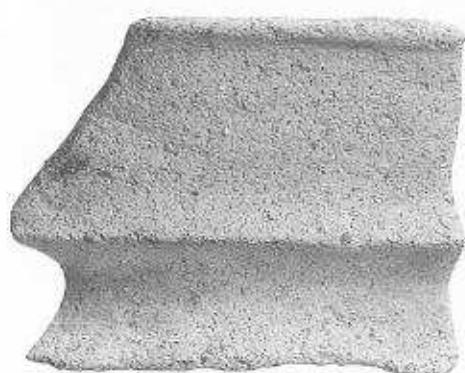
写真図版17 遺物



33



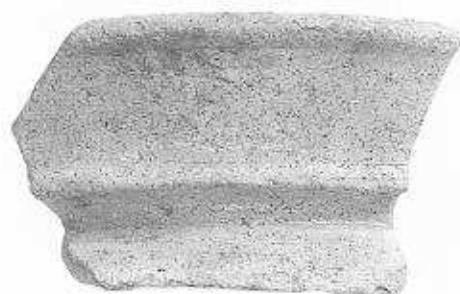
38



35



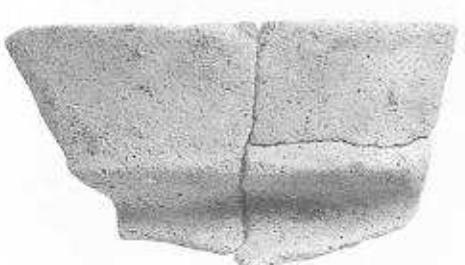
42



36



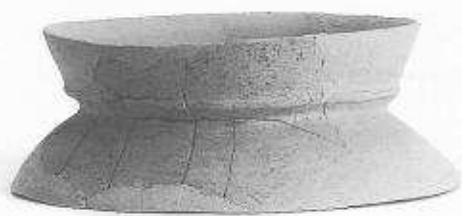
44



37



45



48



54



51



56



53



62



63



65

48・51：SD02出土土器 53：SD01出土土器 54・56・62・63・65：包含層出土土器

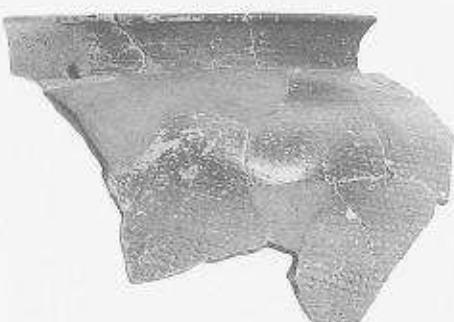
写真図版19 遺物



66



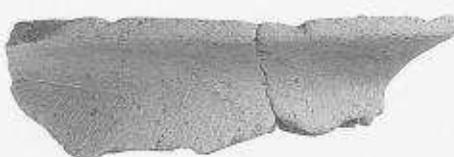
70



89



91



92



67



68



69

66 : SB05出土土器 69・70 : SB10出土土器 67 : SB08出土土器 68 : SB09出土土器 89 : P15出土土器
91 : P13出土土器 92 : P9出土土器

写真図版20 遺物



71



76



82



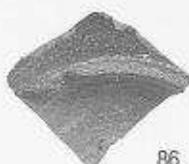
81



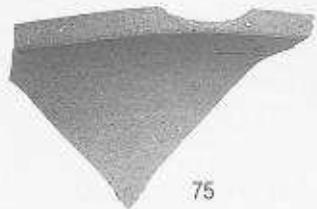
83



85



86



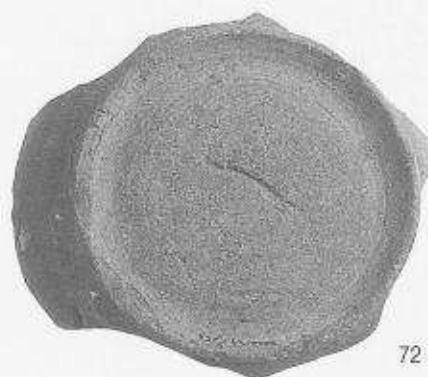
75



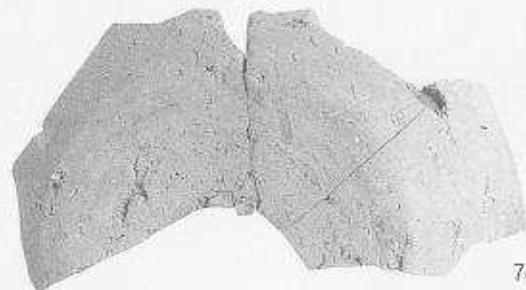
90



88



72



74

71・72:P26出土土器 74・75:P8出土土器 76:P7出土土器 81:P12出土土器 82:P20出土土器
83:P23出土土器 85:P14出土土器 86:P19出土土器 88:P22出土土器 90:P17出土土器

写真図版21 遺物



73



78



79



80



84



107



94



95



116



93



120

73 : P 8 出土土器 78 : P 21出土土器 79 : P 16出土土器 80 : P 24出土土器 84 : P 25出土土器

94 : P 27出土土器 95 : P 28出土土器 93 : P 10出土土器 107 : SD03出土土器 116 : 旧河道出土土器

120 : 包含層出土土器

写真図版22 遺物



96



101



121



98



102



97



103



122



100



105



140



138



139

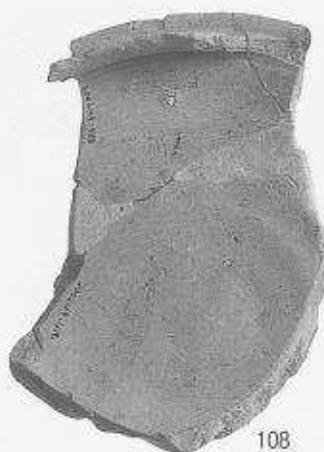
96~98 : SK02出土土器 101・102 : SK04出土土器 103 : SK03出土土器

100・105・121・122・138~140 : 包含層出土土器

写真図版23 遺物



106



108



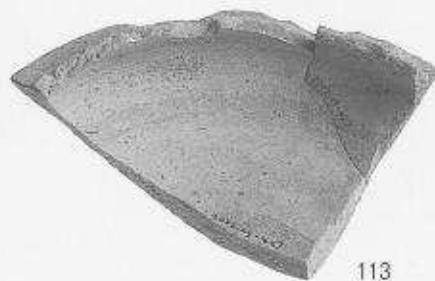
109



110



112



113

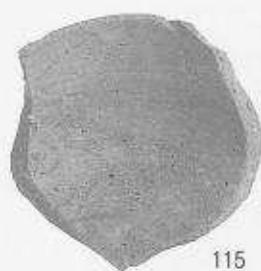


111

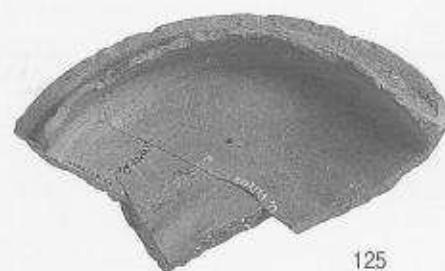


114

106・108～110：SD03出土土器 111：SD05出土土器 112・113：SD04出土土器 114：SD06出土土器



115



125



126



118



117



119



134



136



135



99



104

115・117~119：旧河道出土土器

99・104・125・126・134~136：包含層出土土器

写真図版25 遺物



123



130



124



127



131



128



129



132

123・124・127～132：包含層出土土器



133



137



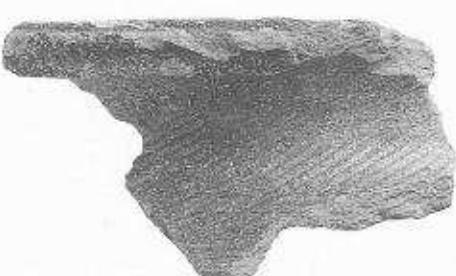
141



181



184



183



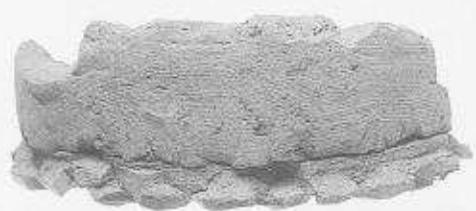
188



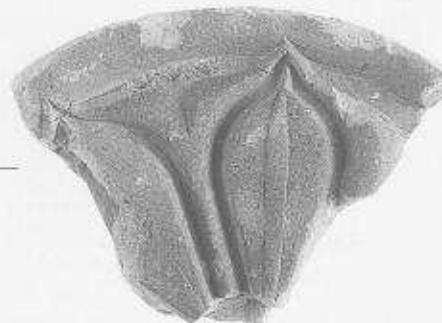
190

133・137・141・184・188・190：包含層出土土器 181・183：旧河道出土土器

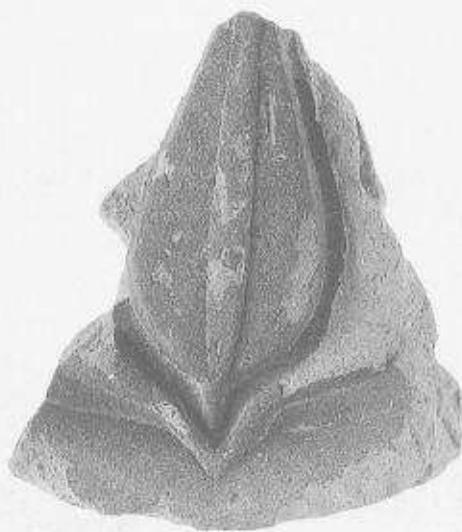
写真図版27 遺物



142

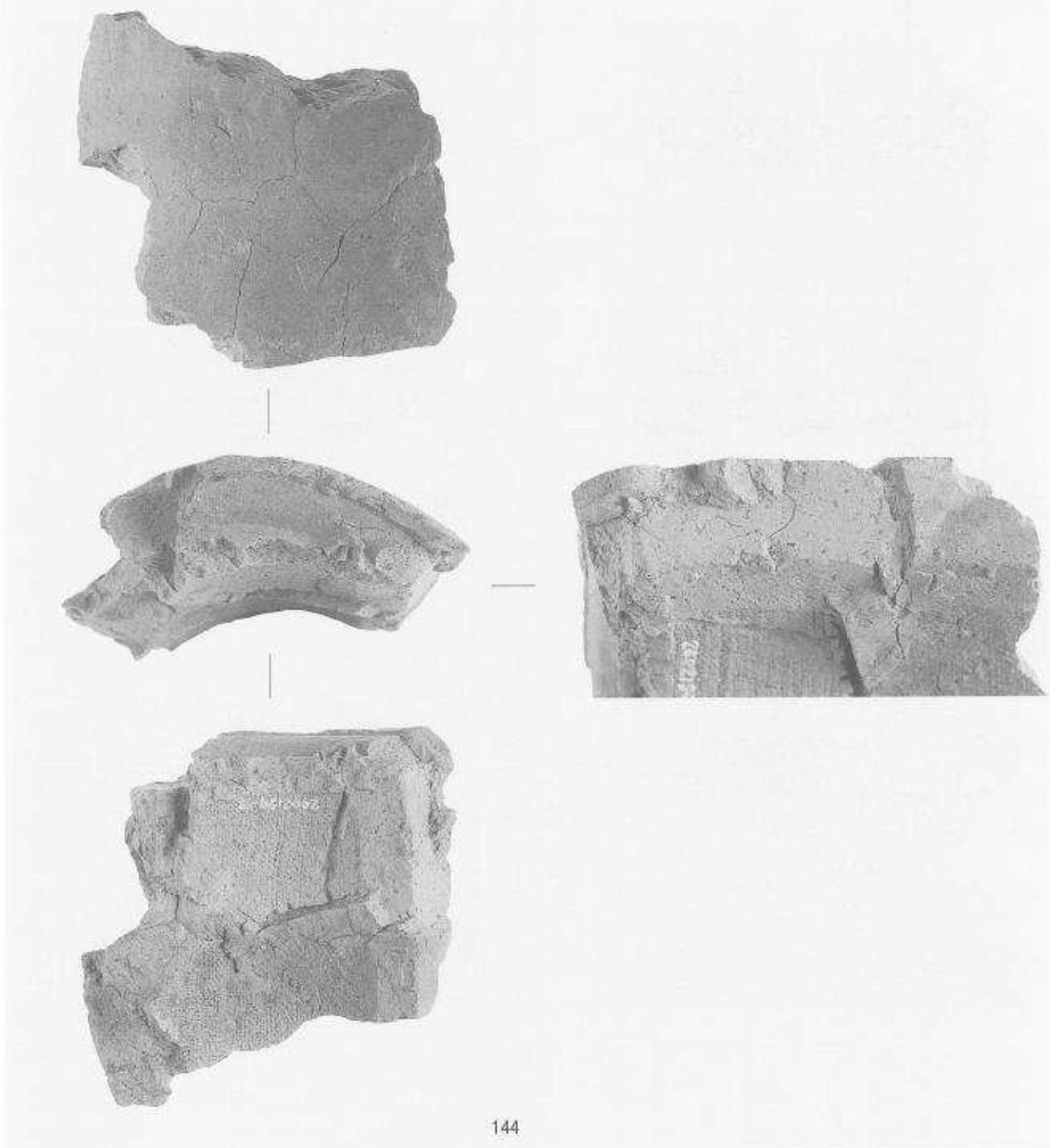


143



145

軒丸瓦 (142・143・145)



144



a

軒丸瓦 (144) a : 144瓦当接合状況

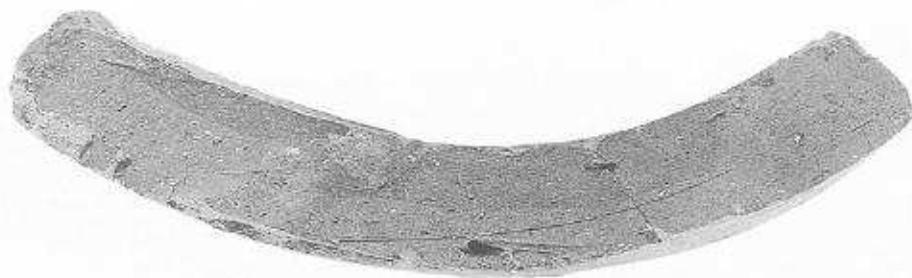
写真図版29 遺物



146

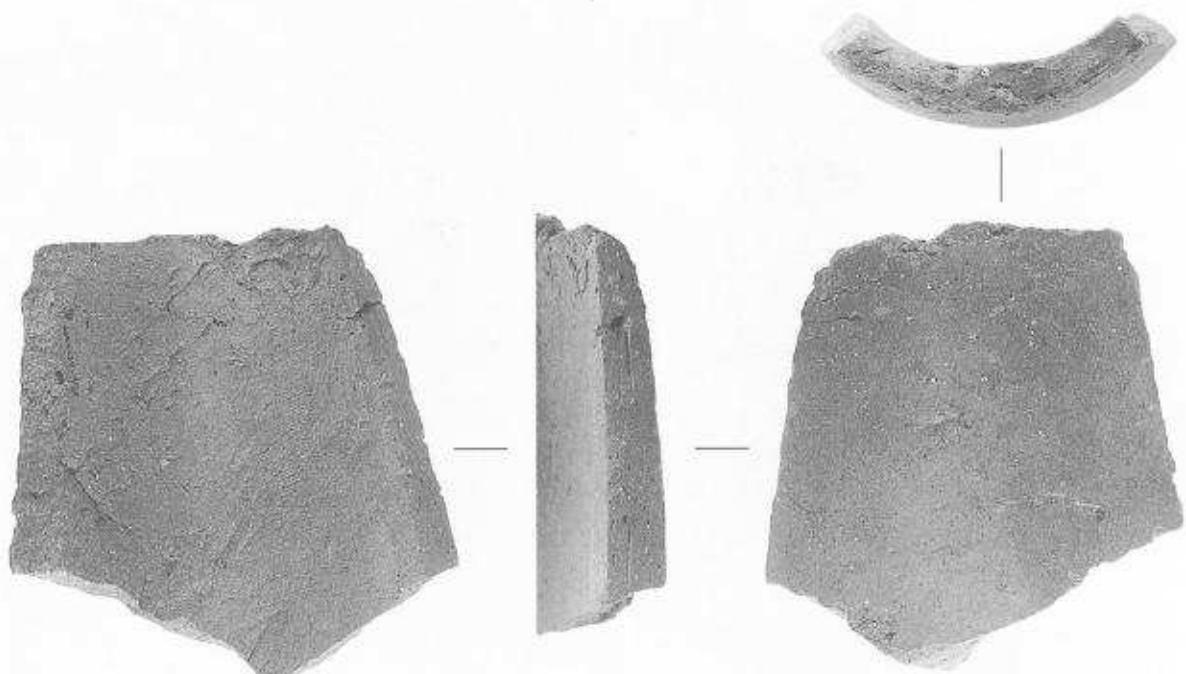


147

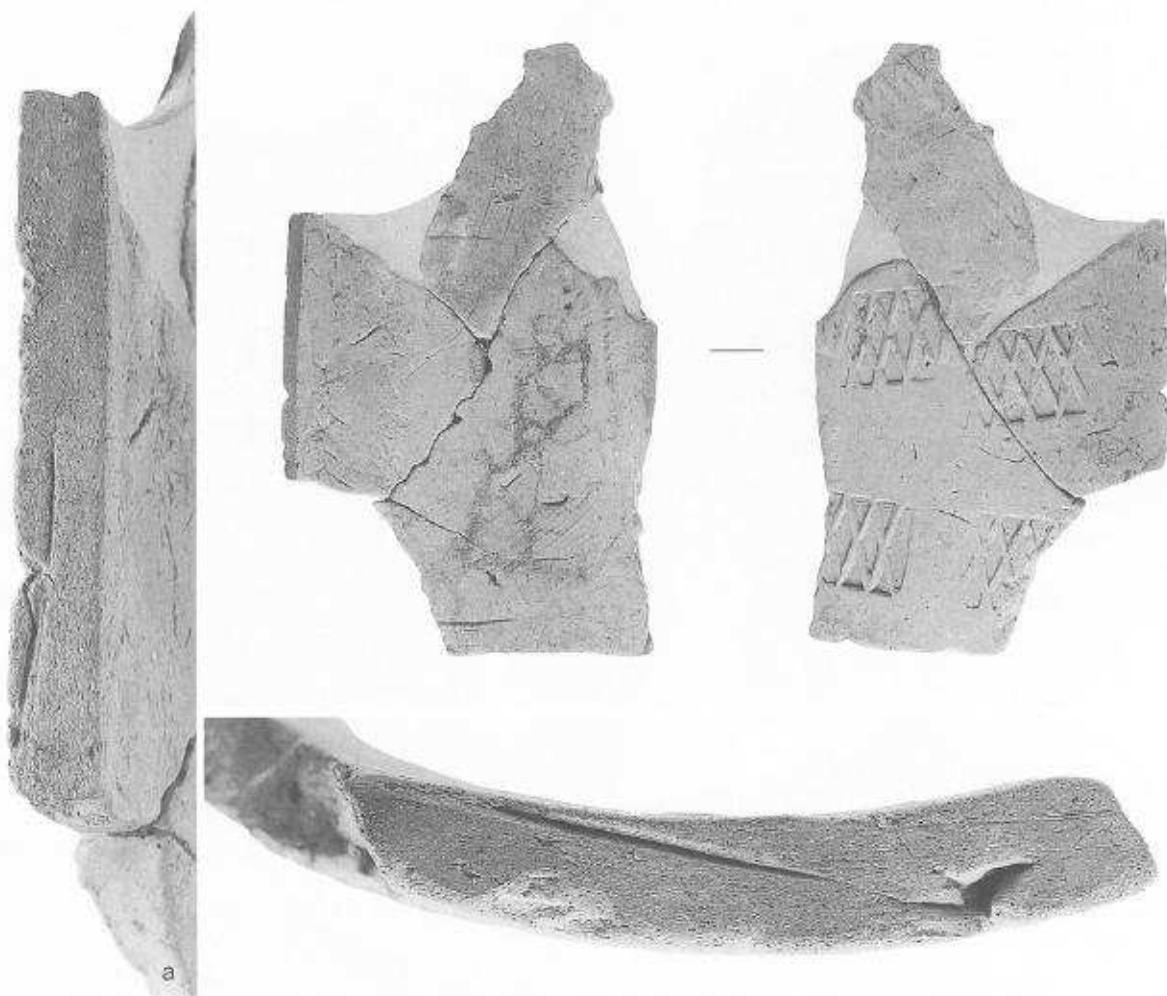


a

丸瓦 (146・147) a : 147端面



148

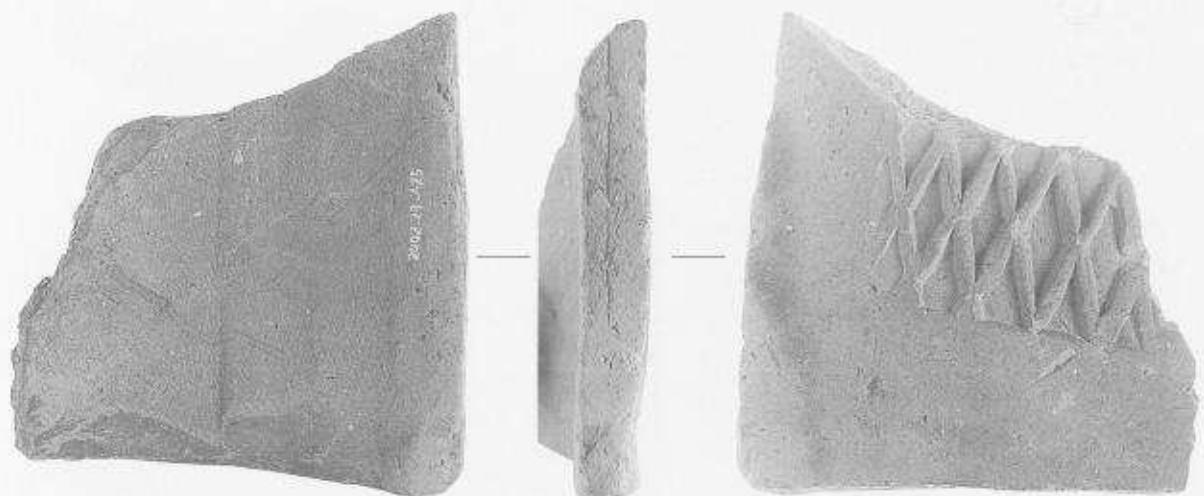


151

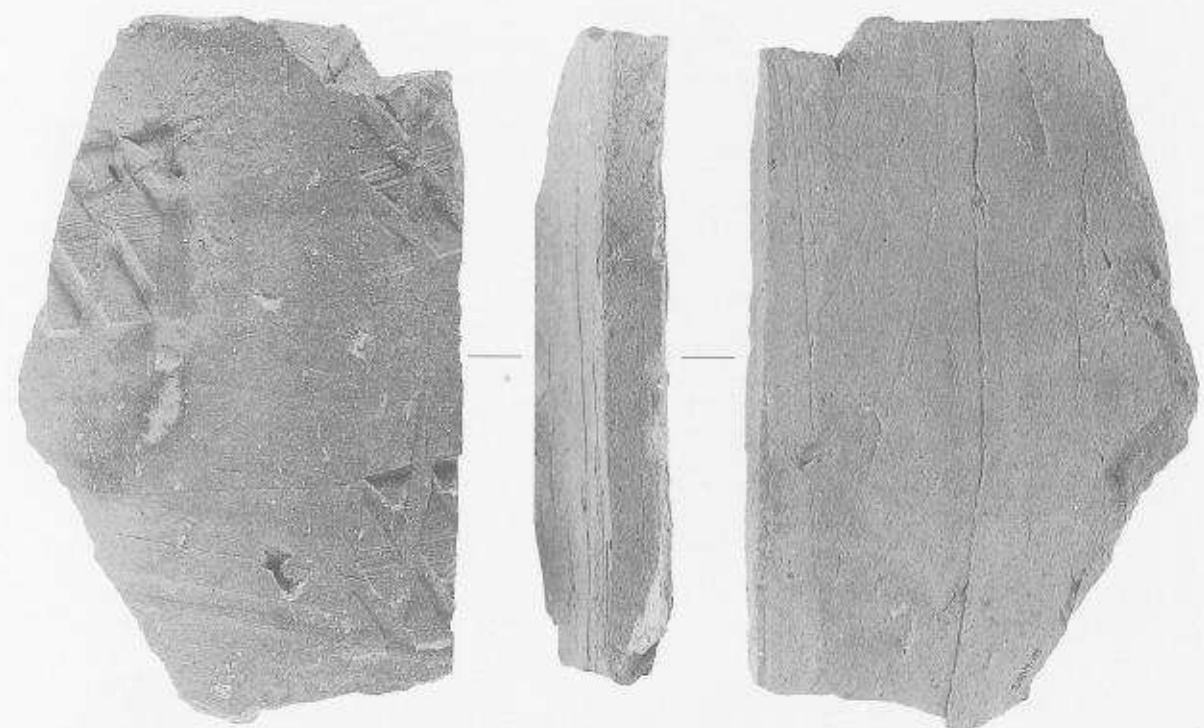
丸瓦 (148)

平瓦 (151) a : 151側面 b : 151端面

写真図版31 遺物



152

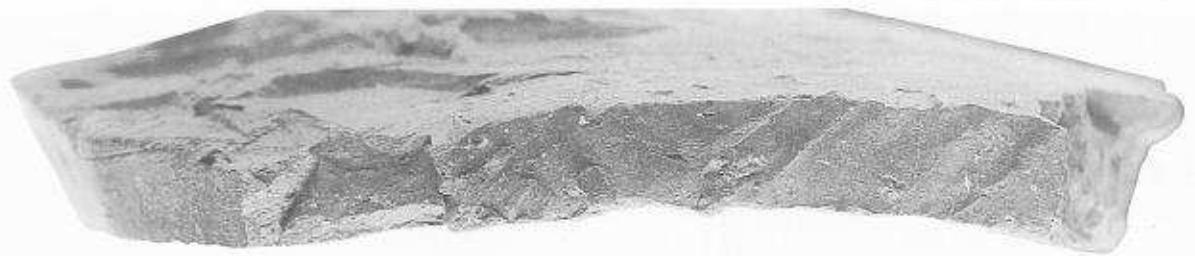


157



a

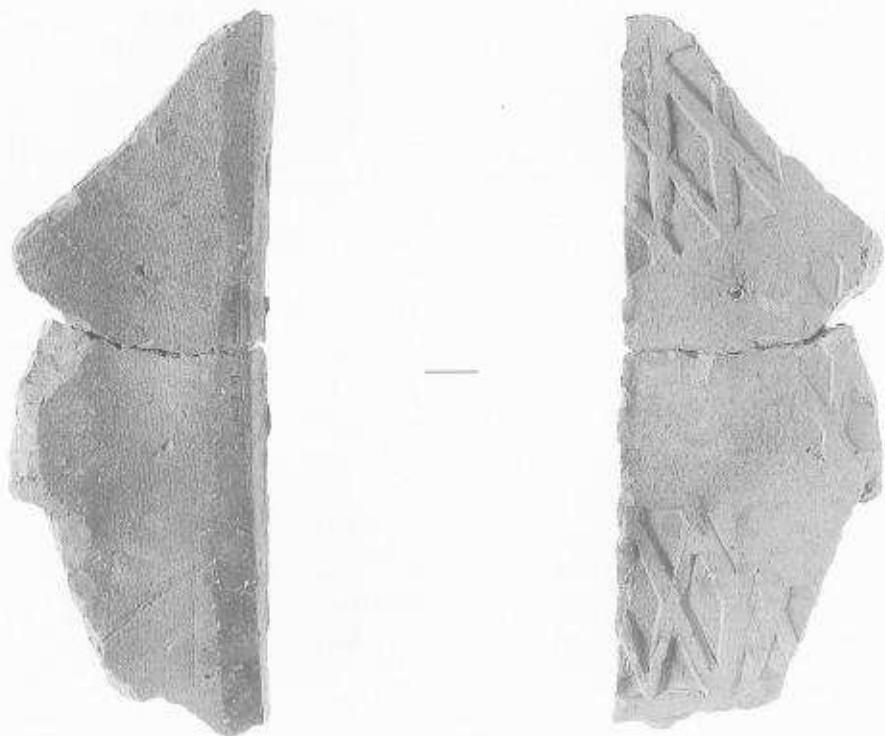
平瓦 (152・157) a : 157端面



a



158



159

平瓦 (158・159) a : 158端面

写真図版33 遺物



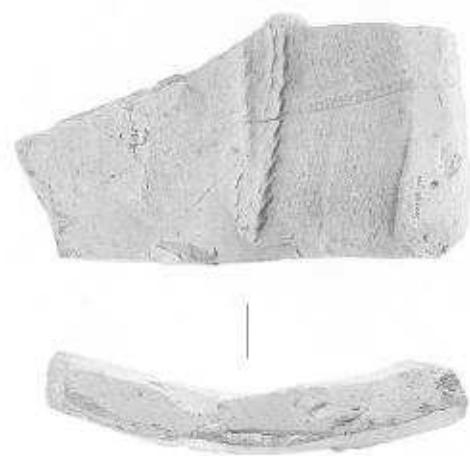
153



160

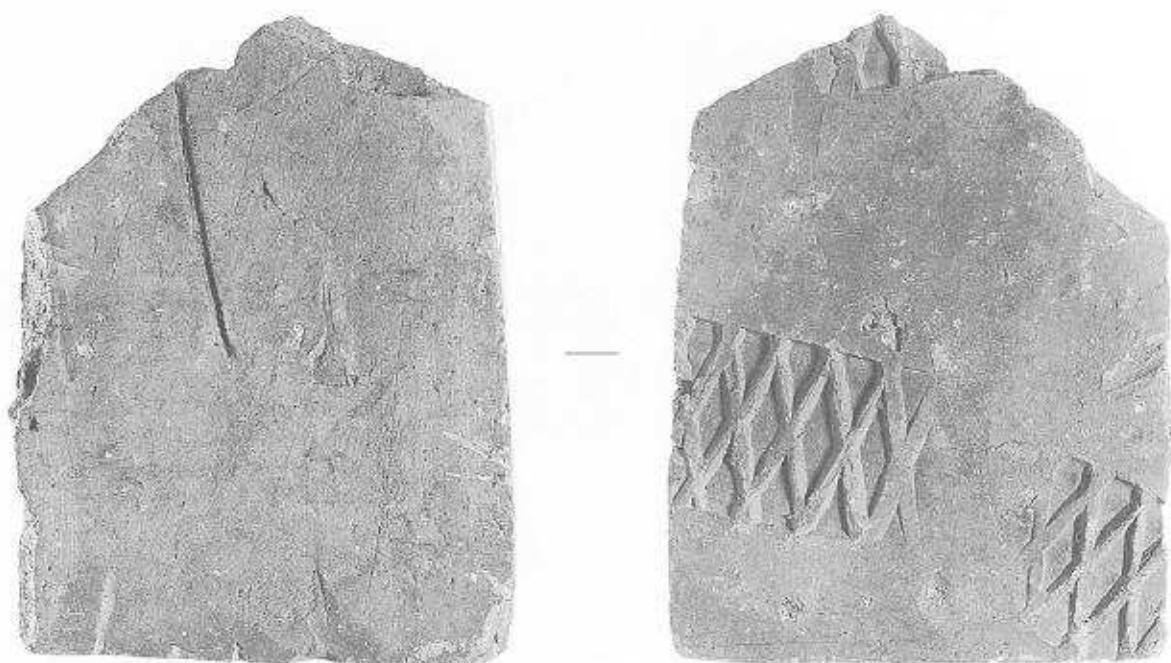


161



162

平瓦 (153・160~162)



4



a



b

平瓦（4） a：4端面 b：4側面

写真図版35 遺物



5



a



b

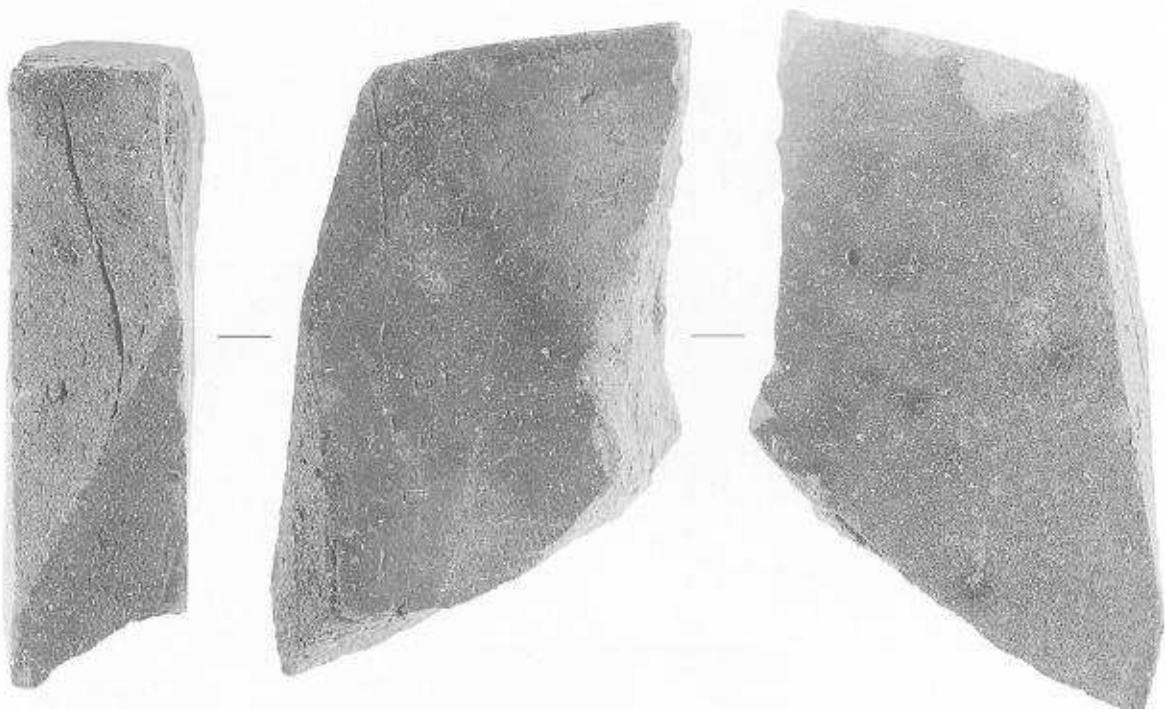


c

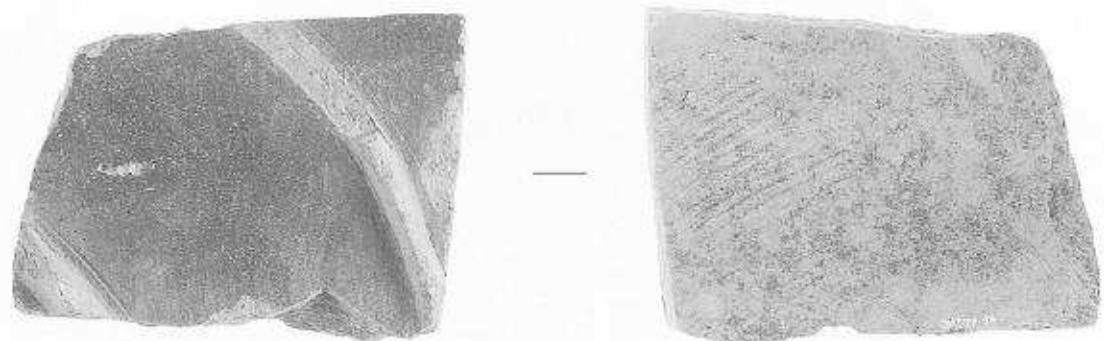


d

平瓦 (5) a : 5右側面 b : 5左側面 c : 5広端面 d : 5狭端面



174



175

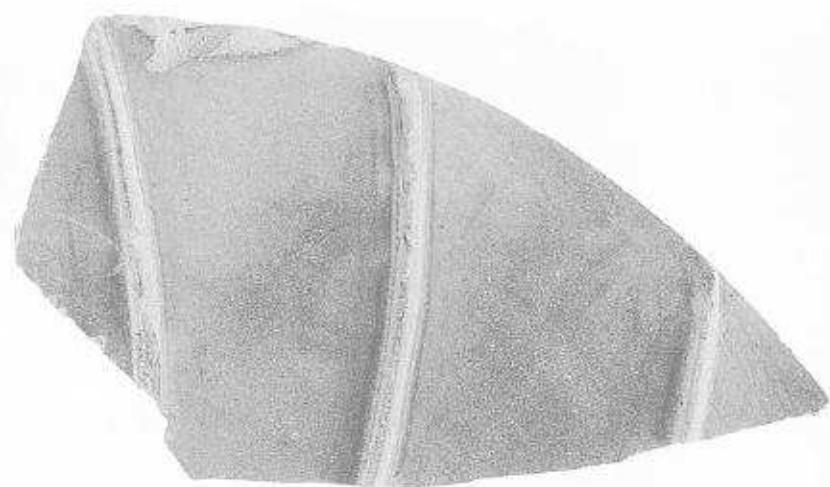


a

平瓦 (174)

鷲尾 (175) a : 175側面

写真図版37 遺物



|



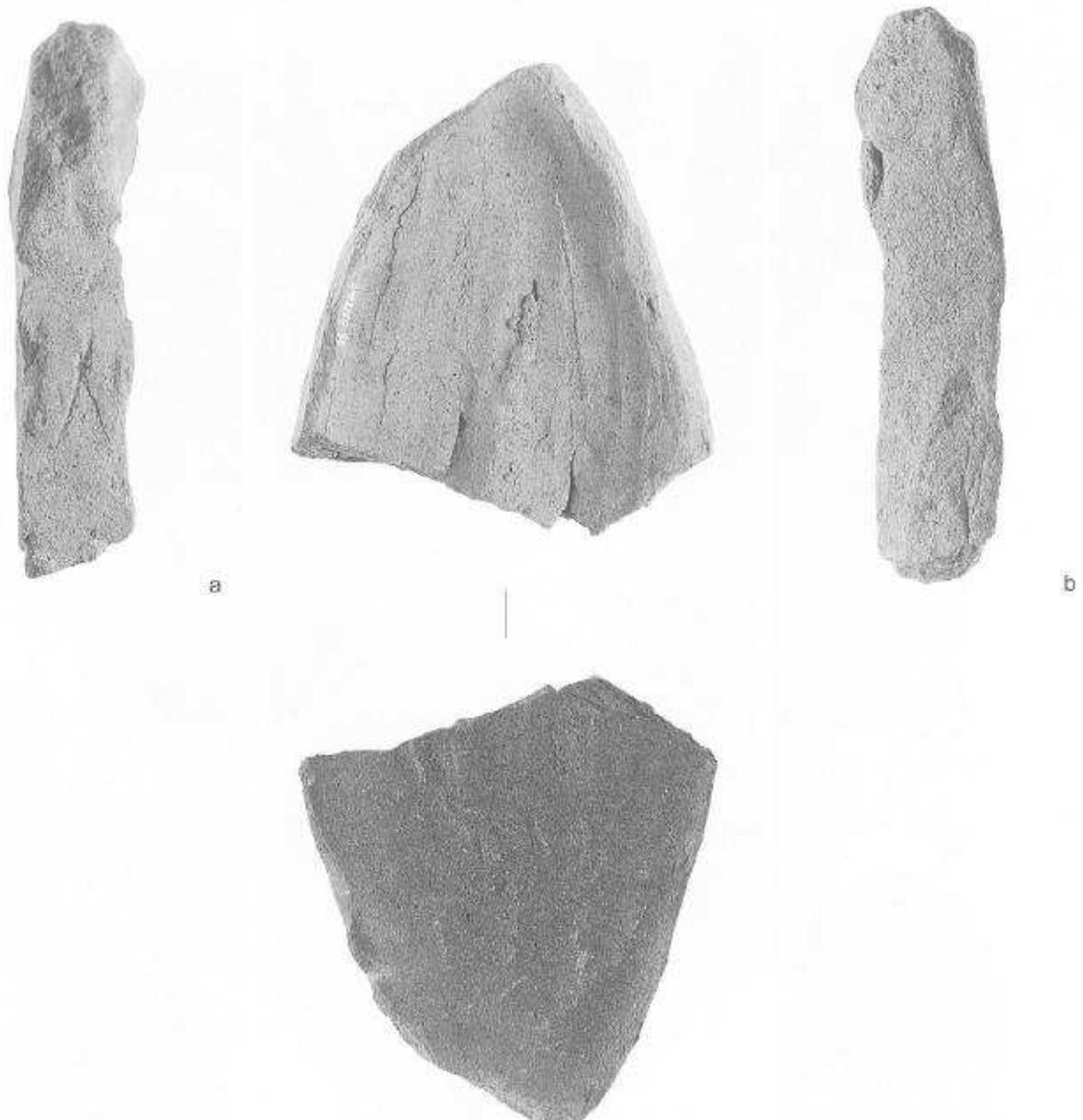
176



a



177



178

鷦尾 (178) a : 178側面 b : 178側面

写真図版39 遺物



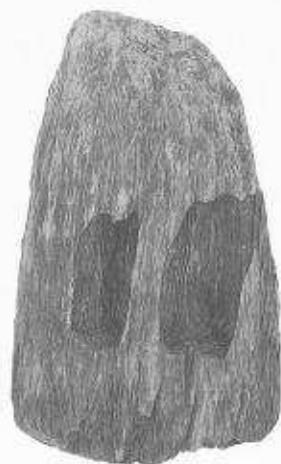
W1



W2



W5

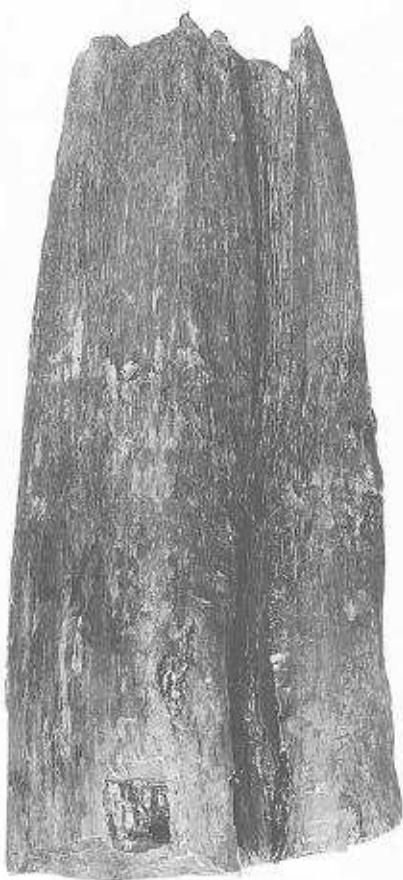


W6



W7

出土柱 (W1・W2・W5～W7：保存処理後)



W1

W2

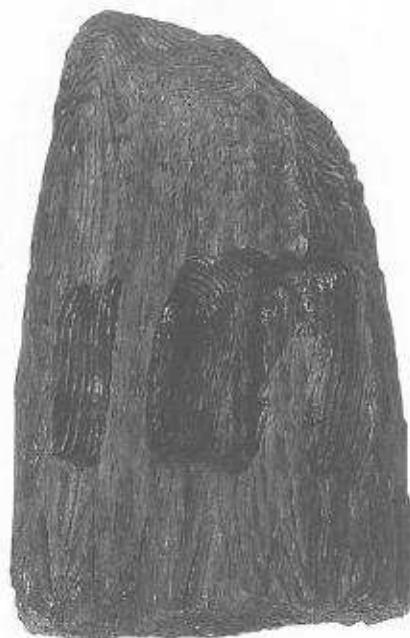


W1 : SB08-P1出土柱
W2 : SB08-P4出土柱

a

a : W1 筍穴
b : W2 筍穴

写真図版41 遺物



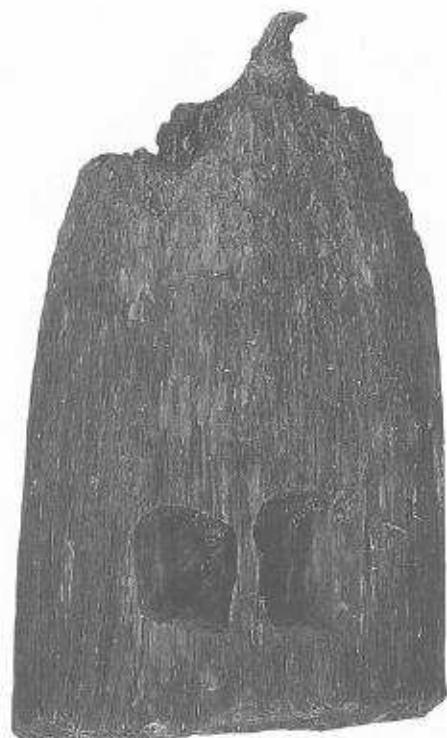
W5



W6

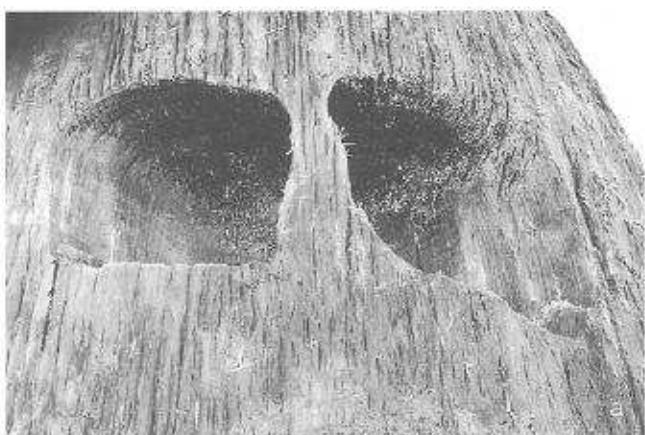


W5 : SB07-P2出土柱 W6 : P29出土柱



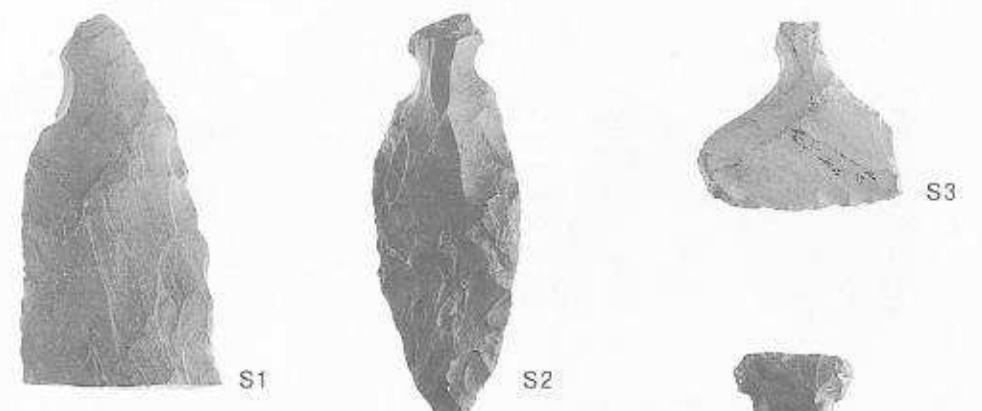
|

W7



W7 : P30出土柱 a : W7 筒穴

写真図版43 遺物



S 1～S 5：遺跡発見契機の石器



S9

S10

S11



S9

S10



S11



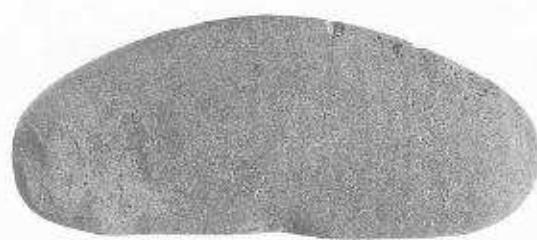
S6



S7



S8



S12



S14

S 6～S12・S14：包含層出土石器

兵庫県文化財調査報告 第315冊

香美町

長見寺廃寺址

—国道178号香住道路ランプ部道路改築事業に伴う発掘調査—

2007年(平成19年)3月20日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL (078) 531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

TEL (078) 362-3784

印刷 水山産業株式会社

〒653-0012 神戸市長田区二番町3丁目4番1号
